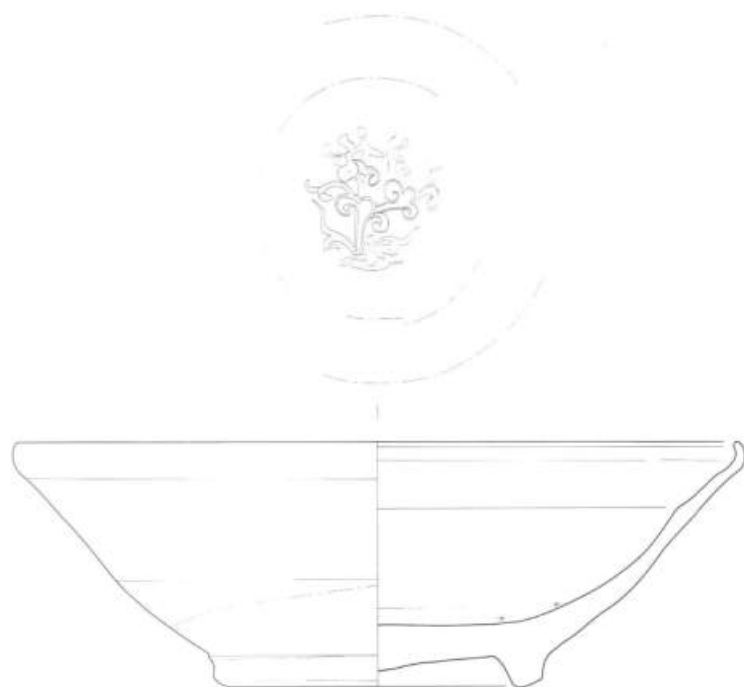


今帰仁村文化財調査報告書第 32 集

# 今帰仁城跡発掘調査報告 VI



平成 25 年 (2013) 3 月

な き じ ん

沖縄県今帰仁村教育委員会

今帰仁村文化財調査報告書第 32 集

# 今帰仁城跡発掘調査報告 VI

－今帰仁城跡外郭発掘調査報告 3－

平成 25 年 (2013) 3 月

な き じ ん  
沖縄県今帰仁村教育委員会

## 序

本報告書は、史跡今帰仁城跡附シイナ城跡の保存修理事業に伴う今帰仁城跡の発掘調査の成果をまとめたものであります。

収録したのは、平成17年度、平成20年度～平成22年度に史跡整備事業及び公開活用事業に伴って実施された発掘調査の報告書であります。これまで今帰仁城跡では様々な調査研究が行われ、特に主郭では城郭の主要部分における利用の変遷や王城としての機能をうかがい知ることのできる傑出した陶磁器の出土、あるいは志慶真門郭においては家臣团的集団の居住区の確認など多くの興味深い資料が得られています。以上のように郭内の面的調査によって得られた情報は今帰仁城跡の復元整備において参考にされ着実に整備が進められているところであります。

また、2000年12月には本村の今帰仁城跡を含む県内9遺産とともに、「琉球国のグスク及び関連遺産群」として今帰仁城跡が世界遺産登録されており、近年ではグスクにとどまらずその周辺地域の調査が進むことで、今帰仁城と集落の実像が解明されつつあります。

平成24年9月には5次指定としてあらたに約4haが追加指定され、史跡総面積は33.3haにまで拡大しております。今帰仁村では今帰仁城跡周辺地域が史跡今帰仁城跡と一体となる文化財として保護・活用を図ることを目指しており、本調査によって発掘された出土資料は地域の住民に公開され活用していくことを計画しております。

最後に、これまで調査にあたっては貴重なご指導を賜りました文化庁保護部記念物課、沖縄県教育委員会文化財課、県立埋蔵文化財センターをはじめ、調査を指導していただいた今帰仁城跡調査研究整備委員の先生方に心から御礼申し上げます。

平成25年3月

今帰仁村教育委員会  
教育長 謝花 弘

## 例 言

1. 本報告は、今帰仁村教育委員会が実施した、「史跡等総合整備活用推進事業・保存修理事業」で、国・県の補助を受けて、平成17年度に実施した「今帰仁城跡外郭第2次調査Ⅸ区」、平成20年度に実施した「今帰仁城跡外郭第8次調査」、平成21年度に実施した「今帰仁城跡外郭第10～12次調査」、平成22年度に実施した「今帰仁城跡外郭第13・14次調査」の成果を主に収録したものである。
2. 発掘調査、資料整理等で次の方々のご指導、ご協力を得た。記して謝意を表す。  
陶磁器等に関する所見：宮城弘樹（名護市教育委員会）、柴田圭子（愛媛県埋蔵文化財センター）  
遺跡全体の調査に係ること：金武正紀（今帰仁城跡調査研究整備委員長）、池田孝之、赤嶺和雄、高橋誠一、上原静、田中哲雄、渡辺美季（今帰仁城跡調査研究整備委員）  
発掘調査等に当たっては本中眞（文化庁記念物課）、三宅克広（〃）、内田和伸（〃）、島袋洋（沖縄県教育庁文化財課）、盛本勲（〃）、上地博（〃）、伊禮良栄（〃）ほか多くの先生方からご指導ご鞭撻いただいた。記して謝意を表す。
3. 発掘調査は今帰仁村教育委員会によって実施された。本報告の執筆・編集は玉城靖・與那嶺俊・有銘倫子であり、もくじに文責を記した。
4. 資料整理は下記のメンバーで行った。  
上間 恵子　松本 綾子　玉城 静香　神山 知枝子　島袋 滝子　山城 留利子
5. 現地での写真撮影は玉城、與那嶺、黒沢健明が担当した。遺物の撮影は與那嶺、玉城静香、島袋滝子が担当した。
6. 出土遺物と発掘調査に係る資料は全て今帰仁村教育委員会（今帰仁村歴史文化センター）において保管する。
7. 報告書の引用・参考文献は巻末に収めた。

# 目次

第I章 序 言	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 保存と整備	1
第3節 保存と整備のための委員会	2
第4節 調査体制	2
第II章 調査概要	4
第1節 調査地域	4
第2節 調査経過	4
第III章 遺 跡	6
第1節 位置と環境	6
第2節 遺構	12
第3節 層序	13
第IV章 報 告	14
第1節 東区V区（外郭8次調査）	14
1. 層序	14
2. 遺構	15
3. V区包含層出土遺物	18
第2節 東区IX区（外郭2次調査）	23
1. 層序	24
2. 遺構	24
3. IX区包含層出土遺物	27
第3節 西区（外郭11・13次調査）	38
1. 層序	38
2. 遺構	42
3. 包含層出土遺物	80
第4節 中区（外郭12次調査）	112
1. 層序	112
2. 遺構	113
3. 包含層出土遺物	117
第5節 中区（外郭14次調査）	123
1. 層序	123
2. 遺構	127
3. 包含層出土遺物	127
第V章 総 括	130
1. 今帰仁城跡外郭西区の発掘調査成果について	130
2. 外郭西側城壁の特徴	130
3. 遺物について	130
4. おわりに	131
《参考文献》	131

# 第I章 序 言

今帰仁城跡外郭は、今帰仁城跡城内の最も北側の郭で、昭和54年に追加指定された地域にあたる。その郭の面積は約20,000㎡で今帰仁城跡の郭の中でも最も広い地域となっている。

本報告では主に、今帰仁城跡外郭東区の試掘調査として先行実施した17年度および、3次調査として実施した平成18年度、5次調査の一部として実施された平成19年度の事業による、外郭地区Ⅲ・Ⅳ区、Ⅶ区において検出された遺構、遺物について収録したものである。

## 第1節 調査に至る経緯

国指定史跡今帰仁城跡の近傍に駐車場や便益施設等を設置する計画が持ち上がった。目的は、史跡指定地内の駐車場撤去の代替として計画されたものである。事業は北部振興策事業によって今帰仁村が主体となって実施された。平成17年7月には整備を完了し今帰仁村グスク交流センターを開館させた。これら新たに設置された施設によって城内の駐車場が撤去され、史跡が機能していた往事の姿へと復元されつつある。他方、駐車場から平郎門へ向かう導線上に、史跡の理解を促すためのガイダンス広場として、今帰仁城跡の地形模型（S=1/100）を設け、今帰仁城跡および周辺地域の現況を一瞥できるように工夫している（平成19年度報告）。

さて、上記の整備事業の進捗に伴って城内駐車場は不必要となり撤去されたことにより、目立たなかった外郭地区が景観的あるいは史跡散策を目的として利用導線上重要な地域として重要度が増し、整備を早急に行うべき地域として位置づけられることとなった。これに伴って、平成17年度からは従来の史跡整備事業から史跡等総合整備活用推進事業へ事業を移行させ、早期整備と史跡の活用に関する充実を目指し整備を進めることを計画した。計画については、整備委員会をはじめとする関係機関との議論を重ね、史跡の総合的な活用を目指すこととした。

## 第2節 保存と整備

外郭の整備事業は城外を東西、城内を東・西及び中央の概ね5つの地区に大別している（図1）。このうち今回対象となるのは、既に報告された東地区の一部、県道下の調査、西地区の根石確認調査である。東地区は既に17年度の試掘調査にはじまり、23年度までに整備をある程度完了している（詳細は整備報告書Ⅲ参照）。この東地区は石垣が150mにわたり良好な状態で残されているのに対して西地区の残りは総じて悪く、特に石垣は石材として近代以降に採取され、根石ごと無くなっている箇所も多い。このことから、西地区の城壁は整備委員会の了承を得て、鉾山から石材を調達し、平成23年度までの整備で概ね復元を完了している。

県道下の調査は北部土木事務所の協力によって平成21～22年度に調査をすることができた。発掘調査によって城壁などの遺構が良好な状態で確認することが出来た。調査完了後は砂によって遺構を保護し、埋め戻しを完了している。なお、史跡内における調査は遺構検出面までで留める方法を採用し保存することを最優先課題としている。

### 第3節 保存と整備のための委員会

1981年に調査研究整備委員会を発足させ、年1回の整備委員会を開催し必要に応じて年数回の整備指導をいただいている。委員は次の通りである。なお、事業全体については、本中眞・山下信一郎、内田和伸（文化庁）、島袋洋・盛本勲・瀬戸哲也・上地博・伊禮良栄（県文化財課）のご指導をいただいた（敬称略）。

委員長	安原 啓示	[京都造形大学客員教授・造園学]（平成17～20年度）
委員長	金武 正紀	[元今帰仁村発掘調査アドバイザー・考古学]（平成22～24年度）
副委員長	與那嶺幸人	[今帰仁村長・行政]（平成17～18年度）
委員	富田 裕次	[海洋博記念公園管理財団理事長・都市計画]（平成17～22年度）
委員	池田 孝之	[海洋博記念公園管理財団理事長・都市計画]（平成23～24年度）
委員	赤嶺 和雄	[設計同人GAN・建築学]（平成17～24年度）
委員	上原 静	[沖縄国際大学・考古学]（平成17～24年度）
委員	金武 正紀	[元今帰仁村発掘調査アドバイザー・考古学]（平成17～21年度）
委員	田中 哲雄	[元東北芸術工科大学・史跡整備]（平成21～24年度）
委員	高橋 誠一	[関西大学・地理学]（平成19～24年度）
委員	渡辺 美季	[神奈川大学・歴史学]（平成19～24年度）

### 第4節 調査体制

調査体制は教育委員会が主体となって実施した。事業全体の総括責任者は教育長、課長、課長補佐までが担い、調査担当者は宮城 弘樹、玉城 靖、與那嶺 俊の専門職員によって充てた。なお、当該職員だけでは事業の遂行は困難であることから、補助員として具志堅 亮・黒沢健明・有銘倫子、仲村善洋、玉城 綾、豊口 敬らによって現場・資料整理の調査補助を行うと共に、随時発掘調査アドバイザーとして金武正紀に遺跡の総括的な評価などについてご指導をお願いする体制を整えている（平成22年3月まで）。また、実際の現場、資料整理については複数名の臨時職員にご尽力いただいた。

〈平成17～23年度 発掘調査・資料整理〉

事業主体	今帰仁村教育委員会		
事業責任者	教育長	田港 朝茂（平成17～20年度）	謝花 弘（平成21～23年度）
	社会教育課長	諸喜田展生（平成17～18年度）	上間 恒章（平成22～23年度）
	総合教育課長	島袋 隆則（平成20～21年度）	
	社会教育課長補佐兼歴史文化センター館長	仲原 弘哲（平成17～21年度）	
	社会教育課長補佐	長田 光吉（平成23年度）	
事務総括	文化財係長	田港 朝津（平成17～20年度）	長田 光吉（平成21～22年度）
		宮里 政有（平成23年度）	
	文化財係主査	石野 裕子	
調査担当者	文化財係専門員	宮城 弘樹（平成17～23年度）	玉城 靖（平成17～23年度）
		與那嶺 俊（平成23年度）	
発掘調査アドバイザー		金武 正紀（平成17～21年度）	

調査補助員（臨時職員）	具志堅 亮	黒沢 健明	有銘 倫子				
	豊口 敬	仲村 善洋	玉城 綾				
発掘作業員（臨時職員）	田港 朝史	平安兪美子	島袋 貴行	大城いち子	山内 豪		
	松田 清美	大城ヒデ子	玉城 京子	仲原シズエ	福居 慶		
	金城 政利	仲原美代子	城間 節子	玉城留美子	宮城 章		
	玉城 光則	松尾美智子	宮里 政公	仲宗根直美			
	内間美佐子	諸喜田富士子					
資料整理（臨時職員）	上間 恵子	松本 綾子	仲里なぎさ	玉城 亜紀			
	玉城 静香	鈴木 美和	新垣あゆみ	當山 巳和			
	知念 飛鳥	島袋 滝子	神山知枝子	山城留利子			

〈平成24年度・資料整理〉

事業主体	今帰仁村教育委員会						
事業責任者	教育長	謝花 弘					
	社会教育課長	上間 恒章					
	社会教育課長補佐	長田 光吉					
事務総括	文化財係長	宮里 政有					
	文化財係主査	石野 裕子					
	臨時職員	大城 慎也	上間 哲朗				
調査担当者	文化財係専門員	玉城 靖	與那嶺 俊				
調査補助員（臨時職員）		有銘 倫子	仲村 善洋				
資料整理（臨時職員）		玉城 静香	神山知枝子	島袋 滝子	松本 綾子	山城留利子	



## 第Ⅱ章 調査概要

### 第1節 調査地域

今帰仁城跡は概略10の郭から構成されており、外郭はその中でも最も北側にある郭で昭和54年に追加指定された地域にあたる。その郭の面積は約20,000㎡で今帰仁城跡の郭の中でも最も広い地域となっている。外郭を区画する石垣は北側に150mにわたり良好な状態で残っているが、門については道路で分断され現況が著しく失われている。また、西側についても残りが悪く土塁状になっているだけで、近代になって破壊された可能性が考えられる。外郭一帯は史跡指定以前から開発されてきた地域で、指定当時には屋敷や店舗が5軒あり、駐車場が造成され、道路が外郭を東西に分断している状況であった。村では昭和49～50年度主要な部分の用地購入を、その後も平成10年度から未公有化の土地の積極的な公有化事業を行い、店舗や住宅の物件補償を行うなど史跡の景観の回復に努めてきた。

外郭の郭内の区画はまず大きく分断している現況道路を境に東側を東区、店舗がある中央は中区、西側を西区として調査を行っている。中でも最も残りの良い東区では平成17年度に駐車場の撤去を行い、試掘調査を実施することで概ね9つの小区画に区分している。本報告となる西区の石垣は現況確認ができておらず、外郭城壁全体の把握に努めるため、根石確認調査を実施することとなった。

### 第2節 調査経過

今帰仁城跡内の発掘調査はこれまで志慶真門郭（1,700㎡/S55～57）、主郭（880㎡/S57～60）が実施されている。これ以後は城壁の基礎部分を中心に調査を実施しているため、面的な遺構確認の発掘調査は平成16年度の外郭調査によって再び着手されることとなった。

外郭調査を本格的に着手した目的は、近年進んでいる周辺地域の整備に伴ってこれまで駐車場となっていて活用が図られていなかった外郭地域を、史跡として積極的に活用できる環境が整ったということが大きな理由である。現今の駐車場から平郎門までの利用導線上にあって、史跡の理解を促す為にも導入部分として位置付けることができる地域である。この為、外郭地域の整備は早急に行われるべきとして、現在も早期完了を目指し、調査・整備を進めている。

発掘調査の計画は概略5年間を一区切りとして、発掘調査前の地形や石垣等の遺構あるいは地籍等を踏まえて東・西・中・城外北西・城外東区の5つのエリアに分けて調査を実施することを計画した。外郭整備第一期の5ヶ年間は、外郭東地区（以下、外郭東区）に設定し、平成17年度から発掘調査を開始し、現在も進行中である。外郭東区は外郭地区全体の中でも戦前からの地形改変が少なく、石垣などの遺構の残りもよい。このため、調査着手前に、遺構の平坦地や地籍、石積み遺構に基づき、I～IX区の9つに分けを行った。この中でも、大きく四つの平坦面が確認されており、またその平坦面を区画するように石垣や石列が延びていたためこの空間「III・IV」「VII」「VIII」「VI～IX」とした。

平成16年度は城壁の外側平坦地（約800㎡）の調査を実施した（1次調査）。またこの他にも鳥居撤去の立ち会い（H15/4㎡×2箇所）、墓撤去の立ち会い（H17/9㎡×1箇所）によっても地下の状況等について確認を行っている。平成17年度は道路によって分断されている地区の内壁側（R-28・29/約250㎡）を中心に石垣の状況確認を目的に調査を実施している。また外郭地区の地下遺構残存状況等を把握するために、南北トレンチ約30m、東西トレンチ約40mの試掘溝を設定し調査を進め、外郭の概要を把握するとともに地区設定を行った（2次調査）。

平成18年度は主に2つの調査区に分けて作業を行った。一つはⅢ・Ⅳ・Ⅶ区（約1400㎡）の発掘調査（3次調査）。もう一つは石垣の根石確認を目的とした確認調査である（東側城壁内壁面約100m:4次調査）。平成19年度はⅦ・Ⅷ区（約1,000㎡）の発掘調査を行った（5次調査）。なおⅧ区にある祭祀施設の古宇利殿内については、地下に良好な形で遺構が埋没していることがわかったため、平成20年度に移設工事を行い、移設後、継続調査を行っている。6次調査は4次調査の残りとして外郭東側城壁根石確認及び測量調査を行っている。なお平成20年度の調査として7・8次調査を実施、継続的に調査を行っている。

#### 今帰仁城跡外郭第2次調査（東区）

2次調査は今帰仁城跡内外郭東区の試掘調査を村教育委員会が実施した（約800㎡）。発掘は玉城靖が担当し、調査補助として與那嶺俊があたった。Ⅲ区、Ⅳ区、Ⅵ区、Ⅶ区、Ⅷ区、Ⅸ区より、グスク時代に相当する包含層及び遺構の存在が確認され、Ⅰ区、Ⅴ区はグスク時代の遺構が確認されたが、多くの岩盤が露出し、平坦地が乏しい地区であることから、外郭東区の主体的な地域ではないことが確認された。またⅨ区、Ⅵ区は現在のウーニーなどの遺構との兼ね合いから発掘調査は試掘程度とし、保存地区とした。なお、調査の概要報告として『史跡今帰仁城跡－外郭発掘調査概報－』今帰仁村文化財調査報告書第23集を発行している。

#### 今帰仁城跡外郭第8次調査（東区）

8次調査は今帰仁城跡内外郭東区の写真測量図化作業を行った。調査は村教育委員会が実施した。調査は宮城弘樹が担当し、調査補助として與那嶺俊があたった。4・6次調査として実施してきた事業の残り部分の調査を行っている。

#### 今帰仁城跡外郭第11次調査（西区）

11次調査は今帰仁城跡内外郭西区の調査を村教育委員会が実施した（約1000㎡）。発掘は玉城靖が担当し、調査補助として與那嶺俊・黒沢健明があたった。調査は西側城壁根石確認を目的として発掘調査を行った。

#### 今帰仁城跡外郭第12次調査（中区）

12次調査は今帰仁城跡内外郭中区の調査を村教育委員会が実施した（約250㎡）。発掘は玉城靖が担当し、調査補助として與那嶺俊・黒沢健明があたった。調査は西側城壁及び東側城壁の繋がりを確認するために県道115号線道路下の掘削を行った。

#### 今帰仁城跡外郭第13次調査（西区）

13次調査は今帰仁城跡内外郭西区の調査を村教育委員会が実施した（約1000㎡）。発掘は玉城靖が担当し、調査補助として黒沢健明・有銘倫子があたった。調査は昨年度実施した西側城壁根石確認調査の残りの部分を発掘、図面作成作業を行った。

#### 今帰仁城跡外郭第14次調査（西区）

14次調査は今帰仁城跡内外郭西区の調査を村教育委員会が実施した（約120㎡）。発掘は玉城靖が担当し、調査補助として黒沢健明・有銘倫子があたった。調査は13次外郭調査において城壁根石が県道115号線道路下へと延長していることが確認されたことにより、沖縄県土木事務所の許可を得て県道下の発掘調査を行った。

## 第三章 遺跡

### 第1節 位置と環境

今帰仁村は沖縄本島北部、本部半島の北側に所在する人口約9,500人の自治体である。本島北部地域一帯は中南部に比して全体的に山地主体となっているため「山原（やんばる）」と呼称されている。今帰仁城跡は今帰仁村の中でも西端、字今泊に立地している。城地の立地する丘陵は標高約100mを計り、丘陵頂部の主郭・御内原からの眺望は広く、北に伊平屋・伊是名島、与論島を望むことができる良所にある（第2図）。本部半島の地形的特徴は概して山地部にみられる今帰仁層・本部層（与那嶺層）という中生代初期頃に堆積した地層群と、低地・海岸部にみられる琉球層群の2つのブロックに大別される。今帰仁層群は中生代三畳紀に堆積した地層で、今帰仁城跡の立地する丘陵一帯から本部町の大堂・浜元付近までの地域に広がっている。特に今帰仁城跡の立地する北西部には、結晶化が進んで硬質、厚さが平均して20cm前後で割れやすい特徴の層状石灰岩が基盤岩となる。

一方、この今帰仁城跡の周辺には集落遺跡、拝所、御嶽、石積み遺構など今帰仁城跡を中心に展開する。今帰仁城跡周辺遺跡の名称はこの関連遺跡群の総称である（第3図）。中心となる今帰仁城跡は今帰仁村大字今泊小字ハンタ原に所在し、城壁に囲まれた面積は約4haの広さを持つ大規模なグスクである（第1図）。最高所の標高は約100mとなり、基盤岩の古生代石灰岩の丘陵上に位置する。丘陵の頂上部が主郭、大庭、御内原となり、その東は70～80mの深い溪谷をつくり天然の要害となる。東側の谷筋は志慶真川が蛇行して流れ、西側の谷筋はタキンチャガーラが流れ東シナ海に注いでいる。今帰仁城御内原の郭に立つと志慶真川の溪谷を脚下に遠く伊是名島、伊平屋島、伊江島、古宇利島を望み、晴れた日には遠く与論島を眺望することができる。今帰仁城跡の城壁は立地する基盤岩の古生代石灰岩という灰色の硬い石を積み上げた石垣で、県内でも有名なグスクである首里城跡、中城城跡、勝連城跡などの白い琉球石灰岩の石垣とは雰囲気異なる。今帰仁城跡の石垣の総延長は約1.5kmを計り、屏風状に曲線的に積み上げられている。城壁で囲まれた空間は先の主郭・大庭・御内原以外にもカーザフ、大隅、外郭、志慶真門郭など概ね10の郭からなり、石畳や石段で各郭は結ばれている。10の郭のうち最も北側にあり広い郭が外郭である。城外から外郭へのアクセスを行ったと考えられる門の部分は道路の開削などがあって不明瞭ではあるが、概ね現在道路に分断された地点にあるものと考えられる。

今帰仁城跡の歴史は、琉球が3つの勢力に分かれていた、いわゆる三山鼎立時代に山北（北山）として、中国明代に琉球国中山王、山南王とともに記録に登場する。これまでに確認されている史料をたよりに概述すると、最古史料の一つに『明実録』があげられる。太祖寛録卷一五八・洪武一六年一二月庚午朔（1383年12月15日）「琉球國山北王怕尼芝、遣其臣摸結習、貢方物。腸衣一襲。」と記され、山北王「怕尼芝」の名称が記述されるのを似て嚙矢とするようである。以後記録によれば、最初の1383年から最後の1415年の33年間に山北王怕尼芝が6回、山北王珉が1回、山北王攀安知が11回、中国皇帝へ使者を送り朝貢貿易を行ったことが記されている。この時代山北は沖縄北部地域と奄美大島近隣まで領域として支配していたようである。

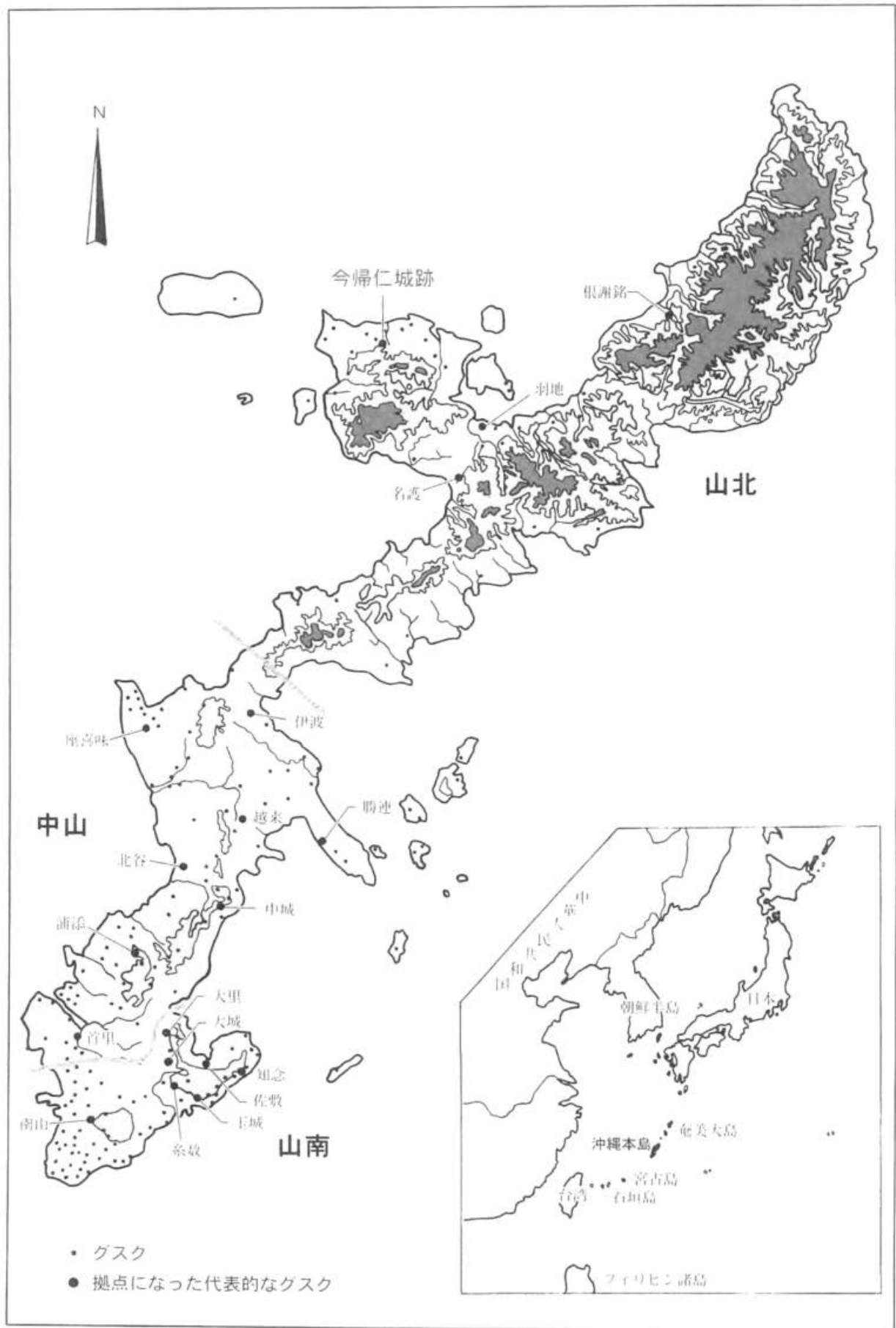
しかし、その山北（攀安知）も本島内で急速に勢力を拡大する中山王尚巴志によって1416年（1422年の和田説もある）に滅ぼされてしまう。中山の山北平定後、城地には中山にとって中山王の子弟や重臣を山北監守に任じ、沖縄本島北部やんばる地域を管理している。それは1665年に監守体制が廃止されるまで続く。この間のことを監守時代と呼んでいる。この監守時代の間、1609年には薩摩軍によるいわゆる琉球入りがあり、今帰仁城に立ち寄っていることが従軍日記「琉球渡海日々記」に記されている。日記によれば「首里城へ向かう途中、運天港に停泊、親



第1図 発掘調査箇所位置図 (S=1/2000) (\*アミカケ部分発掘調査箇所)

第1表 今帰仁城跡及び周辺遺跡のこれまでの調査

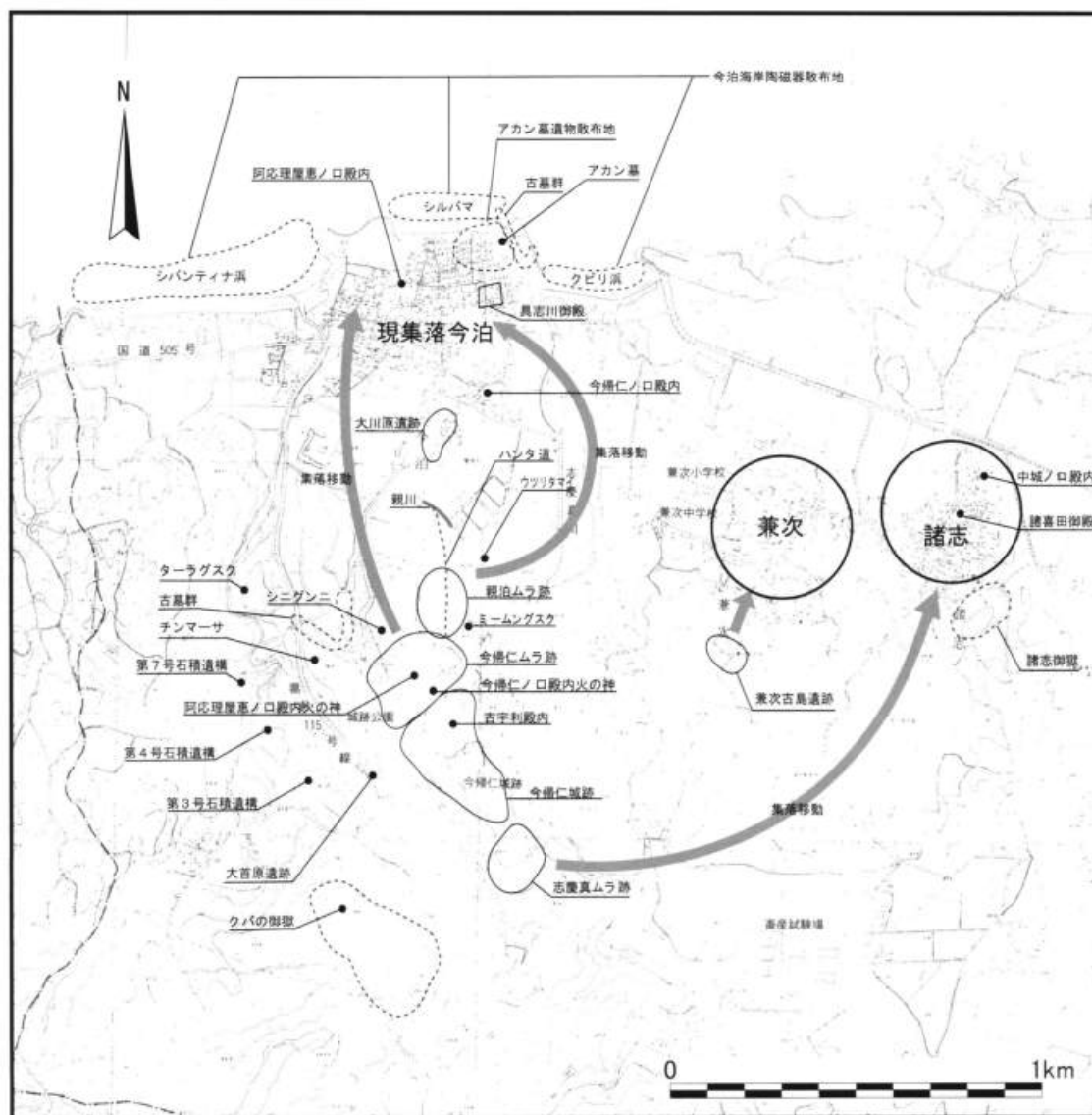
年度	西暦	史跡整備事業等に伴う発掘調査				今帰仁城跡周辺遺跡の発掘調査				
		事業名	調査地区	調査面積	期間	調査	調査地区	調査原因	調査面積	期間
平成元年	1989	主に整備・資料整理								
平成2年	1990	主に整備・資料整理	主郭東側城壁(2次)写真測量に伴う崩落石除去(直査)	約40m						
平成3年	1991	主に整備・資料整理								
平成4年	1992	主に整備・資料整理								
平成5年	1993	主に整備・資料整理								
平成6年	1994	志慶真門郭東側石積み基礎調査	志慶真門郭東側石積外壁側基礎	約6m	9/12～9/13					
平成7年	1995	志慶真門郭東側石積土質調査	志慶真門郭東側石積外壁側基礎	約20m	9/13～1/13					
平成8年	1996	志慶真門郭東側石積試験調査	志慶真門郭北東部北側アザナ調査	約20m	9/2～9/14					
		志慶真門郭東側石積試験調査	志慶真門郭北東部南側アザナ調査	約20m	10/7～10/19					
平成9年	1997	志慶真門郭南側石積試験調査	志慶真門郭南側石積外壁側基礎	約2m	6/25～9/12					
		志慶真門郭南側石積試験調査	志慶真門郭南側石積外壁側基礎	約5m	2/16～3/24					
平成10年	1998	外郭石積遺構調査	外郭西地区石積み遺構調査	約10m	5/11～7/29					
平成11年	1999	志慶真門外壁遺構調査	志慶真門	約10m	4/13～2/29					
		階段遺構確認補足調査	主郭西側階段遺構	約3m	9/30～10/1					
平成12年	2000	主郭東側石積遺構確認調査	主郭東側調査(3次)	約10m	3/17～3/26					
		主郭東側工事に伴う立会調査	主郭東側調査(4次)		11/13～2/22					
平成13年	2001	大隅城壁修理工事に伴う事前確認調査	大隅城壁調査	約10m	9/26～3/31					
平成14年	2002	主郭東側崩落石撤去工事に伴う立会調査	主郭東側調査(5次)		9/21～12/19					
		主郭東側城内壁試験調査	主郭東側調査(6次)	約40m	9/2～9/29					
平成15年	2003	主郭東側工事に伴う立会調査	主郭東側調査(7次)		2/6～3/27					
		主郭南側城壁崩落石撤去	南側城壁調査(1次)		9/1～10/31	2次 西区I区・II区b 3次 ハラクブ 4次 東区(1・7区)	公園整備(記録保存)	1300m <sup>2</sup> 41箇所(5,000m <sup>2</sup> ) 2地点(30m <sup>2</sup> )	4/24～11/7 5/14～7/25 9/24～10/28	
平成16年	2004	鳥居撤去工事に伴う立会調査	Z-30	8m	9/30～10/1	5次 西区V区・IV区の一部 6次 西区IIIc・IV区(旧称IIId) 7次 西区IV区	公園整備(記録保存)	400m <sup>2</sup> 800m <sup>2</sup> 400m <sup>2</sup>	10/27～1/7 12/8～2/25 1/14～1/26	
		第1次外郭発掘調査	城外北西区R-23～25, S-23～25	400m <sup>2</sup>	4/21～3/31	8次 西区IIa 9次 西区IIb 10次 西区IIa 11次 道路敷下	公園整備(記録保存)	400m <sup>2</sup> 600m <sup>2</sup> 200m <sup>2</sup> 200m <sup>2</sup>	5/13～11/10 5/13～12/4 12/21～1/21 1/20～3/31	
平成17年	2005	工事に伴う立会調査	主郭東南アザナ調査		11/12～3/21	12次 東区(7区)	公園整備(記録保存)	200m <sup>2</sup>	12/2～3/31	
		第2次外郭発掘調査	試掘, 東区IX区R-28～29, II区V-33ほか	800m <sup>2</sup>	8/9～3/34					
平成18年	2006	主郭南側城壁崩落石撤去	主郭南側城壁調査(2次) 南西アザナ基礎調査	10m	6/22～8/22					
		主郭東側工事に伴う立会調査(工事)	主郭東側調査(8次)		1/26～3/31					
平成19年	2007	第3次外郭発掘調査	東区III・IV区U-33～36, T-33～36ほか	1000m <sup>2</sup>	4/24～3/30	補足 大川原遺跡	法面崩落(記録保存)	20m <sup>2</sup>	4月～3月	
		第4次外郭発掘調査	外郭東区城壁基礎調査	200m <sup>2</sup>	4/24～3/30		資料整理		4月～3月	
平成20年	2008	主郭南側城壁崩落石撤去	主郭南側城壁調査(3次) 上段部基礎調査	20m <sup>2</sup>	5月～7月	確認 今泊集落内	遺跡範囲確認	4m <sup>2</sup> ×3箇所	6/27～6/29	
		第5次外郭発掘調査	東区VII区S-33, R-33・34, VIII区Q-30～33ほか	1000m <sup>2</sup>	4/23～3/30	13次 親泊ムラ跡(4983番地) 14次 志慶真ムラ跡(4853番地ほか)	遺跡範囲確認	43m <sup>2</sup> 32m <sup>2</sup>	9/19～10/10 12/1～12/28	
平成21年	2009	主郭南側城壁崩落石撤去	主郭南側城壁調査(4次) 下段部基礎調査	20m <sup>2</sup>	5月～6月	16次 ハラクブ試験調査(4929-1番地) 17次 ナガレ庭遺構調査(4699番地ほか)	遺跡有無確認	2m <sup>2</sup> ×5箇所	7月1日	
		第6次外郭発掘調査	外郭東区城壁基礎調査	200m <sup>2</sup>	7/1～11/28	18次 今帰仁ムラ跡(5012番地)	遺跡有無確認	362m <sup>2</sup>	11/4～12/9	
平成22年	2010	第7次外郭発掘調査	外郭V区R-36, S-36ほか	400m <sup>2</sup>						
		第8次外郭発掘調査	外郭VIII区Q-30, R-30～32, S-31	400m <sup>2</sup>						
平成22年	2010	第9次外郭発掘調査	外郭VII区Q-30～33, R-30～32ほか	約600m <sup>2</sup>	4/15～10/1					
		第10次外郭発掘調査	外郭西区城壁基礎調査	約1000m <sup>2</sup>	4/15～10/30	18次 チンマーヤ遺構調査	測量調査	約700m <sup>2</sup>	8/3～8/14	
平成22年	2010	第11次外郭発掘調査	外郭中区県道115号道路下調査	約250m <sup>2</sup>	12/3～3/31					
		第12次外郭発掘調査	外郭西区城壁基礎調査	約1700m <sup>2</sup>	4/1～3/31	19次 今帰仁城跡周辺の旧道調査 崎原遺跡	遺跡有無確認 宅地開発(記録保存)		2/1～2/21 549m <sup>2</sup> 6/1～12/1	
平成22年	2010	第13次外郭発掘調査	外郭西区城壁基礎調査	約1700m <sup>2</sup>	4/1～3/31	ターラグスク遺構調査	測量調査			
		第14次外郭発掘調査	外郭西区県道115号道路下調査	約120m <sup>2</sup>	10/1～3/31	西長浜原遺跡 大首原遺跡	遺跡範囲確認 駐車場整備(記録保存)	約20000m <sup>2</sup> 約5000m <sup>2</sup>	10/6～10/26 9/27～12/31	



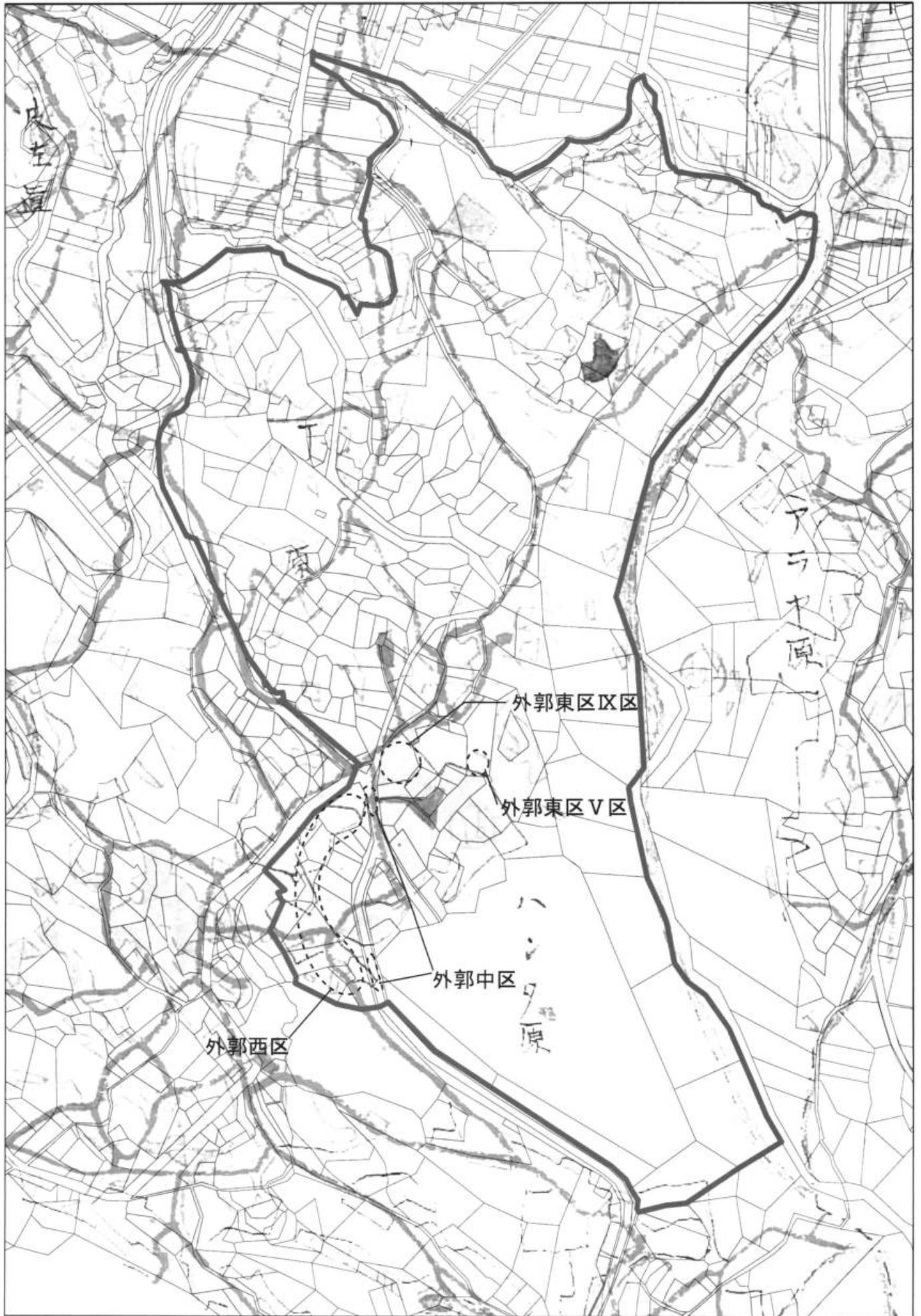
第2図 今帰仁城跡位置図

泊での和議が受け入れられず城へ放火した」とあり、実質的な廃城は監守引き揚げよりも早い、1609年頃にあったと考えられる。

今帰仁城跡は昭和47（1972）年には沖縄の日本復帰と同時に国指定の史跡に指定され、昭和55（1980）年より今帰仁村が主体となって環境整備事業がすすめられている。この中で、平成12（2000）年には世界遺産として登録されたことによって、周辺地域が景観保全地区に指定、さらに平成21（2009）年7月には城下北側に広がる11.5ヘクタールが新たに史跡地域として追加され、翌22（2010）年2月にはシイナグスクが追加指定され、『今帰仁城跡附シイナ城跡』として名称を改め史跡面積合計約22ヘクタールとなっている。今帰仁城跡周辺遺跡が集落として機能していた時代は今から500年以上の時を経ている。現在の土地利用や祭祀空間を直接結びつけることは困難である。しかしグスク時代の景観が大規模な開発を受けることなく今日まで残されており、今帰仁城跡の立地する今泊（旧今帰仁・親泊）をはじめ、具志堅（旧具志堅・上間・真部）、諸志（旧諸喜田・志慶真）などの村落祭祀の重要な参拝地であるとともに、「今帰仁上り」と称される拝所・旧跡めぐりの重要な参拝地となっていることは重要である。ここから遡って文化的な伝統や、空間利用、景観の復元を行うことは集落のありかたや、検出される遺構を理解する参考となる。実際に調査地点の近傍には各集落、門中の祭祀において重要な参拝地となっ



第3図 今帰仁城跡及び周辺遺跡位置図



第4図 今帰仁城跡の現況地積図と明治の地積図の重ね図 (※太線は史跡指定地域)



ている「クバの御嶽」への遙拝を行う「サカンケー」が所在している。「サカンケー」は「参詣」もしくは「坂迎え（あるいは酒迎え）」という語意と解され、南西方向にあるクバの御嶽を遙拝するための香炉がある。

## 第2節 遺構

外郭地区は発掘調査以前より地表面に露出している遺構が数多くみられる。石垣はその代表的なもので、今帰仁城跡の大隅郭を区画する大きく蛇行する石垣は存在感のある遺構の一つである。また外郭東区にある石垣は良好な状態で保存されている。この他にも外郭内を区画する石垣なども確認されている。

発掘調査において検出された遺構は柱穴、土坑、土留め石積み、石敷きなどの遺構である。これ以外にも今回当該地域に発掘前より地表面にあった古宇利殿内も遺構として記録に収めた。なお、基本的には発掘調査時に検出された検出面までの確認で留めており、グスクが城として現役だった時代の調査地区における最も上位の遺構までの調査となっている。ただし、一部の遺構については、整備委員会の指導に基づいて遺構の検出作業を実施している。

今回の報告では特に、注目される遺構として、SB08とした建物跡の基壇状の遺構と想定される遺構がある。この推定建物跡はVIII区のほぼ中央にある石敷きの遺構である。

今回確認された遺構は以下の遺構である。

### 種類 遺構数

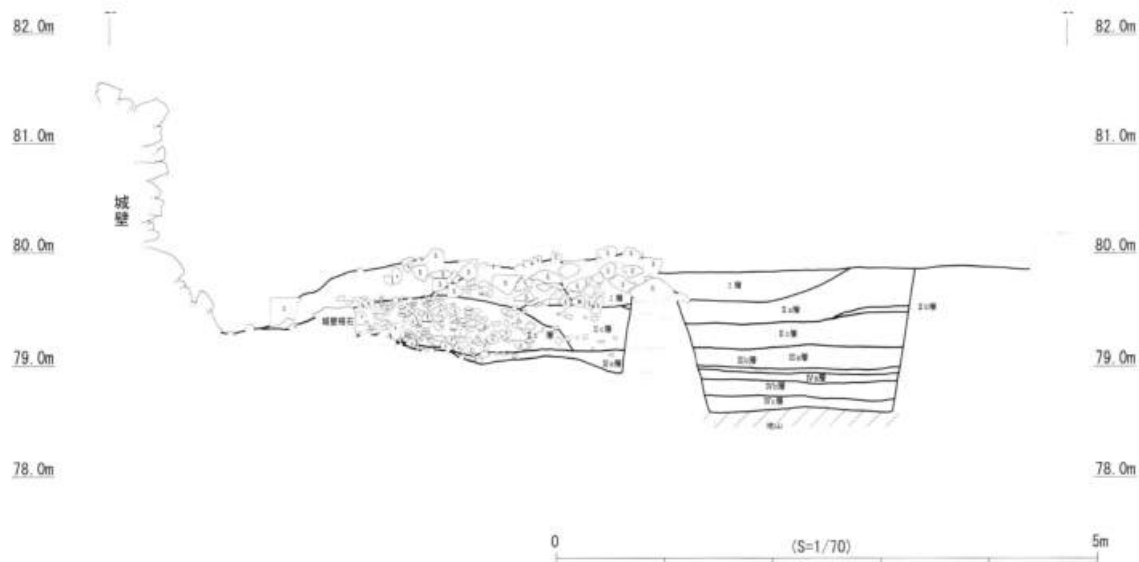
- ・祠：現地表面で確認できる祠で、ご神体などが祀られ、参拝者が現在も訪れる遺構。
- ・柱穴（Pit、記録状「S」に番号を付して整理した）：柱の穴。
- ・土坑（SK）：柱穴とは異なり、遺構検出面で検出された遺構の堀方の径が広く円形ではなく不整形の場合は、土坑として調査を行っている。
- ・土留め石積み（SR）：今帰仁城跡の周辺では、同種の石材は未見である。このため持ち込みの石器と判断されるが、今後注意を喚起しておきたい。
- ・石積み遺構（城壁、もしくはSR）：今帰仁城跡の場合、発掘以前より地表面に現れているグスクの防御線を構成する石積み遺構は「〇〇城壁」と呼称されている。一方、城壁以外にも複数の石積み遺構があり、城壁の規模にははるかに及ばないが、石積み遺構、あるいは石積み根石のみ残存する石列が確認されており、SRと呼称している。
- ・建物跡（SB）：住居等の建物跡で、建物跡を構成されると考えられた石列や石敷きなどもこれに含めた。
- ・道跡状遺構（SW）：石畳等通用路を構成されると考えられる遺構。
- ・不明遺構（SX）：整理時点においても遺構の機能が判然とせず、時期も不詳の資料は不明遺構としている。
- ・造成層：遺跡を覆う堆積層として整理されている。遺構内の覆土は、覆土の表記方法に従う。
- ・覆土：なお、遺跡を覆う堆積層の層順はI・II・III………で表記したが、遺構を覆う堆積層は上から順に「i・ii・iii………」で表記している。

### 第3節 層序

遺跡全体を覆う堆積層は、現代の表土・旧耕作土のⅠ層で、この下にグスク時代の遺物包含層が堆積する。また、グスク時代の包含層下に堆積する層が造成層による堆積層、岩盤の露頭、遺物を全く含まない自然堆積層の地山の幾つかのパターンが認められる。P-31に設けた試掘トレンチを基本層序とした（第5図）。

#### 外郭基本層序

- I 層：【にぶい黄褐色土層】腐食・耕作土層。調査地のほぼ全域が覆われる。地下深くに耕耘が及ぶ地域では包含層や地山を掘削し、ガラスビンや近現代の陶磁器等を包蔵する。
  - II 層：【暗褐色土層・褐色土層】当該遺跡の形成期のグスク時代の遺物包含層（IIa～IIb）。遺跡全体を覆う。VIII区で検出される遺構のほとんどがこの時期のもので、15世紀中頃～17世紀初頭（主郭第Ⅳ期～第Ⅴ期）の遺物が得られている。
  - III 層：【にぶい黄褐色土層・褐色土層】当該遺跡の形成期のグスク時代の遺物包含層（IIIa～IIIc）。当該層序は外郭城壁にもぐり込み、14世紀～15世紀前半（主郭第Ⅱ期～第Ⅲ期）の遺物が得られている。
  - IV 層：【灰黄褐色土層・暗褐色土層・にぶい黄褐色土層】当該遺跡の形成期初頭の層と考えられ、炭を含み粘性が強い。層中には焼土、明褐色土ブロックを含む。出土遺物は在地土器を中心に13世紀後半～14世紀中頃の遺物が主に得られている。
- 地山層：【明赤褐色土層・黄褐色土層】古期石灰岩の岩盤が至る所で露頭。



第5図 基本層序 (P-31 トレンチ)

## 第Ⅳ章 報告

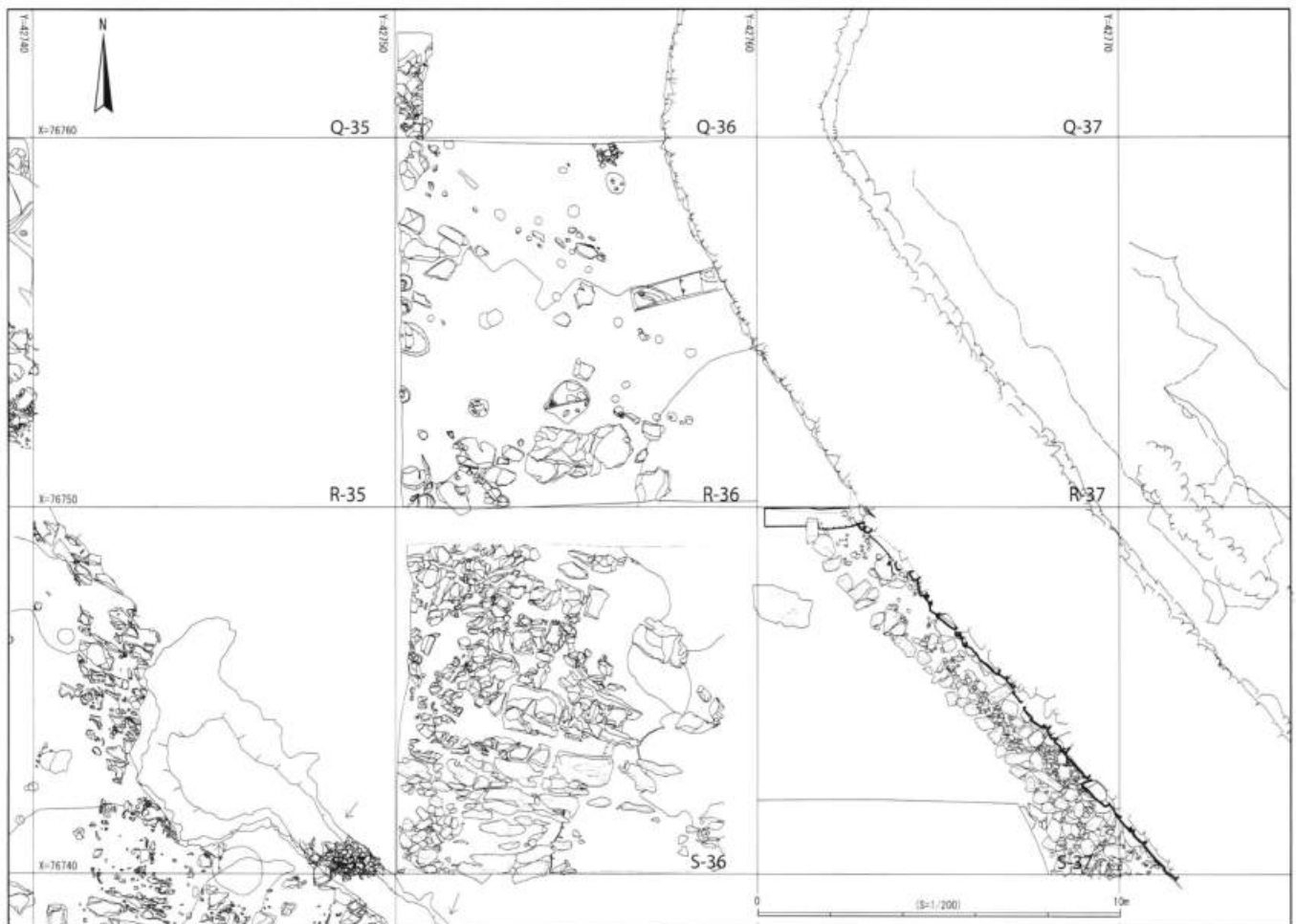
### 第1節 東区Ⅴ区（外郭8次調査）

Ⅴ区は現在の古宇利殿内の背後にあたる地区で、全体は400m程度あるが、調査面積は約200m<sup>2</sup>である。南側には石積み遺構があり、Ⅲ区との境界となっている。西側はⅦ区と接し、北側は東側城壁がめぐっている。調査の結果広い範囲で岩盤が多く露出していることが分かった（S-36）。さらにS-37にあった既存木を残す必要があったことから、遺構は確認されているが調査区の面積は拡張していない。

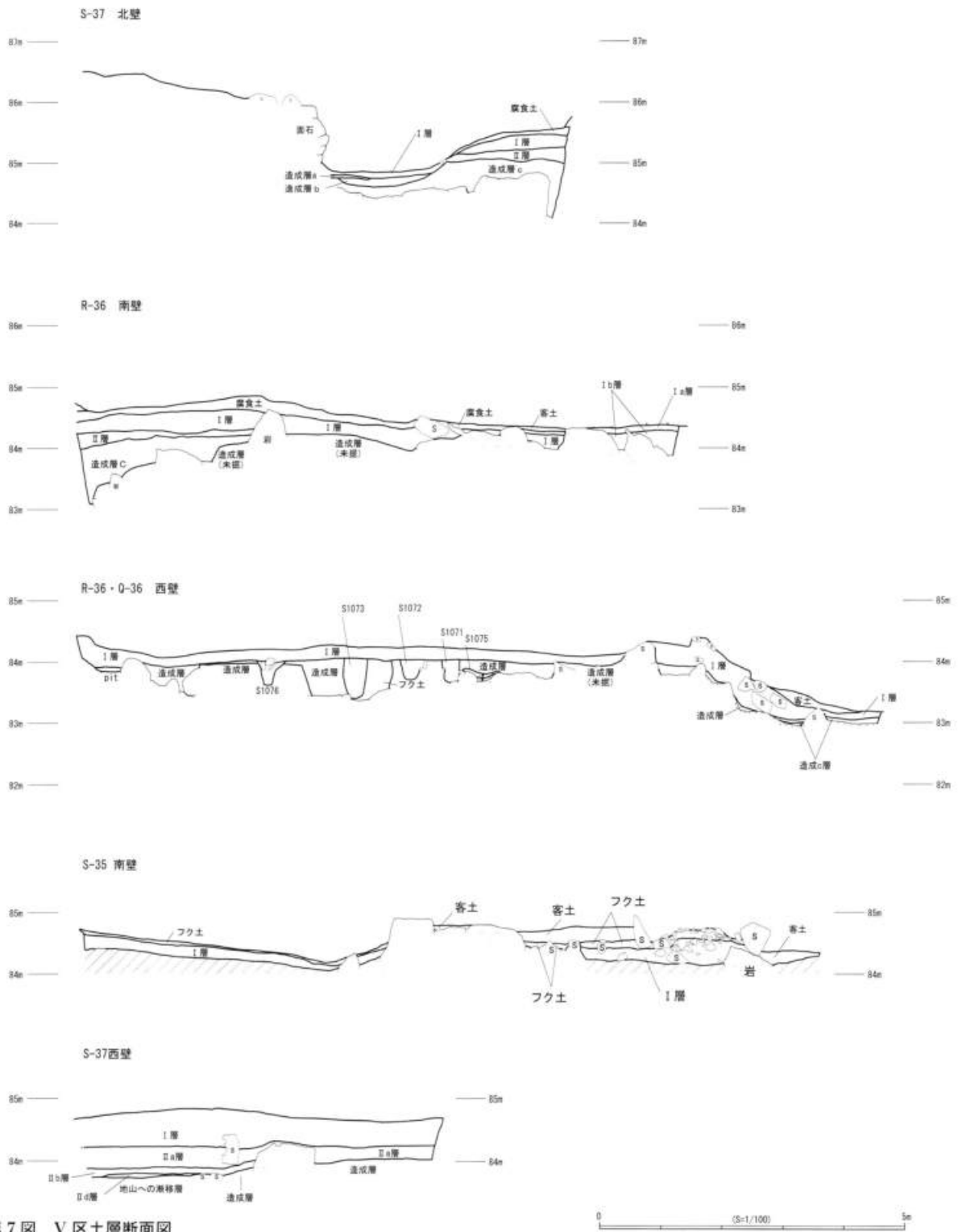
なお、東側城壁に接する形で試掘トレンチを設定して根石にもぐる包含層の確認調査を行った。

#### 1. 層序

Ⅴ区を覆う堆積層は、現代の表土・旧耕作土のⅠ層、この下にグスク時代の遺物包含層が堆積している。また、グスク時代の包含層下には造成層が認められた。造成層からは土器、カムイヤキのみの出土となっている。なお、今帰仁村文化財調査報告書第26集において確認トレンチ④として報告している。その際に主郭Ⅰ・Ⅱ期に相当する層としてⅡe層を報告したが、(p41)、資料整理後に青磁龍泉窯系Ⅴ類が集計されたので、訂正し報告する。



第6図 Ⅴ区遺構詳細図



第7図 V区土層断面図

## 2. 遺構

V区は調査の結果、岩盤が多く検出されている。そのほとんどがS-36で確認され、R-36グリッドで土坑や多数の柱穴が集中して分布している。

種類	遺構数
・柱穴 (SP)	41基
・土坑 (SK)	1基 (S1074)
・石積み遺構 (SR)	1基

[名称] S1074                      [位置] 外郭東区V区(R-36)                      [遺構図] 第8・9図  
 [図版] 図版2-2・3                      [検出面] 造成層C                      [構成] 土坑  
 [規模] 長軸約106cm×短軸約95cm

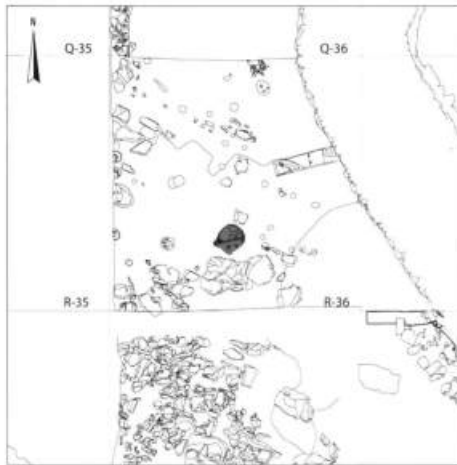
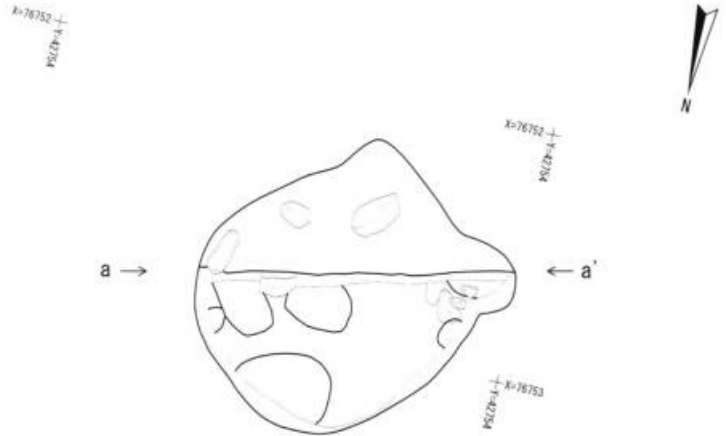
[所見] V区全体でI層を除去するとすぐに地山に似た造成層が確認できる。S1074はこの造成層で検出された廃棄土坑と考えられる。土坑内からはPit24～29の6基のPitが検出されているが、Pit29以外は床面の造成層Cに掘り込まれている。

**[遺構内堆積層]**

i層:7.5YR明褐色5/8、褐色4/6が混ざる。褐色の土に明褐色の土がブロック状に混ざる。

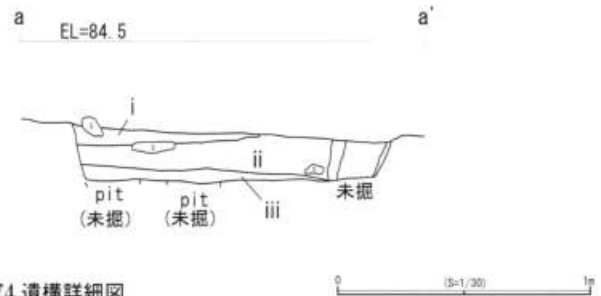
ii層:7.5YR暗褐色3/3の土に炭がまざる。炭は2～3cmの塊で混ざる。

iii層:ii層に明褐色土のブロックが混ざる。



第8図 S1074位置図 (S=1/300)

第9図 S1074遺構詳細図



[名称] R-36グリッド検出の柱穴群

[位置] 外郭東区V区(R-36)

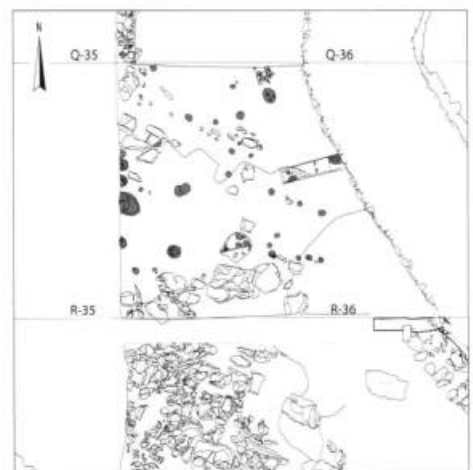
[遺構図] 第10・11図                      [図版] 図版2-1

[検出面] 造成層C                      [構成] 柱穴36基

[所見] V区では多くの岩盤が確認されているが、R-36グリッドでは造成されており岩盤は少なかったことからS1074と同様、造成層で確認された。保存修理事業の観点から上面検出で発掘をやめたが、壁面沿いにおいてのみ柱穴の掘削を行った。掘立柱建物の復元については柱間が不均等のためプランを組むことは出来なかった。掘削した柱穴のみ、所見表(第2表)あり。

**[遺構内堆積層]**

i層:【暗褐色土層・褐色土層】赤褐色土と炭が微量に混ざる。

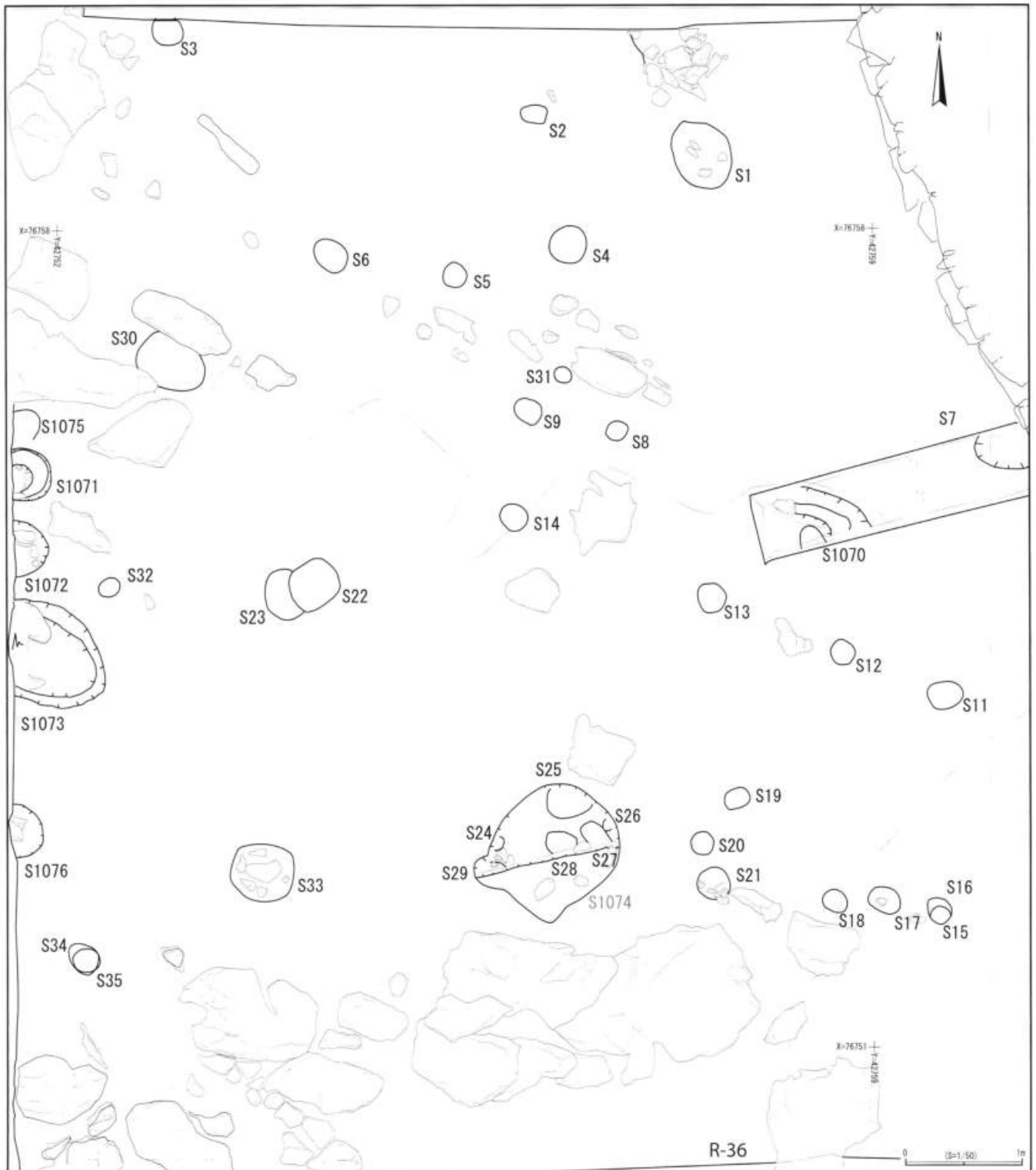


第10図 R-36グリッド検出の柱穴群位置図 (S=1/300)

第2表 R-36 グリッド検出の柱穴所見表

pit 番号	検出面	埋土観察	規格・性格	柱頭	礎石	長幅 (cm)	短幅 (cm)	切り合い
1070	造成層Ⅱ	10YR 暗褐色 3/3 と 5YR 明褐色 5/6 が混ざる。赤褐色土と炭が微量に混入する。	柱穴	—	—	27	—	—
1071	造成層	10YR 暗褐色 3/4 と 5YR 明褐色 5/6 が混ざる。赤褐色土と炭が微量に混入する。	柱穴	—	○	43	—	—
1072	造成層	10YR 暗褐色 3/3 と 5YR 明褐色 5/6 が混ざる。赤褐色土と炭が微量に混入する。	柱穴	—	○	36	—	—
1073	造成層	10YR 褐色 4/4 と 5YR 明褐色 5/6 が混ざる。赤褐色土と炭が微量に混入する。	土坑	—	○	75	—	—
1074	造成層	10YR 褐色 3/3 と 5YR 明褐色 3/4 が混ざる。赤褐色土が微量に混入し、炭が多い。	柱穴	○	○	106	95	—
1075	造成層	10YR 暗褐色 3/3 と 5YR 明褐色 5/6 が混ざる。赤褐色土と炭が微量に混入する。	柱穴	—	—	24	—	—
1076	造成層	10YR 褐色 3/3 と 5YR 明褐色 3/4 が混ざる。赤褐色土が微量に混入し、炭が多い。	柱穴	—	○	35	—	—

※完掘したもののみ。



第11図 R-36 グリッド検出の柱穴群遺構詳細図

### 3. V区包含層出土遺物

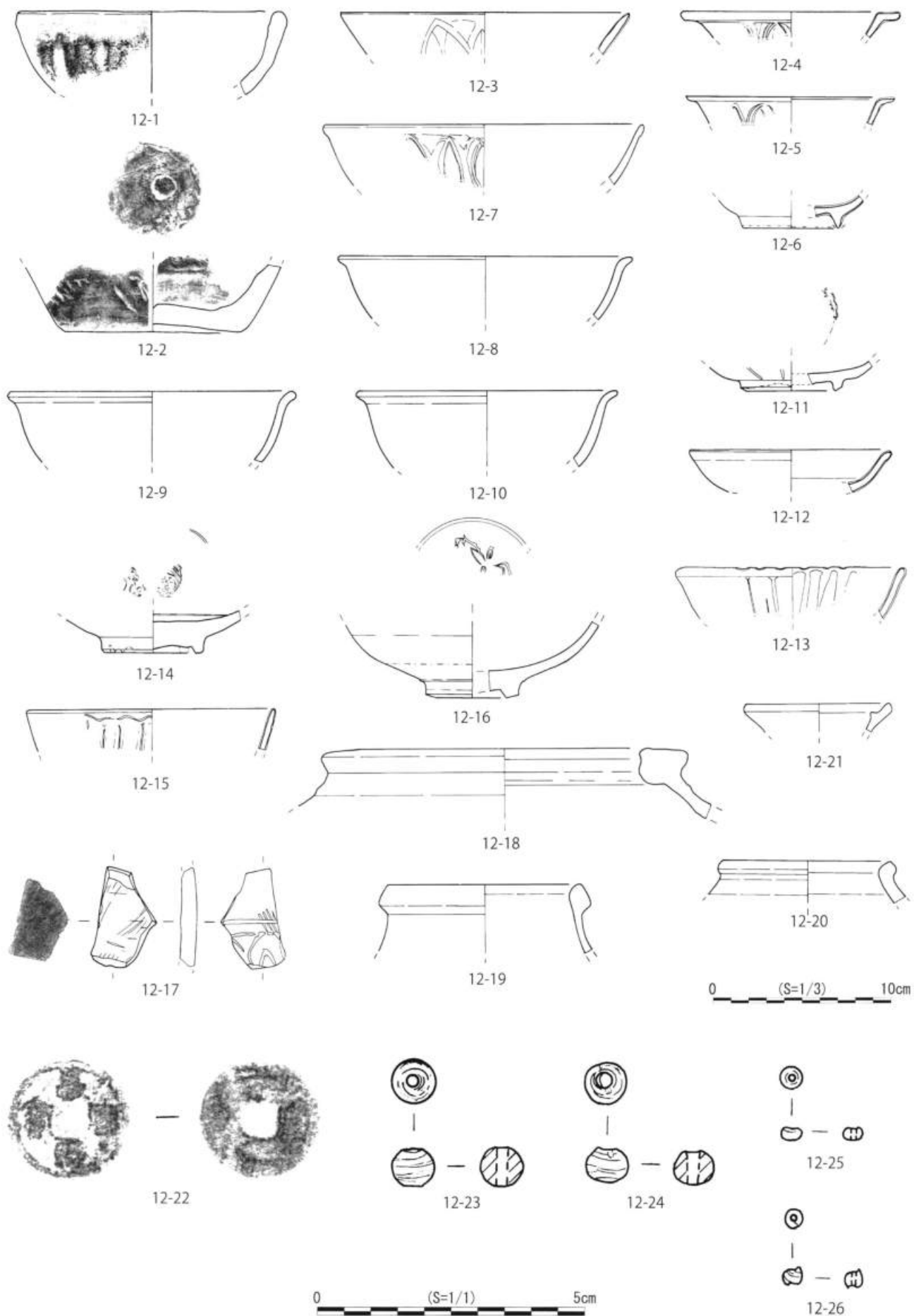
外郭で出土する遺物の多くは15～16世紀代に収まる。これは上層までの発掘で終わっていることもあるが、V区についても同様である。トレンチ掘削において確認された下層からは15世紀以前の古い遺物で構成されている。II層以下、上層（I層）と分けて紹介したい（第12・13図）。

#### 【II・IIc・II d・造成層出土遺物】

1. 土器（第12図－1）1はグスク時代に属する土器で第3様式（宮城・具志堅2007、以下土器分類は左記に従う）、鍋と思われる。
2. カムイヤキ（第12図－2）厚手のつくりとなるB群の壺底部。
3. 青磁（第12図－3～15）3は龍泉窯系青磁II類の口縁部資料で口縁部は尖り、外面には鎬蓮弁を施す。4・6は同III類の口折れ皿で、口縁部は外側に折れ、胴部には蓮弁文、底部は全面を施釉し壘付を面取りする。5は同IV類の口縁部皿。7・14は同IV類碗、8・9は同IV～V類碗、10は同V類碗。11～13は同V類皿。15は同VI類碗口縁部で胴部に細蓮弁を施す。
4. 白磁（第12図－16）16はC3群（無文外反・閩清窯系）。腰部が張り、見込みに印花文を施す。
5. 高麗陶磁（第12図－17）17は象嵌青磁でいわゆる高麗青磁に属する資料で壺胴部か。
6. 中国褐釉（第12図－18～20）18～20は中国産の褐釉陶器と思われる資料で、18は今帰仁城跡をはじめ沖縄のグスクで最も出土する壺で、安座間分類の5類に相当する。
7. 沖縄産陶器（第12図－21）喜名焼の資料か。蓋になる可能性があるが詳細は不明。
8. 銭貨（第12図－22）嘉祐通宝（北宋・1056年）。
9. 玉類（第12図－23～26）III類：丸玉が確認されている。23・24はb2種、25・26はc種。

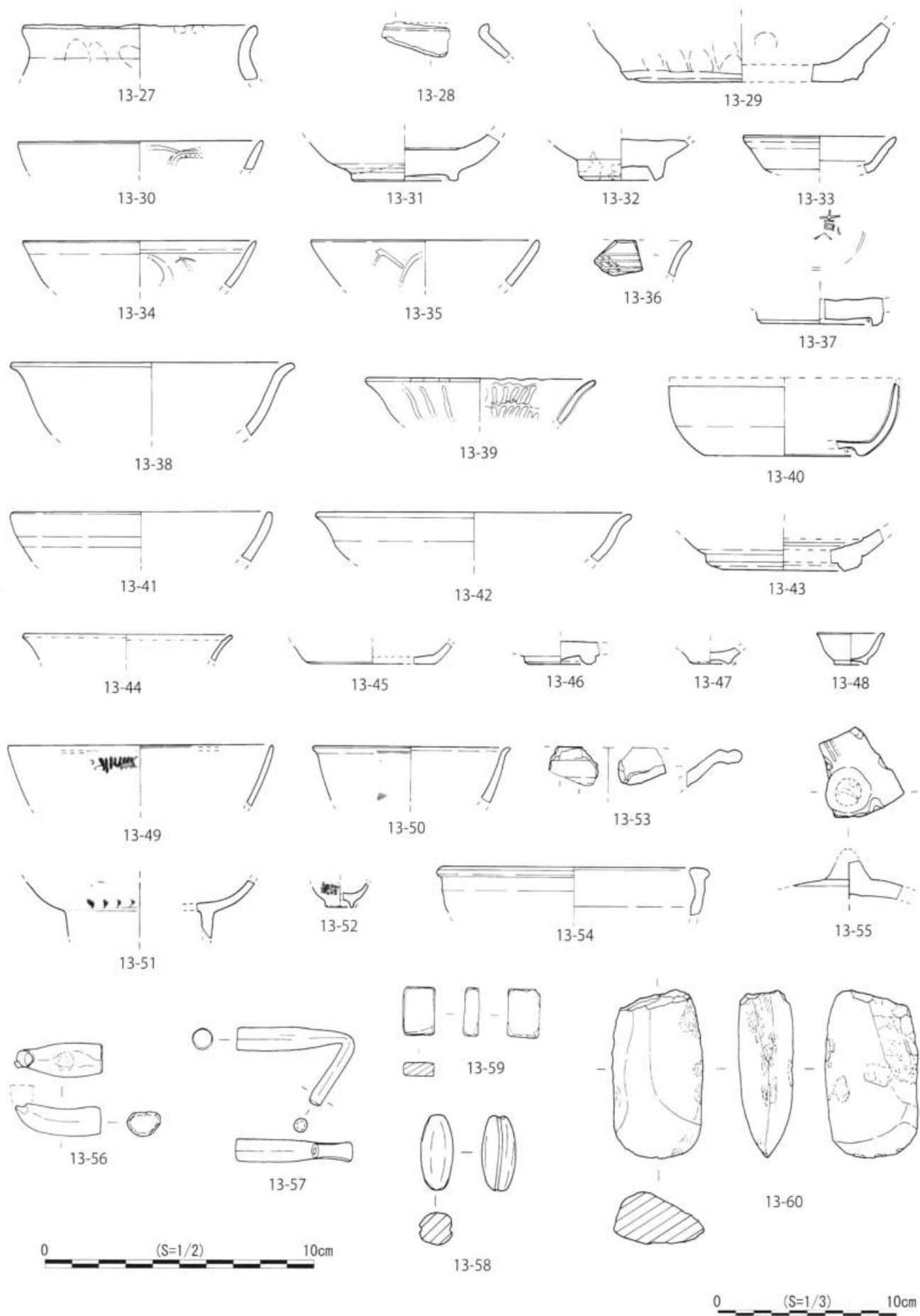
#### 【I層出土遺物】

1. 土器（第13図－27～29）27～29はグスク土器第3様式の土器壺。
2. 青磁（第13図－30～40）30・31・32・34は龍泉窯系I類でいわゆる劃花文碗。32は釉調から劃花文と判断した。33は見込みの櫛描文は確認できないが同安窯系の皿。35は龍泉窯系II類碗で鎬の無い蓮弁文となるタイプ。36は同IV類の碗口縁部で外面に弦文帯を施す。37～40は同V類。37は見込みに「吉」が施文される皿。38は無文外反碗。39は腰折れ皿。40・47は碁笥底の杯。
3. 白磁（第13図－41～48）41はC2群（ピロースクII・閩清窯系）、42はC3群（無文外反・閩清窯系）。43はG群（甫田庄辺窯）の底部。見込みは蛇の目釉剥ぎされ、壘付は面取りされる。素地は精良。44・45はA群（口禿・景德鎮窯系）の皿資料で、全面施釉後に口唇を釉剥ぎする。46はD群（邵武窯系）の杯底部。48はD群の杯完形。
4. 青花（第13図－49～52）49は今帰仁城跡で多く出土する主郭分類III類。口縁外面に波濤文が描かれる。50は分類は不詳器種で小杯あるいは小碗と推定される口縁部小片。51は漳州窯の底部資料。52は主郭分類I類の杯。
5. タイ陶磁（第13図－53）53は半練土器の身と推定され、口縁部は頸縁状となる。
6. 中国褐釉（第13図－54）54は鉢の口縁部資料。
7. 本土産陶磁（第13図－55）55は薩摩産と思われる焼き締め陶器の胴部資料か。
8. 銅製品（第13図－56・57）56・57は金属製の煙管で、56は火皿、57は吸口である、グスク時代のものではなく、近世期の資料と目される。
9. 石器（第13図－58～60）58は定型形の砂岩製の錘で、長軸に一条彫り込んでいる。59は頁岩製の提碇。上原分類では懸垂棒札型碇石となる（上原2010）。長軸が約2.7cmと小さい資料であるが、全面が碇面となって小さくなるまで使用している。60は緑色片岩製の石斧で刃部は両刃となる。



第 12 图 V 区出土遗物实测图 (1)





第13图 V区出土遗物实测图(2)

第3表 V区外郭出土遺物集計表

種別	器種	分類	文様等	部位	V区出土遺物										
					I	I + II c	II b	II c	II d	S1073	造成層	層不明			
青磁	碗	龍泉窯系I類	劃花文	口縁	4			1							
				底部	1										
				胴部	3			2							
		龍泉窯系II類	鎮蓮弁	口縁	15			4	1						
				底部	3										
		龍泉窯系III類	鉢手	口縁	1										
				口縁	2			4							
		龍泉窯系IV類	無絛蓮弁	口縁	1										
				底部	3			1							
				口縁	1										
		龍泉窯系IV~V類	無文外反	口縁	3				7						
				口縁	1			2							
				口縁	43	1		30	2						
		龍泉窯系V類	無文外反	口縁	12				4						
	底部			11				2							
	龍泉窯系VI類	不明	口縁	3											
			底部	1											
	皿	同安窯系I類	蓮弁文	口縁	2			1							
				底部	2										
				底部	3			1							
		龍泉窯系III類	無文	口縁	38				11						
				口縁	7							1			
				口縁	4										
		龍泉窯系IV~V類	無文	口縁	1				1						
				口縁	1										
				口縁	8		1		6						
				口縁	10				7						
				底部	11				6						
				口縁	1										
		龍泉窯系V類	不明	口縁	2										
胴部				1											
龍泉窯系VI類	腰折稜花	口縁	1												
		口縁	1												
		口縁	1												
盤	鏝縁(ヘラ)	口縁	1												
		口縁	1			1									
		底部	2												
杯	不明	口縁	1				2								
		口縁	2				4								
小杯	蓮弁文	口縁	1												
		底部	3				1								
碗	漳州窯	口縁	2				1								
		口縁	1												
皿	庄辺窯	口縁	1				1								
		底部	1												
白磁	碗	景德鎮窯	A群(口禿)	底部	2										
				口縁	5			1							
		福建浦口窯	F(今福仁)	底部	2										
				口縁	12			4	1						
		福建閩清窯	C2(ピロースク2)	口縁	10		1	3							
				底部	1			2							
	組製	不明	口縁	2			1								
			胴部	3			1								
	皿	景德鎮窯系	A(口禿)	口縁	12			2							
				底部	4										
		景德鎮窯系	E群(小皿)	口縁	2										
				底部	1										
	庄辺窯	G群	口縁	1				1							
			口縁	1											
杯	景德鎮窯系	E群	完形	1											
			口縁	4											
福建邵武窯	D群	口縁	1				1								
		底部	1												
瓶	器種不明	不明	口縁	1											
			口縁	1											
青花	明	V類	腰折れ	口縁	3										
				口縁	1										
				口縁	1										
				口縁	4										
				口縁	3										
	漳州碗	不明	口縁	1											
			底部	1									1		
	皿	I類	外反	口縁	2										
				底部	1										
				底部	1										
小杯	I類	直口	底部	1											
			底部	1											
漳州窯	不明	外反	口縁	4											
			胴部	11				1							
天目	碗	不明	口縁	3				2							
			底部	2				1							
褐釉陶器	壺	中・小型	方形口縁	口縁	7			6							
				口縁	12	1		3					2		
	鉢	口縁	1												
翡翠釉	壺	不明	蓋	口縁	1										
				胴部	1										
				口縁	1										
瑠璃釉 象嵌青磁	不明	不明	不明	胴部	1										
				胴部	1				1						

種別	器種	分類	文様等	部位	V区出土遺物								
					I	I + II c	II b	III c	III d	S1073	造成層	層不明	
南西諸島	タイ陶磁	土器		口縁	1								
	カムイヤキ	壺		底部				1					
	壺埴焼	標鉢		口縁	1								
			底部	2									
	高名焼	ナベ		口縁	2								
			口縁	1			1		1				
	グスク土器	壺	不明	口縁	2			2			1	1	
				底部	4			1		1			
				口縁	4								
	沖縄産陶質土器			底部	2								
			口縁	1									
本土産	陶		胴部	5									
道具	円盤状製品			1			1						
石器	石斧			1									
	石製品			1									
	鎌			1									
金属製品	鉄釘		がん首	2							1		
	キセル		吸い口	1									
	銭			1									
								1					

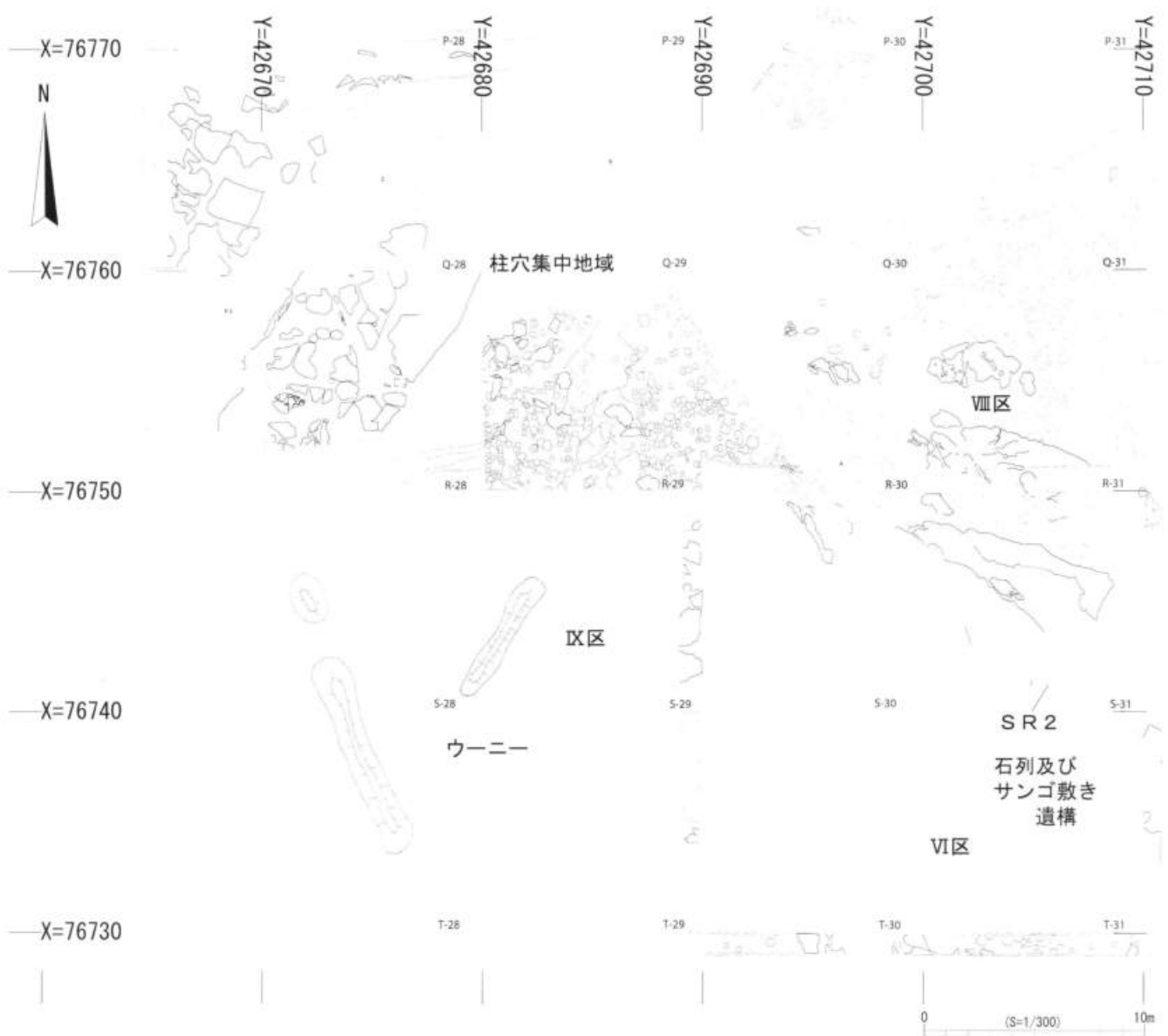
第4表 V区外郭出土遺物観察表

図	種別	分類	器種 (玉類=色) (銭=国名)	部位 (銭=初辨年)	器:口径 他:外径 銭:外径 単位=cm (銭・玉=mm)	器高 厚さ 銭厚 単位=cm (銭・玉=mm)	器:底径 重量 (単位=g)	次	グリッド	層	遺構	dot	No.	備考
12-1	グスク土器	第3様式	鍋	口縁	15.2	—	—	8	R-36		S1073	1	63	
12-2	カムイヤキ	B群	壺	底部	—	—	9.90	8	R-36	造成層	—	—	66	S-36 Ic No.101
12-3	青磁	I	碗	口縁	16.4	—	—	8	S-37	Icd	—	—	38	
12-4	青磁	II	皿	口縁	12.2	—	—	8	S-37	Ic	—	—	31	
12-5	青磁	IV	皿	口縁	12.0	—	—	8	S-37	Ic	—	—	53	
12-6	青磁	II	皿	底部	—	—	5.4	8	S-37	Ic	—	—	35	
12-7	青磁	IV	碗	口縁	18.1	—	—	8	S-37	Ic	—	—	31	
12-8	青磁	IV~V	碗	口縁	16.5	—	—	8	S-36	Ic	—	—	101	
12-9	青磁	IV~V	碗	口縁	16.0	—	—	8	S-37	Ic	—	—	30	
12-10	青磁	V	碗	口縁	14.4	—	—	8	S-37	Ic	—	—	33	
12-11	青磁	V	皿	底部	—	—	5.10	8	S-37	Ic	—	—	32	
12-12	青磁	V	皿	口縁	11.4	—	—	8	S-37	Ic	—	—	32	
12-13	青磁	V	皿	口縁	12.8	—	—	8	S-37	Ic	—	—	33	
12-14	青磁	IV	碗	底部	—	—	5.4	8	S-37	Ic	—	—	30	S-36 Ic No.101
12-15	青磁	VI	碗	口縁	13.9	—	—	8	S-36	Ic	—	—	22	
12-16	白磁	C3	碗	底部	—	—	4.00	8	S-37	Ic	—	—	32	S-37 Ic No.33
12-17	象嵌青磁		壺	胴部	—	—	—	8	S-37	Ic	—	—	31	
12-18	褐釉陶器	5類	壺	口縁	20.8	—	—	8	S-37	Ic	—	—	32	
12-19	褐釉陶器		壺	口縁	10.8	—	—	8	S-37	Ic	—	—	32	
12-20	褐釉陶器		壺	口縁	9.7	—	—	8	S-37	Ic	—	—	35	S-37 Ic No.43
12-21	高名焼?		蓋?	口縁	8.10	—	—	8	S-37	Ic	—	—	32	
12-22	銭貨	高松通寶	北宋	1056年	23.46	1.21	1.95	8	S-37	Ic	—	—	33	篆書
12-23	玉	丸玉b2	無彩色の白		7.93	7.08	0.60	8	S-37	II	—	—	23	
12-24	玉	丸玉b2	鈍い緑みの青		8.19	6.05	0.55	8	R-36		S1074	—	62	
12-25	玉	丸玉c	赤みの明るい灰		4.22	2.58	0.08	8	R-36	表探	—	—	84	
12-26	玉	丸玉c	浅い黄みの暗		3.41	2.74	0.06	8	R-36	表探	—	—	84	
13-27	グスク土器	第3様式	壺	口縁	13.0	—	—	8	S-37	I	—	—	15	
13-28	グスク土器	第3様式	壺	口縁	—	—	—	8	S-36	I	—	—	97	
13-29	グスク土器	第3様式	壺	底部	—	—	12.80	8	S-36	I	—	—	78	
13-30	青磁	I	碗	口縁	13.9	—	—	8	R-36	I	—	—	48	
13-31	青磁	I	碗	底部	—	—	5.85	8	S-36	I	—	—	57	
13-32	青磁	I	碗	底部	—	—	4.1	8	S-36	I	—	—	50	
13-33	青磁	同安窯	皿	口縁	8.6	—	—	8	S-36	I	—	—	16	
13-34	青磁	I	碗	口縁	13.2	—	—	8	S-36	I	—	—	—	
13-35	青磁	II	碗	口縁	12.8	—	—	8	S-37	I	—	—	15	
13-36	青磁	IV	碗	口縁	—	—	—	8	R-36	I	—	—	37	
13-37	青磁	V	皿	底部	—	—	6.6	8	S-36	I	—	—	25	
13-38	青磁	V	碗	口縁	15.7	—	—	8	S-37	I	—	—	7	S-36 Ic No.101 S-36 Ic No.22
13-39	青磁	V	皿	口縁	12.8	—	—	8	S-36	I	—	—	97	S-37 Ic No.9
13-40	青磁		杯	底部	—	—	8.80	8	R-36	I	—	—	13	R-36 I No.12
13-41	白磁	C2	碗	口縁	14.6	—	—	8	R-36	I	—	—	45	
13-42	白磁	C3	碗	口縁	17.6	—	—	8	S-37	I	—	—	1	
13-43	白磁	G	碗	底部	—	—	6.80	8	R-36	I	—	—	45	
13-44	白磁	A	皿	口縁	11.8	—	—	8	R-36	I	—	—	55	
13-45	白磁	A	皿	底部	—	—	7.00	8	S-37	I	—	—	95	S-37 I No.15
13-46	白磁	D	杯	底部	—	—	3.60	8	S-36	I	—	—	92	
13-47	青磁		小杯	底部	—	—	2.00	8	R-36	I	—	—	10	
13-48	白磁	D	完形	完形	3.7	1.80	1.80	8	R-36	I	—	—	46	
13-49	青花	II	碗	口縁	15.2	—	—	8	S-36	I	—	—	42	
13-50	青花	B2?	碗	口縁	11.0	—	—	8	S-36	I	—	—	81	
13-51	青花	漳州窯	碗	底部	—	—	8.00	8	S-36	I	—	—	25	
13-52	青花	I	小杯	底部	—	—	1.50	8	R-36	I	—	—	10	
13-53	半練土器	タイ	身	口縁	—	—	—	8	S-36	I	—	—	74	
13-54	褐釉陶器		鉢	口縁	15.4	—	—	8	S-37	I	—	—	7	
13-55	本土産陶磁	摩多?			—	—	—	8	R-36	I	—	—	45	
13-56	煙管		雁首		33.4	11.74	3.14	8	S-37	I	—	—	4	
13-57	煙管		吸口		70.53	8.39	4.95	8	Q-36	I	—	—	105	
13-59	石器	砥石	懸垂棒杓型		2.68	1.70	6.51	8	R-36	I	—	—	48	頁岩
13-58	石器	鎌			2.8	1.20	5.08	8	R-36	I	—	—	6	砂岩
13-60	石器	石斧			9.2	5.10	228.47	8	R-36	I	—	—	106	緑色片我岩

## 第2節 東区 IX区 (外郭2次調査)

IX区は平面約800㎡で、東にはVIII区との境となる石積み(SR2、既報告:VIII区西南検出の石敷遺構)を配し、北側は東側城壁に囲まれ、南側にはレコーラウニーがある地域である。外郭東側地区は面積が約10,000㎡の広大な地区であることから、2次調査において先行して試掘調査を実施した。調査成果については、既報告書第23・26集において報告済みであるが、R-28・29については未報告であった。IX区の調査については試掘調査の結果、外郭東区の主体的な地域ではないことが確認された。これにより現在でも旧盆明けの戌の日に字今泊によって執り行われる「ウンジャミ(海神祭)」祭祀の舞台として利用されるウーニーなどの遺構との兼ね合いから保存地区としている。

R-28・29はおおまかにI層(a・b)、II層(上・下)、III層の3枚の堆積層が確認されている。III層以下は整備事業の観点から掘削は行っていない。セクション図については第15図に示している。



第14図 IX区遺構詳細図

## 1. 層序

IX区で確認された堆積層は、現代の表土（Ia層）・旧耕作土の（Ib層）でI層とした。この下にグスク時代の遺物包含層が堆積する。色調で上下層に分けたが年代の相違は確認できなかった。その下層からは数多くの柱穴を検出するIII層が確認された。III層は隣接するSR2に潜り込んでおり、掘削を行っていないがSR2の調査から14世紀よりも遡ることはない（既報告26集）。

I層：【にぶい黄褐色土層】腐食・耕作土層。ガラスビンや近現代の陶磁器等を包蔵する（a・b）。  
II層：【暗褐色土層・褐色土層】当該遺跡の形成期のグスク時代の遺物包含層（上・下）。IX区全体を覆う。IX区で検出される遺構のほとんどがこの時期のもので、15世紀～16世紀（主郭第III期～第IV期）の遺物が得られている。

III層：【にぶい黄褐色土層・褐色土層】当該遺跡の形成期のグスク時代の遺物包含層。SR2にもぐり込む。

## 2. 遺構

R-29グリッドにおいてI層を除去後、南側のII層上面を掘り込んだ溝状遺構が確認されており（S2）、SR2の開口部（既報告：VIII区西南検出の石敷遺構）にむかってのびている。続いてII層を掘り進めIII層が検出され始めると、柱穴が密集して確認されはじめ、合計295基が検出されている。柱穴群は、大まかに二つの時期に分かれると思われ、II層上面で検出された新しい時期に相当する10基と、III層で検出されたグスク時代相当の多数の柱穴がある。しかし、III層で検出された柱穴は掘りあげていないこともあり、建物跡のプラン復元には至っていない。また、III層では赤色ブロックを多数含む範囲も確認されている。

種類 遺構数

・柱穴（SP）

295基

・石積み遺構（SR2）

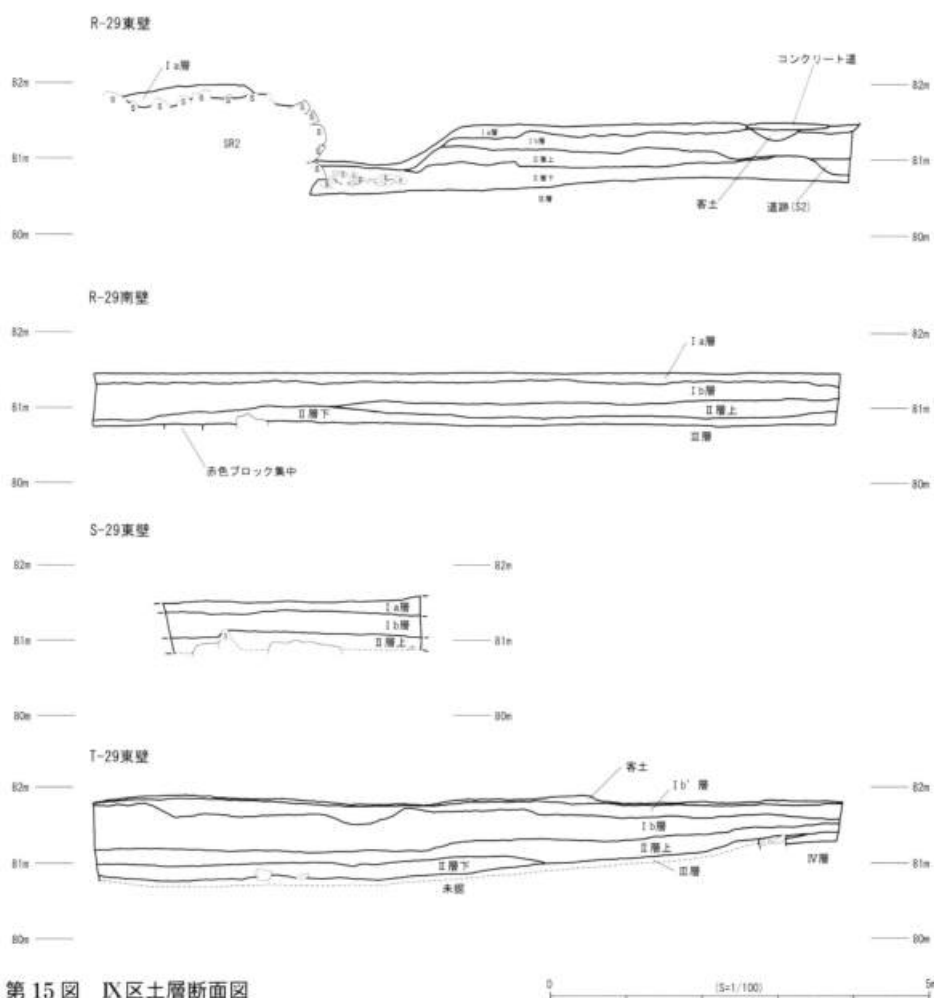
1基（報告済み）

・溝状遺構

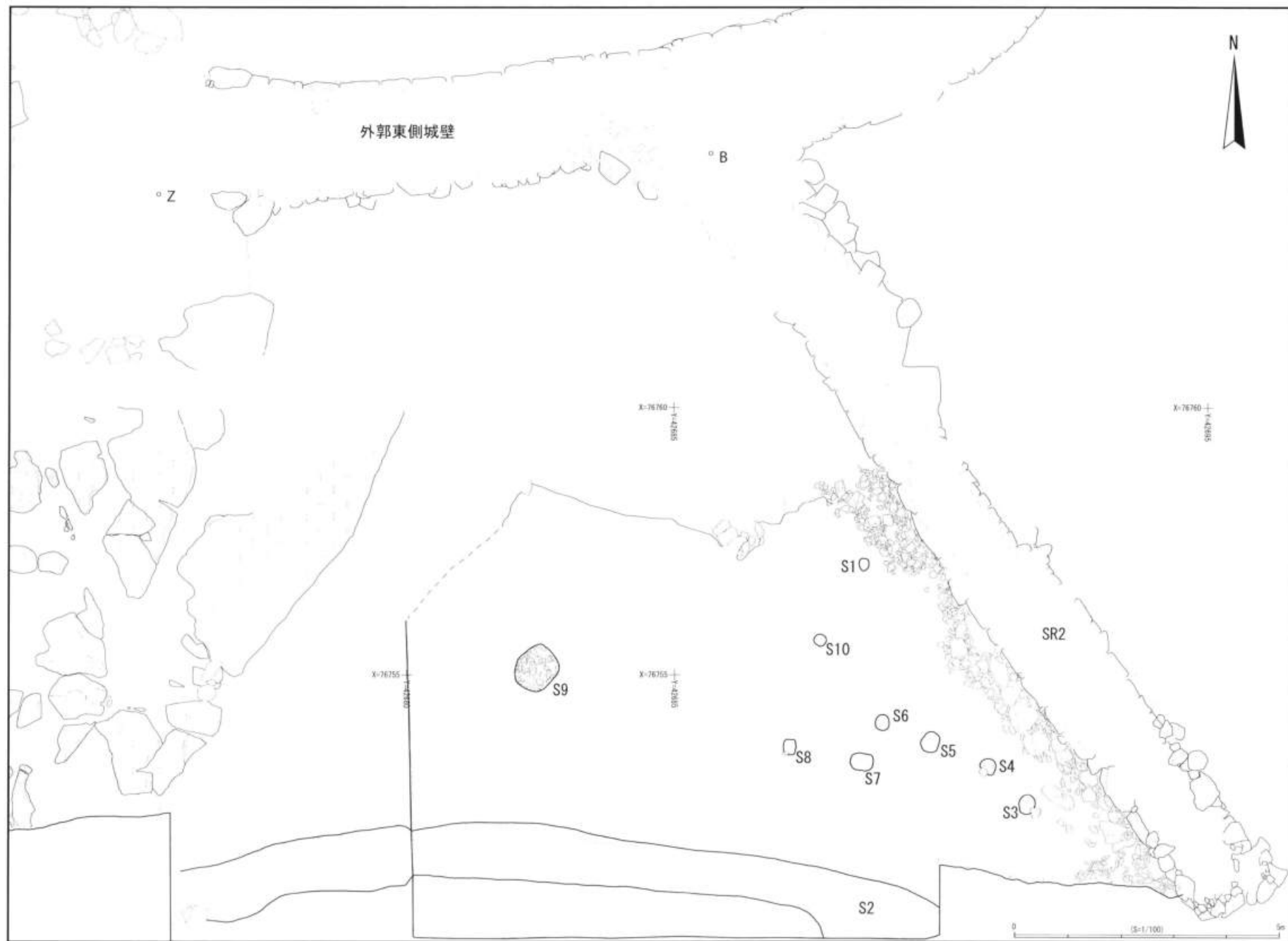
1基（S2）

・レコーラウーニー

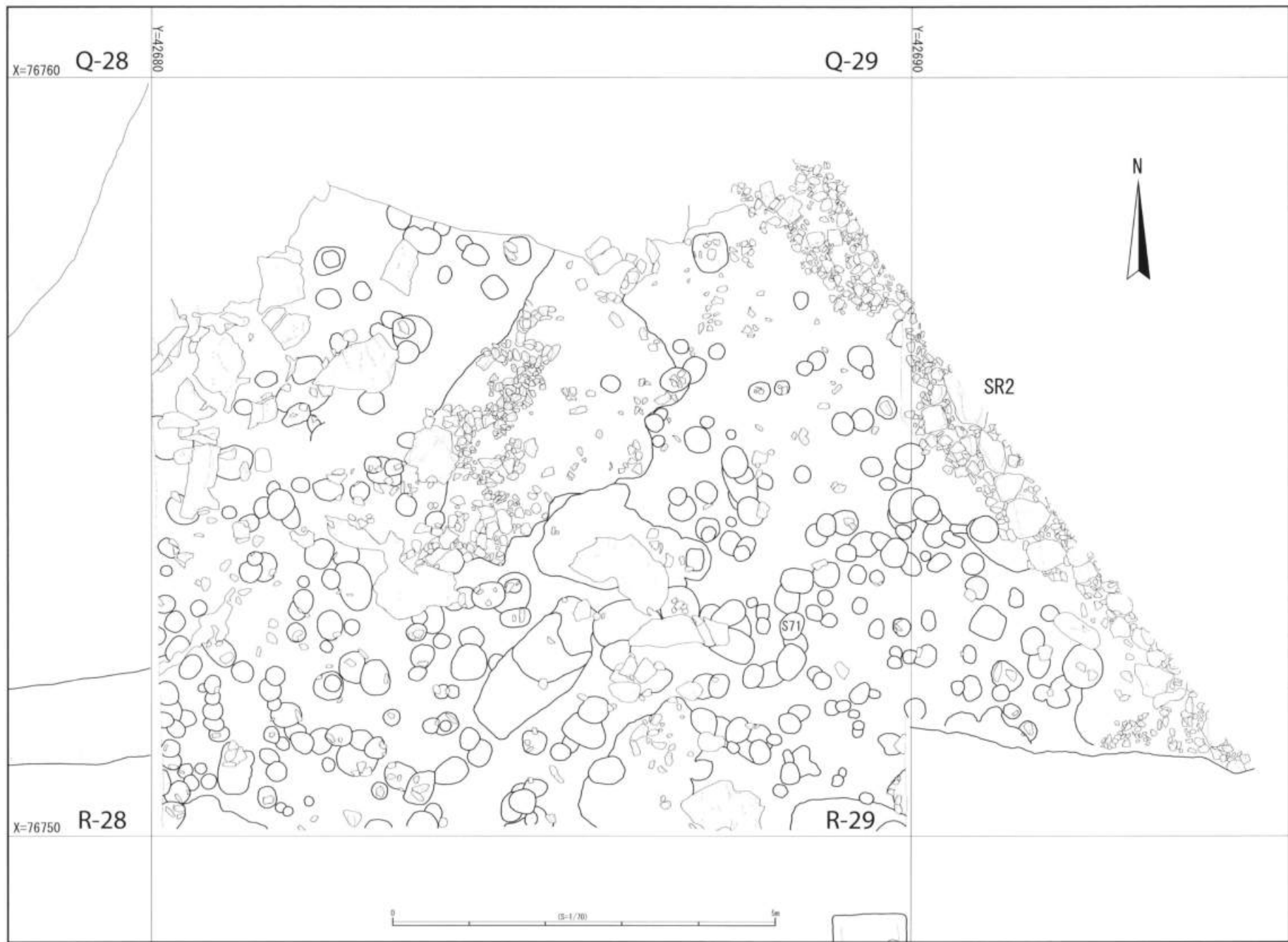
2基（報告済み）



第15図 IX区土層断面図



第16図 IX区II層上面検出の柱穴および道跡遺構詳細図



第17図 IX区Ⅲ層上面検出の柱穴群遺構詳細図

### 3. IX区包含層出土遺物

1. 土器（第18図－1～3）1はグスク土器（第3様式）の底部。2・3は八重山土器？で壺と思われる。
2. カムイヤキ（第18図－4）4はカムイヤキのB群壺の頸部資料。
3. 無釉陶器（第18図－5）5は沖縄産無釉陶器碗の底部。
4. 瓦質土器（第18図－6）6は沖縄産の瓦質土器で蓋と思われる資料で、首里城や渡地村跡で報告例がある。
5. 青磁（第18図－7～30、第19図31～51）7～30、第19図－41は碗資料。7・10・13は龍泉窯系I類で、幅の狭い角高台、内器面には劃花文が確認できる。8・12は同II類の鎬蓮弁文碗。12の見込みには印花文を押印している。9・11は同IV類の口縁部資料。11は口縁部外面に弦文帯、9は小片だが口唇近くに弦文、その下に波濤文？を施す。今帰仁城跡主郭VII層で出土した資料と類似する（第25図－3）。14～19は同IV類の資料。14は高台内部まで施釉すること、見込みが凹み同III類の底部と似ており古段階の資料と思われる。15・16・19はV類の可能性もあるが釉調からIV類とした。20～26は同V類碗。20は無鎬蓮弁文、21・22はヘラ描きの雷文帯碗。23・24・26は同底部。25は無文直口の口縁部。27・28は同VI類口縁部資料。29は同VII類口縁部で口縁外面に波濤文を施す。30は泉州窯系の口縁部で、外面の胴部の釉を掻き取る。第19図－42はいわゆる漳州窯の底部。蛇の目釉剥ぎ、畳付は平坦なつくりとなる。第19図－31～41は皿の資料。31は同安窯系I類の底部資料で、見込みに櫛描文を施す。35・40は龍泉窯系青磁皿III類の底部で、畳付を釉剥ぎする。32～34は同IV類。36～39・41は同V類。43・44は杯。45・46・51は盤で、45は高台が碁筒底に近い。47・48は香炉で、48は口唇を斜めにカットし、蓋受状としている。49は瓶の胴部で外面に浮文で区画、その間に蔓草状の文様を施すが小片のため詳細は不明。内側には整形時の指頭痕が明瞭に残る。50は水注の注ぎ口。
6. 白磁（第19図－52～70、第20図－102）52・53はA群（口禿・景德鎮窯系）の碗で、口唇の釉を掻き取り、底部は畳付まで全面施釉する。54・55はF群（今帰仁タイプ・浦口窯系）の底部資料で、見込みは露胎となる。56はC1群（ピロースクI・閩清窯系）、57・58はC2群（ピロースクII・閩清窯系）で58の見込みは凹む。59～62はC3群（無文外反・閩清窯系）。63はC2群と分類しているが天目状の底部であることから、南平茶洋窯と考えられる（田中2002）。64・65はA群の皿。66・67はE群（景德鎮窯系）の皿。68～70はD群（邵武窯系）の直口皿と八角杯。102は景德鎮窯系か。白色の釉を外底まで施釉させ、高台は畳付に向かって細く仕上げている。凹んだ見込みと外面に花文？が刻まれる。
7. 青花（第20図－71～80、86、106）71は明青花碗II類（小野分類B群・景德鎮窯系）の資料。口縁内面に四方禪文、外面に蘭石文を施す。72はIII類（小野分類C群）、見込みは蓮子となる。73はV類（小野分類D群）で外部口縁に波濤文、胴部にアラベスク文。74はVII類（森分類B2群）で外底に宣徳年造の字款。75・76はI類皿。見込みに玉取獅子。77はIII類皿。78は既報告第29集96－135に類例がある。碁筒底で腰部に蓮弁文を配する（II類）。79は景德鎮ではない粗製の碗で漳州窯系の資料と思われる。80は杯III類。86は裾が波状となっている小罐の蓋の可能性があり。文様の類例はいまのところ確認できていない。106は合子の蓋か。
8. 黒釉陶器（第20図－81～83）89～92と同様いわゆる茶器類である。81の底部は高台脇を一度削り出し、82・83の口縁部は舌状に口唇を尖らす。
9. ベトナム陶磁（第20図－84）釉調から瓶胴部の一部と思われる。区画された内側に幾何学文。
10. 元青花（第20図－85・87・88）元青花もしくは明初の青花磁器。85は蓋で蔓唐草？を施す。87・88は酒会壺の胴部で変形蓮弁文の一部が確認できる。
11. 褐釉陶器（第20図－89～96）中国産と思われる褐釉陶器。89～92は茶入れで赤褐色等



の粘性のある精製された胎土に混和材を含まない。93・94は大型の壺、95・96は中型の壺底部。

12. 焼締陶器（第20図－97）底部の造りは糸切りで仕上げられ茶入れの器と似る。壺と思われる。

13. 韓国青磁（第20図－98～101）98は象嵌青磁で梅瓶と思われる。主郭において出土例がある（第14集、第78図－3）。99・100は碗。101は壺と思われ葉文が施文される。

14. タイ陶磁（第20図－103・104,107）103は口縁部がラッパ状に開くことからシーサッチャナライ窯系、104は口縁部を玉縁状にすることからメナムノイ窯系の資料と思われる。107は半練土器の蓋で今帰仁城跡でも多く出土している。

15. ベトナム陶磁（第20図－105）ベトナムの白磁瓶と思われる。唐草文を線彫りする。

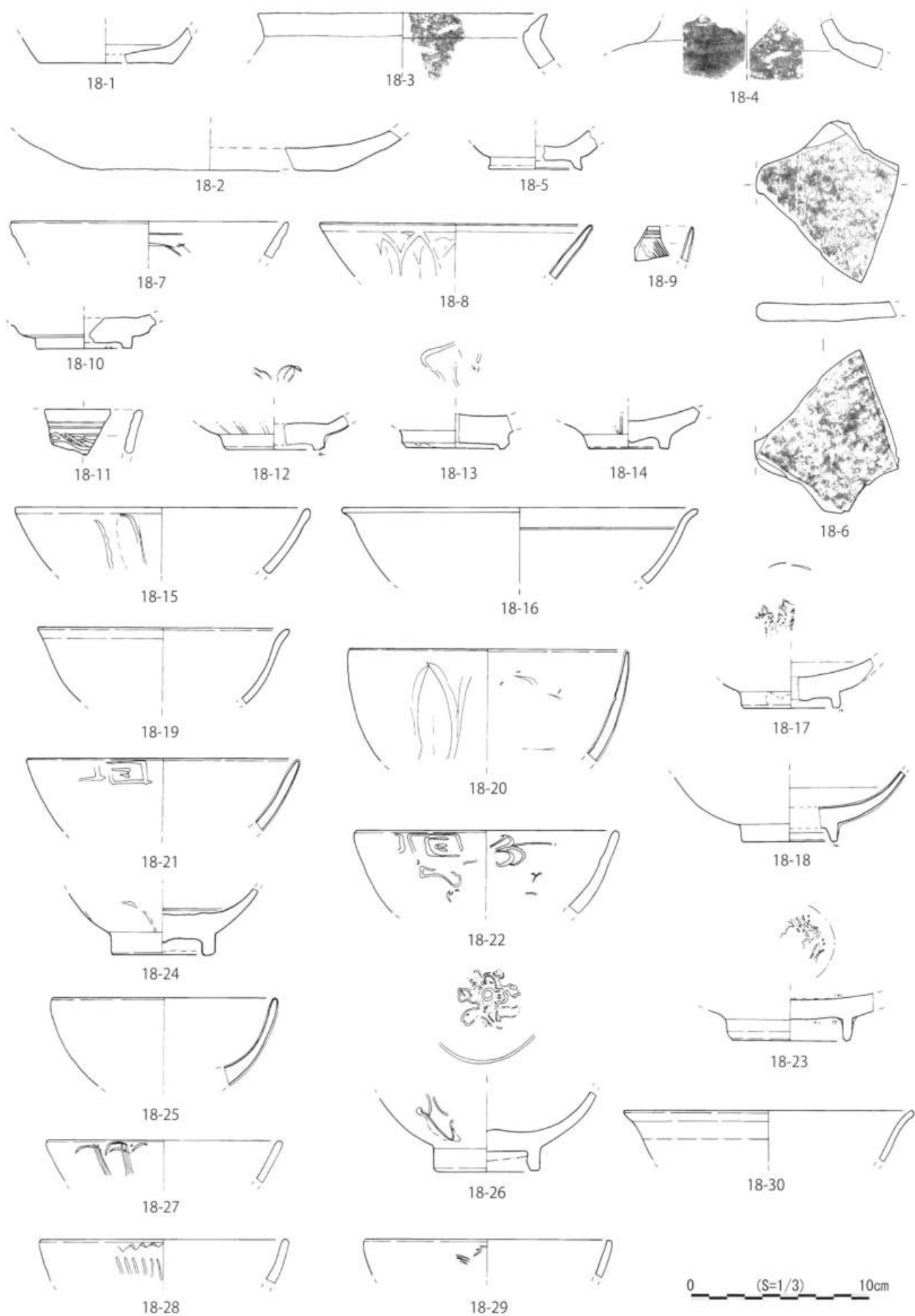
16. 金属製品（第21図－108～128）108～119は青銅製品。108・110は鍍金された製品で前者は八双金具か。後者は葉文を丁寧な細工した製品。109は鉋穴が穿たれた板状の製品。111・112・114は鉋。113は筆筒等の引き金具か。116は覆輪。115も覆輪の可能性はあるが詳細不明。117・118は用途不明の板状製品。119は簪。つくりは比較的大ぶりで断面は六角形である。120～128は鉄製品。120～122、124は鋏で3種類確認できている。120は二股に分かれる雁又型、121は龍舌型、122・124はバチ型となる。123は鋸で刃先は約4センチ。125・127は釘で断面方形。125は頭部を折りたたまれる。127は残りがよく約10.7cmを計る。126は先端に向かって円錐状に広がり、鋏の可能性はある。128は刀子で。

17. 銭貨（第22図－129～135）129は天聖通寶（北宋・1023年）。130は3枚重なった状態で出土した。残念ながら銭名は不明。131・132は皇宋通寶（北宋・1038年）。133は熙寧通寶（北宋・1068年）。134は乾道○寶（南宋・1165年）。135は寛永通寶（新寛永・1697年）。

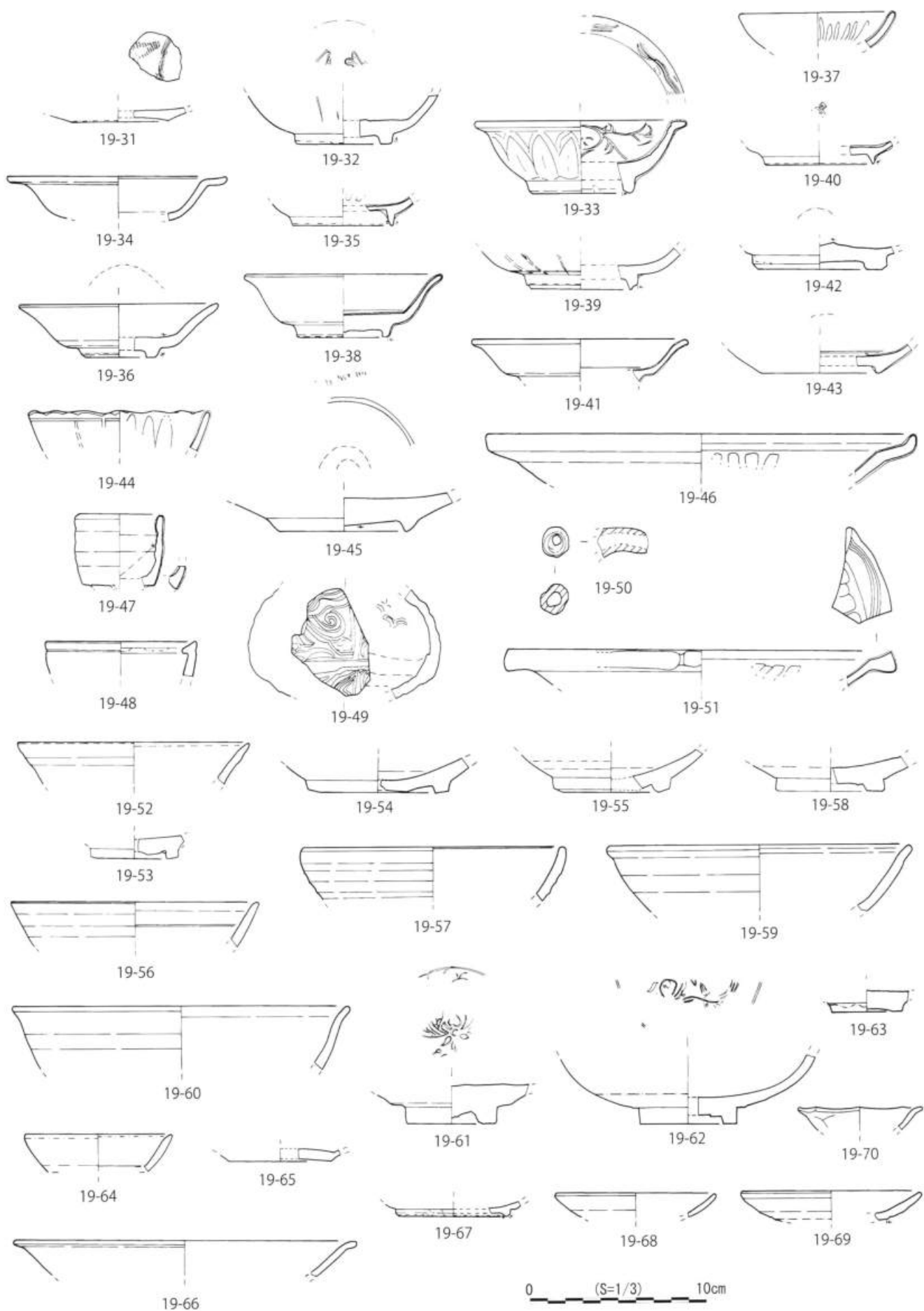
18. 玉類（第22図－136～149）玉は主郭報告書分類よりⅢ類（丸玉）が出土している。136～144はb2種としたガラス製の丸玉で、サイズは136の外径10.19mm、厚さ10.6mm、重量1.82gが最大で、飴状になったガラスを複数回巻き上げて製作されたガラス玉である。回数が1～3回程度の小品をc種（145～149）とした。

19. 骨製品（第22図－150）長さ4.8cmの断面円形の棒状の骨製品で、中央に孔が穿たれている。骨製の長尺中央に孔が穿たれる資料としては主郭（114－1）で出土例があるが、長さ及び形状が異なる。なんらかの服飾などの留具や付属的道具として利用するために加工された骨製品と推量される。

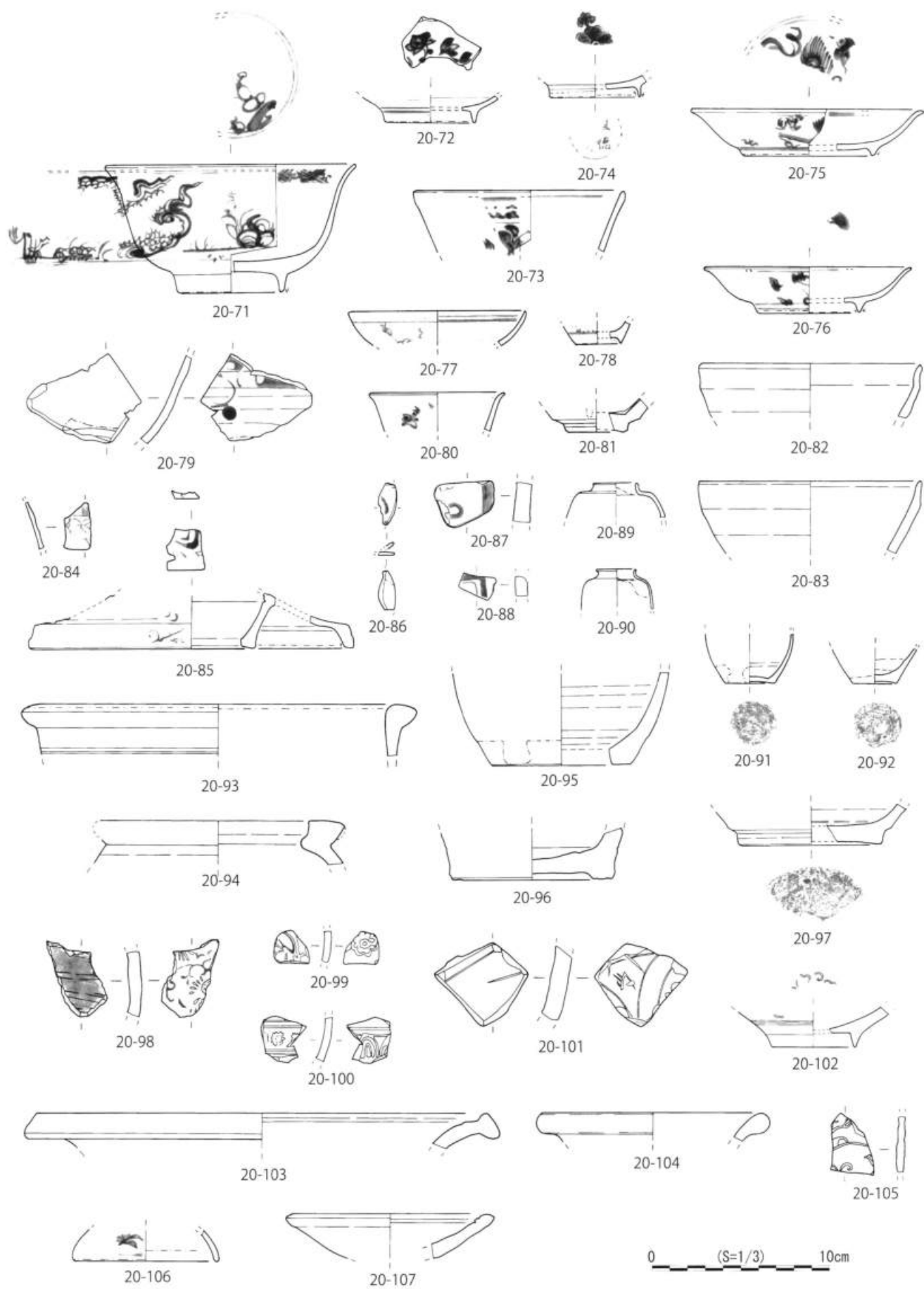
20. 石製品（第23図－151）石灰岩を素材とする碗の底部様の形態の資料である。全形を保持しないため、一見底部の様に見える資料とも考えられなくもないものの、類例を持って検討したい。



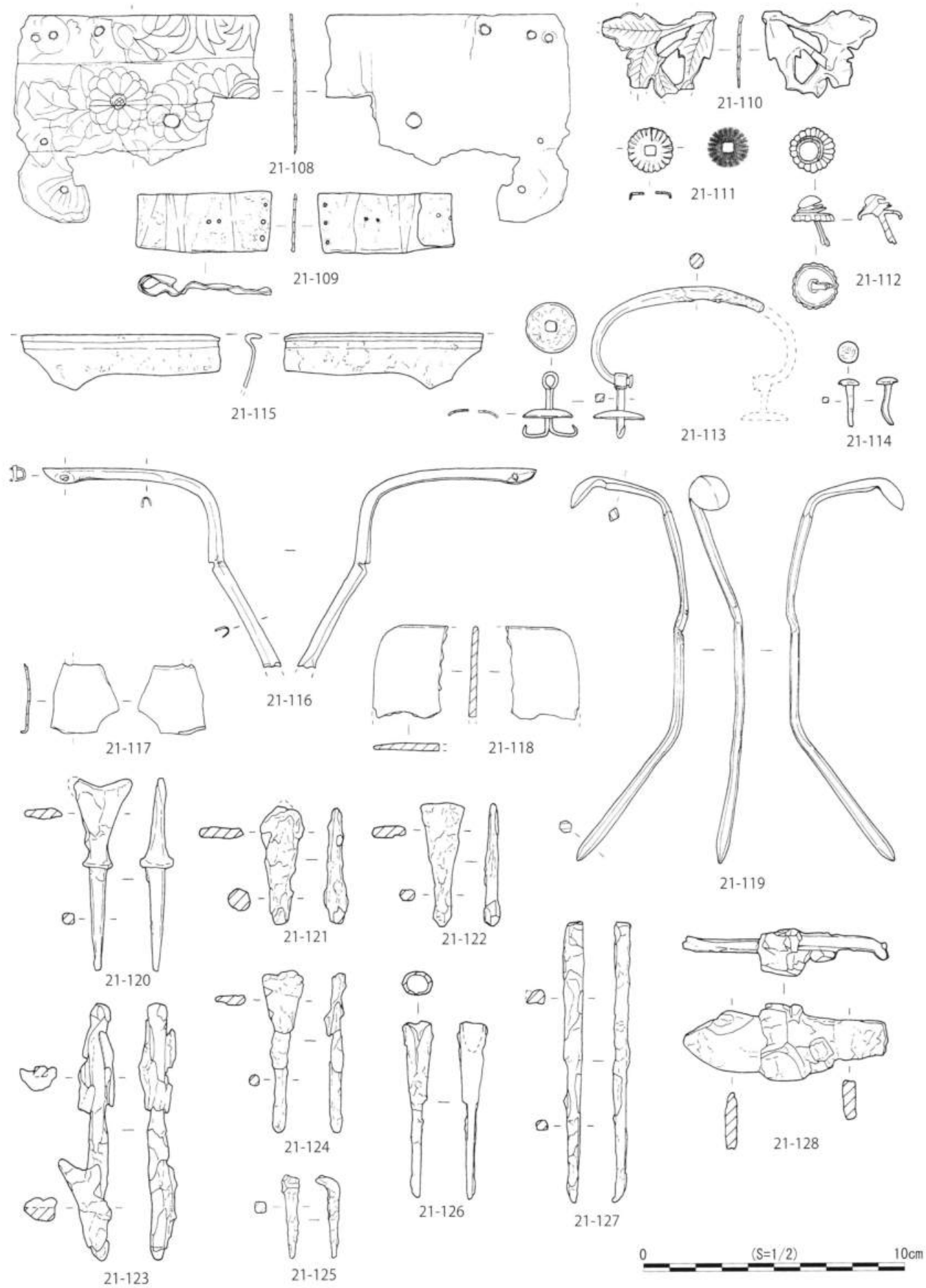
第18图 IX区出土遗物实测图(1)



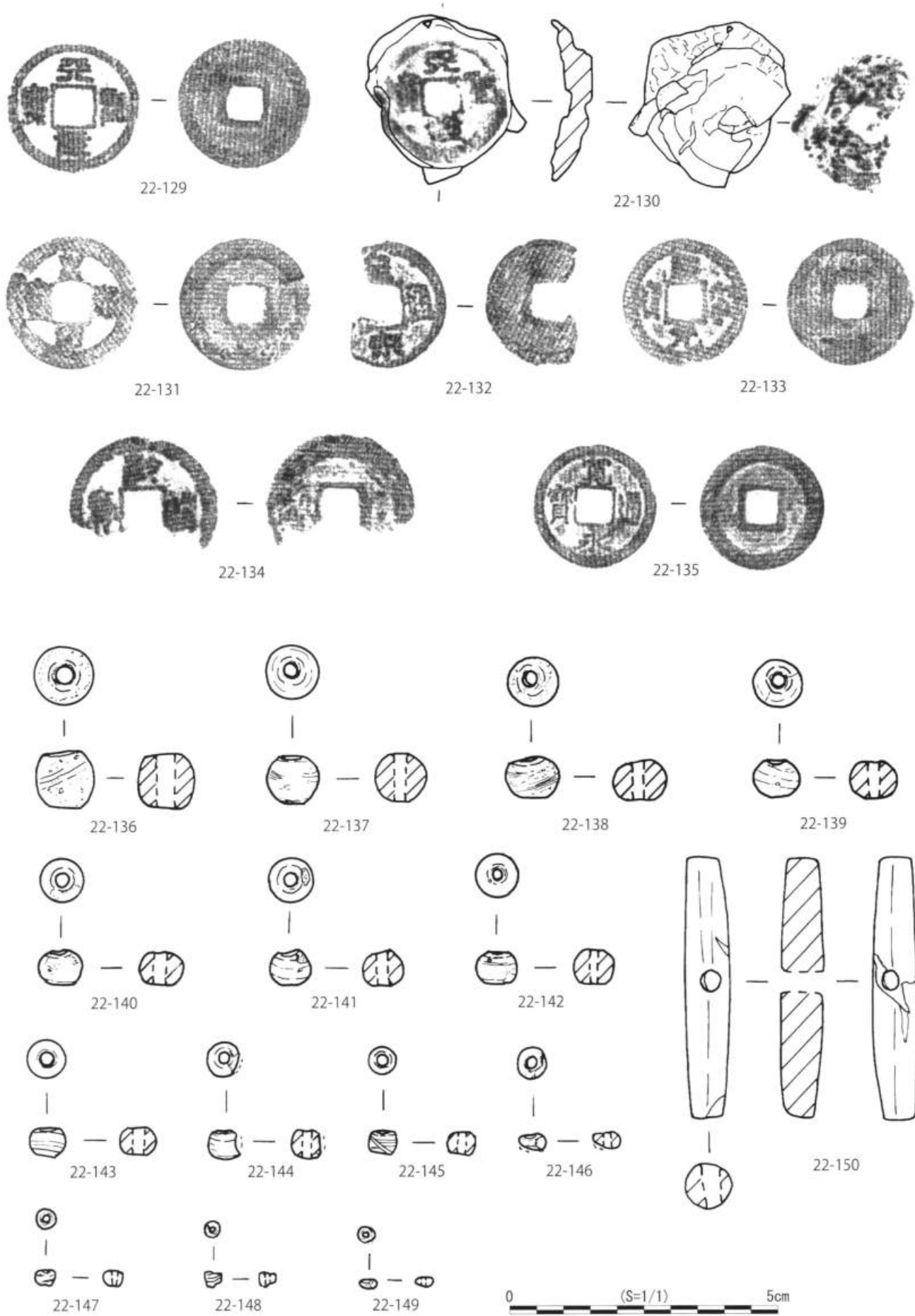
第19图 IX区出土遗物实测图(2)



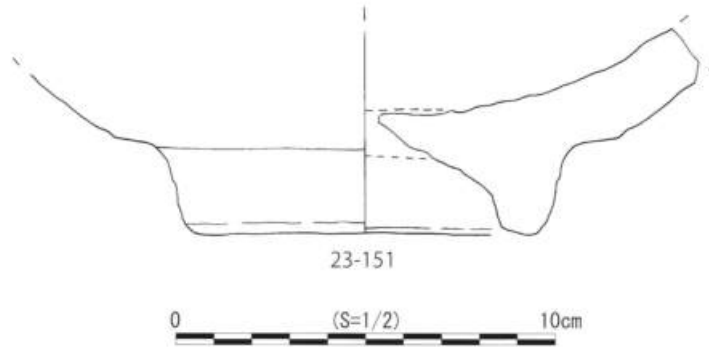
第 20 图 IX 区出土遗物实测图 (3)



第 21 图 IX 区出土遗物实测图 (4)



第 22 图 IX 区出土遗物实测图 (5)



第 23 図 IX区出土遺物実測図 (6)

第 5 表 IX区出土遺物集計表

種別	器種	分類	文様等	部位	IX区出土遺物											推定個体数				
					I	I b	I + II	I + II + III 下	II	II - III 下	III 下	III	III b	S	I + S		破片数小計			
青磁	碗	同安窯系 I 類	縹緋文	口縁	2						1							3		
		龍泉窯系 I 類	刺花文	口縁	6				2									8		
				底部	5															
		龍泉窯系 II 類	竊蓮弁	口縁	1				4		2							8		
				底部	4				1		2				1			2	2	
		龍泉窯系 IV 類	無縁蓮弁	口縁	1														1	
			弦文帶碗	口縁					1		2								1	
			波濤文	口縁							1								1	
			不明	底部	8				6		3			1					17	
		龍泉窯系 IV ~ V 類	無文外反	口縁	25				39		27				2			93	81	
			無縁蓮弁文	口縁	36				30		9				1			76	75	
			雷文帯	ヘラ	23				19		2				1			45	31	
			スタンプ	スタンプ	20				18		2							40	40	
		龍泉窯系 V 類	外反	口縁	158				125		1	33			4			321	288	
			直口	口縁	75				46		15				3			138	120	
			不明	底部	32				14		2	1			1				49	
		龍泉窯系 VI 類	細蓮弁文	完形																
				口縁	13		1		23		1	1						39	35	
			不明	口縁	3				3									8	8	
				底部	3														5	
	龍泉窯系 VII 類	波濤文	口縁					2										2		
	泉州窯系	縹反碗	口縁	3				3										5		
	粗製品	粗製碗	底部	1		1												2		
	皿	同安窯系 I 類	縹緋文	口縁	3				3									6	5	
				底部	2													2	2	
		龍泉窯系 III 類	口折皿	口縁	1													1	1	
				口折皿	1														3	3
		龍泉窯系 IV・V 類	口折皿	口縁	3				5		1								9	9
				底部							2									
			腰折外反 V 類	完形			1				1								2	
				口縁	15				8		5				1			29	23	
				底部	1				2									3		
			直口有文	口縁	1				1										2	
		直口無文 V 類	口縁	3				3		2								8	7	
		無文外反	口縁	15				8		2				1			25	26		
			口縁	23				12						1			36	32		
		龍泉窯系 V 類	口折皿	底部	2			1										3	3	
				完形	1														1	
		腰折椀花	口縁	2				6		1							9	9		
	分類不明	皿	底部	27				4		2							35	35		
	盤	鈔縁 (椀花)	口縁	6				1						1				7		
		鈔縁 (不明)	口縁	19		1		18		1				1			40	34		
			底部	8				1									8	8		
	瓶	不明 (大皿)	底部					2										1		
			胸部	1						2										
杯	杯	口縁					1										1			
		底部	1						1								2			
	蓮弁文	口縁	1						1								2			
		口縁					1										1			
	束口杯	底部								1							1			
		破片						1									1			
	身	胸部	5				3						1							
		蓋	3														3			
	酒会器	香炉	口縁			1		1										1		
			完形										1					1		
水注		注口						1									1			
		白磁	1																	
円盤状製品	釉種						1													
	青磁	1					3										6			
白磁	碗	景徳鎮窯系	A 群 (口壳)	口縁	1				1									2		
				底部	1															
		福建浦口窯	F (今歸仁)	口縁					1		1							4		
				底部	3															

種別	器種	分類	文様等	部位	Ⅹ区出土遺物											推定個体数				
					I	I b	I + II	I + II + III + III下	II	II + III下	III下	III	III b	S	I + S		破片数小計			
白磁	碗	福建閩清窯	C1 (ピロースク1)	口縁	1					1							2			
			C2 (ピロースク2)	口縁	9				3									9		
			底部	4				1												
		茶洋窯系 福建庄辺窯	C3 (無文外反)	口縁	28					20		15				1			55	
			底部	6				3			1									
			底部	1															1	
	皿	景德鎮窯系	G群	底部	1													1		
			A (口壳)	口縁	9				7		4			3				19		
			底部	3				1		2										
		福建邵武窯系	E群 (外反皿)	口縁	13				5										18	
			底部	5				3											1	
			E群 (小皿)	底部			1												1	
		福建邵武窯系	D群 (小皿) 直口	口縁	9				7										15	
			D1群 (小皿)	底部	4														4	
皿C群	口縁		1														3			
杯	福建閩清窯	不明	口縁	13			5							2			18			
	福建庄辺窯	D1 (八角杯)	口縁	3				1									2			
小杯	不明	底部					1										1			
青花	元 or 明	小壺	フタ	口縁	1												1			
		青花	酒会壺	フタ							2							2		
	明	Ⅱ類	外反	口縁	7		1		4									10		
		Ⅲ類	蓮子	口縁						3	1							3		
		Ⅳ類	口折	口縁	1													1		
		Ⅴ類	腰折れ	口縁					3									3		
		Ⅵ類	樽型	底部	1													1		
		Ⅶ類	外反	底部	1													1		
		Ⅷ類	外反不明	口縁	1				2					1				4		
		ⅧかⅤ	不明	口縁	14				8									21		
	鉢	Ⅷ類	重製鉢	胴部口縁	7				3									7		
		Ⅷ類	外反	口縁	8				4									12		
	皿	Ⅰ類	外反	口縁	3				3									6		
				底部					1									2		
Ⅱ類		膝筒底	口縁	2				8									9			
小杯	Ⅱ類	外反	口縁	2				3									2			
			底部	1					3								2			
杯	Ⅰ類	筒型	口縁	2					1									1		
			不明	底部	2													2		
			合子	蓋	口縁	1													1	
天目	碗	不明	蓋	口縁	4												4			
			不明	蓋	口縁	4												4		
褐釉陶器	壺	中・小型	茶入れ	口縁					11								10			
				底部					1									5		
				口縁	9														2	
				口縁	11					10									16	
				口縁	1					2						1			3	
				口縁	1					1									2	
	タイ陶器	半鉢	シーサーチャナライ窯系	フ字形口縁	口縁	5			4						1			9		
					口縁	11			8									16		
					不明	底部	1				1								1	
					不明	底部	1				2									3
	ベトナム	白磁	碗	色絵	口縁	2												2		
					口縁	1													1	
					口縁	1														1
	南西諸島	徳之島産	カムイヤキ	不明	口縁	2				1								3		
口縁					1				1									1		
蓋					口縁														3	
蓋					口縁					4										4
香炉					口縁					2										1
口縁					6							1							7	
沖縄産		瓦質土器	不明	瓶	口縁	5												5		
					口縁	13						1							14	
		施釉陶器	不明	不明	口縁	2						1						3		
					底部	1							1						2	
グスク土器		不明	不明	碗	口縁	15				1								14		
					口縁															1
八重山土器		不明	不明	壺	口縁					1								1		
					口縁															1
肥前	銅鉢種	不明	皿	口縁	1												1			
				口縁															1	
近現代陶器 (本土産)				碗	口縁	22				1						23				
				碗	底部	5								1		6				
骨製品	丸玉 (黒)	不明	不明	不明	口縁							1					1			
					口縁														1	
玉器	丸玉 (白)	不明	不明	不明	口縁										1		1			
					口縁														1	
石器	不明	不明	不明	不明	口縁												1			
					口縁														1	
その他	不明	不明	瓦に似ている	不明	口縁												1			
					口縁														2	
				陶質土器	口縁	1										1				



第6表 IX区出土遺物観察表

図	種別	分類	器種 (玉類=色) (銭=国名)	部位 (銭=初銚年)	器:口径 他:外径 銭:外径 単位=cm (銭・玉=mm) (金属=mm)	器高 厚さ 銭厚 単位=cm (銭・玉=mm) (金属=mm)	器:底径 重量 (単位=g)	次	トレンチ	グリッド	層	dot	No.	備考	
18-1	グスク土器	グスク		底部	-	-	-	2	-	R-29	I層下	-	143		
18-2	土器	八重山?	壺	底部	-	-	7.5	2	-	R-29	I層	10	83	R-29 I層 dot11 No.84	
18-3	土器	八重山?	壺	口縁	16.3	-	-	2	-	R-29	I層	16	92		
18-4	カムイヤキ	B群	壺	頸部	-	-	-	2	南トレンチ	T-29	I層上	113	437		
18-5	黒細陶器	沖繩産	碗	底部	-	-	-	2	-	R-29	Ib層	-	28		
18-6	瓦質土器	沖繩産	蓋	口縁	-	-	5.2	2	南トレンチ	T-29	I層上	115	439		
18-7	青磁	I	碗	口縁	15.6	-	-	2	南トレンチ	T-29	I層上	-	434		
18-8	青磁	II	碗	口縁	15.3	-	-	2	-	R-28	Ib層	-	47		
18-9	青磁	IV	碗	口縁	-	-	-	2	-	R-29	I層	-	161		
18-10	青磁	I	碗	底部	-	-	5.3	2	-	R-29	Ib層	-	28		
18-11	青磁	IV	碗	口縁	-	-	-	2	-	R-29	I層下	-	131		
18-12	青磁	II	碗	底部	-	-	5.1	2	-	R-30	Ib層	-	95		
18-13	青磁	I	碗	底部	-	-	5.5	2	-	Q-28	I層	-	260		
18-14	青磁	IV	碗	底部	-	-	4.4	2	-	Q-28・29	I層	-	262		
18-15	青磁	IV	碗	口縁	16.6	-	-	2	-	R-29	I層	-	85		
18-16	青磁	IV	碗	口縁	19.9	-	-	2	-	R-29	I層下	-	162		
18-17	青磁	IV	碗	底部	-	-	5.4	2	-	R-29	I層上	-	72		
18-18	青磁	IV	碗	底部	-	-	5.1	2	西トレンチ	R-29	I層	-	22		
18-19	青磁	IV	碗	口縁	14.0	-	-	2	-	R-29	I層下	-	143		
18-20	青磁	V	碗	口縁	15.6	-	-	2	-	R-29	I層下	-	143		
18-21	青磁	V	碗	口縁	15.2	-	-	2	-	R-30	I層下	-	194	ヘラ	
18-22	青磁	V	碗	口縁	14.7	-	-	2	東トレンチ	T-29	I層	-	140	スタンプ	
18-23	青磁	VI	碗	底部	-	-	6.4	2	-	R-29	I層b	-	112		
18-24	青磁	VI	碗	底部	-	-	5.4	2	-	Q-29・R-29	I層	-	317		
18-25	青磁	V	碗	口縁	12.6	-	-	2	-	R-29	I層下	56	169		
18-26	青磁	VI	碗	底部	-	-	5.5	2	-	R-30	I層	22	102		
18-27	青磁	VI	碗	口縁	13.2	-	-	2	東トレンチ	T-29	I層	-	140		
18-28	青磁	VI	碗	口縁	13.8	-	-	2	-	R-28	Ib層	-	231		
18-29	青磁	VI	碗	口縁	13.9	-	-	2	-	R-29	I層上	-	73		
18-30	青磁	泉州窯系	碗	口縁	16.2	-	-	2	-	R-29	I層	-	22		
19-31	青磁	同安窯系	皿	底部	-	-	5.6	2	-	R-29	Ib層	-	27		
19-32	青磁	IV	皿	底部	-	-	5.3	2	-	R-29	I層下	64	191		
19-33	青磁	IV	皿	口縁	11.8	4.25	5.5	2	-	Q-29	I層	-	87		
19-34	青磁	IV	皿	口縁	12.4	-	-	2	-	R-29	I層下	40	151		
19-35	青磁	II	皿	底部	-	-	5.7	2	-	R-29	I層下	-	162		
19-36	青磁	V	皿	完形	11.2	3.10	4.0	2	-	R-29	I層下	52	167		
19-37	青磁	V	皿	口縁	8.9	-	-	2	-	R-29	I層	-	79		
19-38	青磁	V	皿	完形	11.0	3.10	5.1	2	-	Q-28・29	I層	-	260		
19-39	青磁	V	皿	底部	-	-	5.7	2	-	R-29	I層下	59	186		
19-40	青磁	III	皿	底部	-	-	6.2	2	-	R-29	I層上	-	73		
19-41	青磁	V	皿	口縁	12.2	-	-	2	-	R-30	I層下	66	195		
19-42	青磁	粗製品	碗	底部	-	-	7.1	2	-	R-29	I層上	-	73	R-29 Ib層 No.27	
19-43	青磁	-	杯	底部	-	-	6.7	2	-	R-29	I層下	37	148		
19-44	青磁	-	杯	口縁	10.0	-	-	2	-	T-29	I層下	-	216		
19-45	青磁	-	盤	底部	-	-	7.2	2	東トレンチ	R-29	I層	-	39		
19-46	青磁	-	盤	口縁	24.4	-	-	2	-	R-29	I層下	80	254		
19-47	青磁	-	香炉	口縁	4.8	-	-	2	-	R-29	S10	43	154		
19-48	青磁	-	香炉	口縁	8.6	-	-	2	-	R-29	I層上	-	73	Q-28 I層 No.311	
19-49	青磁	-	瓶	胴部	-	-	-	2	東トレンチ	T-29	I層	4	24		
19-50	青磁	-	水注	注ぎ口	-	-	-	2	-	R-29	I層下	49	166		
19-51	青磁	-	盤	口縁	21.0	-	-	2	-	R-29	S9	-	171		
19-52	白磁	A群(口壳)	碗	口縁	13.2	-	-	2	-	R-29	I層	-	85	R-29 I層下 No.143	
19-53	白磁	A群(口壳)	碗	底部	-	-	3.9	2	-	R-29	I層	-	85		
19-54	白磁	F(今帰仁)	碗	底部	-	-	6.6	2	-	Q-29・R-29	I層	-	317		
19-55	白磁	F(今帰仁)	碗	底部	-	-	5.4	2	-	Q-29・R-29	I層	-	317		
19-56	白磁	C1	碗	口縁	14.2	-	-	2	西トレンチ	R-29	I層	-	19	R-29 I層 No.161	
19-57	白磁	C2	碗	口縁	14.8	-	-	2	東トレンチ	T-29	Ic層	-	61		
19-58	白磁	C2	碗	底部	-	-	6.0	2	-	R-29	I層	14	90		
19-59	白磁	C3	碗	口縁	17.0	-	-	2	-	Q-29・R-29	I層	-	317		
19-60	白磁	C3	碗	口縁	19.0	-	-	2	-	R-29	I層下	-	162		
19-61	白磁	C3	碗	底部	-	-	5.1	2	-	R-29	I層	-	114		
19-62	白磁	C3	碗	底部	-	-	5.4	2	-	R-29	I層下	-	143	西トレンチ R-29 I層 No.22	
19-63	白磁	茶洋窯系	碗	底部	-	-	4.0	2	-	R-29	I層	-	3		
19-64	白磁	A	皿	口縁	8.3	-	-	2	-	R-30	S1	-	101		
19-65	白磁	A	皿	底部	-	-	5.8	2	-	R-29	Ib層	-	314		
19-66	白磁	E	皿	口縁	19.3	-	-	2	-	R-29	I層	-	70		
19-67	白磁	E	皿	底部	-	-	6.1	2	-	R-28	Ib層	-	245		
19-68	白磁	D	皿	口縁	9.0	-	-	2	南トレンチ	T-29	I層上	110	429		
19-69	白磁	D	皿	口縁	10.0	-	-	2	西トレンチ	R-29	I層上	-	19		
19-70	白磁	D	八角杯	口縁	7.0	-	-	2	-	R-29	I層上	-	73		
20-71	青花	II	碗	完形	14.2	-	-	5.8	2	-	R-29	I層下	57	184	R-30 Ib層 No.95 R-29 I層下 No.143
20-72	青花	III	碗	底部	-	-	5.0	2	-	R-29	I層	-	70		
20-73	青花	V	碗	口縁	12.0	-	-	2	-	R-29	I層	-	6		
20-74	青花	VII	碗	底部	-	-	5.0	2	-	T-29	表探	-	71	高台内に「宣徳年造」欠損	
20-75	青花	I	皿	完形	13.3	-	-	7.1	2	東トレンチ	R-29	I層	-	15	R-29 I層下 No.263 R-29 I層 No.6 R-29 I層 No.2

図	種別	分類	器種 (玉類=色) (銭=国名)	部位 (銭=初繰 年)	器:口径 器:外径 銭:口径 単位=cm (銭・玉=mm) (金属=mm)	器高さ 銭厚 単位=cm (銭・玉=mm) (金属=mm)	器:底径 重量 (単位=g)	次	トレンチ	グリッド	層	dot	No.	備考
20-76	青花	I	皿	完形	11.8	—	5.6	2	—	R-29	I層	—	125	
20-77	青花	II	皿	口縁	10.1	—	—	2	—	R-29	II層	—	70	
20-78	青花	III	小杯	底部	—	—	2.5	2	—	R-29	II層	—	33	
20-79	青花	粗製品	碗	胴部	—	—	—	2	東トレンチ	R-29	I層	—	12	
20-80	青花	II	小杯	口縁	7.5	—	—	2	—	R-29	II層	—	114	
20-81	黒箱	—	碗	底部	—	—	3.2	2	東トレンチ	T-29	II層	23	119	
20-82	黒箱	—	碗	口縁	12.4	—	—	2	—	R-29	II層下	38	149	
20-83	黒箱	—	碗	口縁	12.7	—	—	2	—	R-29	II層下	18	108	
20-84	青花	ベトナム	瓶	胴部	—	—	—	2	—	R-30	II層	—	—	
20-85	元青花	—	蓋	口縁	18.4	—	—	2	—	R-29	II層	—	33	R-29 I層 No.2
20-86	青花	—	小壺	口縁	—	—	—	2	—	R-29	I-II層	—	293	
20-87	元青花	—	酒会壺	胴部	—	—	—	2	—	R-30	II層下	—	—	
20-88	元青花	—	酒会壺	胴部	—	—	—	2	—	R-29	II層下	—	162	
20-89	褐釉陶器	—	茶入れ	口縁	2.4	—	—	2	—	R-29	II層下	53	168	
20-90	褐釉陶器	—	茶入れ	口縁	2.15	—	—	2	—	R-29	II層下	—	162	
20-91	褐釉陶器	—	茶入れ	底部	—	—	2.8	2	—	R-29	II層下	62	189	
20-92	褐釉陶器	—	茶入れ	底部	—	—	2.6	2	—	R-29	II層下	58	185	フ字形口縁
20-93	褐釉陶器	—	大型壺	口縁	20.4	—	—	2	—	R-29	II層下	35	146	方形口縁
20-94	褐釉陶器	—	大型壺	口縁	13.4	—	—	2	—	R-29	II層	—	28	
20-95	褐釉陶器	—	中型壺	底部	—	—	7.8	2	—	Q-28・ R-29	I層	—	318	
20-96	褐釉陶器	—	中型壺	底部	—	—	9.2	2	—	S-29	II層	—	—	
20-97	青銅器	—	底	底	—	—	7.9	2	—	R-29	II層	13	89	
20-98	粉青象嵌	韓国	壺	胴部	—	—	—	2	—	R-28	II層	—	226	
20-99	象嵌青磁	韓国	碗	胴部	—	—	—	2	—	R-29	II層	—	28	
20-100	象嵌青磁	韓国	碗	胴部	—	—	—	2	—	R-28	II層	—	239	
20-101	粉青象嵌	韓国	壺	胴部	—	—	—	2	—	R-29	II層	—	27	
20-102	白磁	景徳鎮?	碗	底部	—	—	4.6	2	—	R-29	II層	16	92	
20-103	タイ褐箱	シーサッチャ	壺	口縁	25.4	—	—	2	—	T-29	Ic層	—	65	
20-104	タイ褐箱	メナムノイ	壺	口縁	12.6	—	—	2	東トレンチ	R-29	II層	—	12	
20-105	白磁	ベトナム	瓶	胴部	—	—	—	2	—	R-29	II層上	—	73	
20-106	青花	—	台子	口縁	8.2	—	—	2	—	R-30	II層	—	95	
20-107	半練土器	タイ	蓋	口縁	11.1	—	—	2	南トレンチ	T-29	II層上	—	434	
21-108	金属製品	青銅	—	—	93.24	0.84	16.20	2	—	R-29	II層下	55	—	
21-109	金属製品	青銅	—	—	63.72	0.77	5.46	2	—	R-29	II層下	—	—	
21-110	金属製品	青銅	—	—	43.16	1.07	5.71	2	西トレンチ	R-29	GL- 70	20	—	
21-111	金属製品	青銅	—	—	17.36	0.98	1.74	2	—	Q-29・ R-29	II層	—	273	
21-112	金属製品	青銅	瓶	—	20.76	1.83	2.75	2	—	R-29	II層下	—	—	菊座笠紙
21-113	金属製品	青銅	—	—	98.05	5.44	16.10	2	—	R-29	II層下	50	174	
21-114	金属製品	青銅	—	—	18.45	2.22	0.69	2	—	R-29	II層下	—	143	
21-115	金属製品	青銅	—	—	74.38	1.57	12.68	2	—	R-29	II層下	46	—	
21-116	金属製品	青銅	—	—	136.85	4.87	7.51	2	—	R-29	II層下	—	143	
21-117	金属製品	青銅	—	—	26.48	1.18	4.19	2	—	R-29	II層下	—	162	
21-118	金属製品	—	—	—	34.07	3.18	17.88	2	—	R-29	II層下	42	153	
21-119	金属製品	青銅	簪	—	191.93	5.35	18.64	2	—	—	表採	—	415	
21-120	金属製品	鉄	瓶	—	73.42	6.40	12.35	4	—	—	表上剥ぎ	41	—	
21-121	金属製品	鉄	瓶	—	45.08	6.30	8.29	2	—	R-29	II層下	51	—	
21-122	金属製品	鉄	瓶	—	47.05	4.36	6.08	2	—	R-29	II層下	—	—	
21-123	金属製品	鉄	瓶	—	98.45	10.29	22.61	2	—	R-29	II層下	41	—	
21-124	金属製品	鉄	瓶	—	61.59	4.25	5.22	2	—	R-29	II層	—	—	
21-125	金属製品	鉄	釘	—	32.07	4.34	2.07	2	—	R-29	II層下	—	—	
21-126	金属製品	鉄	瓶	—	66.46	10.77	8.30	2	—	R-28	II層	—	—	
21-127	金属製品	鉄	釘	—	107.59	6.86	13.47	2	—	R-29	II層下	54	—	
21-128	金属製品	鉄	刀子	—	78.68	4.83	27.06	2	—	R-29	II層	—	—	
22-129	銭貨	天聖通寶	北宋	1023年	25.12	1.24	3.39	2	—	Q-29・ R-29	内環I層	—	319	(篆書)
22-130	銭貨	—	—	—	—	—	10.61	2	—	—	II層	27	107	三枚重なる。一枚は天聖通寶(篆書)
22-131	銭貨	皇宋通寶?	北宋	1038年	25.33	1.22	3.04	2	—	R-29	II層	—	116	(篆書)
22-132	銭貨	皇宋通寶	北宋	1038年	24.35	1.41	2.21	2	—	R-29	II層	—	38	皇宋通寶一字欠損(真書)
22-133	銭貨	熙寧元寶	北宋	1068年	24.28	1.16	3.15	2	—	R-29	II層下	—	180	(真書)
22-134	銭貨	乾道元寶	南宋	1165年	—	1.69	3.83	2	—	R-28	II層	—	48	乾道元寶一字欠損(篆書)
22-135	銭貨	寛永通寶	—	1697年	23.42	1.11	2.55	2	—	R-29	II層下	—	162	新寛永
22-136	玉	丸玉b2	青みの黒	—	10.19	10.60	1.82	2	—	R-28	II層	76	235	
22-137	玉	丸玉b2	無彩色の白	—	9.96	8.95	1.54	2	東トレンチ	T-29	II層	—	141	
22-138	玉	丸玉b2	灰みの紫みの青	—	9.87	7.75	1.47	2	—	R-29	II層上	—	74	
22-139	玉	丸玉b2	無彩色の白	—	8.59	6.98	0.78	2	—	T-29	II層上	114	438	
22-140	玉	丸玉b2	青みの黒	—	8.53	6.89	0.82	2	—	R-29	II層下	—	181	
22-141	玉	丸玉b2	黄みの白	—	8.27	5.74	0.52	2	—	R-29	S- 71	386	658	
22-142	玉	丸玉b2	黄みの白	—	7.78	6.71	0.64	2	—	R-29	II層	19	110	
22-143	玉	丸玉b2	浅い青	—	7.07	5.32	0.35	2	—	R-29	II層	—	115	
22-144	玉	丸玉b2	黄みの白	—	6.62	5.44	0.23	2	—	R-29	II層下	65	192	
22-145	玉	丸玉c	明るい緑みの青	—	5.35	4.77	0.18	2	東トレンチ	T-29	II層	28	160	
22-146	玉	丸玉c	黄みの暗い灰	—	6.28	3.55	0.13	2	—	R-30	II層上	394	659	
22-147	玉	丸玉c	暗い赤	—	3.92	3.24	0.07	2	—	—	II層	—	296	
22-148	玉	丸玉c	浅い緑みの青	—	3.41	2.40	0.03	2	東トレンチ	T-29	II層	—	141	
22-149	玉	丸玉c	灰みの紫みの青	—	9.87	7.75	1.47	2	—	R-29	II層上	—	74	
22-150	骨製品	—	—	—	48.64	8.29	—	2	—	R-29	II層下	63	190	
23-151	石製品	—	碗	底部	—	—	9.0	2	東トレンチ	R-29	II層	1	9	

### 第3節 西区（外郭11・13次調査）

今帰仁城跡外郭西区は、外郭東側城壁から県道115号線を挟んで西側にのびる西側城壁の遺構残存状況を確認することを主な目的としておこなった調査である。調査面積は11次調査（平成21年度）が約1000㎡、13次調査（平成22年度）が約1700㎡となる。

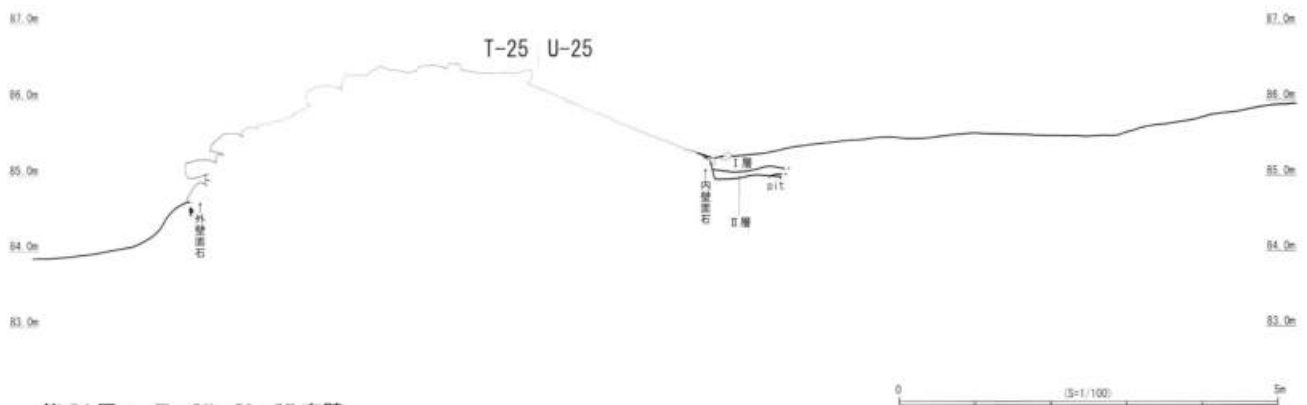
調査以前より当該地区は盛り土が所々残る状況で、東側城壁に比して残りは総じて悪い。過去に行われた踏査や地形測量からは城壁のラインを確認できていなかった。直接確認できていたのは模型の南側にある城壁箇所だけであり、聞き取り等からも近代以降の開発や石材として持ち出されたことで根石が残っていないことが想定された。そこで、この盛り土ラインに沿って直交する形で根石確認トレンチを4箇所設定し、根石と堆積層の確認調査を行った。このトレンチ調査によって確認された根石のラインを追っていくことで調査区を徐々に拡大していくこととした。

調査の結果、一部根石まで欠損する箇所があったが、全体的な石垣の形状を把握することができた。東側城壁に比べると保存状況はよくないが、今帰仁城跡の特徴の一つである屏風状に曲がりくねった城壁の様子が西側城壁でも確認することができた。また、調査区北側の内壁内側の平坦面、調査区中央部の城壁内側の根石が欠損する部分などで、柱穴の集中箇所が確認されている。

#### 1. 層序

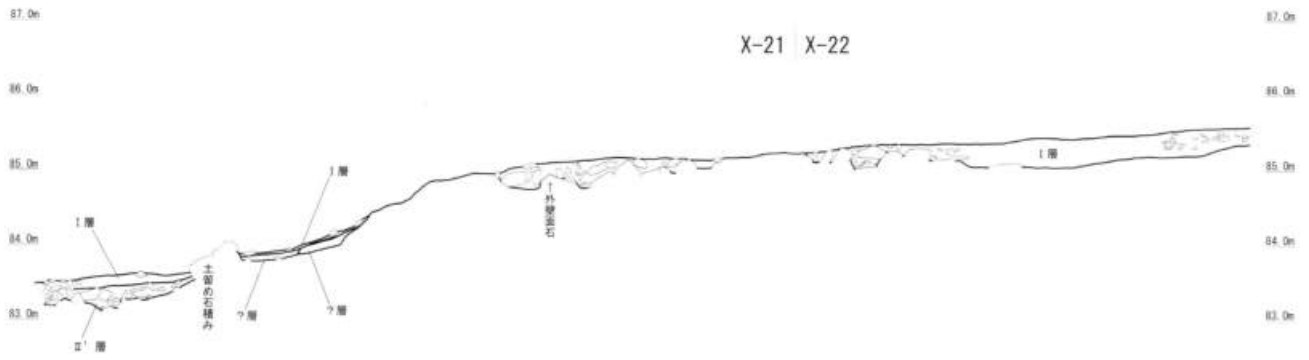
遺跡全体を覆う堆積層は、現代の表土・旧耕作土層、この下にグスク時代相当の遺物包含層、自然堆積の地山層が認められる。この傾向は外郭全体を通して確認できることだが、西区に限っては後世の作業等によって攪乱され、グスク時代限定の層が確認されない箇所も多いが、根石確認トレンチ⑨が比較的残りが良好であった。

- I 層：【にぶい黄褐色土・褐色土層】腐食・耕作土層。調査地の全域が覆われる。地下深くに耕耘や攪乱が及ぶ箇所が西区では多く、東区に比してI層の堆積も少ない。ガラス瓶や近現代の陶磁器等を包蔵する。
  - II 層：【暗褐色土・褐色土層】当該遺跡を形成するグスク時代の遺物包含層（IIa～IIe）。
  - III 層：【にぶい黄褐色土・褐色土層】当該遺跡を形成するグスク時代の遺物包含層C-24北壁で城壁に被ることが確認された。
  - IV 層：【暗褐色土・褐色土層】当該遺跡の形成期初頭の包含層。城壁根石に潜り込む。
- 地山層：【明赤褐色土・黄褐色土層】無遺物層。古期石灰岩の岩盤が露頭。

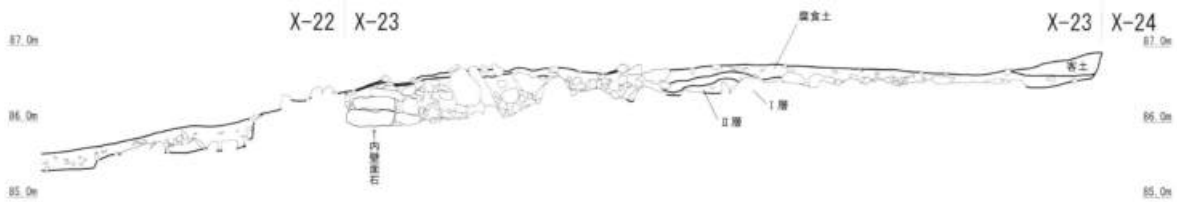


第24図 a T-25・U-25 東壁

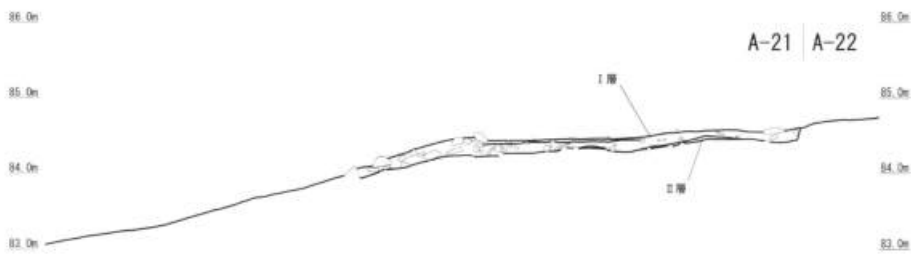
第24図 11・13次外郭基本層序断面図(1)



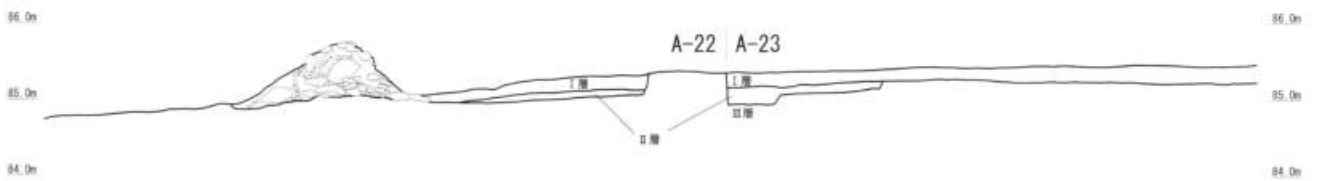
第 25 図 a X-21・22 北壁



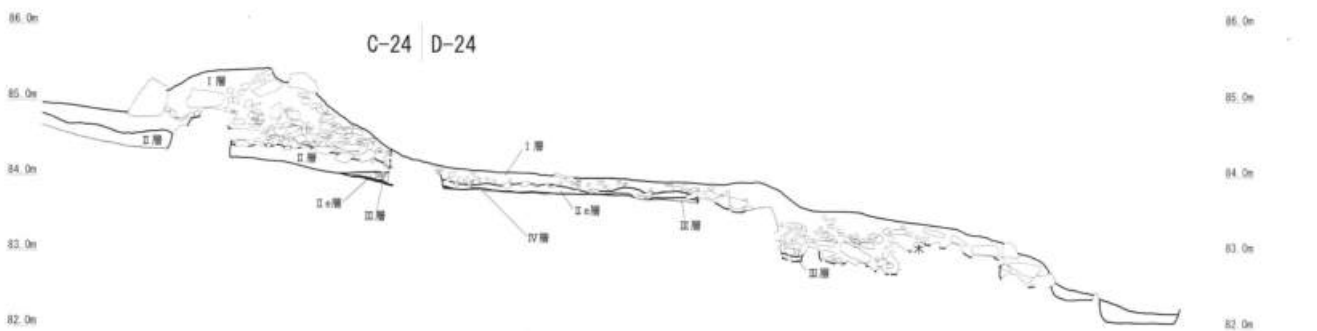
第 25 図 b X-22・23 北壁



第 25 図 c A-21・22 北壁



第 25 図 d A-22・23 北壁



第 25 図 e C-24・D-24 北壁

第 25 図 11・13 次外郭基本層序断面図 (2)



Y=42730

T-27

U-27

V-27

W-27



Y=42720

T-26

U-26

V-26

W-26

X-26

Y-26

U-25・26検出の柱穴群

Y=42710

T-25

SX1

U-25

V-25

W-25

X-25

Y-25

Y=42700

T-24

U-24

V-24

W-24

X-24

Y-24

Y=42690

T-23

U-23

V-23

W-23

X-23

Y-23

根石確認トレンチ⑦

Y=42680

U-22

V-22

W-22

X-22

Y-22

根石確認トレンチ⑤

Y=42670

U-21

V-21

W-21

X-21

Y-21

SX5

SX7

SX4

Y=42660

U-20

V-20

W-20

X-20

Y-20

X=76740

Y=42590

X=76730

X=76720

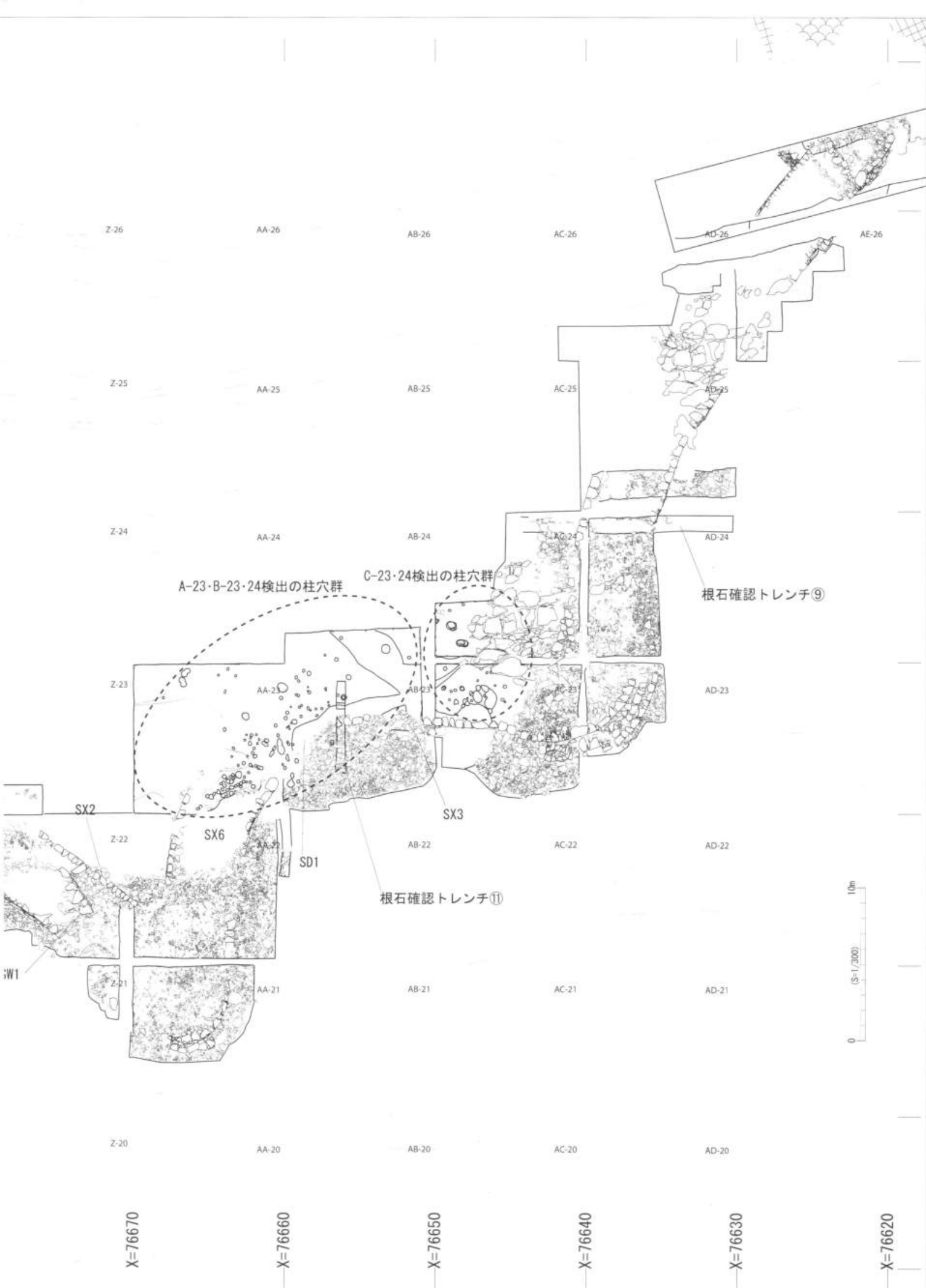
X=76710

X=76700

X=76690

X=76680

第 26 図 11・13 次外郭遺構詳細図



## 2. 遺構

[名称] 西側城壁

[位置] 外郭西側

[検出面] 現地表面より露出、盛土内より検出

[規模] 総延長180m 幅:最大10m、最小4m 高さ:最大2.4m

[遺構構成] 石積遺構1基、補強用石積み9基

[所見] 西側城壁は今帰仁城跡の最も北側にある外郭を取り囲む城壁で、高さ最大10m、幅最大10m（アザナ突出部）で築かれた石垣である。実測図作成にあたっては、石垣に基準点 A～BB の測点を設置し、遺構全体の測量基準点として設けた。測点番号を連番で付して内壁外壁の別を記し、城壁の遺構タイトルとしている。測点を北から南へ読み、立面図名称としている。具体的には A-B 内壁等とした。内壁外壁の別は外郭側に向いている方を内壁とした。東側城壁に比べて石垣の保存状況が悪く、残りの良い部分でも根石から数段の高さとなっている。測点 A は外郭西側城壁の起点となり、これより北東方向に、かつては城壁が続いていたものと考えられている。しかし、測点 A と外郭東側城壁の測点 Z の間は現在では旧県道115号線およびすでに撤去された建物によって分断されており、往事の姿を推察することすら難しい状況である。この地区については第4節で詳述している。

以下、個別の石積の現況について詳述していく。

### 内壁

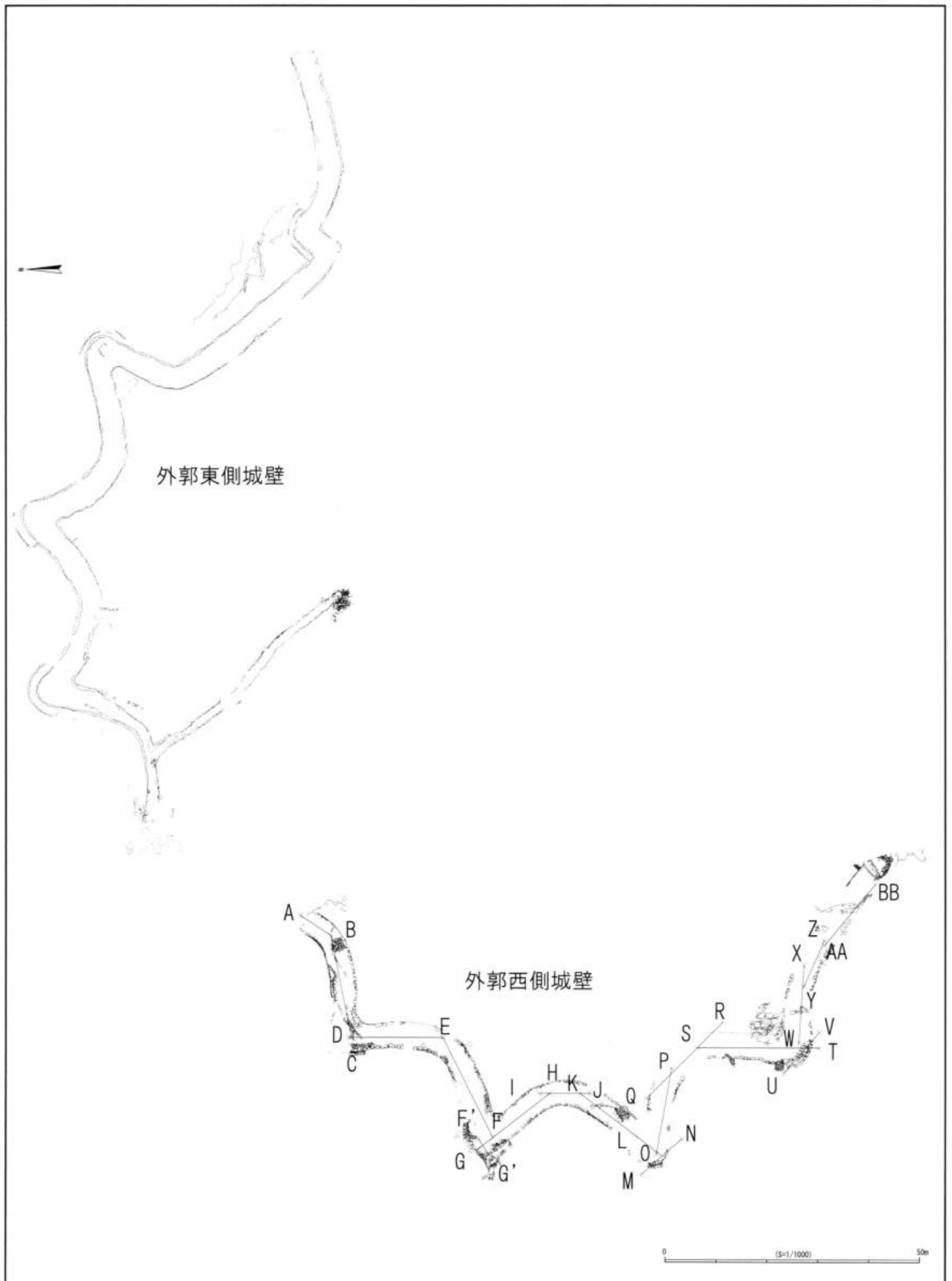
A-B 内壁（第29図 a） A-B 内壁は保存状況は悪く、根石のみが地中より検出されている。北東側は欠損しているため詳細は不明。残りのよい部分で高さ1m、勾配は80度となっている。その他については根石が残るのみであった。現存している部分で長さ7m、そのうち根石のみの部分が約3mとなる。

B-C 内壁（第29図 b） B-C 内壁も保存状況は非常に悪く、さらに調査前の平成16年までは戦後に建てられた墓が1基あり、根石のラインの一部はこの墓の下からも検出された。検出されたのが根石のみであるため詳細は不明。根石の前面に一部礫の集積が見られる。裏込めには SX1 と SW2 が構築されている。SW2 は外壁側に見られる II 期城壁との対応も考えられるが詳細は不明。また、SX1 と根石の間には土砂が堆積しているため、時期的に隔絶していることが分かっている。残存部の長さ約16m。

D-E 内壁（第29図 c） D-E 内壁も保存状況が悪く発掘調査によって石積が検出された。残存していた石積は根石とその上に乗る1石のみとなり、直線部分では根石も欠損した箇所もある。石積みは表土層の下から検出された。アザナ突出部の内壁にあたる。検出された石積みの長さは約9m。城壁内には後代に構築された雑な石積みが存在する。

E-F 内壁（第31図 a） 測点 E～J の間は根石がほぼ連続して検出され、保存状況の悪い西側城壁において比較的残りの良い箇所といえる。E-F 内壁では約18m にわたり石積みが出されているが、石積みは高い所でも60cm 程度である。石材の状況は割れた石材が見られる他、樹根等によって動かされたと思われるズレが見られた。

G-H 内壁（第31図 b） G-H 内壁も E-F 内壁から連続して石積みが出されている。こちらも高い所で60cm 程度の石積みしか残っていないが上の石材はずれている状況である。ほと



第 27 図 西側城壁測量測点位置図 (S=1/1000)



んどが一段のみの検出であった。

I-J 内壁（第31図 c）I-J 内壁も連続して石積みが発見された箇所である。石積みは表土を掘削後、第II層中より発見されている。第II層は当該遺跡を形成する遺物包含層で、石積み内部の裏込石にも被覆している。一部根石の欠損も見られ、発見されている石積みも1段のみであり、詳細は不明。

K-L 内壁（第33図 a）測点J付近で根石の欠損があり、I-J 内壁とは約4mの隔たりのあとに直線状に発見された石列がK-L 内壁である。当区間では裏込め石材の分布が見られない箇所があり、面石内外で第II層が被覆している。ほぼ根石のみが発見されているが、向かって左側（測点L側）で50cm程度の高さがあった。さらに左側でアザナ突出部となるが、こちらは根石から欠損している。なお、K-L 内壁で発見されているSW1、SX2については各遺構の項にて詳述している。

O-P 内壁（第33図 b）O-P 内壁はアザナ突出部から城内側に向かってのびる城壁である。しかし、幅約2.7mの石積みを残すのみであとは根石から欠損している状況であった。残存している箇所、高さ約60cm、石積みの下部は第II層中に埋まっているため詳細は不明。下部の石材についてはオリジナルの位置を保っていると思われるが、上部の石材は孕みだし、ずれなどが見られる。

W-X 内壁（第33図 c）アザナの内壁部に当たる。保存状況は悪く根石しか残っておらず、さらに根石が欠損した箇所もある。測点P～Wの間は完全に滅失しており、その痕跡も確認することが出来なかった。

W-X 内壁補強用石積み（第33図 d）アザナ突出部の外壁側に取り付けられた石積みのことを補強用石積みと呼称してきたが、W-X 内壁側に沿って発見された石列を仮に、「W-X 内壁補強用石積み」とした。発見された石積みは幅2.8mと小規模で、積み上げられていたかどうかは不明。石列とW-X 内壁との間は礫が発見されており、石積みの内部に充填されていた栗石の可能性もあるが、詳細は不明である。

AA-BB 内壁（第33図 e）発見された石積みは幅約1.2m、高さも約40cmとほとんど滅失し根石も残っていない状況であった。裏込め石、外壁側の面石の状態から内壁側の面石のラインは推定できた。

## 外壁

A-B 外壁（第35図 a）A-B 外壁およびB-C 外壁は外郭西側城壁の中では最も残りの良い箇所となっている。A-B 外壁は長さ約4.5m、高いところで約1.85m残る。勾配は約83度。根石には幅約100cmの長方形の石を配する。根石は顎石状になる。向かって左側は欠損しており石積みは残っていない。また、残存箇所においても石材のずれがみられる。

B-C 外壁（第35図 b）B-C 外壁は面石が上下2段になっている。下段は幅60cm以上の長方形の石材を多用し、横目地を通すように積まれている。これに対し上段の石積みは石材の大きさ形ともに揃えず、横目地も通らない。以上のことから、外郭東側城壁で見られたII期城壁と同じ

ように、後の時代の積み直しである可能性がある。。城壁の長さ約11.4m、高いところで約2.4m、勾配は82度となる。なお、向かって右側にアザナ突出部に向けて城壁が続いていたと考えられているが、こちらは完全に滅失しており詳細は不明である。

D-E 外壁（第35図 c）D-E 外壁は他の西側城壁同様、保存状態が悪く根石から2～3段程しか残っていない。また、向かって左側のアザナ突端部は完全に滅失しており、他にも根石が欠損している部位がある。アザナ付近には補強用石積みと思われる石列が外側に一部残る。

E-F 外壁（第37図 a）E-F 外壁も保存状態が悪く、長さ約6.4mの範囲でしか石積みは検出されていない。石積みは根石より3段程度しか残っていない。また、根石が面石より約20cm前が出る顎石状になる。

E-F 外壁補強用石積み①（第37図 b）E-F 外壁側では補強用石積みと見られる2列の石積みが発見され、そのうち本城壁と外側で検出された石積みとの間で検出された石積みをE-F 外壁補強用石積み①とした。検出された石積みは長さ約3m、高さ約60cmとなる。

E-F 外壁補強用石積み②（第37図 c）E-F 外壁補強用石積み①より外側に配された石積みをE-F 外壁補強用石積み②とした。①と同様、保存状態は悪く長さ約2.5m、高さ60cm程度しか残存していないため詳細は不明。

F'-G' 外壁（第39図 a）アザナの先端部にあたる石積み。しかし、保存状況は悪く、根石がわずかに残るのみである。

G-H 外壁（第39図 b）長さ約18mにわたり連続して根石が発見されている。しかし積石が残るのはごくわずかであった。また、顎石状の根石が2石見つまっている。

G-H 外壁補強用石積み（第39図 c）G-H 外壁のアザナ突出部付近で補強用石積みが発見されている。ただし、残りが悪く根石が部分的にみられるのみで詳細は不明。

I-J 外壁（第41図 a）G-H 外壁に引き続き連続して根石が発見されている。根石から2段程度の積石が残る。発見されている石積みの長さは約7mで高さが40cm程度となる。また、顎石状の根石も発見されている。

K-L 外壁（第41図 b）I-J 外壁から連続して根石が発見され、比較的残りもよく長さ約5m、高さも120cm程が残り勾配は86～88度となる。この部分は土盛として地表面より露出しており、土盛に被覆していた表土等を除去すると石積みが発見された。外観上の特徴として面石には横長の石材を多用しているが、間詰め石が他の城壁に比して多用されている事があげられる。また、根石は顎石状となる。

M-N 外壁（第41図 c）アザナ突出部の先端にあたる。保存状況は悪く根石が残るのみである。突出部の先端と内壁側の推定ラインとの幅は約10mとなっており、外郭城壁の中ではもっとも幅の広い箇所となる。城壁内は外壁側に緩やかに傾斜した平場となっているが、薄く堆積した腐植土層を除去すると、裏込材として使用されていたと考えられる礫に覆われていた。

M-N 外壁補強用石積み（第41図 d）M-N 外壁でも補強用石積みが検出されているが、保存状況は悪い。突出部の先端で根石が数石検出されている。

O-P 外壁（第43図 a）アザナから内湾していく部分であるが根石が部分的に残るのみであった。一部で高さが約1m 残る部分があるが、これは土盛に取り込まれていた部分にあたり、表土等を除去した際に検出された。この部分の勾配が85度となっている。

Q-R 外壁（第43図 b）Q-R 外壁は根石が間隔をあけて4石のみ検出されている。これらの根石は多少のずれ等はあるものの、ほぼ原位置の近くで留まっているものと考えられる。

S-T 外壁（第43図 c）S-T 外壁も保存状況は悪くほぼ根石しか検出されていない。一部の根石は調査前の地表面に石列状に露出している状態であった。検出された根石には割れやずれ等が見られる。

S-T 外壁補強用石積み（第45図 a）アザナに近い部分では補強用石積みも検出されているが保存状況が悪く詳細は不明。U-V 外壁補強用石積みと一体となる石積みではあるが、一部が欠損しているため分けて記述している。

U-V 外壁（第45図 b）アザナ突出部にあたるが、保存状況が悪く根石のみの検出となっているため詳細は不明。

U-V 外壁補強用石積み①（第45図 c）U-V 外壁の外側に2列の石積みが配されており、そのうち外側をU-V 外壁補強用石積み①とした。保存状況は悪く根石とその上の1段しか確認されていないため詳細は不明。

U-V 外壁補強用石積み②（第45図 d）上記石積みより内側にあるものをU-V 外壁補強用石積み②とした。根石しか検出されていないため詳細は不明。

W-X 外壁補強用石積み（第47図 a）測点W-X 区間では本城壁の根石を確認することはできなかったが、U-V 外壁補強用石積み①の延長線上に石列が確認された。これは面を揃えて配されることからW-X 外壁補強用石積みとした。根石が数石残るのみで詳細不明。

Y-Z 外壁（第47図 b）Y-Z 外壁は客土を除去し検出された。検出された石積みの長さは約10m に及ぶ。保存状況は悪く根石と2～3段の積石が残るのみであった。向かって左端では3段の積石が検出されているが、端部は造成土に接する。

AA-BB 外壁（第47図 c）外郭を分断する県道115号線の地下に潜り込むように検出された石積み。城壁をまたいで道路が建設されており、その後の調査で道路下に城壁が保存されていることが明らかになった。AA-BB 外壁では横長の石材を使用するという外郭の城壁で一般的な特徴が観察された。残存する石積みの高さは2.4m、勾配が82度となっている。

以上、外郭西側城壁の外観から見て取れる特徴を紹介した。しかしながら、全体的に保存状況が非常に悪く、ほとんどが根石と数段の積石が残るのみであった。比較的残りのよいごく狭い範囲での比較となるが、外郭東側城壁との共通点が多く認められた（既報告：29集 p67）。まず、用いている石材や積方については、横方向に長い石材を多用すること、裏込めは栗石のみで土などは用いないこと、勾配はおおむね78～88度となることがあげられる。勾配についてはややきつくなっているが、これは後世の改変や孕み出しなどの劣化が影響していると考えられる。また、平面的な共通点としては地形に合わせて曲線を描き、アザナ突出部を設けている。さらに各アザナには補強用石積みを設置していることが挙げられる。城壁の規模については、城壁基部の幅が4～5m、アザナ突出部では8mないし10mとなる。高さは残存する最高所で2.4mとなるが、保存状況が悪いため比較するほどの資料にはなりえない。西側城壁は総延長180mをはかり、東側城壁が同じく200mであることからほぼ同規模の城壁が築かれていたことが想像できる。

東側城壁において紹介していたⅡ期城壁については、西側城壁でも一部で同じような石積みを見ることができた。具体的にはB-C外壁であるが、面石が上下2段で構築されそれぞれ積み方が異なることが観察された。上段の石積は東側でも見られたように積み方が雑でやや稚拙な印象を受けることから、Ⅱ期城壁の可能性もあるが検出されたのがこの一箇所のみであるため、詳細は不明である。この他にもSX1～SX3など、後代に構築されたと考えられる遺構が城壁上に残る。これらは、平成23年度に行われた第15次外郭発掘調査において発見された塹壕との関連が指摘されているが、詳細は当該調査報告書に譲ることにする。

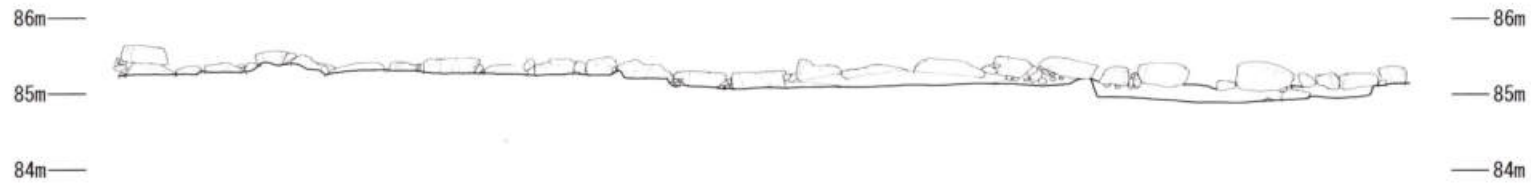
さて、本調査で得られた西側城壁の構築年代については後述する根石確認トレンチ⑨でその一端をうかがうことができるが、明言するには資料の蓄積が不足していることは否めない。ここではC-24グリッド北壁の城壁下にもぐり込むⅣ層の出土状況から14世紀後半代以降のという指摘にとどめ、さらなる調査成果をまって検討したい。

### A-B内壁



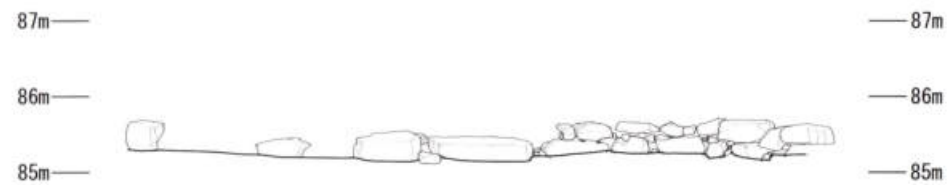
第29图 a

### B-C内壁



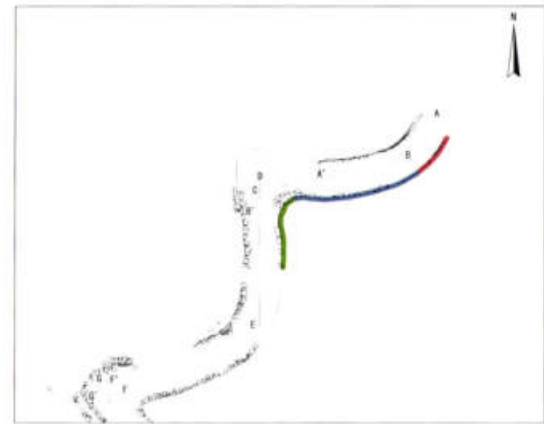
第29图 b

### D-E内壁



第29图 c

第29图 西側城壁(内壁)A-B、B-C、D-E

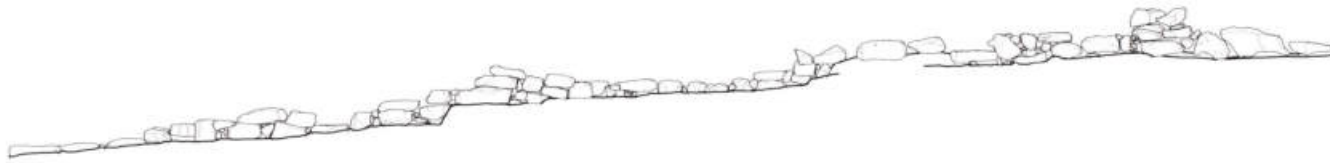


第28图 西側城壁(内壁)A-B·B-C·D-E位置图  
(S=1/1000)



### E-F内壁

87m —  
86m —  
85m —  
84m —



—87m  
—86m  
—85m  
—84m

第31图 a

### G-H内壁

86m —  
85m —  
84m —



—86m  
—85m  
—84m

第31图 b

### I-J内壁

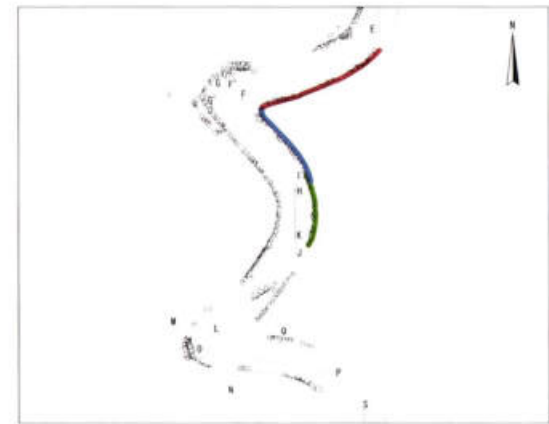
86m —  
85m —  
84m —



—86m  
—85m  
—84m

第31图 c

第31图 西侧城壁(内壁)E-F、G-H、I-J



第30图 西侧城壁(内壁)E-F、G-H、I-J位置图(S=1/1000)

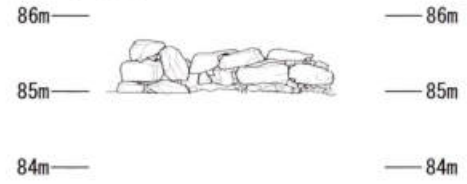


### K-L内壁



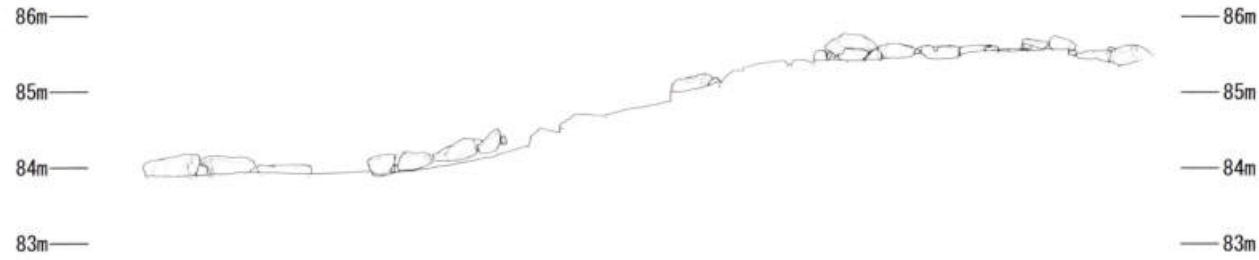
第 33 図 a

### O-P 内壁



第 33 図 b

### W-X内壁



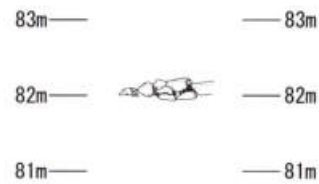
第 33 図 c

### W-X補強用石積み

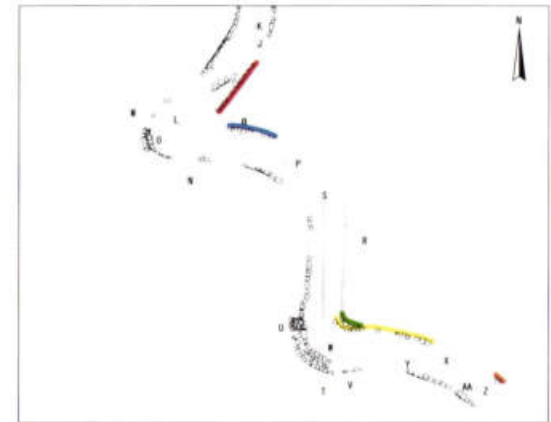


第 33 図 d

### AA-BB内壁



第 33 図 e

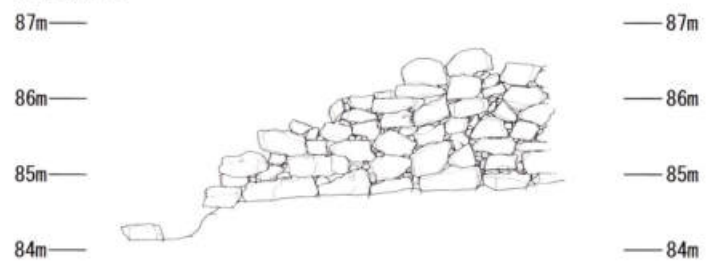


第 32 図 西側城壁(内壁)K-L、O-P、W-X、W-X補強用石積み、AA-BB位置図 (S=1/1000)



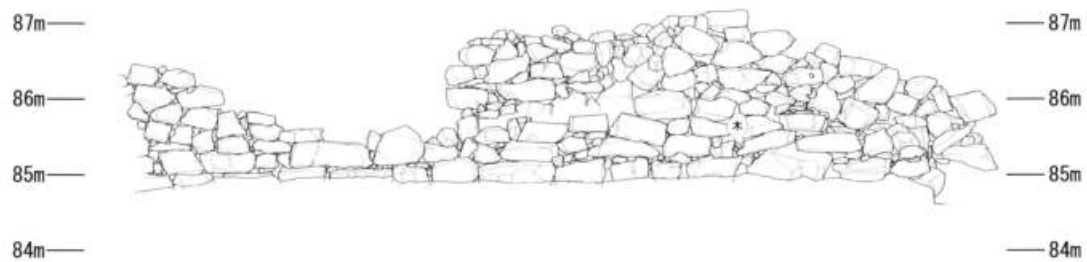
第 33 図 西側城壁(内壁)K-L、O-P、W-X、W-X補強用石積み、AA-BB

## A-B外壁



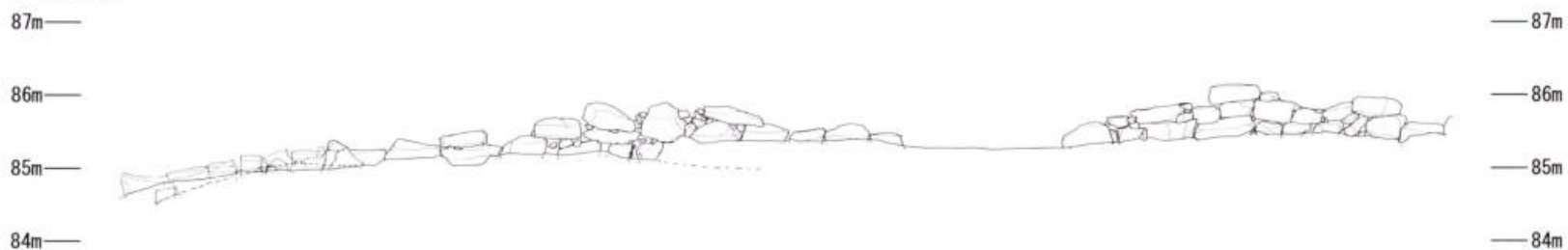
第 35 圖 a

## B-C外壁

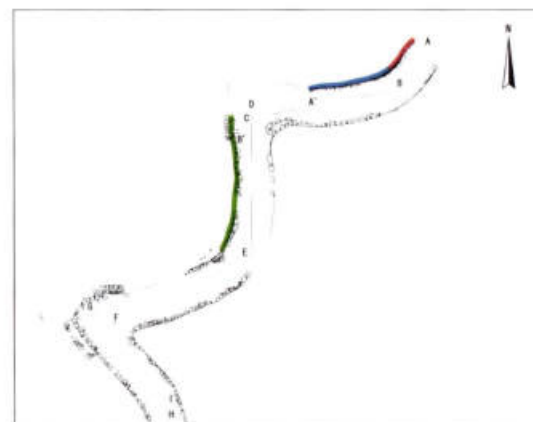


第 35 圖 b

## D-E外壁



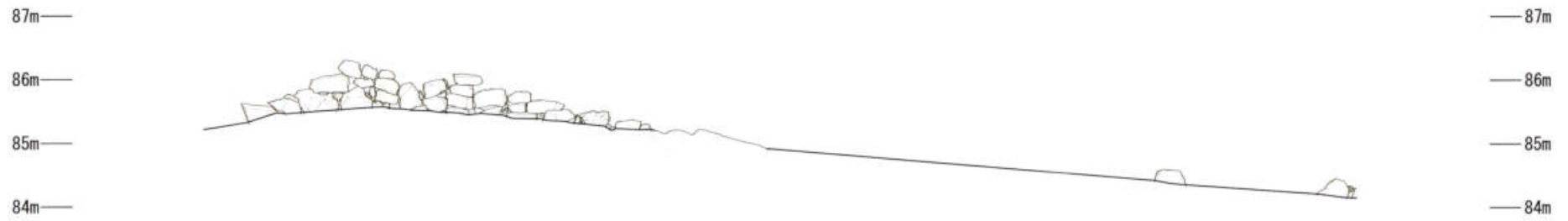
第 35 圖 c

第 34 圖 西側城壁(外壁)A-B、B-C、D-E 位置圖  
(S=1/1000)

第 35 圖 西側城壁(外壁)A-B、B-C、D-E



E-F外壁



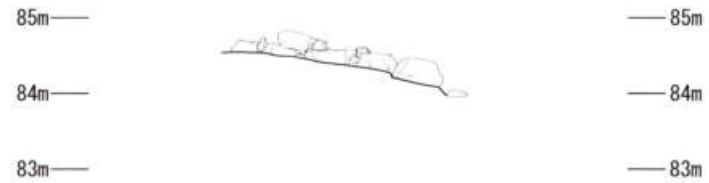
第37図 a

E-F外壁補強用石積み①



第37図 b

E-F外壁補強用石積み②



第37図 c



第36図 西側城壁(外壁)E-F、E-F補強用石積み①②位置図 (S=1/1000)



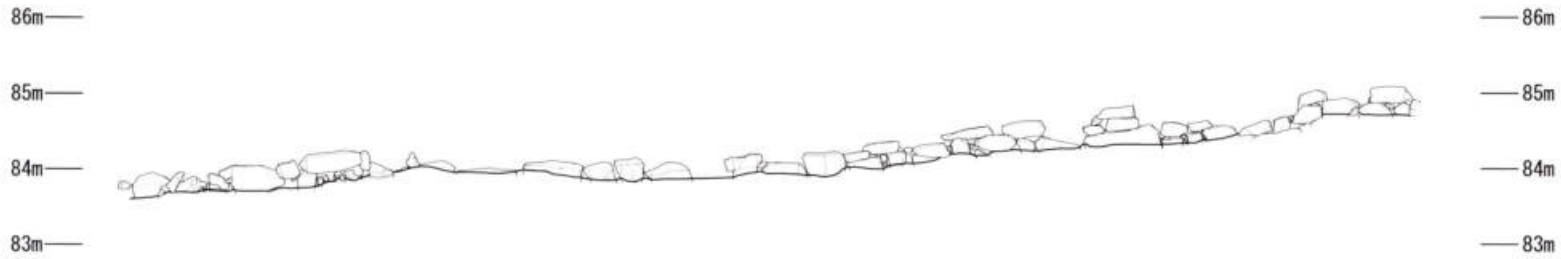
第37図 西側城壁(外壁)E-F、E-F補強用石積み①②

### F'-G' 外壁



第 39 図 a

### G-H 外壁

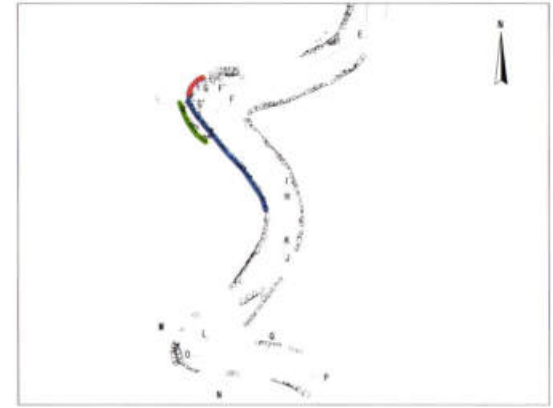


第 39 図 b

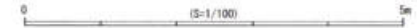
### G-H 外壁補強用石積み



第 39 図 c



第 38 図 西側城壁(外壁)F'-G'、G-H、G-H補強用石積み位置図 (S=1/1000)



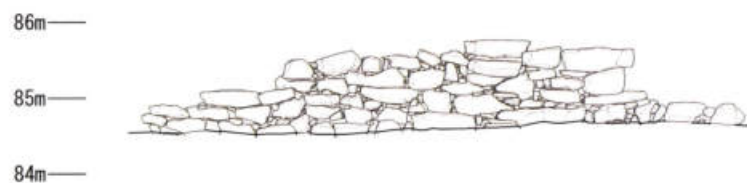
第 39 図 西側城壁(外壁)F'-G'、G-H、G-H補強用石積み

I-J外壁



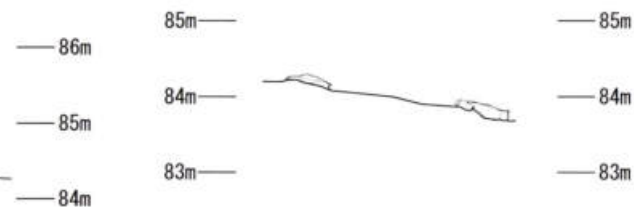
第41図 a

K-L外壁①



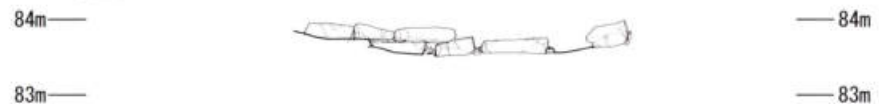
第41図 b-1

K-L外壁②



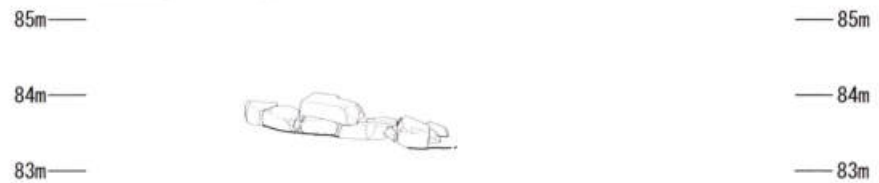
第41図 b-2

M-N外壁



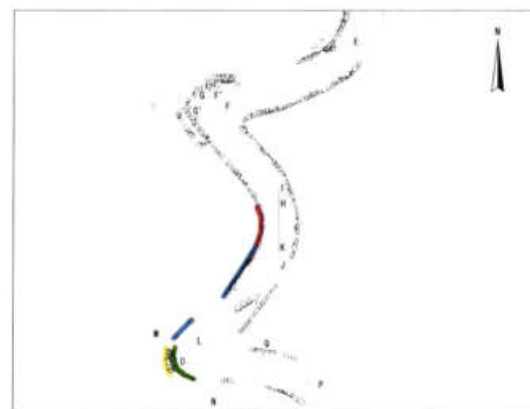
第41図 c

M-N外壁補強用石積み



第41図 d

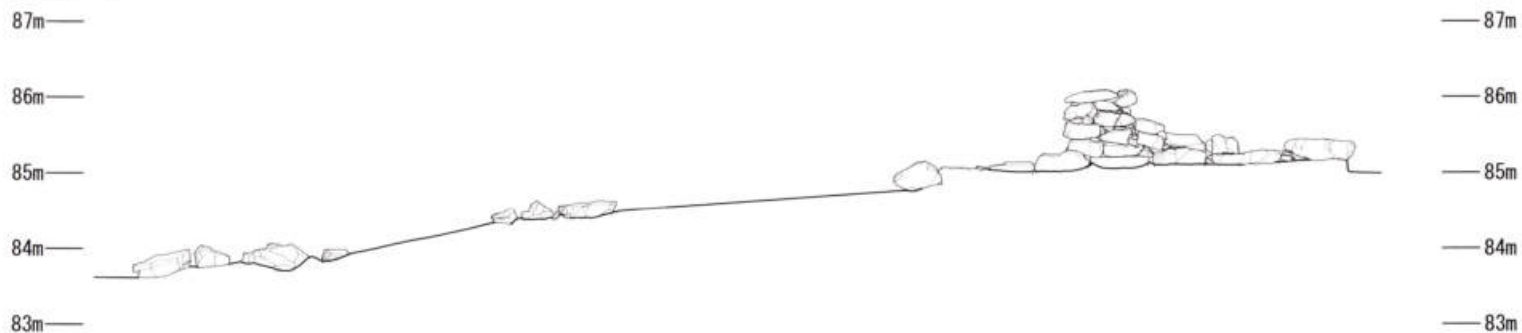
第41図 西側城壁(外壁)I-J、K-L、M-N、M-N補強用石積み



第40図 西側城壁(外壁)I-J、K-L、M-N、M-N補強用石積み位置図 (S=1/1000)

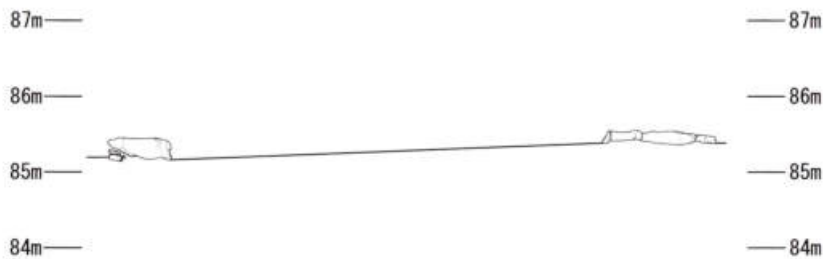


0-P外壁



第 43 图 a

Q-R外壁

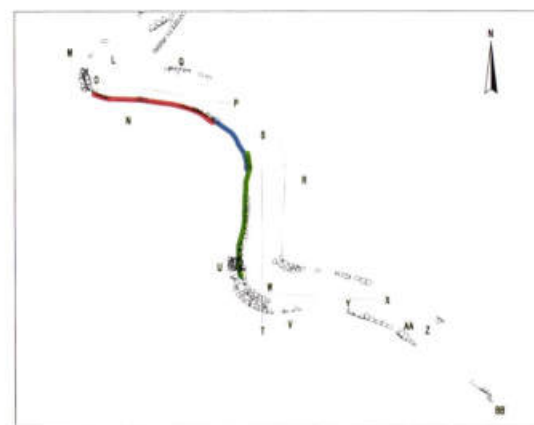


第 43 图 b

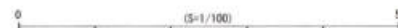
S-T外壁



第 43 图 c



第 42 图 西側城壁 (外壁) O-P、Q-R、S-T 位置圖 (S=1/1000)



第 43 图 西側城壁 (外壁) O-P、Q-R、S-T

### S-T外壁補強用石積み



第 45 図 a

### U-V外壁

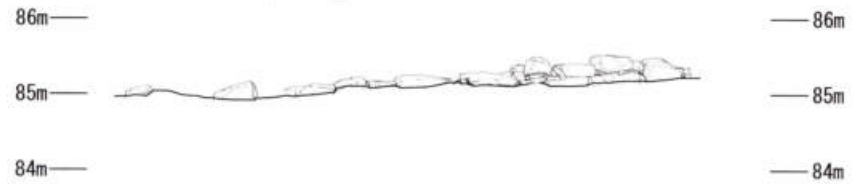


第 45 図 b



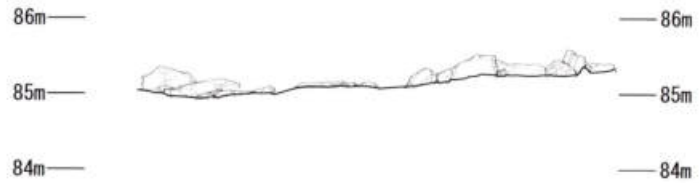
第 44 図 西側城壁（外壁）S-T補強用石積み、U-V、U-V補強用石積み①② (S=1/1000)

### U-V外壁補強用石積み①



第 45 図 c

### U-V外壁補強用石積み②



第 45 図 d



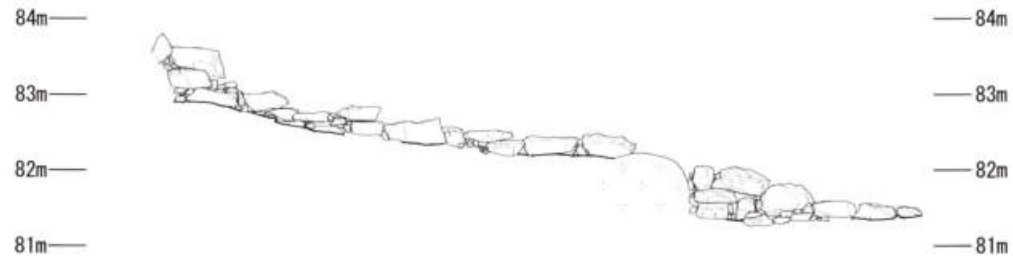
第 45 図 西側城壁（外壁）S-T補強用石積み、U-V、U-V補強用石積み①②

W-X外壁補強用石積み



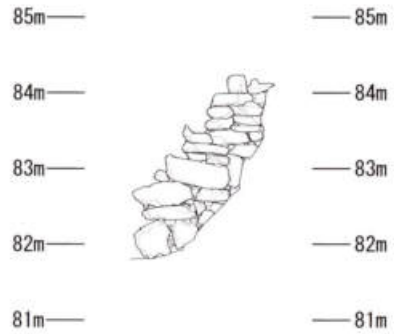
第 47 図 a

Y-Z外壁



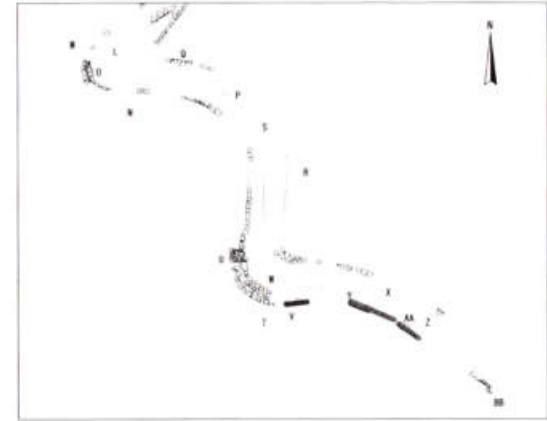
第 47 図 b

AA-BB外壁



第 47 図 c

第 47 図 西側城壁(外壁)W-X補強用石積み、W-X、Y-Z、AA-BB

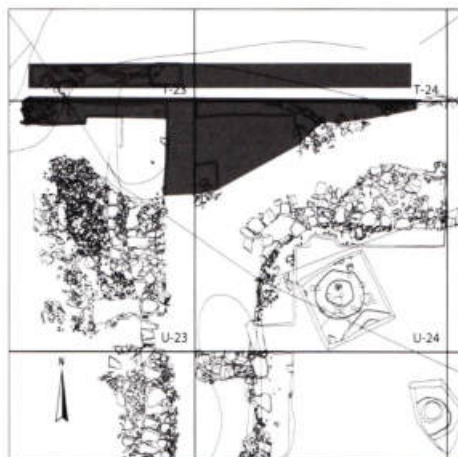


第 46 図 西側城壁(外壁)W-X補強用石積み、W-X、Y-Z、AA-BB位置図 (S=1/1000)



### 根石確認トレンチ⑤（第50図）

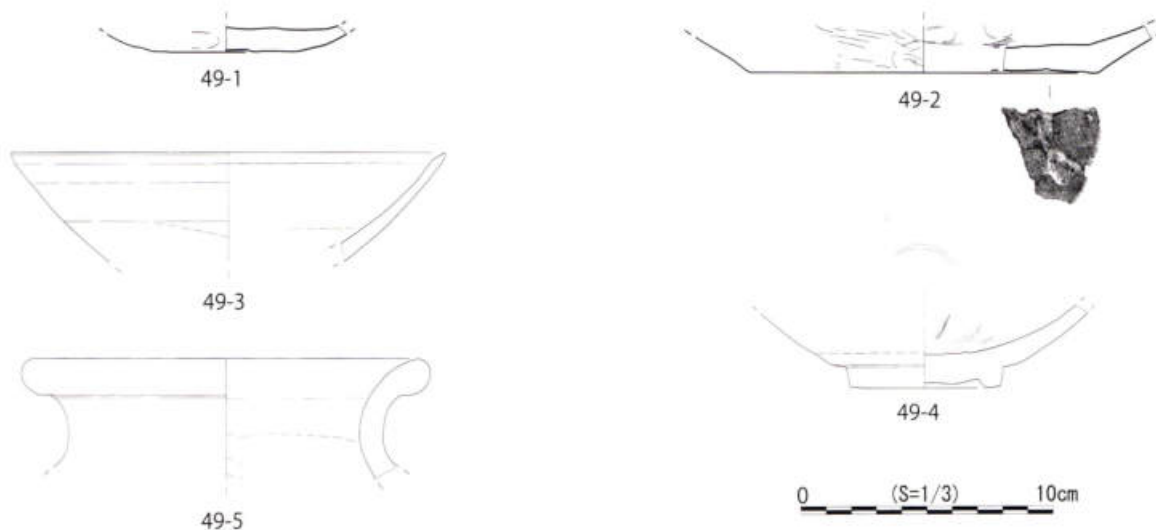
根石確認トレンチ⑤は西側城壁の北端、最初の扇の要（アザナ）に位置し1/100模型が隣接する。根石の想定された箇所を順に掘り進めると、内壁側については少なくとも1段は検出されたが、外壁側は扇の要の箇所を確認することが出来なかったことからU-23・24、T-23・24グリッドに東西方向へ幅約1mのトレンチを設定した。残念ながら当該箇所は大きく攪乱を受けていたことから根石は確認されず、攪乱層から遺物が得られている。なお、U-23・24グリッドは拡張したため不正形となっている。



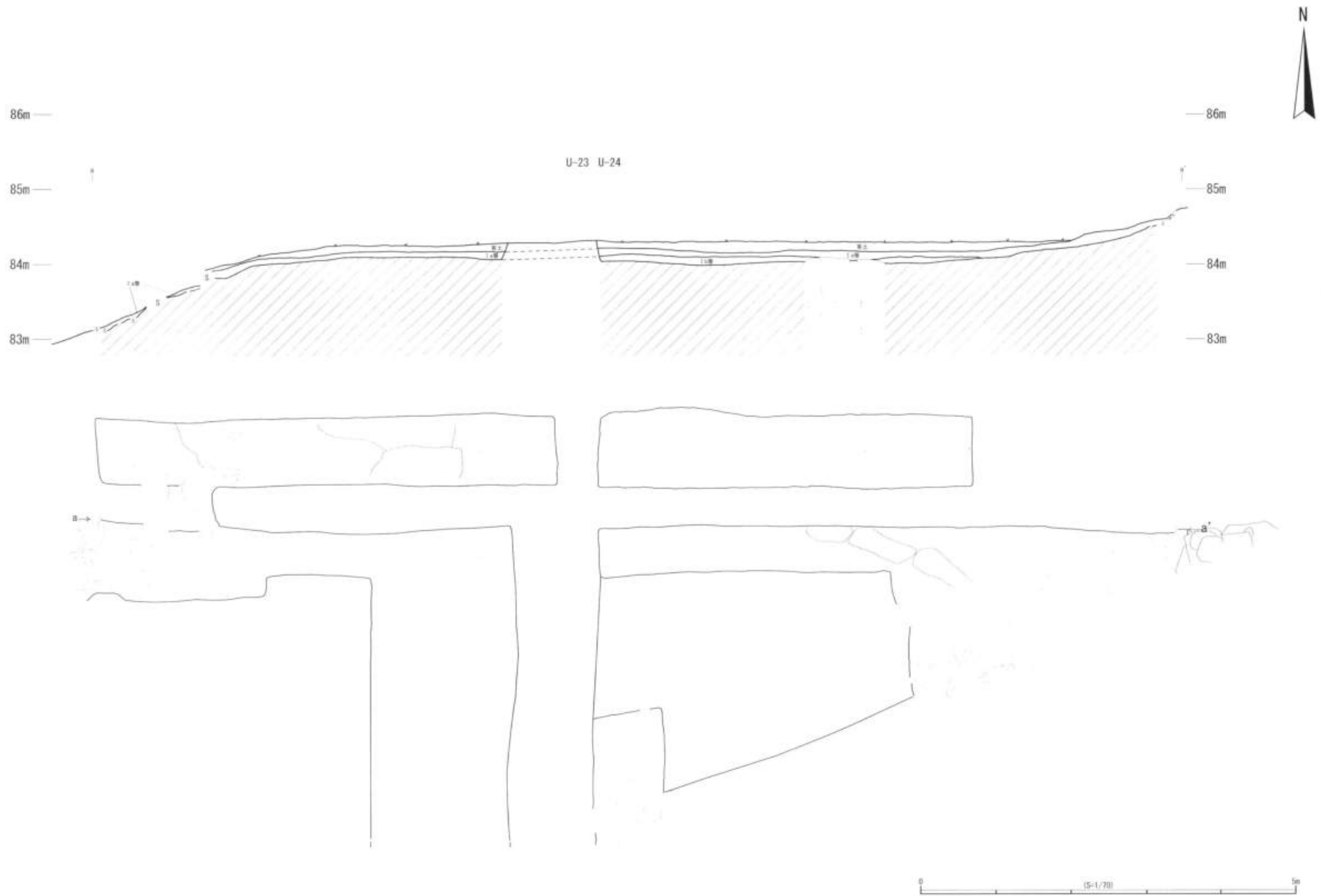
第48図 西側城壁根石確認トレンチ⑤位置図 (S=1/300)

### 〔出土遺物〕（第49図）

1. 土器（第49図-1・2）主郭のV層以下で多く出土したいわゆる「グスク土器」である。粘板岩を混和材として用いる特徴を持つ終末期の形式である（第3様式）。1・2は底部資料で器種は不明。2は外面の削り痕が顕著で、厚みのある底部から直線的に立ち上がる。
2. 白磁（第49図-3・4）3はF群（今帰仁タイプ・浦口窯系）。口縁部まで直線的に立ち上がり、口唇部内側を斜位に削る。口縁～胴部破片のため見込みは確認できないが、蛇の目釉剥ぎと思われる掻き取り痕を観察できる。4はC1群（ピロースクI・閩清窯系）。内面には下から上へ楕円描文、見込みは平坦だが圏線状に凹み、外面は腰部以下を無釉とし、底部は角高台、外底の削りは浅い。3・4ともに分類の要素をよくあらわす典型的な碗資料である。
3. タイ陶磁（第49図-5）5はメナムノイ窯系の大型褐釉陶器壺。玉縁状に肥厚し外反する。胎土は精製され色調は小豆色。

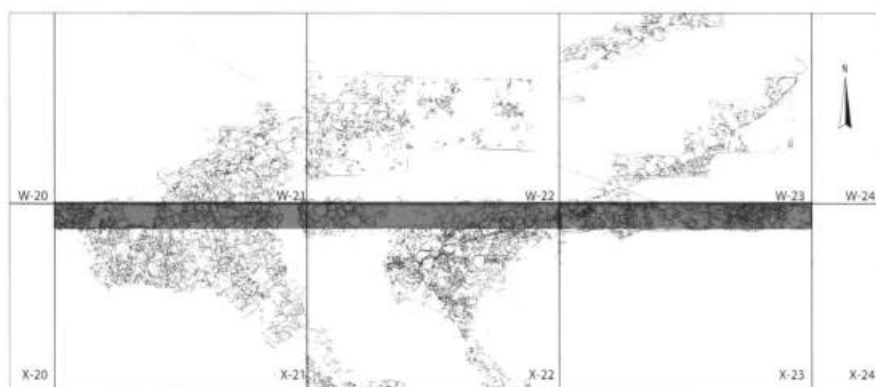


第49図 西側城壁根石確認トレンチ⑤出土遺物実測図



第 50 図 西側城壁根石確認トレンチ⑤詳細図





第51図 西側城壁根石確認トレンチ⑦位置図 (S=1/300)

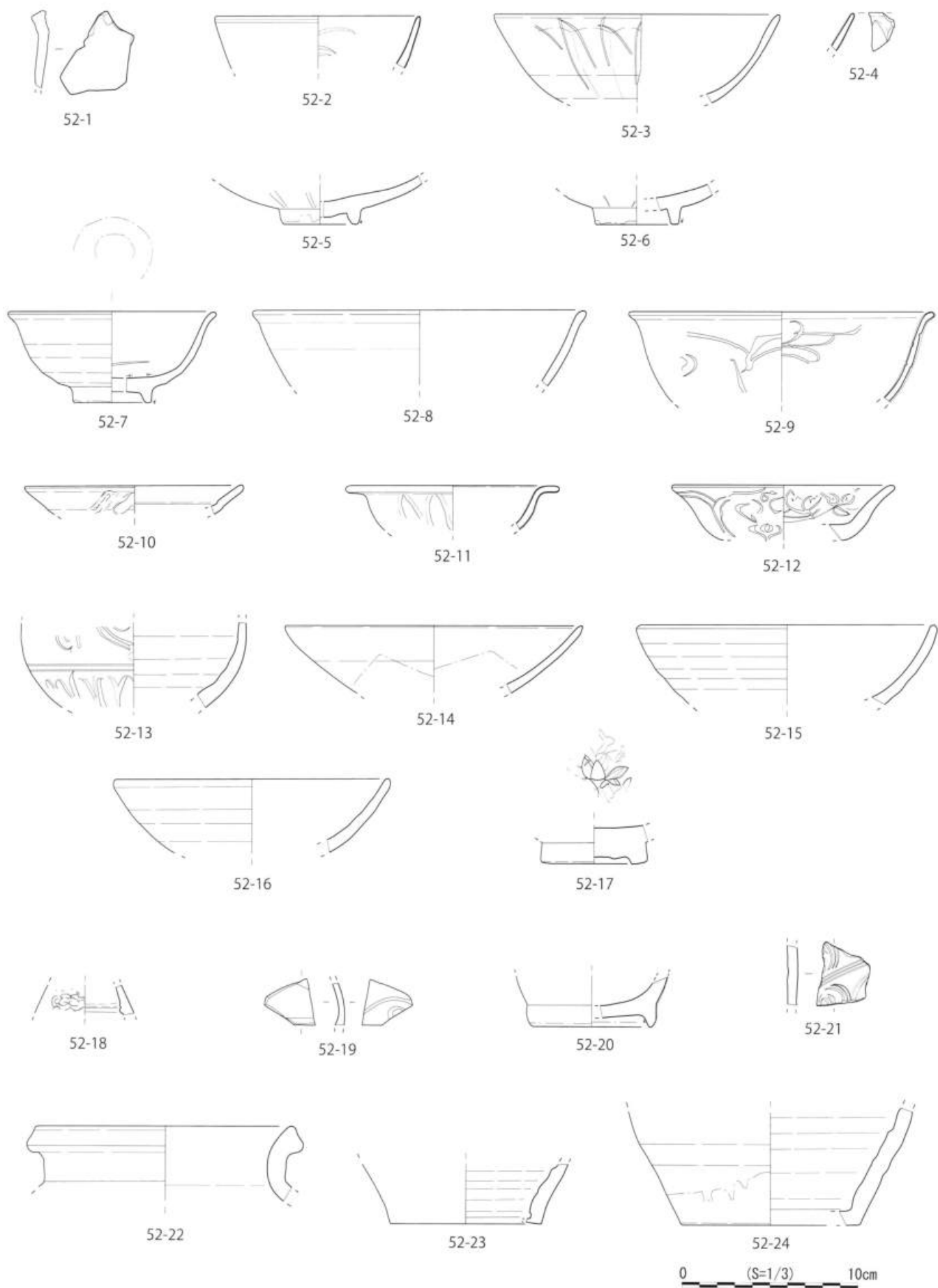
### 根石確認トレンチ⑦ (第53図)

根石確認トレンチ⑦は西側城壁の最北西端、北から数えて2番目のアザナに位置する。トレンチはX-21・22・23グリッドに東西方向へ幅約1mで設定した。また、根石へ潜る堆積層を確認するために、X-22東壁沿いにサブトレンチをいれた。調査の結果、城壁外及び城壁沿いの攪乱が著しいことがわかった。原因としては近代の耕作行為や石取りによってグスク時代相当の遺物包含層がとばされていると考えられ、地山あるいは岩盤までの土壌被覆も数十cm程度とかなり少ない。西区全体においてこのような状況で、近現代の遺物とともにグスク時代相当の遺物が得られている。

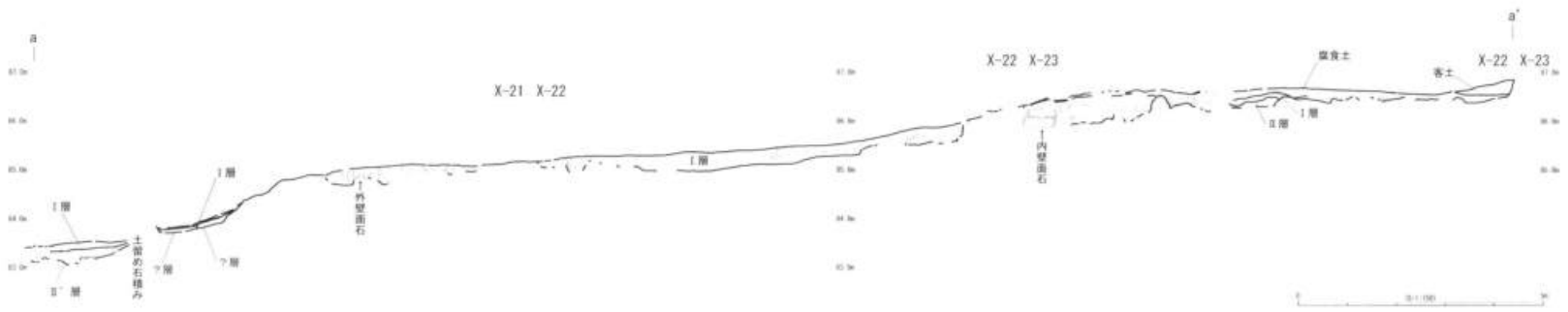
なお、トレンチ沿いG-H城壁アザナの外側においてI層除去した後に、外壁面石の外側に石列状のSX4が検出されている (SX4の詳細はp53で記述)。

### 【出土遺物】(第52図)

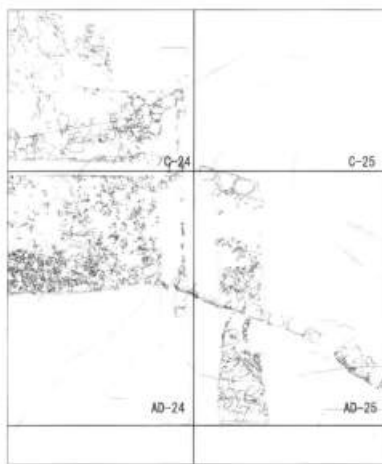
1. 土器 (第52図-1) 1は破片のため詳細まではわからないが、グスク土器とは明らかに様相が異なる土器。口縁部にかけて直線的に立ち上がり、胎土から貝塚時代後期相当の土器の可能性がある。トレンチ⑦のI層で確認された。
2. 青磁 (第52図-2~13) 2~9は碗。2は龍泉窯系I類でいわゆる劃花文碗。内器面には劃花文が確認できる。4は小破片だが恐らく同II類と思われる (鎬蓮弁文碗)。3は同IV類。退化した蓮弁文碗でIV類の中でも古手の資料と思われる。5・6も同IV類の底部。角高台となり外底には釉が掛けられず露胎となる。見込みは凹む。8・9は同V類の口縁部資料。8は大振りの無文碗。9は内外面にヘラによる施文。外面は変形蓮弁文、内面は草花文と思われる。7は龍泉窯とは異なる粗製碗。器高は低く、外器面には轆轤が明瞭に残る。外底無釉、見込みは蛇の目釉剥ぎとなる。10~12は皿。10は同安窯系、内面に櫛描文が若干確認できる。11・12は龍泉窯系V類。11は口折れ皿、外面には蓮弁文。12は外面に変形蓮弁文、内面に草花文。13は瓶の胴部。外面には片切り彫りによる牡丹唐草文と推定され、2条の界線、腰下部には細めの蓮弁文が施される。
3. 白磁 (第52図-14~17) 14はF群 (今帰仁タイプ・浦口窯系)。内外面体部中位ともに露胎とする。15・16はC2群 (ピロースクII・閩清窯系)。17はC3群 (無文外反碗・閩清窯系)。角高台は雉に仕上げ、見込みに印花を押印する。
4. 翡翠釉 (第52図-18) 18は玉壺春瓶の資料か。文様は牡丹か。
5. 瑠璃釉 (第52図-19・20) 19・20は瓶の資料。19は後述する第93図-223・224と同一個体と推定され、袋物の胴部破片で窓枠と推定される文様が露胎の隆線で表現される。20は底部資料。
6. 青白磁 (第52図-21) 21は刻文にて唐草文を体部全体に施した瓶の胴部小片。
7. 褐釉陶器 (第52図-22~24) 22は大型壺の口縁部。直線的に立ち上がり三角形に肥厚させる。素地が灰色、砂礫をや白色粒を含むことから安座間分類2類か。23・24は中型壺の底部。



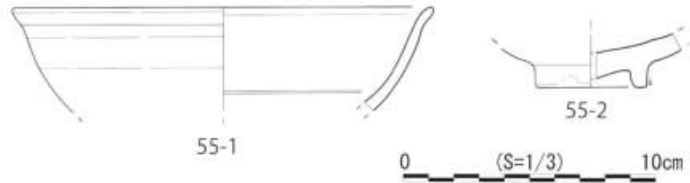
第 52 図 西側城壁根石確認トレンチ⑦出土遺物実測図



第 53 図 西側城壁根石確認トレンチ⑦詳細図



第54図 西側城壁根石確認トレンチ⑨  
位置図 (S=1/300)



第55図 西側城壁根石確認トレンチ⑨出土遺物実測図

### 根石確認トレンチ⑨ (第56図)

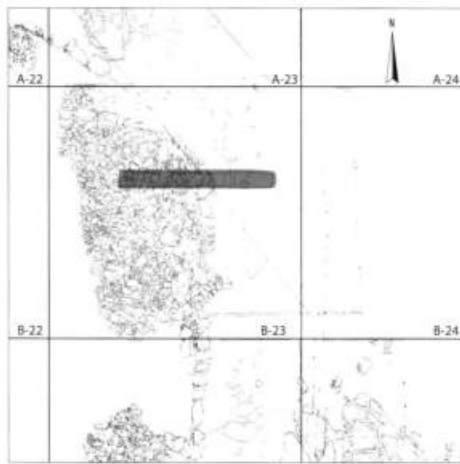
確認トレンチ⑨は調査区の南端、C-24・D-24グリッドへ南北方向に幅約1mのトレンチを設定した。近現代の攪乱が著しく、根石も1石確認できる程度であった。しかし、根石に被るIII層、潜り込むIV層が確認されたことから外郭西区の基本層序とした(p38詳細)。IV層からは14世紀後半代の青磁が確認されたことから、概ね15世紀前後の構築年代に相当すると思われる。

### 【出土遺物】(第55図)

1. 青磁 (第55図-1・2) 1は釉調、腰の張りから龍泉窯系IV類碗とした。2も同IV類碗底部。見込みが凹みIII類の系譜を色濃く残す。



第56図 西側城壁根石確認トレンチ⑨詳細図



第57図 西側城壁根石確認トレンチ⑪位置図  
(S=1/300)



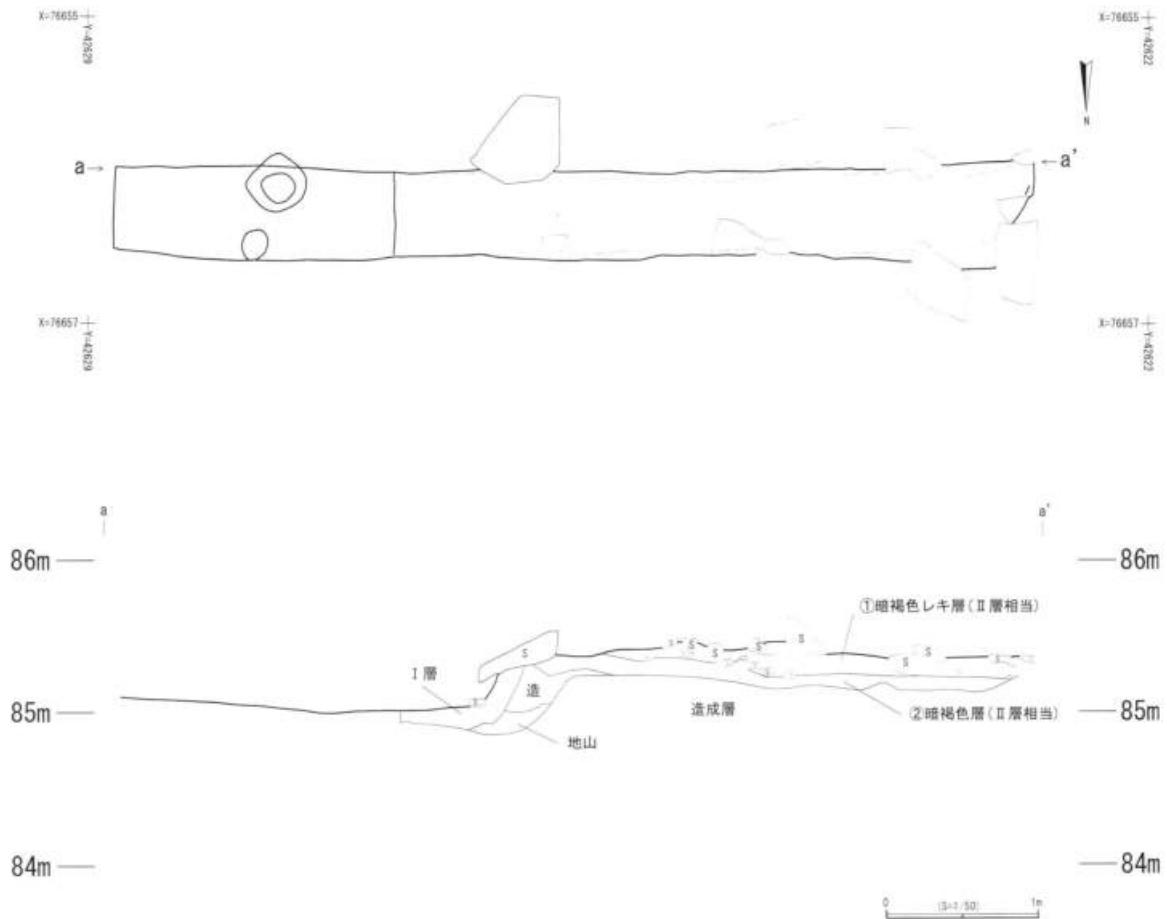
第58図 西側城壁根石確認トレンチ⑪出土遺物実測図

### 根石確認トレンチ⑪ (第59図)

確認トレンチ⑪は調査区南西側、B-23グリッドへ東西方向に幅約1mのトレンチを設定した。この地点からは畑の畝や近代に作られたと考えられるマウンド(SM)が調査前から確認されていた。表土層やこのマウンドを撤去したが攪乱が著しく、内外壁の根石は確認されなかった。

### 〔出土遺物〕(第58図)

1. 青磁 (第58図 - 1) 1は龍泉窯系 IV類の口折れ皿。
2. 石器 (第58図 - 2) 2は直径1cmを測る石製の球状製品で、いわゆる石弾と推定される。ただ、石質は、外見的には結晶質石灰岩と類することから自然生成物の可能性もある。

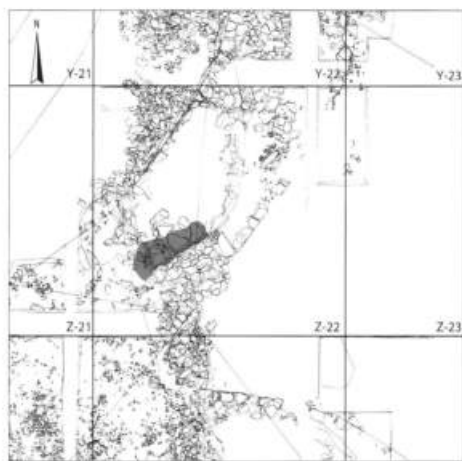


第59図 西側城壁根石確認トレンチ⑪詳細図

[名称] SW1 [位置] 外郭西区 (Z-22)

[遺構図] 第62図 [検出面] II層

[所見] 根石確認調査の際に城壁内で確認された石垣で、長さは約4m、高さ約60cm、比較的大きめの石を使用して積まれている(直径60~70cm)。西側城壁に伴う遺構と思われる。今帰仁城跡各所の城壁において、内部に城壁を積み上げることで城壁本体の強度を増すためと考えられる内部城壁が確認されており、当該遺構も同様の遺構の可能性はある。



第60図 SW1位置図 (S=1/300)

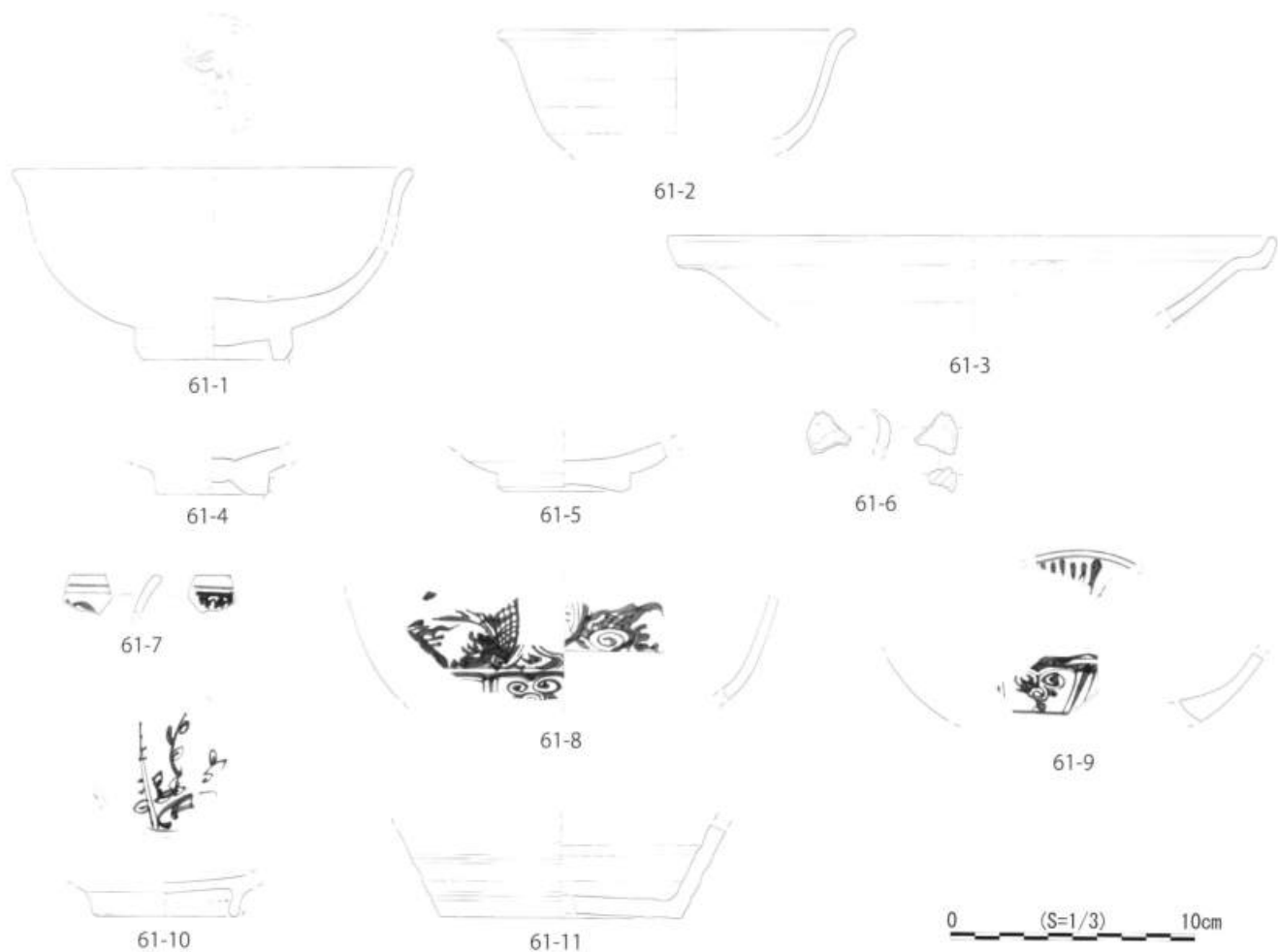
【出土遺物】(第61図)

1. 青磁 (第61図-1~3) 1・2は龍泉窯系V類碗。3は同V類の顎縁口縁の盤。

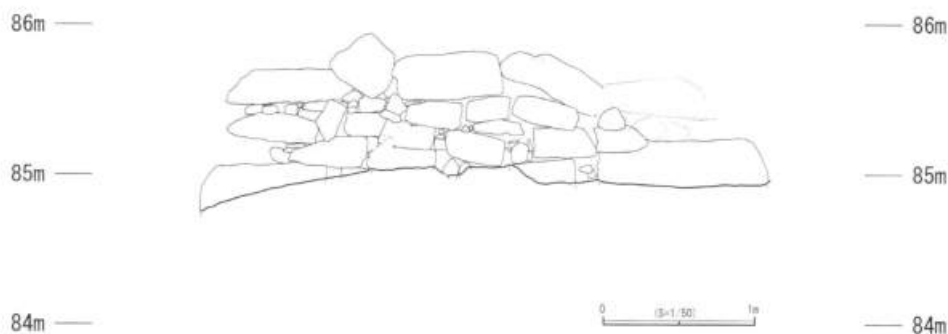
2. 白磁 (第61図-4~6) 4はC1群(ピロースクI・閩清窯系)、5はC2群(ピロースクII・茶洋窯系)。6は小壺か。

3. 青花 (第61図-7~10) 7~9はII類の同一個体。腰部には変形蓮弁文、胴部は唐草文と雲文が配される、いわゆる雲堂手の類で、首里城京の内に類品を見る事ができる。10はV類の底部か。見込みには折枝梅文。

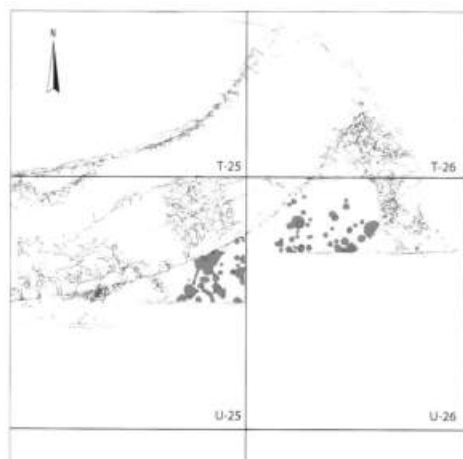
4. 褐釉陶器 (第61図-11) 中型壺の底部。



第61図 SW1出土遺物実測図



第62図 SW1遺構詳細図



第63図 U-25・26 検出の柱穴群位置図 (S=1/300)

[名称] U-25・26検出柱穴群

[位置] 外郭西区 (U-25・26)

[遺構図] 第64図 [図版] 図版9-1

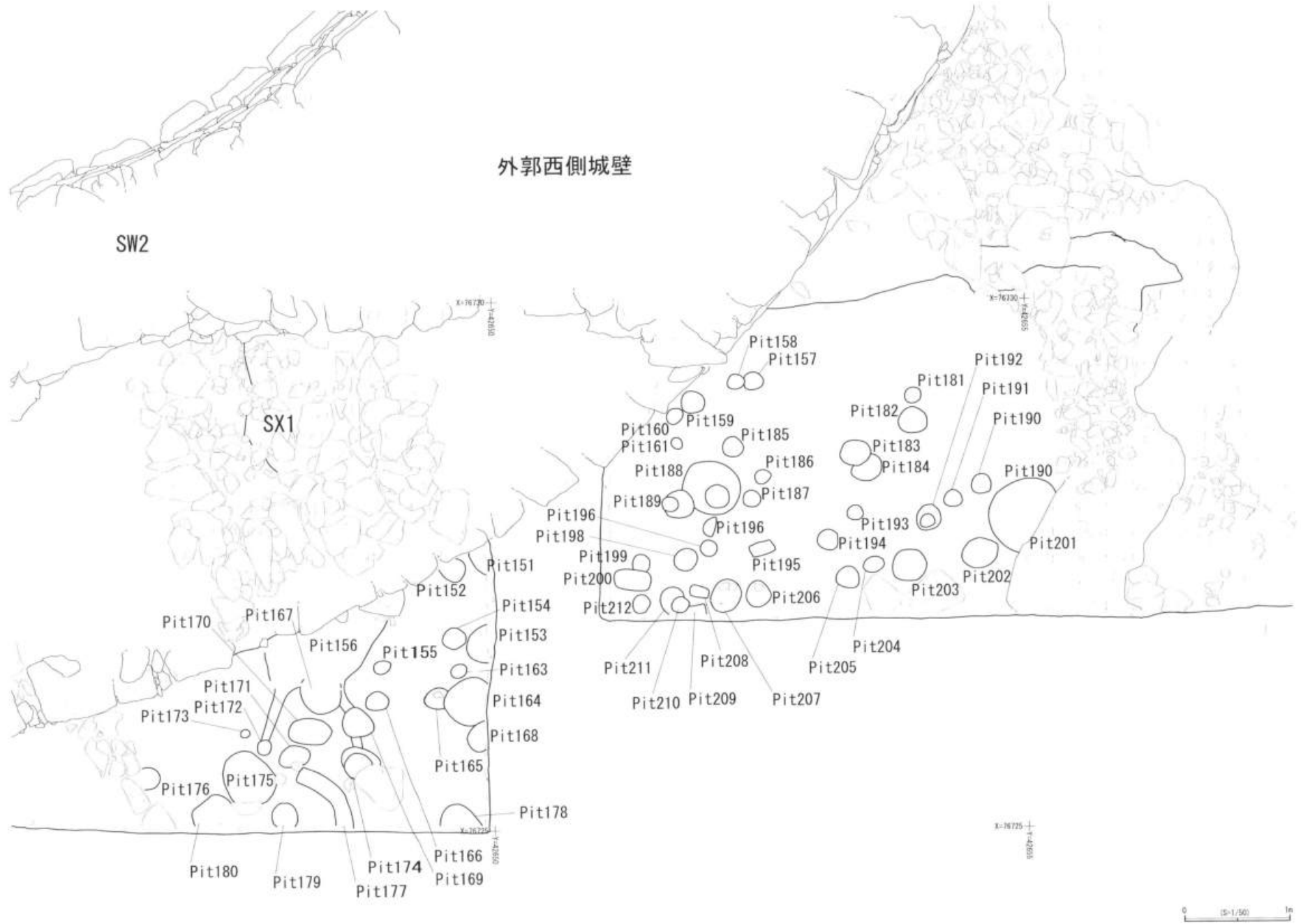
[検出面] 地山面 [構成] 柱穴71基

(Pit151~212)

[所見] 調査区最北端の内壁側の根石確認調査において地山層で71基確認された。掘削範囲は保存修理事業の観点から狭めているので、建物遺構のプランを組むことは出来ていない。また柱穴は城壁根石の下から検出されたので少なくとも15世紀中頃よりも古い柱穴遺構群と思われる。

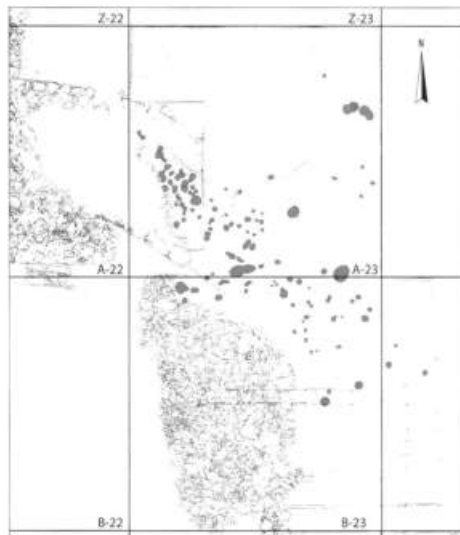
第7表 U-25・26 検出の柱穴遺構所見表

S番号	グリッド	埋土の観察	規格・性格	柱底	根石・礎	長幅	短幅	GL. (m)	切り合い	S番号	グリッド	埋土の観察	規格・性格	柱底	長幅	短幅	GL. (m)	切り合い
151	U-25	10YR4/4 褐色	柱穴	-	-	24	10	84.93		183	U-26	10YR4/4 褐色	柱穴	-	30	19	84.9	184を切る
152	U-25	10YR4/5 褐色	柱穴	-	-	21	20	84.92		184	U-26	10YR4/4 褐色	柱穴	-	30	17	84.9	183に切られ
153	U-25	10YR3/4 暗褐色	柱穴	-	-	35	12	84.95		185	U-26	10YR4/4 褐色	柱穴	-	20	12	84.8	
154	U-25	10YR4/4 褐色	柱穴	-	-	20	20	84.96		186	U-26	10YR4/4 褐色	柱穴	-	15	19	84.9	
155	U-25	10YR4/4 褐色	柱穴	-	-	15	9	84.94		187	U-26	10YR4/4 褐色	柱穴	-	17	15	84.9	
156	U-25	10YR4/4 褐色	土坑	-	-			84.85		188	U-26	10YR4/4 褐色	柱穴	○	55	48	84.8	189に切られ
157	U-26	10YR4/4 褐色	柱穴	-	-	17	15	84.8		189	U-26	10YR3/4 暗褐色	柱穴	-	30	20	84.8	188を切る
158	U-26	10YR4/4 褐色	柱穴	-	-	16	14	84.81		190	U-26	10YR3/4 暗褐色	柱穴	-	19	18	84.9	
159	U-26	10YR4/4 褐色	柱穴	-	-	23	20	84.86		191	U-26	10YR3/4 暗褐色	柱穴	-	18	12	84.9	
160	U-26	10YR4/4 褐色	柱穴	-	-	17	13	84.88		192	U-26	10YR3/4 暗褐色	柱穴	○	24	17	85	
161	U-26	10YR4/4 褐色	柱穴	-	-	12	9	84.88		193	U-26	10YR4/4 褐色	柱穴	-	15	14	85	
163	U-25	10YR4/6 褐色	柱穴	-	-	15	12	84.96		194	U-26	10YR3/4 暗褐色	柱穴	-	21	14	85	
164	U-25	10YR3/4 暗褐色	柱穴	-	-	45	20	84.95		195	U-26	10YR3/4 暗褐色	柱穴(四角)	-	22	12	85	
165	U-25	10YR4/4 褐色	柱穴	-	有り	20	18	84.96	164 切られ	196	U-26	10YR3/4 暗褐色	柱穴	-	19	7	84.9	
166	U-25	10YR4/4 褐色	柱穴	-	-	20	18	84.94		197	U-26	10YR4/4 褐色	柱穴	-	15	15	85	
167	U-25	10YR4/4 褐色	柱穴	-	-	47	27	84.94		198	U-26	10YR3/4 暗褐色	柱穴	-	23	16	85	
168	U-25	10YR3/4 暗褐色	柱穴	-	-	28	9	84.97		199	U-26	10YR3/4 暗褐色	柱穴	-	15	15	84.9	
169	U-25	10YR4/4 褐色	柱穴	-	-	28	17	84.94		200	U-26	10YR3/4 暗褐色	柱穴(四角)	-	34	19	84.9	
170	U-25	10YR4/4 褐色	柱穴	-	-	4	22	85		201	U-26	10YR3/4 暗褐色	柱穴	-	71	33	84.9	
171	U-25	10YR4/4 褐色	柱穴	-	有り	30	12	85		202	U-26	10YR4/4 褐色土	柱穴	-	36	21	85	
172	U-25	10YR4/4 褐色	柱穴	-	-	13	12	85		203	U-26	10YR4/4 褐色	柱穴	-	33	31	85	
173	U-25	10YR4/4 褐色	柱穴	-	-	9	8	85		204	U-26	10YR4/4 褐色	柱穴	-	19	14	85	
174	U-25	10YR4/4 褐色	柱穴	○	-	35	14	85		205	U-26	10YR4/4 褐色	柱穴	-	23	15	85	
175	U-25	10YR4/4 褐色	柱穴	-	-	54	32	85.03		206	U-26	10YR3/4 暗褐色	柱穴	-	25	17	85	
176	U-25	10YR4/4 褐色	柱穴	-	-	19	15	85.01		207	U-26	10YR3/4 暗褐色	柱穴	-	33	26	85	
177	U-25	10YR4/4 褐色	柱穴	-	-	75	16	85.05		208	U-26	10YR3/4 暗褐色	柱穴(四角)	-	18	9	85	
178	U-25	10YR4/4 褐色	柱穴	-	-	46	14	85.05		209	U-26	10YR3/4 暗褐色	柱穴(四角)	-	13	9	85	210に切られ
179	U-25	10YR4/4 褐色	柱穴	-	-	24	22	85.04		210	U-26	10YR4/4 褐色	柱穴	-	16	10	85	209,211 切る
180	U-25	10YR4/4 褐色	柱穴	-	-	39	16	85.03		211	U-26	10YR4/4 褐色	柱穴	-	24	18	85	210に切られ
181	U-26	10YR4/4 褐色	柱穴	-	-	17	15	84.9		212	U-26	10YR3/4 暗褐色	柱穴	-	19	13	84.9	
182	U-26	10YR3/4 暗褐色	柱穴	-	-	27	19	84.9										



第 64 図 U-25・26 検出の柱穴群遺構詳細図



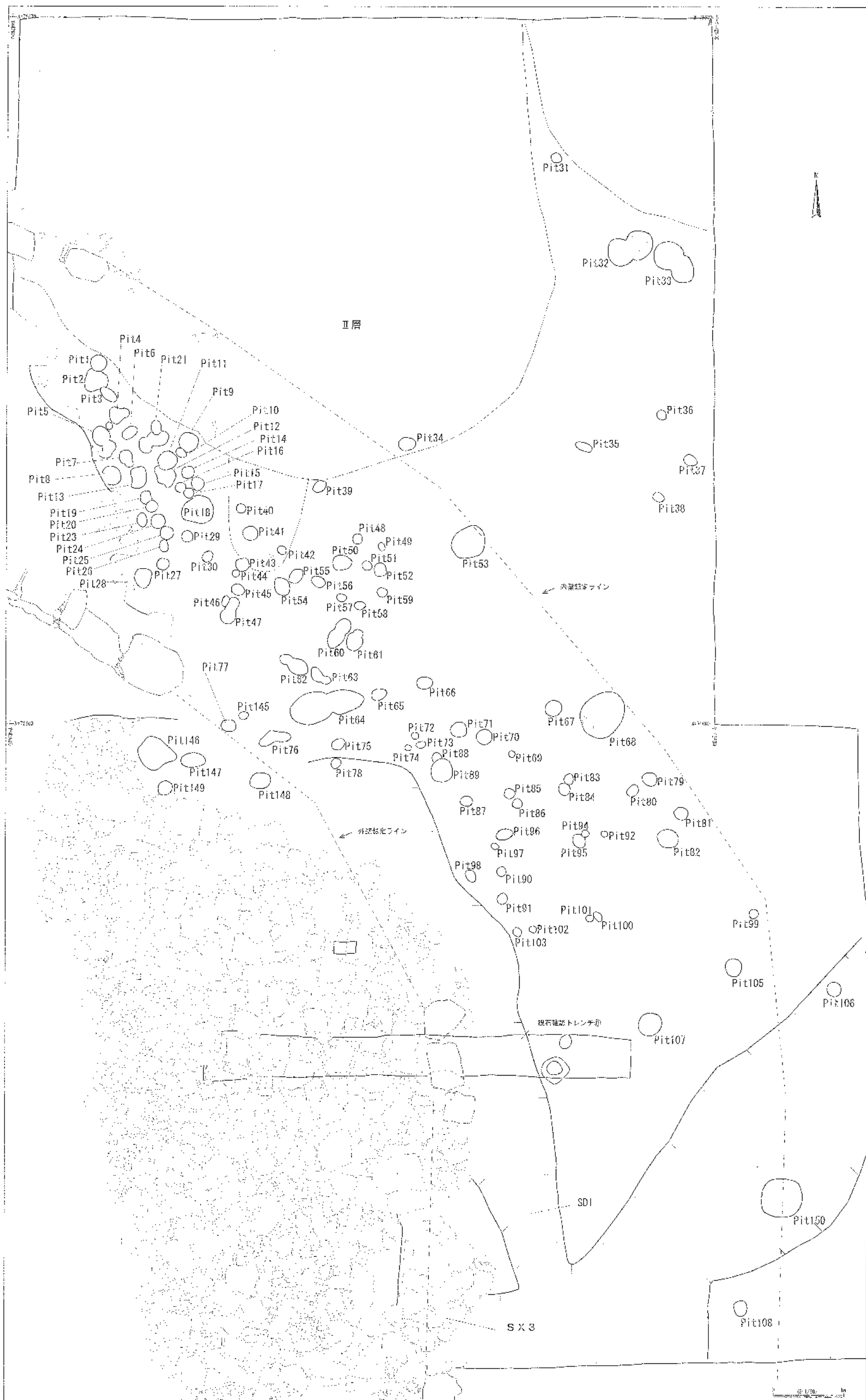


第 65 図 A-22・23・B-23・24 検出の柱穴群位置図  
(S=1/300)

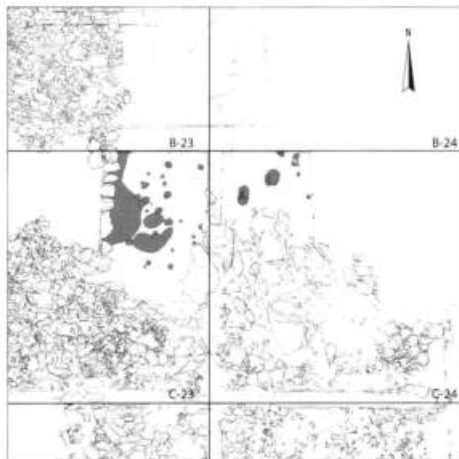
[名称] A-22・23、B-23・24 検出の柱穴群  
 [位置] 外郭西区 (A-22・23、B-23・24)  
 [遺構図] 第66図 [図版] 図版9-2  
 [検出面] 地山層 [構成] 柱穴114基  
 [所見] 調査区南西内壁側の地山層で柱穴遺構が114基確認された。根石確認トレンチ①において地山が抉られるように攪乱されていたことから、周囲にあった柱穴遺構も攪乱を受け、多くの柱穴の上部がとばされ直径は小さい状態で検出された。建物遺構のプランを組むことは出来ていない。城壁の下層より検出されていることから少なくとも15世紀中頃よりも古い柱穴遺構群と思われる。

第 8 表 A-23・B-23・24 検出の柱穴所見表

S番号	グリッド	検出面	埋土の観察	長幅	短幅	GL(m)	S番号	グリッド	検出面	埋土の観察	長幅	短幅	GL(m)	S番号	グリッド	検出面	埋土の観察	長幅	短幅	GL(m)
1	A-23	地山	10YR4/4 褐色土	22	24	84.98	39	A-23	地山	10YR4/4 褐色土	20	17	85.23	77	B-23	地山	10YR4/4 褐色土	20	16	84.95
2	A-23	地山	10YR4/4 褐色土	30	34	84.98	40	A-23	Ⅱ層 (?)	10YR4/4 褐色土	14	14	85.15	78	B-23	地山	10YR4/4 褐色土	15	12	85
3	A-23	地山	10YR4/4 褐色土	26	18	84.98	41	A-23	Ⅱ層 (?)	10YR4/4 褐色土	22	20	85.15	79	B-23	地山	暗褐色土に黄褐色土がまだらに入り、炭も少し。	22	18	85.15
4	A-23	地山	10YR4/4 褐色土	28	13	84.99	42	A-23	Ⅱ層 (?)	10YR4/4 褐色土	13	12	85.19	80	B-23	地山	暗褐色土に黄褐色土がまだらに入り、炭も少し。	19	12	85.15
5	A-23	地山	10YR4/4 褐色土	45	14	84.97	43	A-23	地山	10YR4/4 褐色土	19	18	85.12	81	B-23	地山	暗褐色土に黄褐色土がまだらに入り、炭も少し。	20	17	85.13
6	A-23	地山	10YR4/4 褐色土	21	14	85.01	44	A-23	地山	10YR4/4 褐色土	11	10	85.1	82	B-23	地山	暗褐色土に黄褐色土がまだらに入り、炭も少し。	30	25	85.12
7	A-23	地山	10YR4/4 褐色土	24	18	84.97	45	A-23	地山	10YR4/4 褐色土	19	19	85.09	83	B-23	地山	10YR4/4 褐色土	15	13	85.14
8	A-23	地山	10YR4/4 褐色土	26	25	84.96	46	A-23	地山	10YR4/4 褐色土	15	10	85.06	84	B-23	地山	10YR4/4 褐色土	17	12	85.13
9	A-23	地山	10YR4/4 褐色土	26	30	85.06	47	A-23	地山	10YR4/4 褐色土	38	16	85.06	85	B-23	地山	10YR4/4 褐色土	15	14	85.12
10	A-23	地山	10YR4/4 褐色土	15	12	85.04	48	A-23	地山	10YR4/4 褐色土	15	15	85.2	86	B-23	地山	10YR4/4 褐色土	18	18	85.12
11	A-23	地山	10YR4/4 褐色土	27	27	85.04	49	A-23	地山	10YR4/4 褐色土	13	12	85.2	87	B-23	地山	10YR4/4 褐色土	12	10	85.11
12	A-23	地山	10YR4/4 褐色土	28	28	85.04	50	A-23	地山	10YR4/4 褐色土	28	22	85.17	88	B-23	地山	10YR4/4 褐色土	33	30	85.11
13	A-23	地山	10YR4/4 褐色土	30	20	84.99	51	A-23	地山	10YR4/4 褐色土	13	13	85.19	89	B-23	地山	10YR4/4 褐色土	19	18	85.11
14	A-23	地山	10YR4/4 褐色土	27	16	85.06	52	A-23	地山	10YR4/4 褐色土	19	18	85.19	90	B-23	地山	10YR4/4 褐色土	14	13	85.04
15	A-23	地山	10YR4/4 褐色土	20	19	85.05	53	A-23	地山	10YR4/4 褐色土	49	45	85.2	91	B-23	地山	10YR4/4 褐色土	22	17	85.04
16	A-23	地山	10YR4/4 褐色土	14	13	85.06	54	A-23	地山	10YR4/4 褐色土	24	20	85.14	92	B-23	地山	10YR4/4 褐色土	10	9	85.13
17	A-23	地山	10YR4/4 褐色土	15	14	85.05	55	A-23	地山	10YR4/4 褐色土	20	17	85.17	93	B-23	地山	10YR4/4 褐色土	15	13	85.13
18	A-23	地山	10YR4/4 褐色土	45	27	85.05	56	A-23	地山	10YR4/4 褐色土	19	15	85.17	94	B-23	地山	10YR4/4 褐色土	11	10	85.13
19	A-23	地山	10YR4/4 褐色土	19	17	84.97	57	A-23	地山	10YR4/4 褐色土	15	13	85.18	95	B-23	地山	10YR4/4 褐色土	19	18	85.13
20	A-23	地山	10YR4/4 褐色土	17	17	84.96	58	A-23	地山	10YR4/4 褐色土	17	14	85.18	96	B-23	地山	暗褐色・褐色土がまだらに混入	22	12	85.09
21	A-23	地山	10YR4/4 褐色土	20	15	85.03	59	A-23	地山	10YR4/4 褐色土	15	13	85.2	97	B-23	地山	暗褐色・褐色土がまだらに混入	9	8	85.08
22	A-23	地山	10YR4/4 褐色土	34	21	85.02	60	A-23	地山	10YR4/4 褐色土	44	14	85.16	98	B-23	地山	暗褐色・褐色土がまだらに混入	16	13	85.03
23	A-23	地山	10YR4/4 褐色土	20	14	84.94	61	A-23	地山	10YR4/4 褐色土	30	14	85.17	99	B-23	地山	10YR3/3 暗褐色土	15	14	85.12
24	A-23	地山	10YR4/4 褐色土	20	19	84.96	62	A-23	地山	10YR4/4 褐色土	35	15	85.2	100	B-23	地山	10YR4/4 褐色土	15	10	85.08
25	A-23	地山	10YR4/4 褐色土	19	18		63	A-23	地山	10YR4/4 褐色土	20	20	85.11	101	B-23	地山	10YR4/4 褐色土	11	9	85.08
26	A-23	地山	10YR4/4 褐色土	16	13	84.95	64	A-23	地山	10YR4/4 褐色土	100	30	85.07	102	B-23	地山	10YR4/4 褐色土	10	10	85.03
27	A-23	地山	10YR4/4 褐色土	17	17	84.93	65	A-23	地山	褐色土に炭混入	20	17	85.13	103	B-23	地山	10YR4/4 褐色土	14	9	85.03
28	A-23	地山	10YR4/4 褐色土	27	15	84.9	66	A-23	地山	10YR4/4 褐色土	23	17	85.17	104	B-23	地山	10YR4/4 褐色土	17	15	85.02
29	A-23	地山	10YR4/4 褐色土	16	15	85.03	67	A-23	地山	10YR4/4 褐色土	24	23	85.18	105	B-23	NR	10YR3/3 暗褐色土	25	24	85.09
30	A-23	地山	10YR4/4 褐色土	16	14	85.06	68	A-23	地山	10YR4/4 褐色土	84	62	85.18	106	B-23	NR	10YR4/4 褐色土	22	20	85.03
31	A-23	地山	10YR4/4 褐色土	16	15	85.18	69	B-23	地山	10YR4/4 褐色土	10	9	85.13	107	B-23	地山	10YR3/3 暗褐色土	32	32	85.09
32	A-23	地山	褐色土に一部暗褐色土 (10YR3/3) が混ざる。炭含む。	65	27	85.26	70	B-23	地山	10YR4/4 褐色土	23	22	85.14	108	B-23	地山	10YR4/4 褐色土	23	17	85.07
33	A-23	地山	褐色土に一部暗褐色土 (10YR3/3) が混ざる。炭含む。	69	24	85.26	71	B-23	地山	10YR4/4 褐色土	23	21	85.14	145	A-23	地山	10YR4/4 褐色土	14	11	84.98
34	A-23	Ⅱ層 (?)	10YR4/4 褐色土	25	18	85.24	72	B-23	地山	10YR4/4 褐色土	10	8	85.11	146	B-23	地山	褐色土に少量の炭混入	57	15	84.86
35	A-23	地山	10YR3/3 暗褐色土	24	12	85.23	73	B-23	地山	10YR4/4 褐色土	14	9	85.12	147	B-23	地山	褐色土に炭混入	45	15	84.86
36	A-23	地山	10YR4/4 褐色土	13	11	85.21	74	B-23	地山	10YR4/4 褐色土	10	8	85.1	148	B-23	地山	褐色・暗褐色土がまだらに混入	32	22	84.92
37	A-23	地山	10YR4/4 褐色土	20	17	85.22	75	B-23	地山	10YR4/4 褐色土	19	18	85.01	149	B-23	地山	10YR4/4 褐色土。SM 断面に有り	20	20	84.85
38	A-23	地山	10YR4/4 褐色土	15	13	85.24	76	B-23	地山	10YR4/4 褐色土	40	14	84.98	150	B-24	地山	褐色・暗褐色土がまだらに入り、炭も少量混入	58	55	84.99



第66図 A-22・23、B-23・24検出の柱穴群



第 67 図 C-23・24 検出の柱穴群位置図 (S=1/300)

[名 称] C-23・24 検出の柱穴群

[位 置] 外郭西区 (C-23・24)

[遺構図] 第 68 図

[検出面] 地山層

[構 成] 柱穴 18 基

[所 見] C-23・24 グリッドで検出された柱穴群遺構群は、西側城壁の南西、北から数えて 4 番目のアザナの城壁内で検出された。しかしこのグリッドでも攪乱が著しく、重機の爪痕も確認されている。その結果、多くの根石が 1 石残存する程度で、柱穴の径も小さく、プランを確定させるには至っていない。城壁の下層より検出されていることから少なくとも 15 世紀中頃よりも古い柱穴遺構群と思われる。なお、検出された柱穴遺構は、保存修理事業の観点から検出面で留めている。



第 68 図 C-23・24 検出の柱穴群遺構詳細図

第9表 C-23・24 検出の柱穴遺構所見表

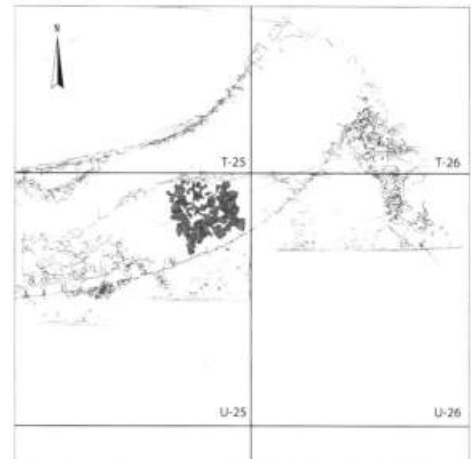
S番号	グリッド	検出面	埋土の観察	規格・性格	長幅	短幅	GL(m)	備考	S番号	グリッド	検出面	埋土の観察	規格・性格	長幅	短幅	GL(m)	備考
109	C-23	地山	褐色土に炭が混ざる。	柱穴	27	17	84.98		127	C-23	地山	褐色土に炭が混ざる。	柱穴	113	56	85	同一土坑の可能性2
110	C-23	地山	中心は暗褐色、外側は褐色土	柱穴	28	23	85.01		128	C-23	地山	褐色土に少量の炭混入	柱穴	18	12	85	同一土坑の可能性2
111	C-23	地山	10YR4/4 褐色土	柱穴	18	15	85.04		129	C-23	地山	褐色土に少量の炭混入	柱穴	17	11	84.99	同一土坑の可能性2
112	C-23	地山	10YR3/3 暗褐色土	柱穴	14	11	85.06		130	C-23	地山	10YR4/4 褐色土	柱穴	30	25	84.9	同一土坑の可能性2
113	C-23	地山	10YR4/4 褐色土	柱穴	20	14	85.09		131	C-23	地山	10YR4/4 褐色土	柱穴	20	9	85.05	
114	C-23	地山	10YR4/4 褐色土	柱穴	35	24	85.01		132	C-23	地山	10YR4/4 褐色土	柱穴	15	14	85.06	
115	C-23	地山	10YR3/3 暗褐色土	柱穴	29	15	84.99		133	C-23	地山	10YR4/4 褐色土	柱穴	16	11	85.01	
116	C-23	地山	10YR3/3 暗褐色土	柱穴	24	21	84.94	同一土坑の可能性1	134	C-23	地山	10YR4/4 褐色土	柱穴	12	10	85.03	
117	C-23	地山	10YR4/4 褐色土	柱穴	24	22	84.95	同一土坑の可能性1	135	C-23	地山	暗褐色土に炭が混ざる。	柱穴	24	21	84.92	
118	C-23	地山	10YR3/3 暗褐色土	柱穴	31	25	84.95	同一土坑の可能性1	136	C-23	地山	褐色土に炭が混ざる。	柱穴	21	18	84.91	
119	C-23	地山	10YR4/4 褐色土	柱穴	10	7	84.97	同一土坑の可能性1	137	C-23	地山	暗褐色土に炭が混ざる。	柱穴	12	9	84.88	
120	C-23	地山	10YR3/3 暗褐色土	柱穴	15	14	84.93	同一土坑の可能性1	138	C-24	地山	10YR4/4 褐色土	柱穴	30	17	85.13	
121	C-23	地山	10YR4/4 褐色土	柱穴	27	16	84.96	同一土坑の可能性1	139	C-24	地山	10YR4/4 褐色土	柱穴	53	22	85.02	
122	C-23	地山	褐色土に炭が混ざる。	柱穴	15	14	84.95	同一土坑の可能性1	140	C-24	地山	10YR4/4 褐色土	柱穴	42	23	84.99	
123	C-23	地山	褐色土に炭が混ざる。	柱穴	83	39	84.95	同一土坑の可能性1	141	C-24	地山	10YR4/4 褐色土	柱穴	40	20	85.07	
124	C-23	地山	暗褐色土に炭が混ざる。	柱穴	36	23	85.04	同一土坑の可能性1	142	C-24	地山	10YR4/4 褐色土	柱穴	57	27	85.07	
125	C-23	地山	暗褐色土に炭が混ざる。	柱穴	15	10	85.1		143	C-24	地山	10YR4/4 褐色土	柱穴	18	14	85.08	
126	C-23	地山	褐色土に炭が混ざる。	柱穴	57	15	85.06	同一土坑の可能性2	144	C-24	地山	10YR4/4 褐色土	柱穴	18	17	84.98	

[名称] SX1 [位置] 外郭西区 (U-25)  
 [遺構図] 第70図 [図版] 図版8-1  
 [検出面] I層 [構成] 石積み  
 [規模] 長軸2.9×短軸2.8m

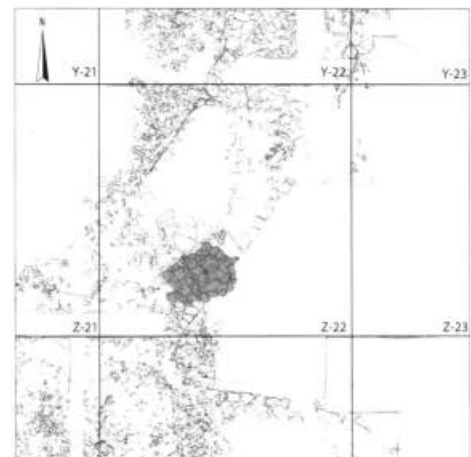
[所見] SX1はB-C城壁の上に構築された方形状の石積み。B-C城壁にはSX1の他に、内部に石積みが構築されている (SW2)。SX2はSW2の面石に被っているため、構築順は古いものから、B-C城壁→SW2→SX1となる。

SX1は調査前の段階から城壁上に露出しており、城壁根石との間には土の堆積があるため、城壁とSX1が一連の遺構ではないと考えられた。さらに、この堆積土や石積みの内側の混雑土層

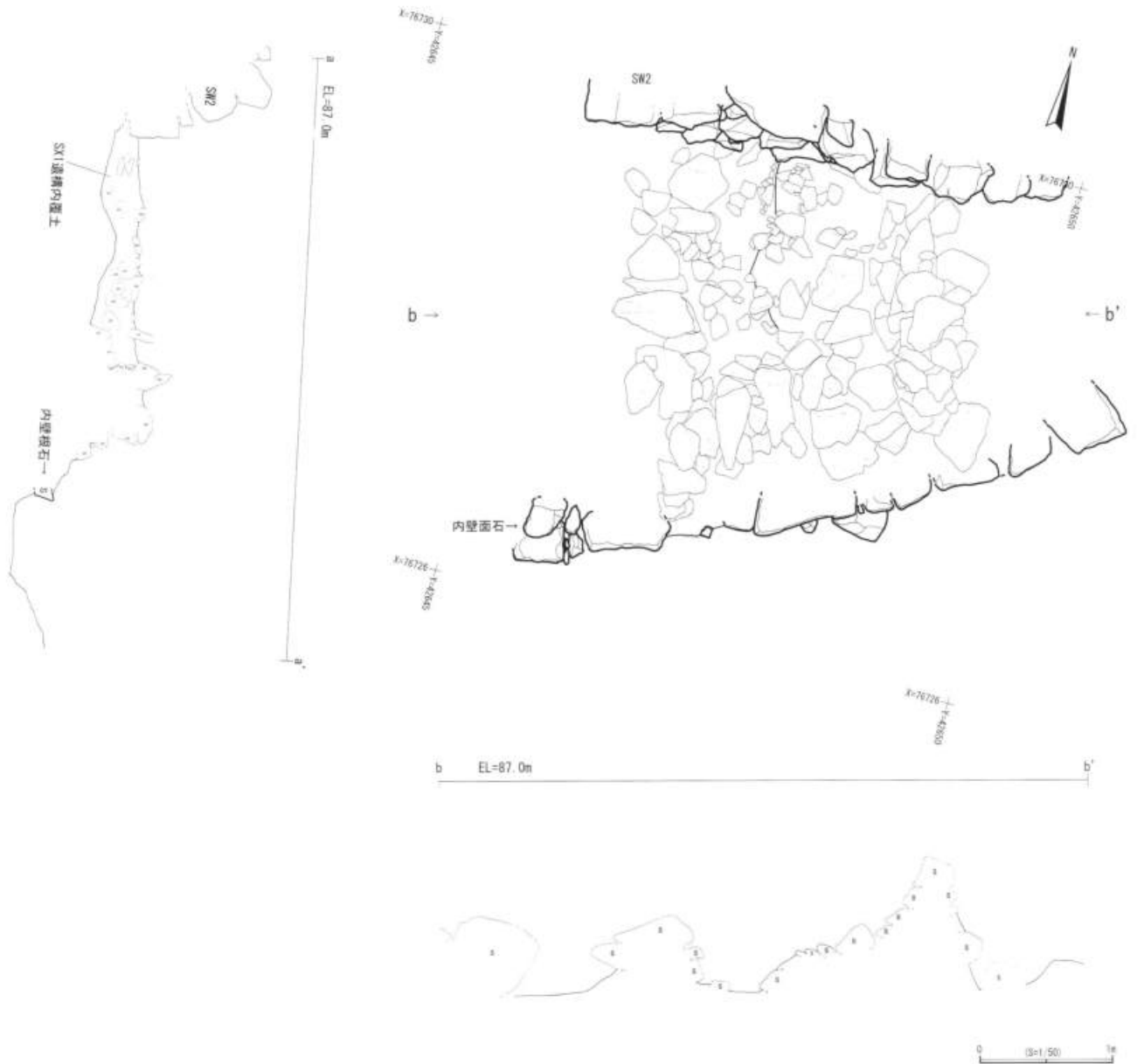
からはガラス片等の近現代のものと思われる遺物が検出され、SX1に被覆する土や周囲の堆積層からも近世以降の遺物が多く含まれている。したがって、SX1は近世以降に構築された可能性が高いと考えられる。



第69図 SX1位置図 (S=1/300)



第71図 SX2位置図 (S=1/300)



第70図 SX1遺構詳細図

〔名称〕 SX2

〔位置〕 外郭西区 (Z-22)

〔遺構図〕 第72図

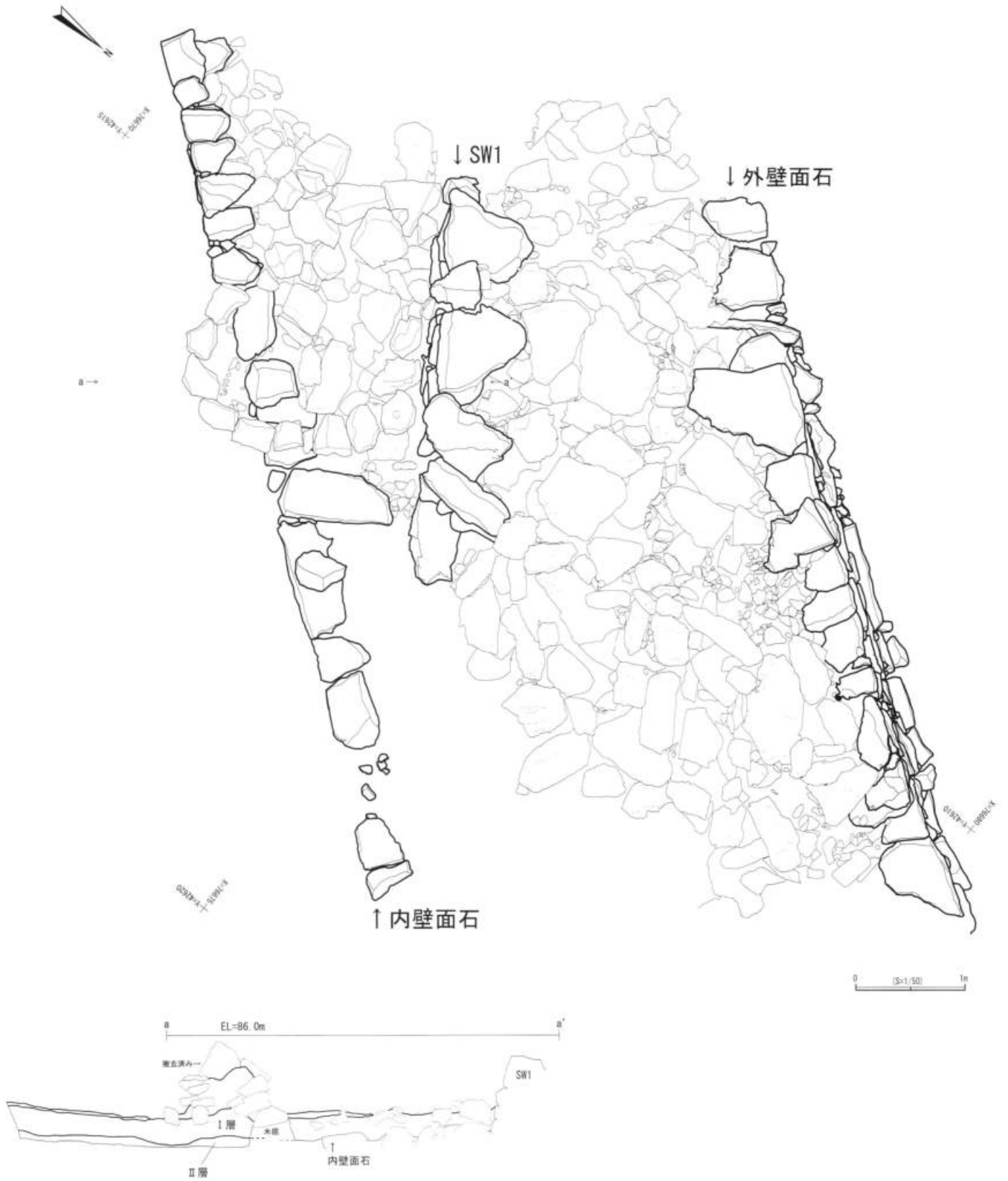
〔図版〕 図版8-2

〔検出面〕 I層

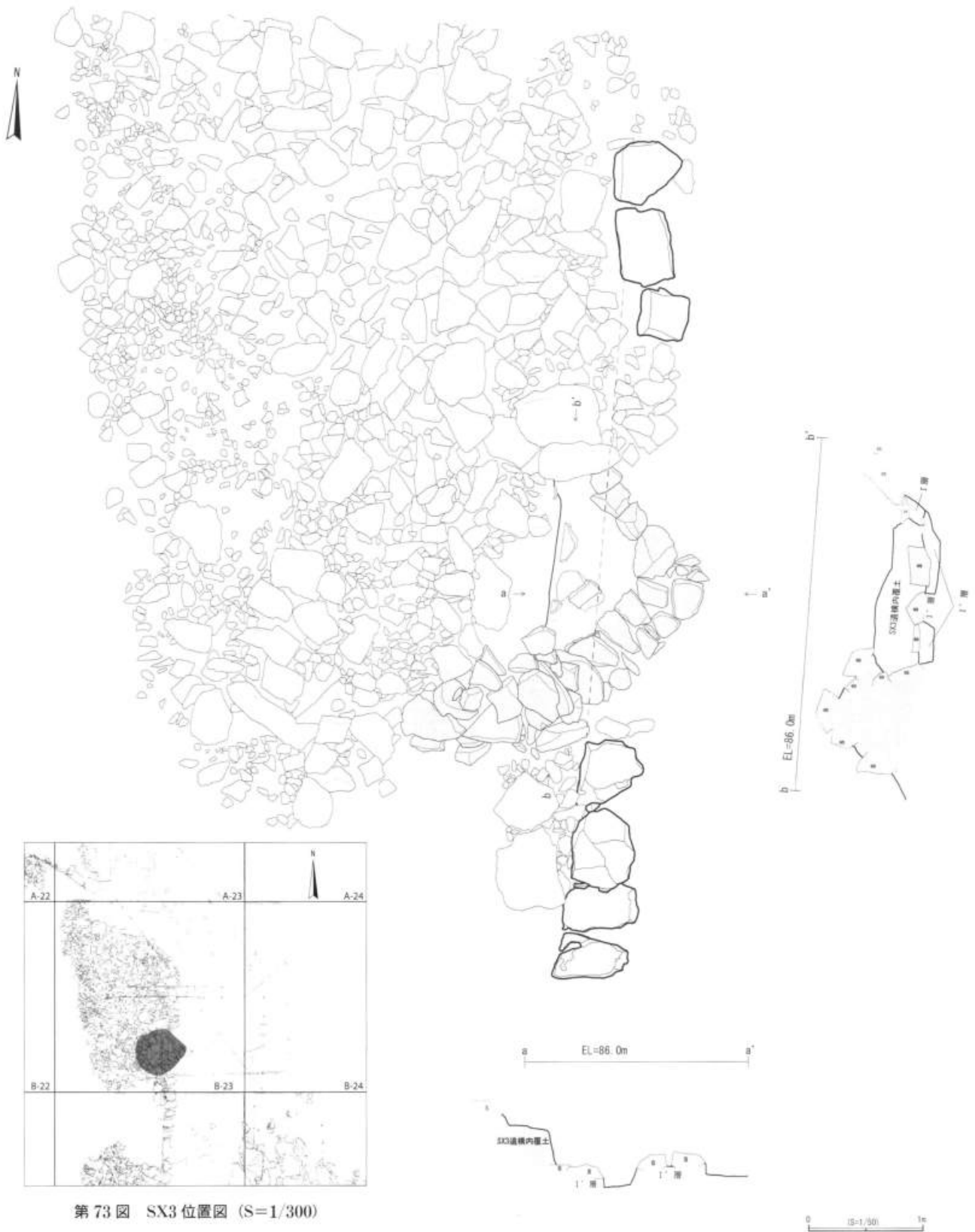
〔構成〕 円形の石列

〔規模〕 長軸3.0m、短軸2.2m

〔所見〕 SX2はK-L城壁の上に構築された円形の石列。K-L城壁内にはSX2の他に石積みが構築されている (SW1)。SX2はSW1の面石を覆っているため、SW1より新しい。K-L城壁の根石の上には堆積土があり、SX2はその上に乗っている。K-L城壁が埋まった後、あるいは城壁を埋めた後にSX2は構築されている。この堆積土は、Z-22・23、Y-22・23で見られる根石の内外に堆積する包含層 (II層) ではなく、土色はI層の褐色に近い。そのため、SX2はII層 (監守時代か?) より時代は新しくなる可能性が高い。ただし、SX2の覆土から出土した遺物はグスク～監守時代の遺物が多く含まれているため、SX2の構築された年代は判然としない。



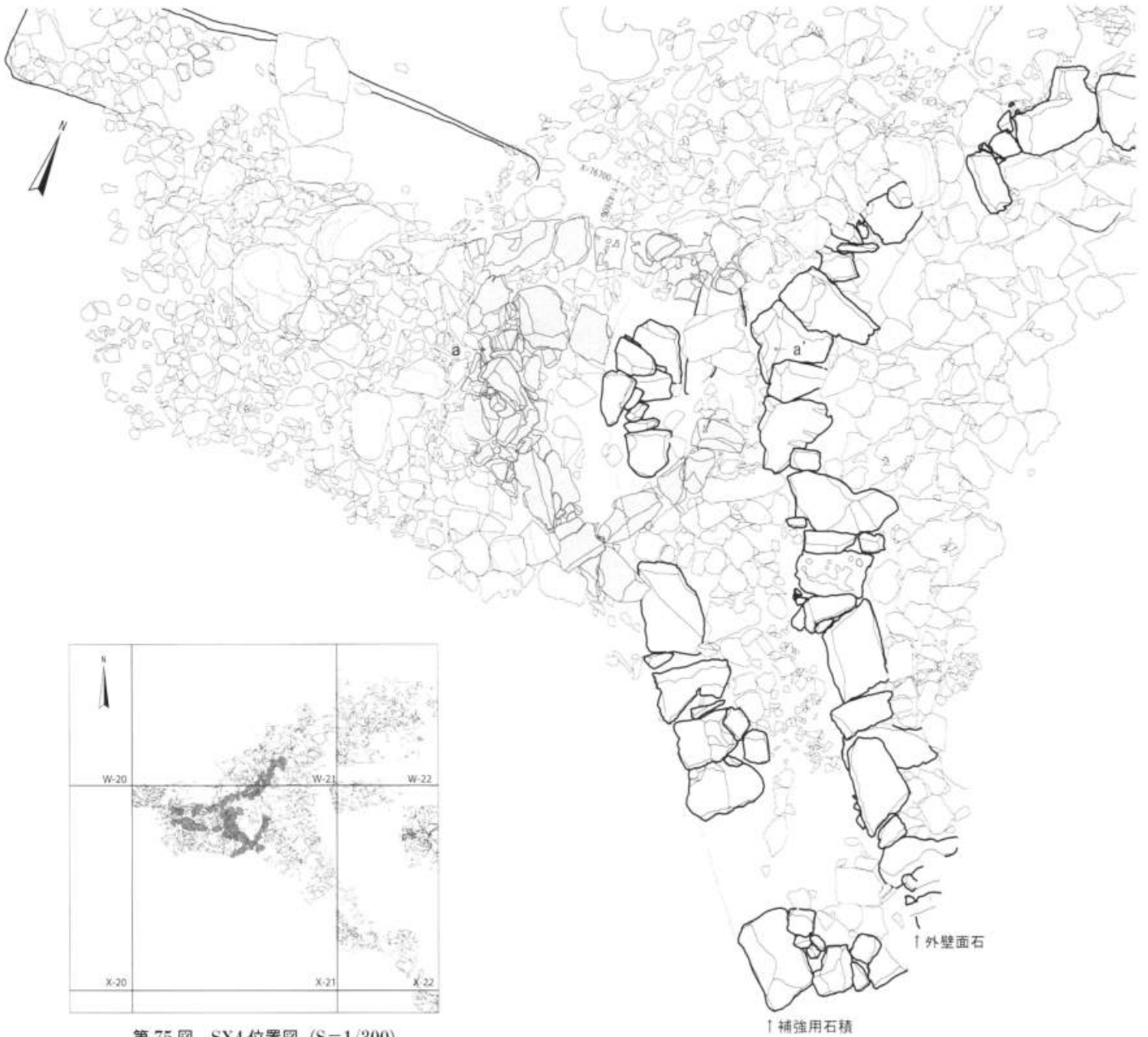
第 72 図 SX2 遺構詳細図



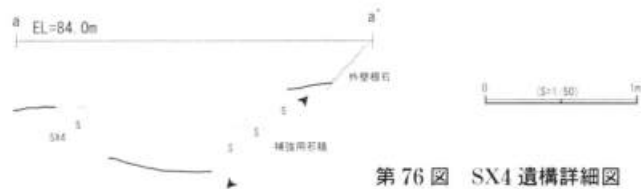
第73図 SX3位置図 (S=1/300)

第74図 SX3遺構詳細図

[名称] SX3 [位置] 外郭西区 (B-23) [遺構図] 第74図 [図版] 図版8-3  
 [検出面] I層 [構成] 半円形の石積み [規模] 長軸3.0m、短軸1.5m  
 [所見] SX3は半円形状の石積みで、石積みの下部には石列が検出されており、形態はSX2と共通する。この地点はS-T城壁の外壁面石が3石残り、その上部および前面が土盛のようになっていた。SX3の石積みはこの土盛の南端に位置し、SX3は土盛に乗る形で構築されている。さらに、石積みの根石が乗る褐色土 (I'層) はB-23グリッドで検出されたI層相当の溝状遺構 (SD1) の覆土と同じものであった。SX3に伴う遺物、SD1から出土した遺物は近世以降のものが混ざるため、SX3の構築年代は近世以降である。



第75図 SX4位置図 (S=1/300)



第76図 SX4遺構詳細図

[名称] SX4

[位置] 外郭西区 (X-21・W-21)

[遺構図] 第76図

[図版] 図版8-4

[検出面] I層

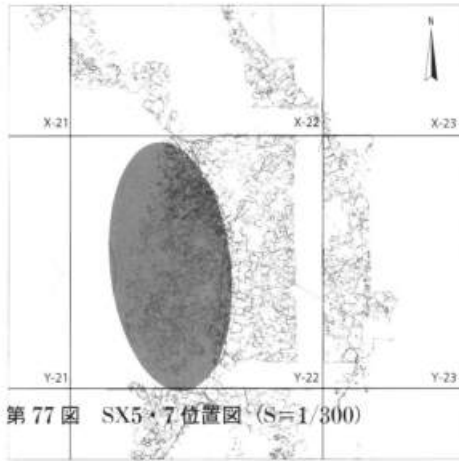
[構成] 不正形な石列

[規模] 長軸3.1m、短軸2.3m

[所見] G-H城壁アザナの外側にある石列状の遺構。トレンチ⑦においてI層除去後、外壁面石の外側に石列状の遺構が検出され、当初は根石の上にいる石や斜面沿いにのびる石列状の遺構と考えられた(薄グレー)。その後の検討で、根石にのる石や斜面沿いの石は一連のものではないと判断され、城壁へとりついて構築された石列部分をSX4とした(濃グレー)。

また、C-H外壁アザナ部には補強石積みが確認されている。SX4の石列範囲内に一部見えた補強石積みを検出するため、SX4内の礫や覆土を除去した。SX4出土遺物の一部にかなり古い遺物(当該遺跡形成期?)が得られているのは、この補強石積み検出の際の下層掘削によると判断した。





第77図 SX5・7位置図 (S=1/300)

[名称] SX5・7 [位置] 外郭西区 (Y-22)

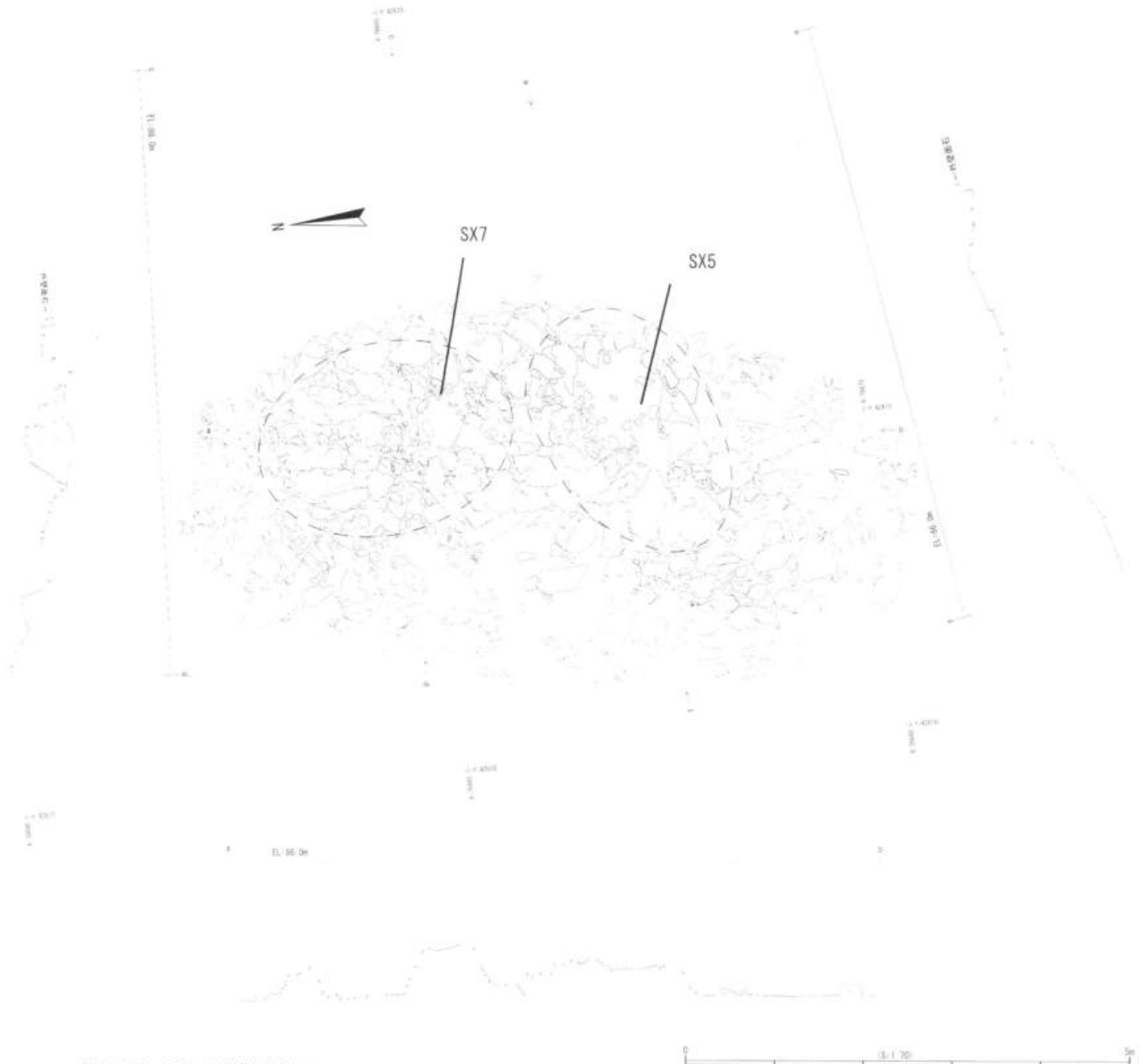
[遺構図] 第78図 [図版] 図版8-7

[検出面] I層 [構成] 楕円形石列 (2基)

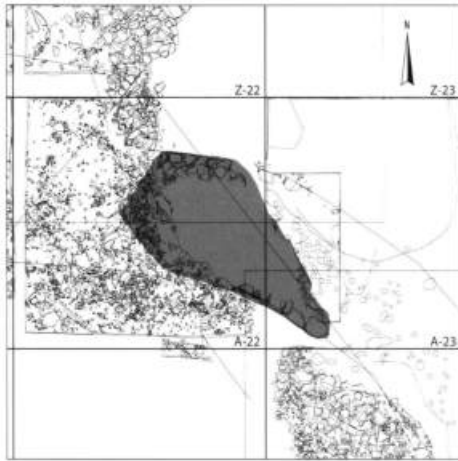
[規模] SX5: 長軸3.0m、短軸2.0m

SX7: 長軸2.9m、短軸2.1m

[所見] G-H城壁の外壁面石沿いで、I層除去後に検出された楕円形石列状の遺構。城壁へとりついて構築されるその他のSX遺構と同様の形状をなす。SX5・7は隣接して検出され、遺構内覆土も黒色土で同じであったため同時期、同形状の遺構と判断した。



第78図 SX5・7遺構詳細図



第79図 SX6位置図 (S=1/300)

〔名称〕 SX6

〔位置〕 外郭西区 (A-22・23)

〔遺構図〕 第81図

〔図版〕 図版8-6

〔検出面〕 I層

〔構成〕 石列遺構?

〔規模〕 長軸2.5m、短軸2.2m

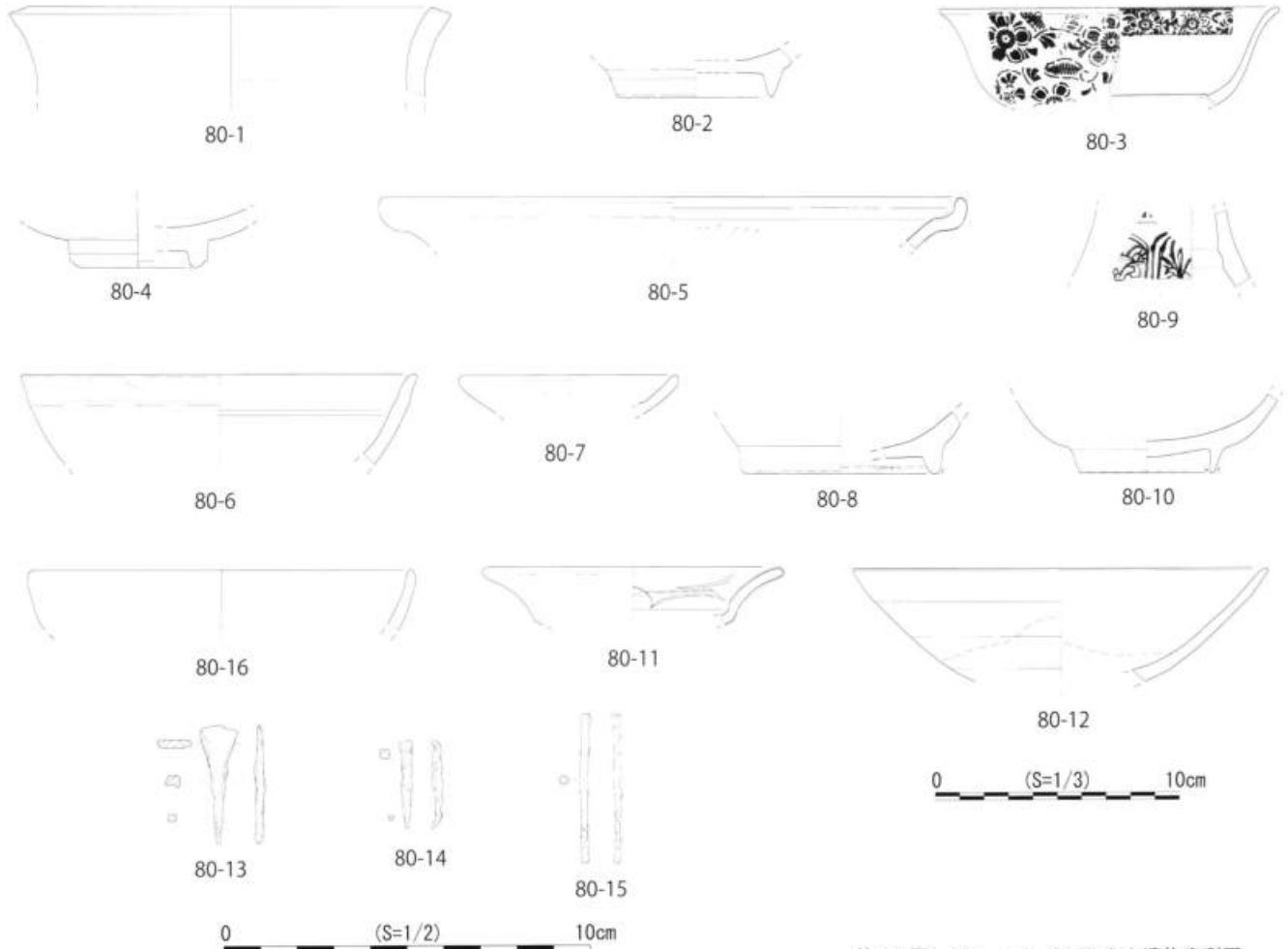
〔所見〕 O-P城壁内で検出された土坑状の遺構。城壁へとりついて構築されるその他のSX遺構とは異なり、雑ではあるが城壁の石材を使用して周囲を囲み、遺構内は黒色土と10~30cm程度の小礫を充填している。なお、城壁を損壊する恐れがあることから、石列の面石検出は行っていない。

遺構内についても保存修理事業の観点から掘削しなかったが、覆土の黒色土等から他のSXと同時期と考えられる。

〔遺構内出土遺物〕 (第80図)

**SX.1出土遺物** (第80図-1~3) 1はカムイヤキのB群壺の口縁部。2は沖縄産陶器、灰釉碗の底部。3は砥部焼。

**SX.2出土遺物** (第80図-4~9) 4は中国産粗製青磁碗の底部。5は龍泉窯系青磁盤口縁部資料。6は白磁碗で口縁直下に陰圏線を配すC1群(ピロースクI・閩清窯系)。7はD群(邵武窯系)の直口皿。8は瑠璃釉瓶、9はベトナム青花で頸部小片だが、面取された頸部に二重圏線の窓枠を配し枠内に「青海波文と唐草文が見られる。類品として主郭82図-7があり、ほぼ同形状の資料である。



第80図 SX1~4, S145出土遺物実測図



第 81 図 SX6 遺構詳細図

SX.3出土遺物（第80図－10） 10は白磁E群の碗。高台の造りは青花蓮子碗に似る。

SX.4出土遺物（第80図－11~15） 11は龍泉窯系青磁V類の腰折外反皿。白磁12はF群（今帰仁タイプ・浦口窯系）。13は鋏、14は釘、15は用途不明の棒状の鉄製品。近代以降の遺物か。

S145出土遺物（第80図－16） 16はC2群（ピロースクII・閩清窯系）。

[SM1出土遺物]（第82図） SM1はA-22・23において近現代に攪乱されたと考えられるマウンドで、SX3はSM1の上に構築されていた。グスク時代相当の包含層は確認されず、恐らく同時期に作られた可能性がある。SM1からは構築の際に攪乱されたグスク時代の遺物も数多く出土した。

1. 土器（第82図－1） 1はグスク時代相当の土器第3様式。

2. 青磁（第82図－2~8） 2は同安窯系碗で内面中位に櫛描文を施文する。3は外面に轆轤痕を明瞭に残す外反碗（龍泉窯系IV類）。4~6は同V類碗。5は内外底を蛇の目釉剥ぎ、6は見込みに十字に切り込みを入れる。7は泉州窯系と考えられる底部で高台内側の削りが雑で、胎土に黒色粒を含む。8は龍泉窯系の盤。

3. 白磁（第82図－9・10） 9はC2群（ピロースクII・閩清窯系）の底部で見込みが凹む。10はD群（邵武窯系）の直口皿。

4. 元青花（第82図－11） 文様等の特徴から元代の青花磁器と思われる。小片のため文様のモチーフや器種は不明。外郭VII区で出土した蓋とも類する（第26集）。

5. 焼締陶器（第82図－12） 中国産と思われる鉢で、微砂粒を混和材とする資料。口縁部に縄状の押圧刻文を施す。類品が主郭にある（金武2003,73p）

6. 黒釉陶器（第82図－13） 天目碗の底部資料。

7. タイ産陶磁（第82図－14・15） 14は半練土器蓋でおとし蓋のタイプ。15は褐釉小壺の底部か。

8. 本土産陶磁（第82図－16） 砥部焼の口縁部で、直口口縁の碗。内外面とも型紙による絵付けを施し、類品から推するに「福」の字を連続的に配する資料。近代の本土産磁器。

9. 沖縄産陶磁（第82図－17・18） 17・18は上焼の資料で白化粧後に透明釉を施釉する。これも主として近代の遺跡で多出する資料。

10. 石器（第82図－19~21） 19は置砥で欠損部以外の全面に砥面が残る。20は提砥で、上原分類（上原2010）では懸垂棒状型のA類。21は定型形の錘で、長短軸の中央を一条彫り込む。

11. 金属製品（第82図－22） 断面方形のいわゆる和釘タイプの鉄製短小の釘。

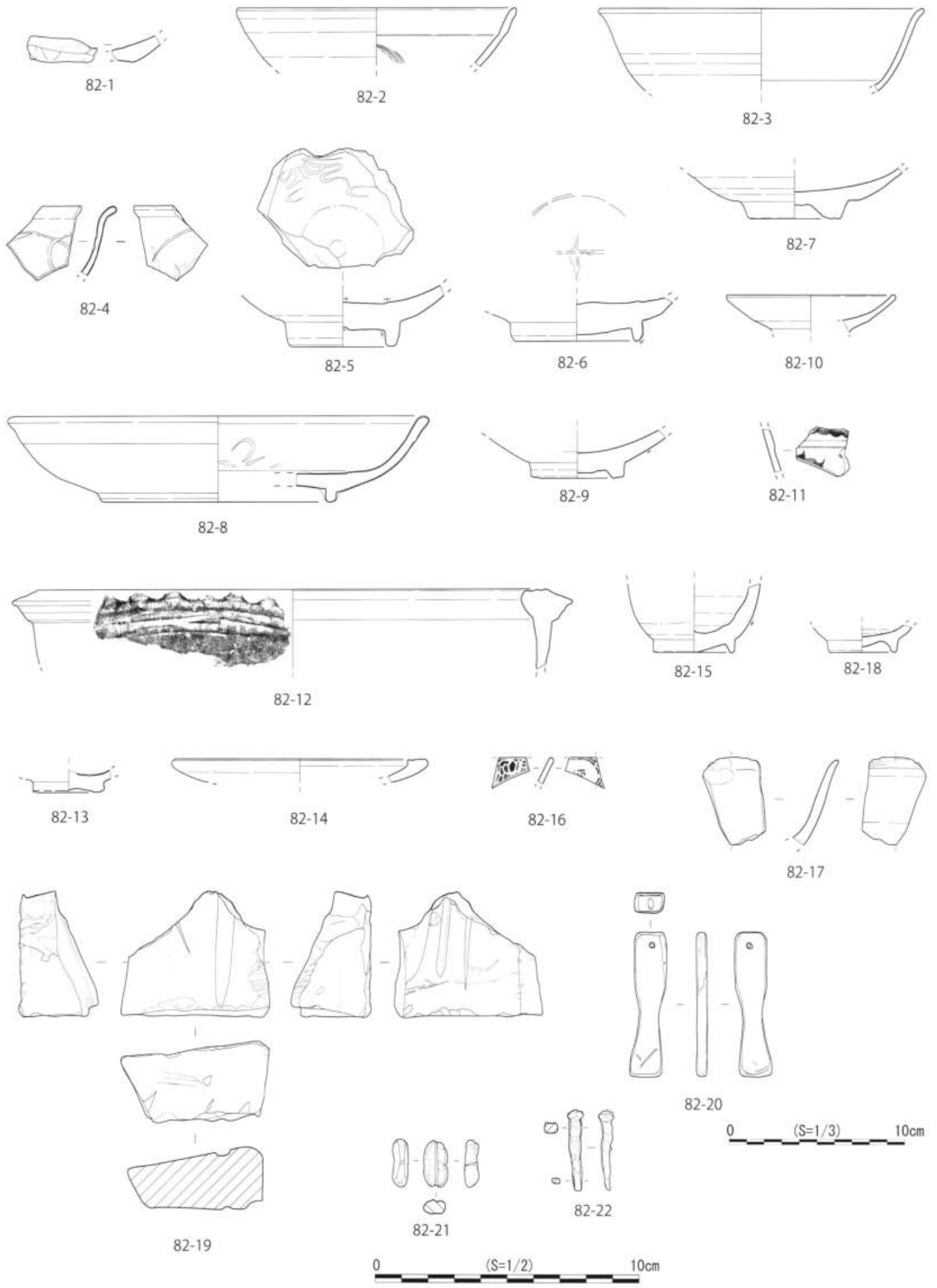
### 3. 包含層出土遺物

西区において出土する陶磁器の多くは14世紀から16世紀前半に収まるものが出土しているが、相対的に龍泉窯系青磁V類が多く出土しており、15世紀前後が主体的な年代の様相である。ただし、西区の冒頭でも述べたが、東側城壁に比して保存状況は総じて悪い。聞き取り等では近代以降の開発や石材として持ち出されたことが確認されており、先行トレンチ調査でも攪乱され、土壌の被覆も少なかった。しかし数多くの出土遺物が当該地区一帯で確認されていることから、II~V層の出土遺物を第83~84図、I層の出土遺物を第85~99図で一括して掲載し紹介する。

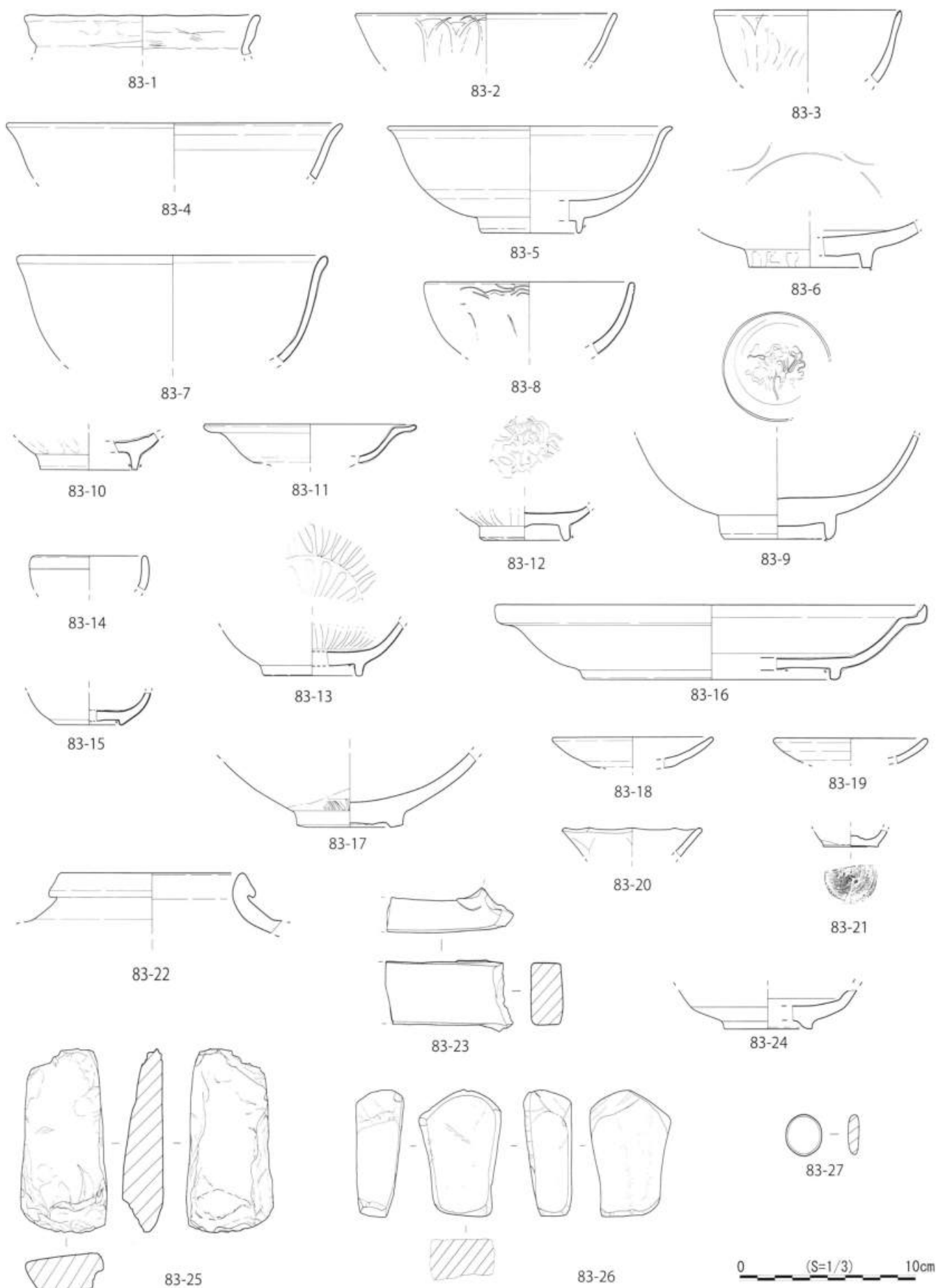
#### [II~V層出土遺物]

1. 土器（第83図－1） 83-1は壺形、84-42は鍋形の口縁部資料。ともにグスク時代に属する薄手の第3様式。

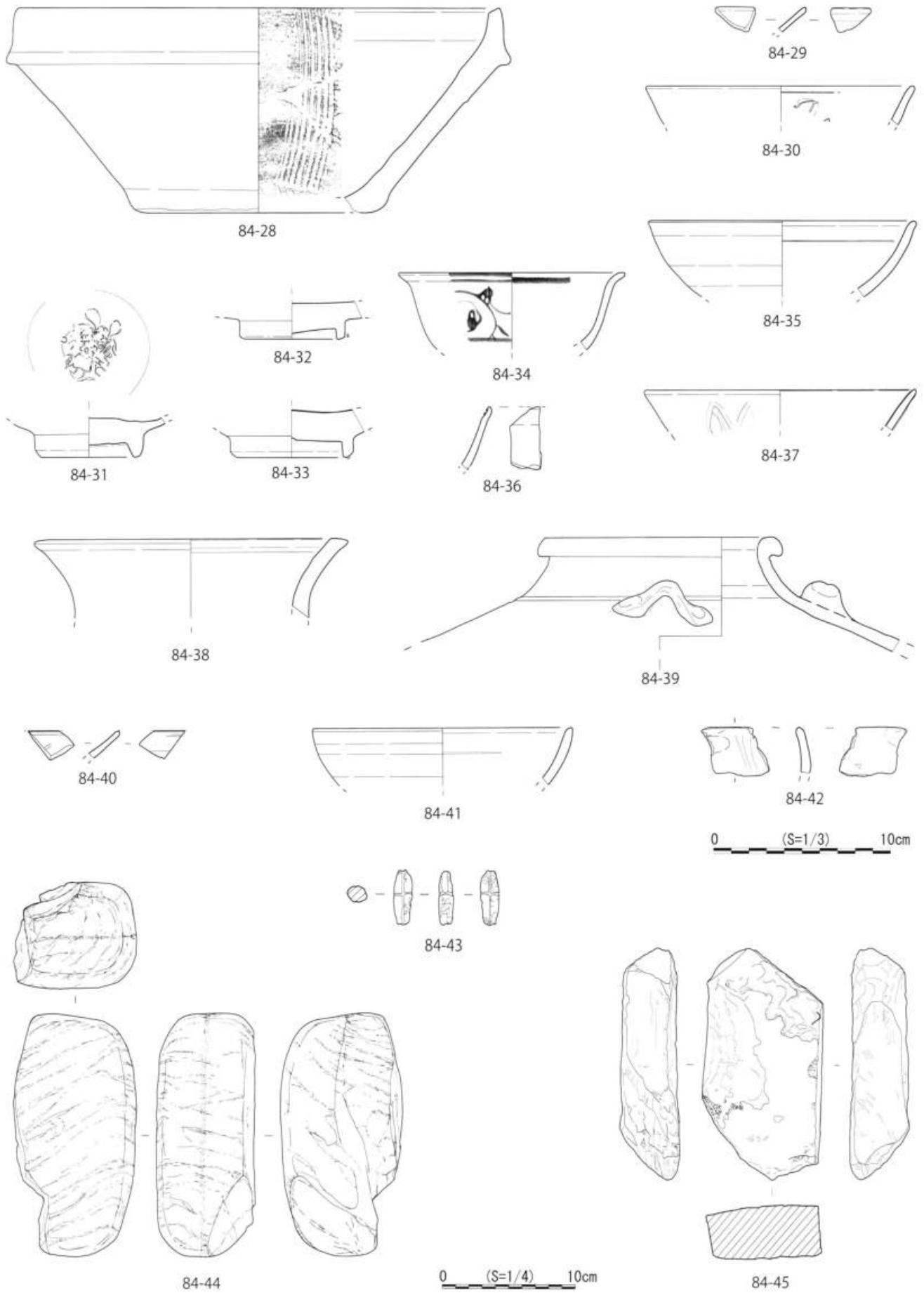
2. 青磁（第83図－2~16） 83-2・3は龍泉窯系III'類の口縁部資料。4~6は同IV類。4・5は無文外反碗、6は見込みが広く、角高台に高台内側を無釉とする。7・9は同V類で大振りの碗となる。8は同VII類の碗口縁部で、口縁部外面に波濤文を施す。10~13は皿の資料。10は同III'



第 82 図 SM1 出土遺物実測図



第83图 11・13次外郭出土遺物実測図(1)



第84図 11・13次外郭出土遺物実測図(2)

類の底部で高台下部のみ釉を掻き取る。全体に貫入が入る。11は同IV類の口折れ皿で、やや口唇を摘み上げる。12・13は同V類。14・15は碁笥底の杯で同一個体の可能性がある。16は罫縁の盤。外底を蛇の目釉剥ぎする。

3. 白磁（第83図－17～20） 17はC2群（ピロースクⅡ・閩清窯系）の底部で見込みが凹み、外底の削りは浅い。腰部下半は鉋削り痕が残る。18～20はD群（邵武窯系）の直口皿と八角杯。

4. 褐釉陶器（第83図－21・22） 21は小型の壺でいわゆる茶入れ。赤褐色の粘性のある精製された胎土で、混和材をほとんど含まず、底裏には糸切り痕が明瞭に残る。22は口縁部を断面三角形に肥厚させる資料で、頸部をほぼ持たないが第29集で分類したIV類に相当する。

5. カムイヤキ（第83図－23） 23はB群壺の把手と考えられる資料。

6. 本土産陶磁（第83図－24） 24は唐津腰折皿。

7. 石器（第83図－25～27） 25は刃部を欠損しているが石斧と考えられる資料。26は置砥で82－19と同様に欠損部以外の全面に砥面が残る。27は自然石を基石として使用したか。

8. 本土産陶磁（第84図－28） 第84図はⅡa層～V層から出土した遺物。28は備前播り鉢。摺り目が8本を確認できる。

9. 白磁（第84図－29、35、41） 29はA群（口禿げ・景德鎮系）、35・41はC1群（ピロースクⅡ・閩清窯系）で口縁部内面に圈線を一条巡らせる。

10. 青磁（第84図－30～33、36、37、40） 30は龍泉窯系Ⅰ類。内面に劃花文を描く。32は同IV類碗で角高台の底部となる。31・33は同V類底部で、33は外底まで施釉される。36は同VI類碗、37は同Ⅱ類碗でいわゆる鎬蓮弁文碗。40は櫛描文の先端が確認でき、同安窯系の資料と思われる。

11. 青花（第84図－34） 主郭分類Ⅱ類（B1群）と思われる。外面唐草文を配し口唇は褐色に発色する。類品は主郭に見る（63－6）。

12. カムイヤキ（第84図－38） B群壺の口縁部資料。

13. 褐釉陶器（第84図－39） 横耳となる大型の四耳壺（安座間分類3類）。直立的に立ち上がる頸部で、口縁部を肥厚させる。肩部には砂目が残る。

14. 土器（第84図－42） 42は鍋形の口縁部資料。グスク時代に属する薄手の第3様式。

15. 石器（第84図－43～45） 43は82－21と同様に定型形の錘で、長短軸の中央を一条彫り込む。44は敲石、45は置き砥石。

#### [Ⅰ層出土遺物]

1. 土器（第85図－1～6） グスク時代に属する土器で薄手の終末の器形である（第3様式）。1は壺、2は甕、3は鍋の口縁部資料。4は器種は不明だが、胎土等の特徴から胴小片で調整痕を外面に明瞭に残し、補修孔と見られる3mm程度の穴が穿たれる。5・6は壺の底部と思われ、5の底部外面には指頭圧痕。

2. カムイヤキ（第85図－7～12） 得られた資料全てが厚手となるB群で壺と考えられる。

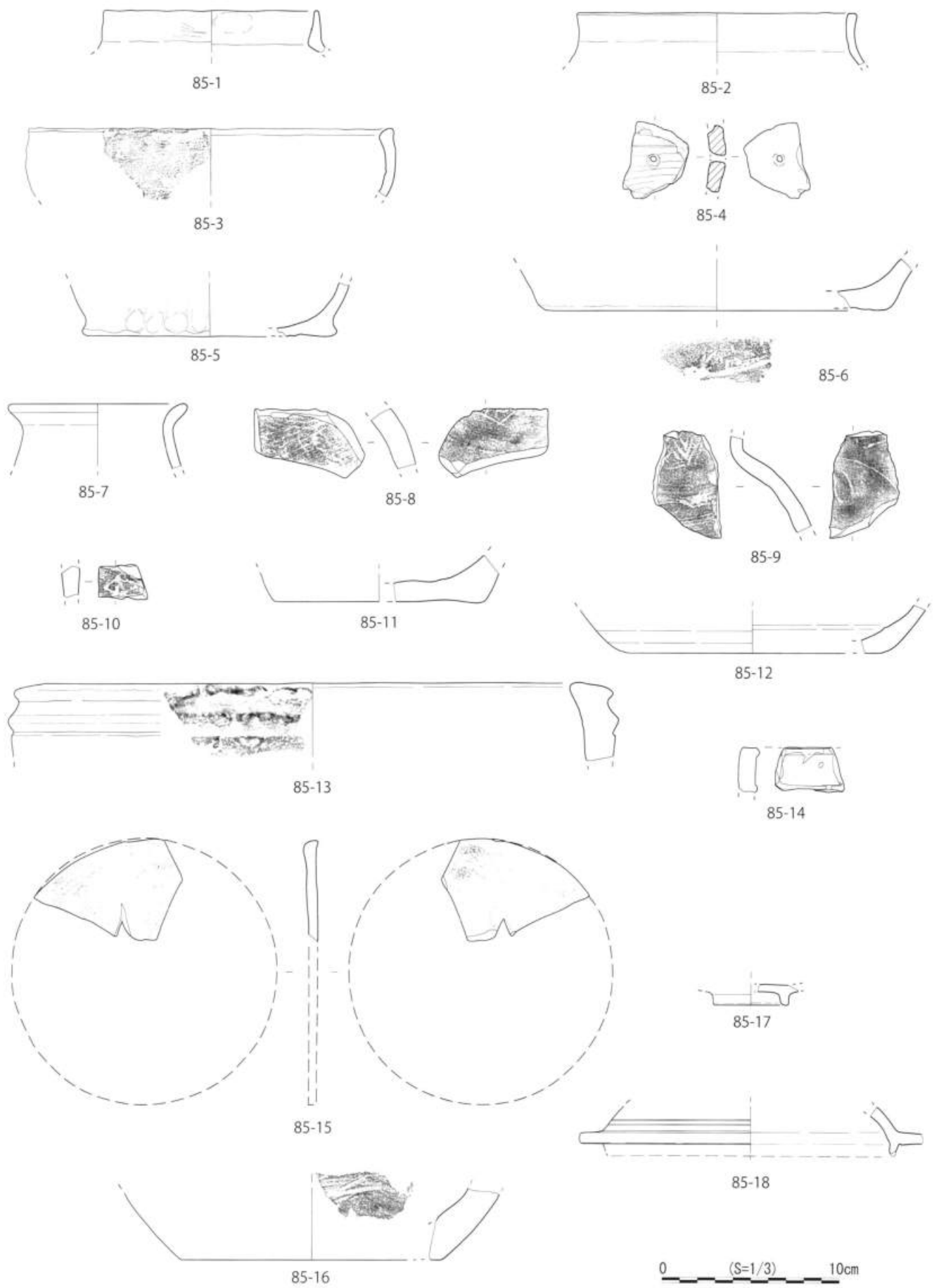
3. 瓦質土器（第85図－13～16） 14・16は本土産の瓦質土器。14は直立する口縁部で鉢か。13・15は沖縄産瓦質土器。13は植木鉢で波状の凸帯を口縁下に巡らす。円盤状製品である15は蓋と考えられ、京の内出土例がありタイ産の可能性もある（沖縄県教育委員会1998）。

4. 沖縄産陶磁（第86図－17～18） 17・18は初期の沖縄産陶器と思われる資料で、湧田窯跡、もしくは喜納窯跡の資料と酷似。17は碗で胎土には交胎状に筋模様が入る。18は今帰仁で初めて出土する資料で、壺の蓋と思われる。第96図－285は樽と目されるが今帰仁では類品がなく検討を要す。

5. 青磁（第86図－19～第90図－133）

碗（第86図～88図－81） 19は同安窯系の胴部資料で、内面に櫛描文を施す。20～22は龍泉





第85図 11・13次外郭出土遺物実測図(3)

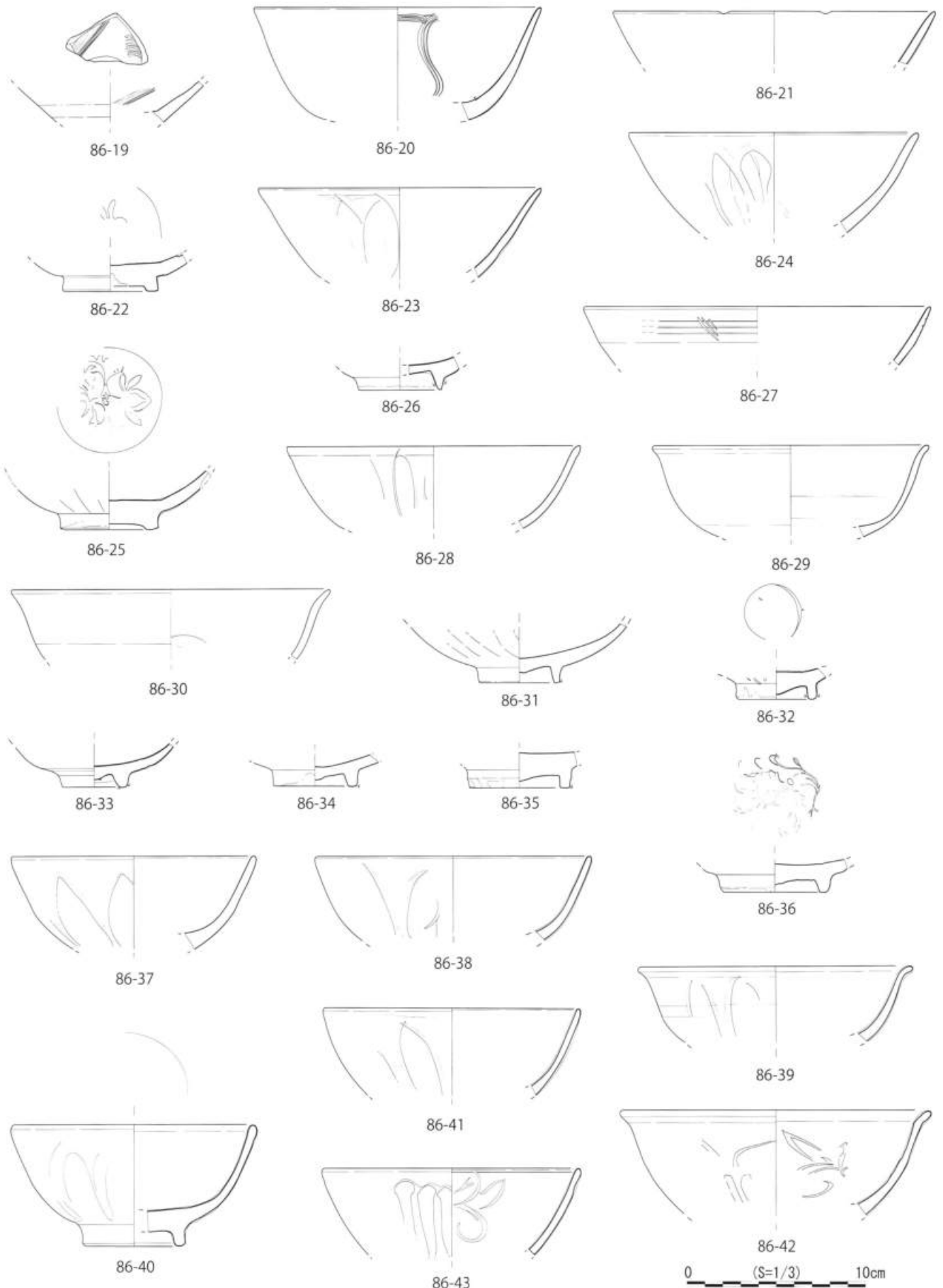
窯系 I 類。20の内面には劃花文が施される。21は口唇を刻み輪花とする。22は腰部過半が折れ曲がり I 類の特徴を表す。23~25は同 II 類で外面には鎬蓮弁文が施文される。25の見込みには印花文及び中央に「吉」字を押印。26・32は同 III 類の系統で粗雑な一群 (III 類)。27~31、33~36は同 IV 類。27は口縁外面に弦文を三条、28・31は蓮弁文、29は無文、30は内面に花文を施す。31は角高台、外底無釉、見込みを凹ませる。33・34は III 類の影響を強く受ける一群で見込みが凹む。38~65は同 V 類。37~41は無鎬蓮弁文、42は外面に変形蓮弁文、内面に草花文、43は外面に弁間の狭い蓮弁文、内面に草花文を施す。44~46はヘラ描きの雷文帯、47はスタンプの雷文帯を施す。48~52は無文直口・無文外反の口縁部資料。53~65は底部資料。66~77は同 VI 類で細蓮弁文が多数を占める。78は高台が三角形となる同 VII 類。79~81は龍泉窯系とは異なる粗製の資料で、今帰仁グスクで出土するこれらの一群は見込みを蛇の目釉剥ぎするものが増加し、特に79・80は轆轤痕を明瞭に残す直口口縁に幅広の高台をもつ漳州窯とされる資料。

皿 (第88図 - 82~89図 - 106) 88-82・83は同安窯系の資料で、櫛描文が見込みに描かれる。84は龍泉窯系 III 類の口折皿で、見込みに双魚文。85~87は同 IV 類の口折皿で底部は高台外側までの施釉。88~89-102は同 V 類。厚く施釉、口折皿はより緩やかとなる。91は双魚文と卍文が中央にスタンプされる。103~105は同 VI 類でより粗雑化した稜花皿の一群。106は漳州窯系の皿で碗の造りとよく似ている。

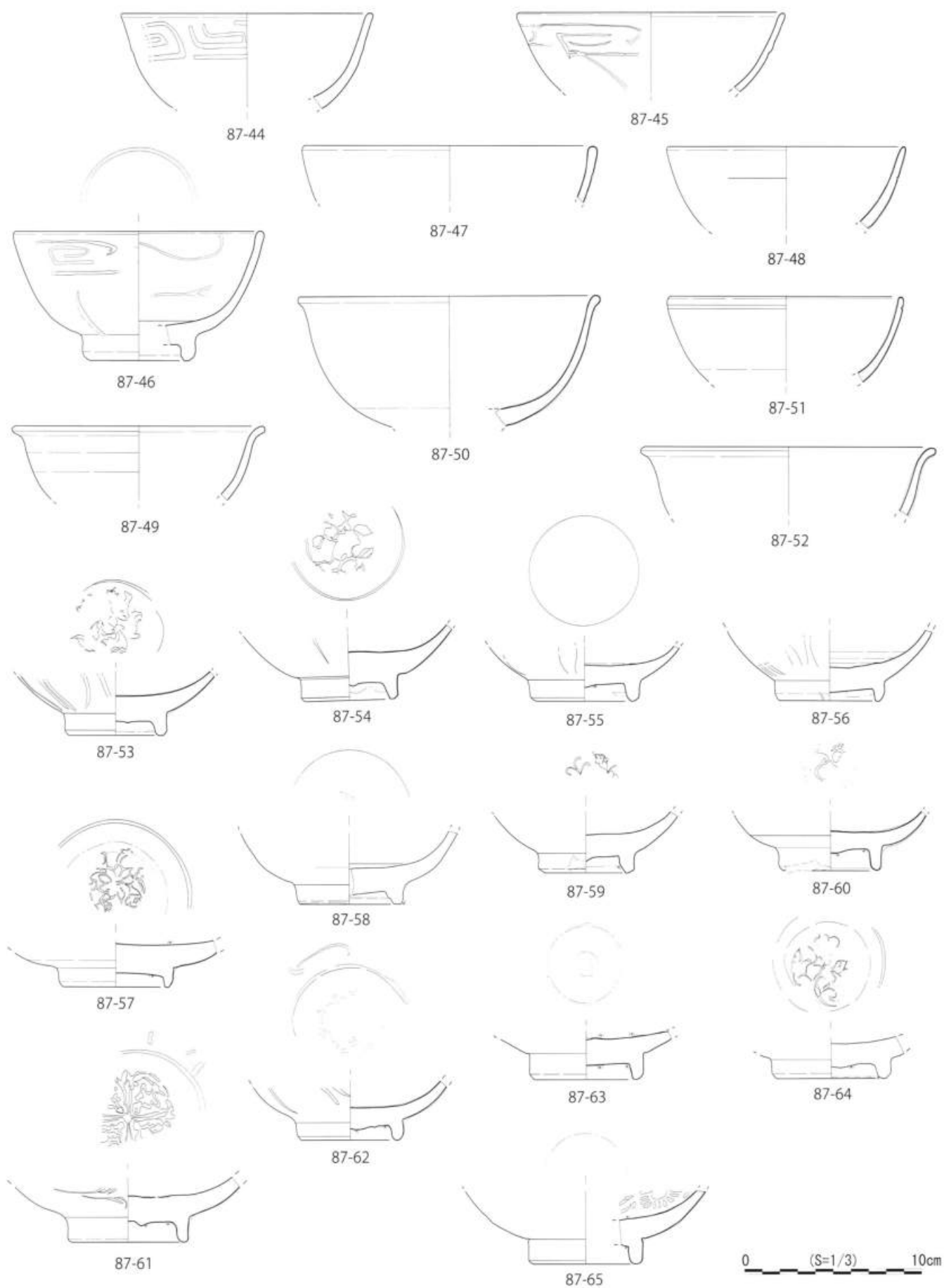
盤 (第89図 - 107~90図 - 118) 107は口唇が稜花、108~111は口縁が鐔縁、112・113は直口口縁となる資料。107・110~112で内面に幅広の蓮弁を、108は内面に線描きによる刻花文、109・113は櫛描きとなる。114~118は底部資料。116は見込みに印文が施され、格子状の地文様を背景に、見込みには判然文としないものの、鶴、麒麟、双魚文の崩れた文様配置と推する。

その他 (第90図119~133) 119~133はその他の器種。119は鉢、120は束口杯で口縁部が内側に屈曲しすぼまる。121は馬上杯。緩やかに外反し外面には雑に線彫りで雑に蓮弁を施す。122~125は口径の大きい杯で、122・123は内外面を蓮弁ヘラ彫りで描き、124・125は碁笥底で大振りの資料。126は瓶。127は口径8cmの香炉の資料で、内側の釉は胴部下半まで掛からない。128は香炉の脚。129は小壺の口縁部資料で口唇部には釉がかからない。130は器台の一部で葉状の窓部と思われる。131~133は酒会壺。131は身の中位部で牡丹唐草文、132は身の下半部で陽刻の蓮弁文、すぐ上位には界線。133は蓋。

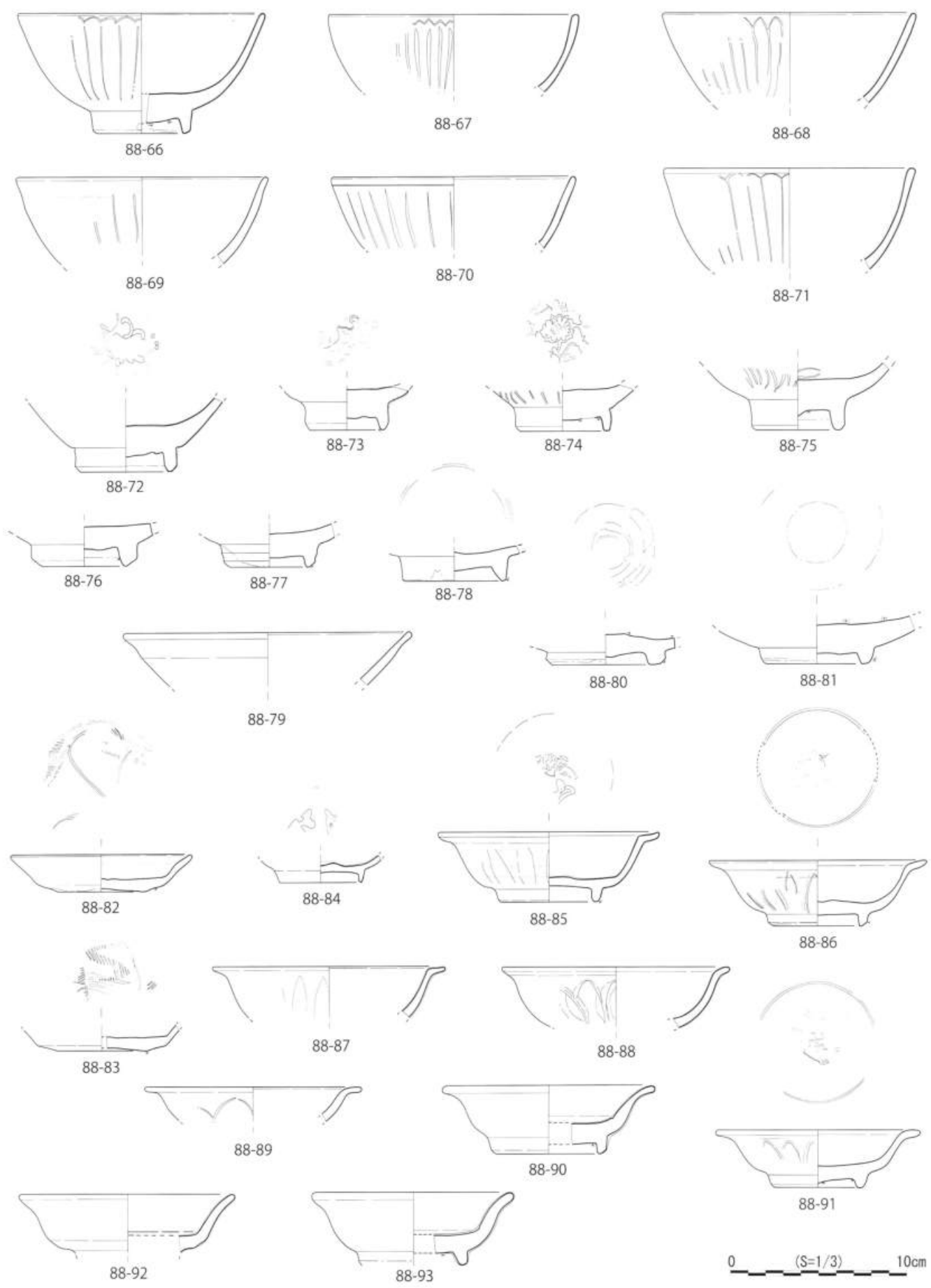
6. 白磁 (第90図 - 134~第92図 - 178) 134~154は碗。134は A 群 (口禿・景德鎮窯系) の碗で、口唇の釉を掻き取る。135は F 群 (今帰仁タイプ・浦口窯系) の底部資料。口縁内側を斜位に面取りし、外面は胴部中位までの施釉となる。136は C1 群 (ピロースク I・閩清窯系) で口縁部内面に圈線を一条巡らせる。137も C1 群で見込みに圈線状の凹みがある。138~141は C2 群 (ピロースク II・閩清窯系)。142~144は C3 群 (無文外反・閩清窯系)。144は口縁部の形状が漳州窯に酷似するが釉調等から C3 群とする。145は D' 群 (邵武窯系) か。146は D 群 (邵武窯系) で薄手の造りで口縁部を斜位に面取りする。外郭 VIII 区で出土例がある (第29集:90-16・17)。147~155は底部資料。147は玉縁口縁碗の底部資料で (大宰府分類 IV 類)、高台内削りはほとんどなく見込みは大きく凹む。148は A 群、149は F 群、150・151は C1 群、152は C2 群、153・154は C3 群、155は D' 群で見込みは露胎、外面も腰部下半を露胎とする。156~167は皿。155~157は A 群で平底の皿。159は C3 群の皿で、見込みには印花文。出土例はあまり多くない。160・161は D' 群。160は見込みに「満」字を押印する。碗のタイプが多いが皿は希と思われる。161はいわゆる灯明皿。口唇は口禿げとなる。162~165は D 群 (邵武窯系) で抉り高台皿。見込みには重ね焼きの目跡が残る。166・167は E 群 (景德鎮窯系) の皿。167は菊花皿となる。168~170は D 群の杯、171・172は E 群の杯。173は莆田庄辺窯の鉢 (G 群) で口縁部は受け口状となる。174~178は袋物の資料で瓶もしくは壺と思われる。



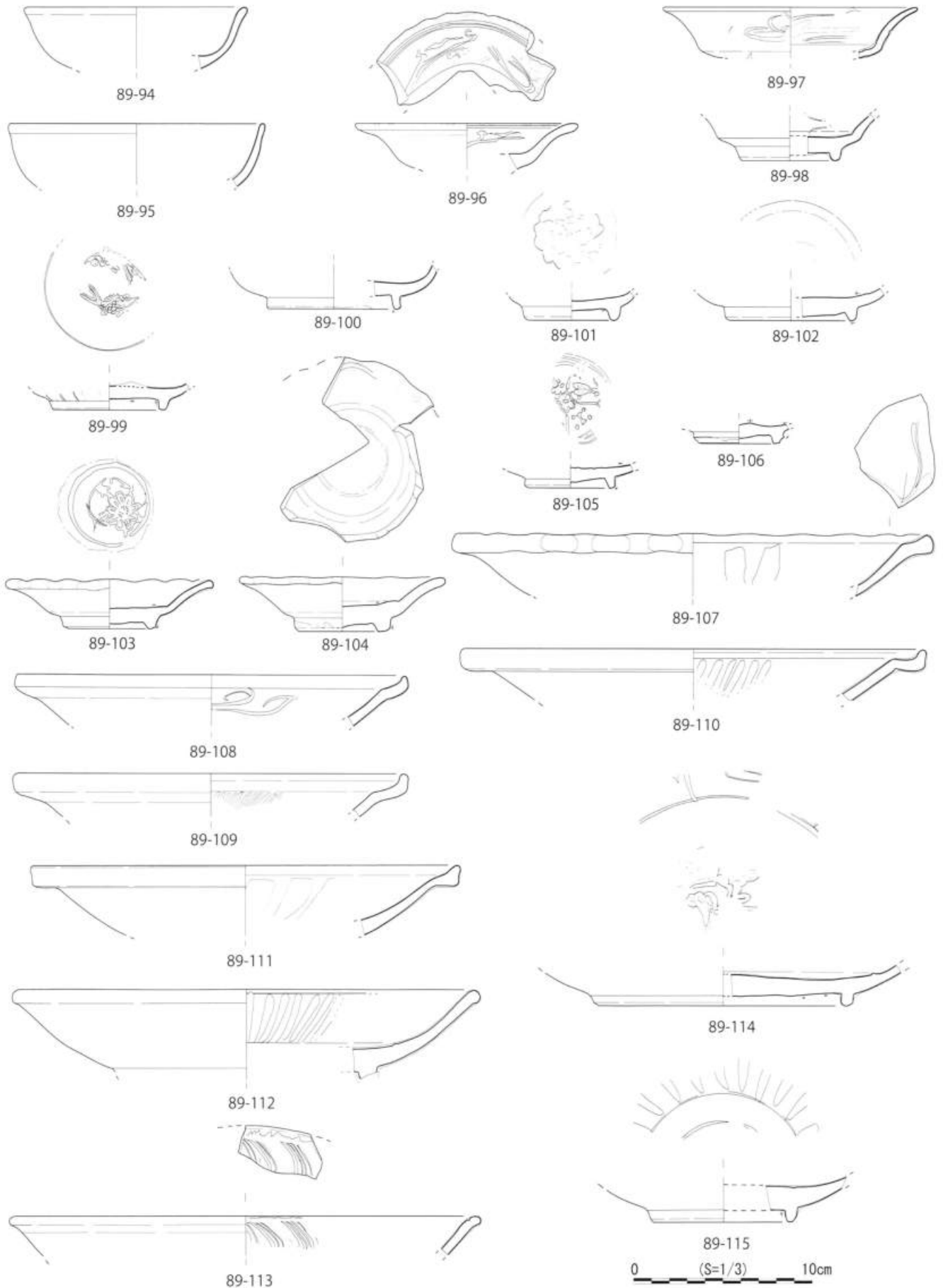
第 86 图 11・13 次外郭出土遺物実測図 (4)



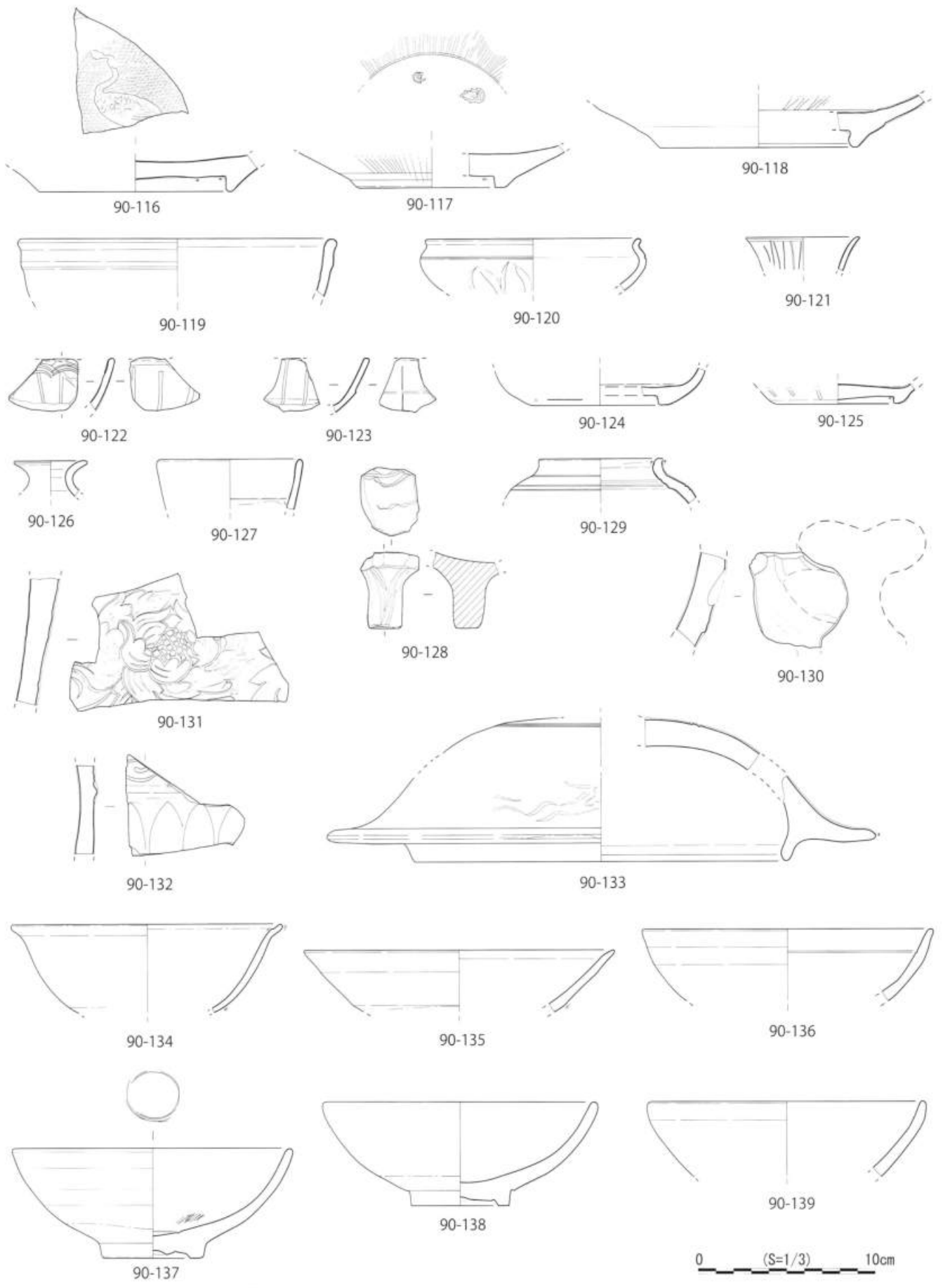
第 87 图 11・13 次外郭出土遺物実測図 (5)



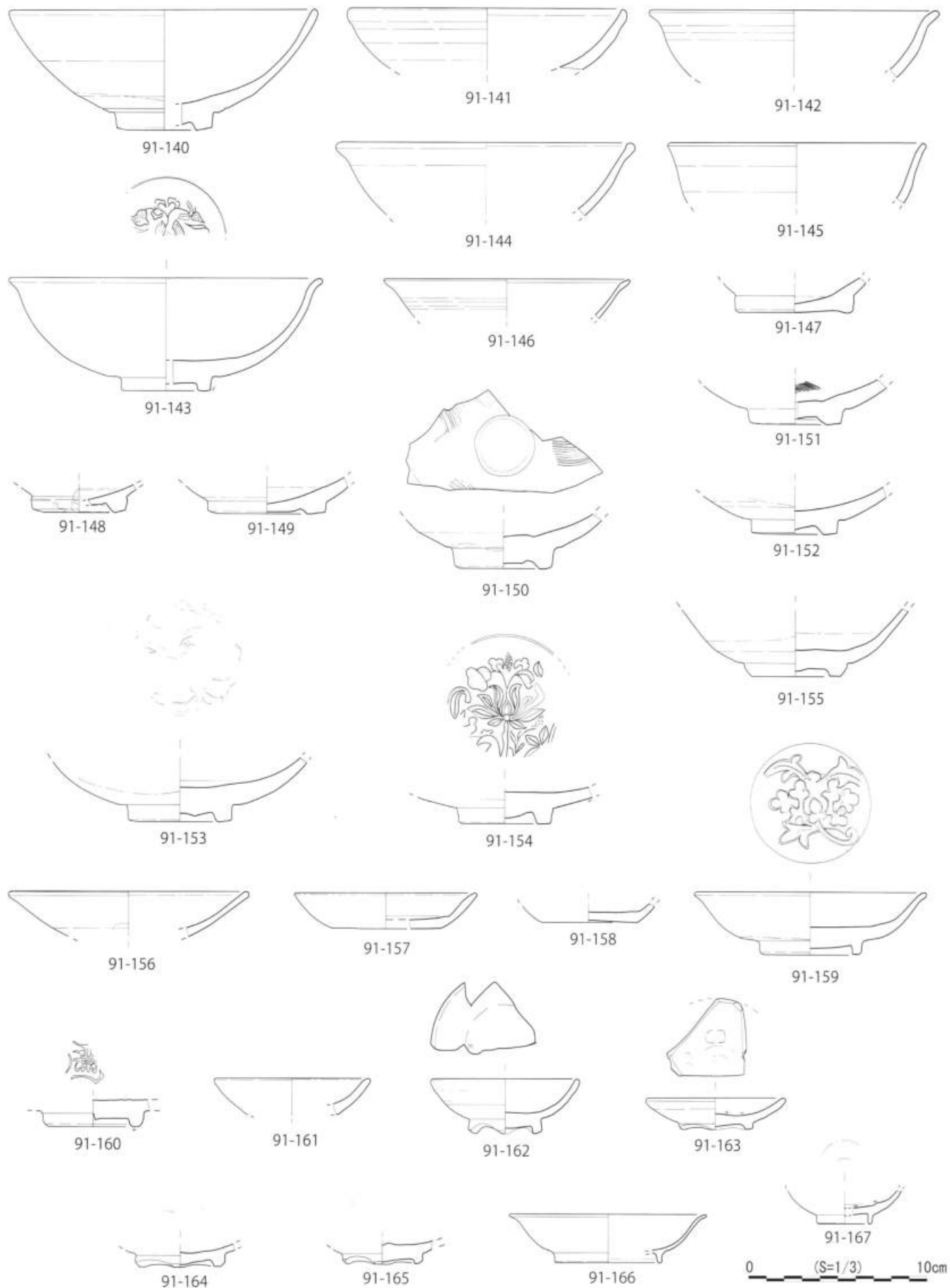
第 88 图 11・13 次外郭出土遺物実測図 (6)



第 89 图 11・13 次外郭出土遺物実測図 (7)



第90図 11・13次外郭出土遺物実測図(8)



第91図 11・13次外郭出土遺物実測図(9)



7. 青花（第92図 - 179~ 第93図 - 210） 179~182は主郭分類明青花碗Ⅱ類（小野分類B群・景德鎮窯）の資料。179は外面に宝草華唐草文と上下に界線、内面は口縁部に界線。180の外面上位に波濤文と界線、その下に牡丹唐草文、内面には如意頭文。181は略化した花唐草文（宝草華唐草か?）。182は見込みに「福」字。183~185は同Ⅲ類（小野分類C群・景德鎮窯）。183・184は今帰仁城跡で最も一般的に出土するタイプで、見込みは凹み、外面口縁部に波濤文、腰部に蕉葉文、見込みには蓮華文を施す。185は口縁部以下を欠損するが同様のタイプと思われる。186は同Ⅳ類（小野分類無し）。高台はハの字に開き見込みは蓮子となる。187・188は同Ⅴ類（小野分類D群・景德鎮窯）。見込みが平坦で広く腰が鋭角に折れ直線的に立ち上がるタイプ。腰部にはアラベスク文、口縁部に波濤文（187）、見込みには十字文を施す（188）。189・190は同Ⅵ類（小野分類E群・景德鎮窯）で饅頭心になるタイプ。189はダミ技法で草花文が描かれる。191・192は同Ⅶ類（上田A-Ⅳ・景德鎮窯）。193は素地が陶胎、釉に透明感がない資料で粗製の碗で福建・広東、具体的な窯名をあげると漳州窯の資料と思われる資料。見込みは蛇の目釉剥ぎされる。第93図 - 194~199は皿資料。194~196は同Ⅰ類（小野分類B群）の資料で、外面に唐草文、見込みには十字文（194）や玉取獅子文（196）を施す。197は同Ⅱ類（小野分類C群）で碁笥底となる。見込みには草花文。198・199は同Ⅲ類（小野分類E群）か。199の見込みにはダミ技法で文様が描かれる。200~204は杯。200は粗製の小杯。201・202は同Ⅲ類の小杯か。203は同Ⅰ類の筒型となる。外面には隆帯による圏線で区画し隆帯下部には如意頭文を配し、見込みには草花文を施す。204は同Ⅱ類で外面高台際から内底は露胎。203と同様に如意頭文を施すが呉須の発色は悪い。205は粗製の杯で呉須の発色が悪く、特徴的な高台内側の削りとなる。206・209は小型の壺で底部は無釉（206）となる。207・208は瓶で、腰部に如意頭文（207）、頸部には蕉葉文を描く（208）。210は壺の蓋で、草花文が描かれる。

8. 元青花（第93図 - 211~214） 酒会壺、もしくは梅瓶と思われる胴部。211は牡丹唐草文、213・214は梅瓶の肩部と考えられ、文様は鳳凰の羽部と思われる。類例としてはインドネシア・トローラン遺跡出土の青花牡丹唐草文梅瓶がある（亀井2010/p144）。

9. 黒釉（第93図 - 215~217） 福建省南平茶洋窯で作られたと考えられる茶器。舌状の口縁（215）、高台脇を平坦に削り、高台内側の削りが殆ど無い（216・217）。

10. 翡翠釉（第93図 - 218~222） 218・219は皿。220は酒会壺の口縁部。221・222は梅瓶で釉の剥落が著しいが口縁部に蕉葉文（221）、胴部に唐草文が線彫りで描かれる（222）。

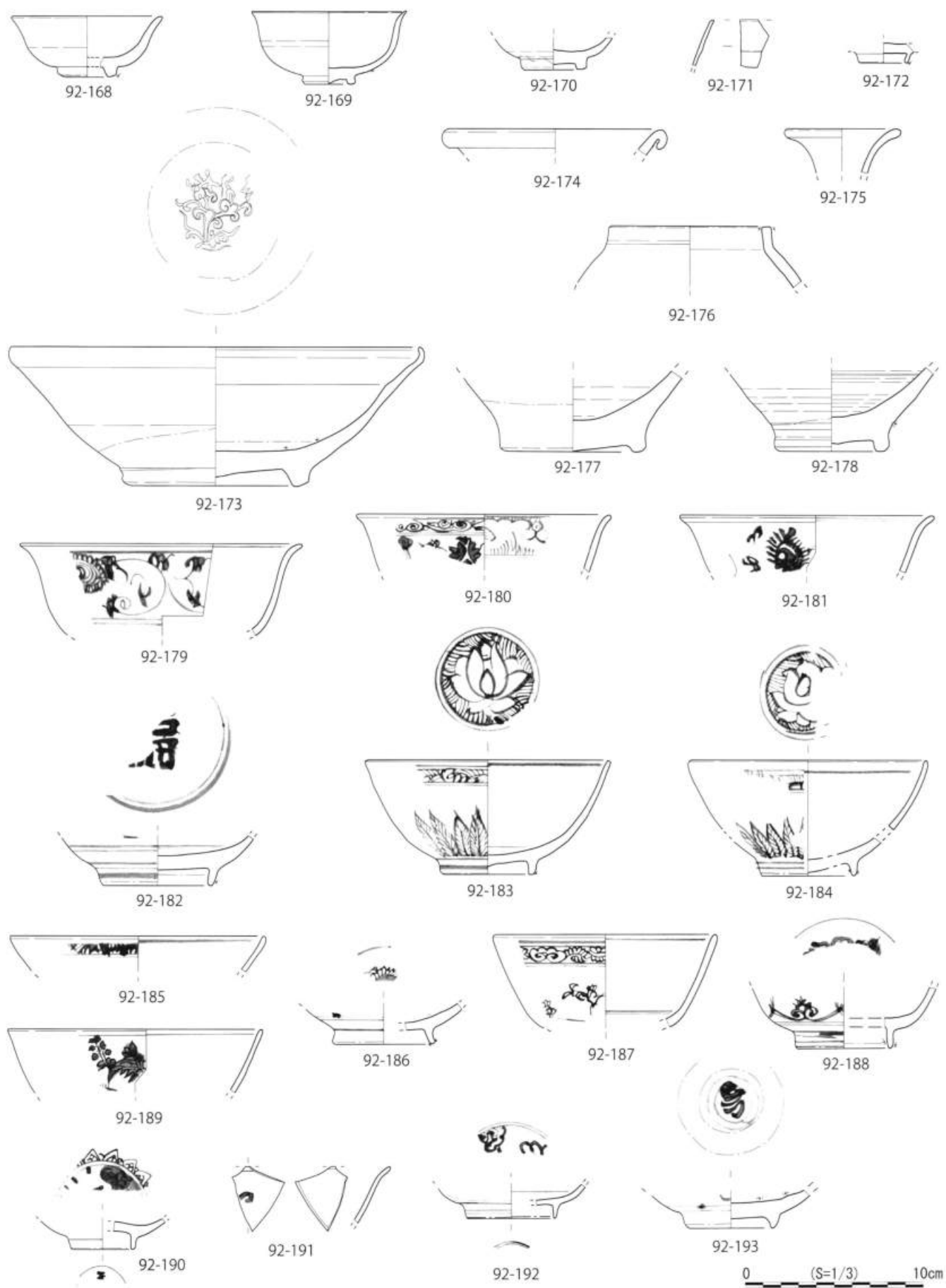
11. 瑠璃釉（第93図 - 223~226） 224・225は水注もしくは瓶と考えられる胴部資料で、先に確認トレンチ⑦より出土した第52図 - 19は同一個体の可能性がある。水注胴部破片で、窓枠と推定される文様が釉を掻き落として磁胎を盛りあげ、赤みを帯びる隆線にて表現される。円形付文と尾を引いた雲のような線文が描かれているが、龍珠と雲文であれば龍文かと推すが小片のため主文様は不明。今帰仁城跡でも同様の資料は初例となる。226は瓶の底部資料。

12. 三彩（第93図 - 227・228） 227は水注もしくは瓶か。蕉葉文が線彫りで描かれる。228は小破片につき詳細不明。

13. 色絵（第93図 - 229） 釉が禿げおちているが、唐草文?の痕跡が若干残る。

14. 本土産陶磁（第93図 - 230~233） 230は備前の播鉢。播目が8本確認できる。231は肥前陶磁、232は瀬戸美濃の皿か。233は唐津焼灰釉の腰折皿。

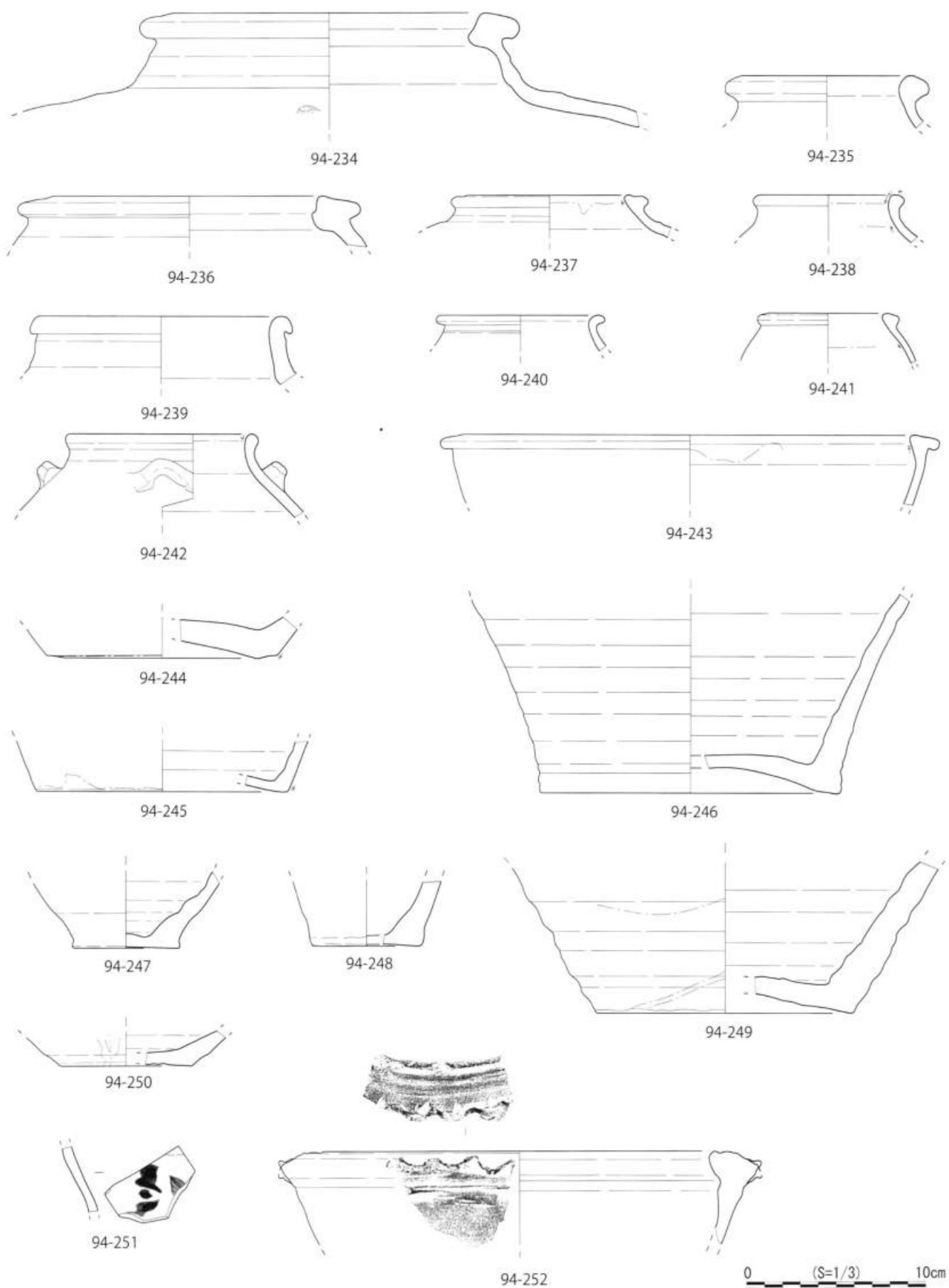
15. 褐釉陶器（第94図 - 234~252） 234・236・246は口縁部の断面が方形になる大型の壺で、安座間分類5類に相当する。235は玉縁状に肥厚した口縁の小型の壺、237・238・240・241も小型の壺である。239は口縁を外側に折り頸部を屈曲させ直上する資料で、新里村遺跡などで出土例のある多耳壺で、古式の資料と目される。242は四耳壺で今帰仁でも比較的多く出土する資料類品としては志慶真門郭出土資料をあげる（今I33図 - 1）。243は口縁を平坦とする鉢で、250は鉢の底と推測され胎土等の特徴も近似するので同一個体ないしは、同系統の製品と考える。



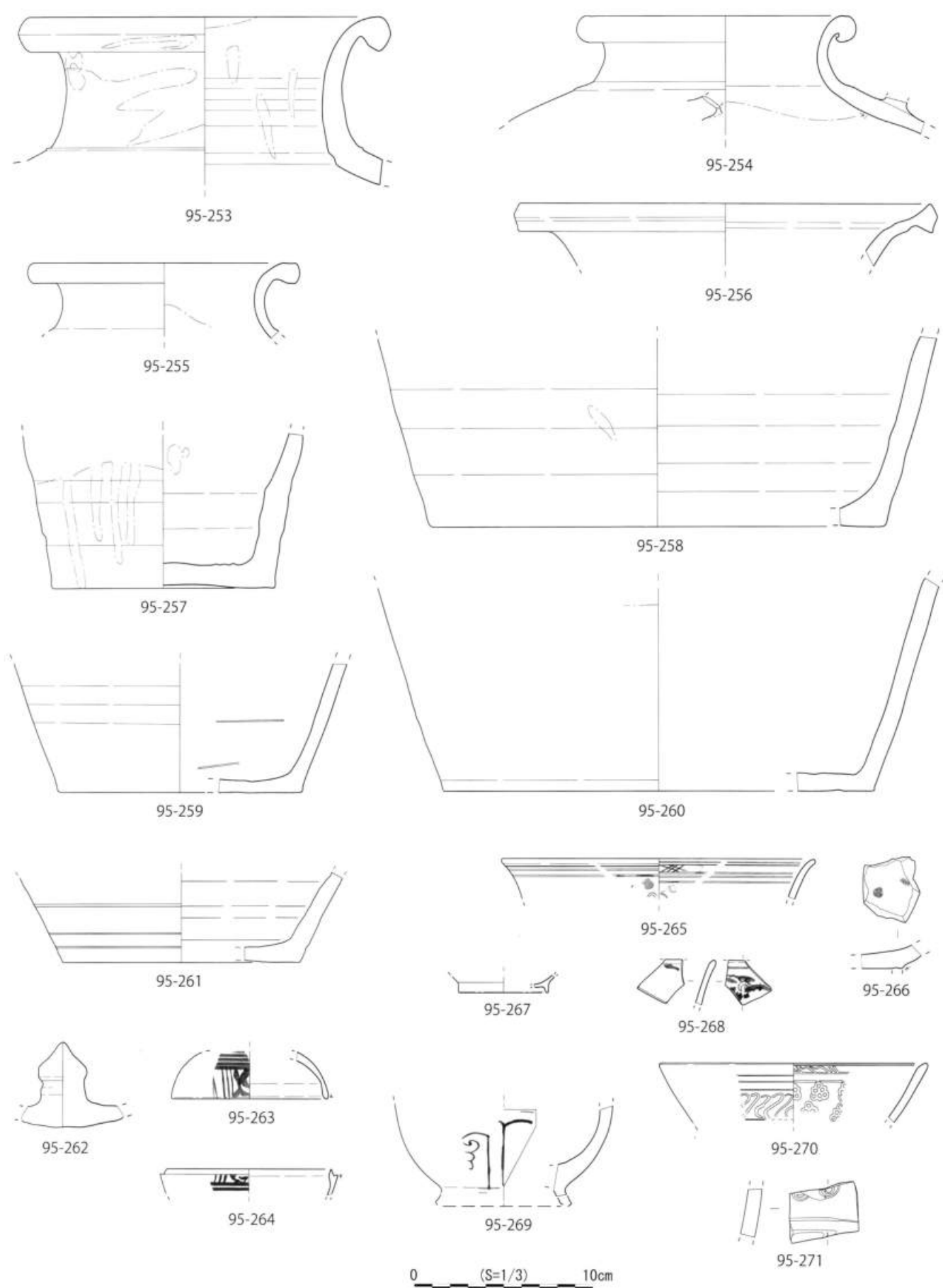
第92图 11·13次外郭出土遺物実測図(10)



第93図 11・13次外郭出土遺物実測図(11)



第94图 11・13次外郭出土遺物実測図(12)



第95図 11・13次外郭出土遺物実測図(13)

類品として今周 III41図 - 15を挙げておく。244はやや軟質白色の陶胎で底部が上げ底状の底部で縁部を平滑にする特徴的な資料、いわゆるルソン壺などにも類品を見る事が出来る。245は首里城京の内での多くの類品がある胴部に文様を描く多耳壺で安座間分類1類。247・248は傘状の口縁に朱泥の胎土で宜興窯産と考えられる。249は大型の壺で粗い砂を多く含む厚手の底部資料。251はにぶい橙色の地色に鉄絵で絵付けする。252は焼締陶器で主郭に類品（金武2003）をみることのできる鉢、復元径はこれまでの類品に比べるとやや小さいので本来はもう少し大きな資料と目される。

**16. タイ陶磁**（第95図 - 253~264） 253~255はメナムノイ窯系の褐釉陶器大型壺。玉縁状に肥厚し大きく外反する。256はシーサッチャナライ窯系の褐釉陶器大型壺。口縁部はラッパ状に大きく外反する。257・258・261は胎土からメナムノイ窯系の底部。259・260はシーサッチャナライの底部。262は半練土器の蓋で宝珠型の摘み部。263・264は鉄絵合子で蓋受け口となる口縁部は露胎となる（264）。

**17. ベトナム陶磁**（第95図 - 265~269） 265・266は端反りの色絵碗。内外面上位に赤色の顔料で圏線を配し、緑で葉を表現している。267は小破片のため判然としないが白磁の底部か。268・269は染付。268は胎土・釉調から染付とした。269の瓶は変形蓮弁文が描かれ、外郭 VII区で出土した108-161と接合できる（第26集・p111）。

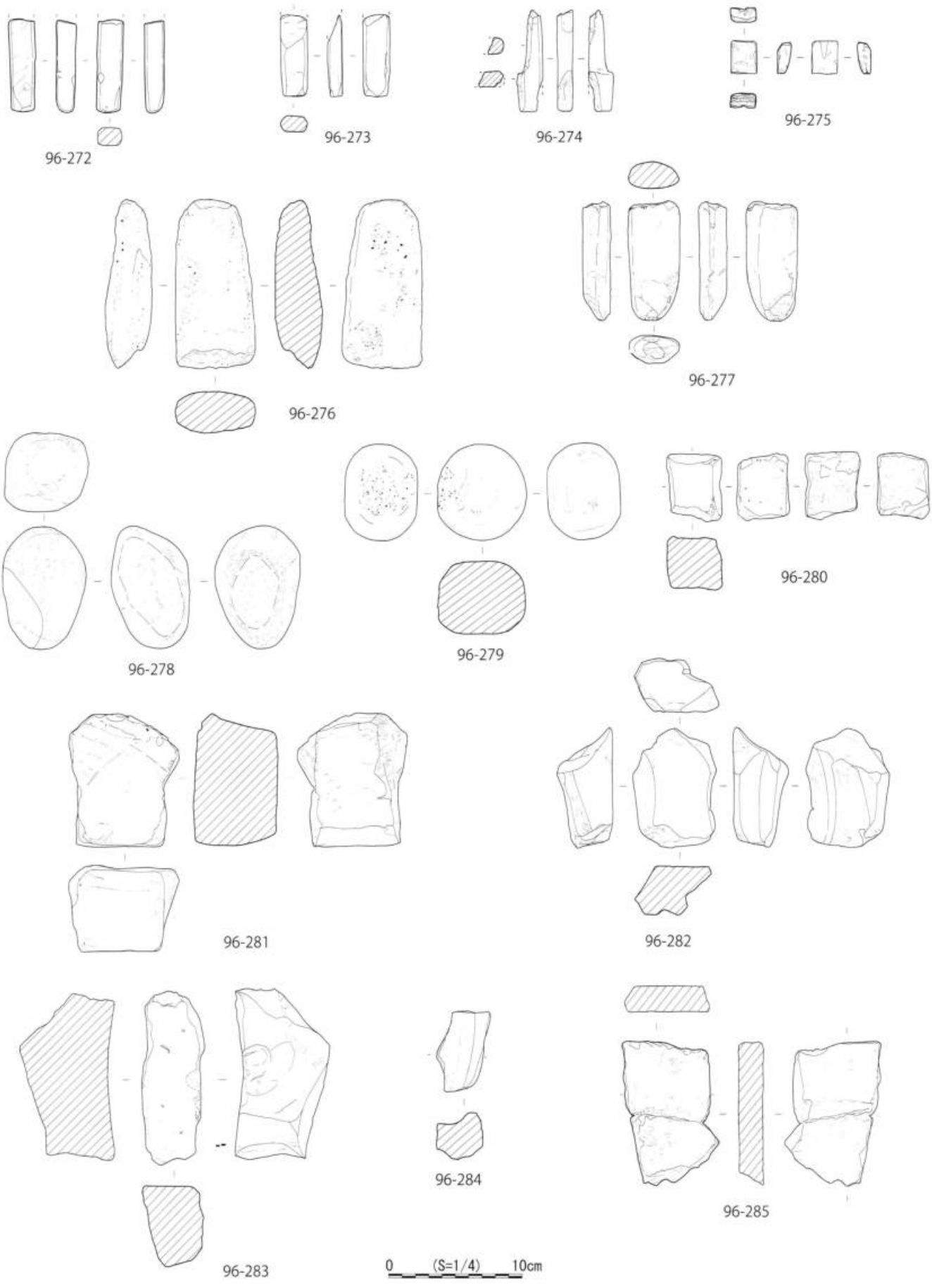
**18. 高麗陶磁**（第95図 - 270・271） 270は直線的に立ち上がる碗。271は梅瓶胴部。

**19. 石器**（第96図 - 272~285） 272~275、280~283は砥石である。砥石は上原静氏の分類があるのでこれを用いる（上原2010）。272~275は懸垂棒札型 A 類。275は全面に砥面がある。280~283は置砥。280は平面が四角形となる（規格定形板柱型 C 類）。281・283は打割礫型 A 類。282は不定形となる自然礫型 C 類。277は一部砥面が確認できるが自然礫の可能性もあり。276は撥型の石斧で両刃であったと思われるが片面が欠損する。278・279は自然礫を用いた敲打具。284は大部分を欠損しているが弧状に擦られた痕が残ることから臼の可能性もある。

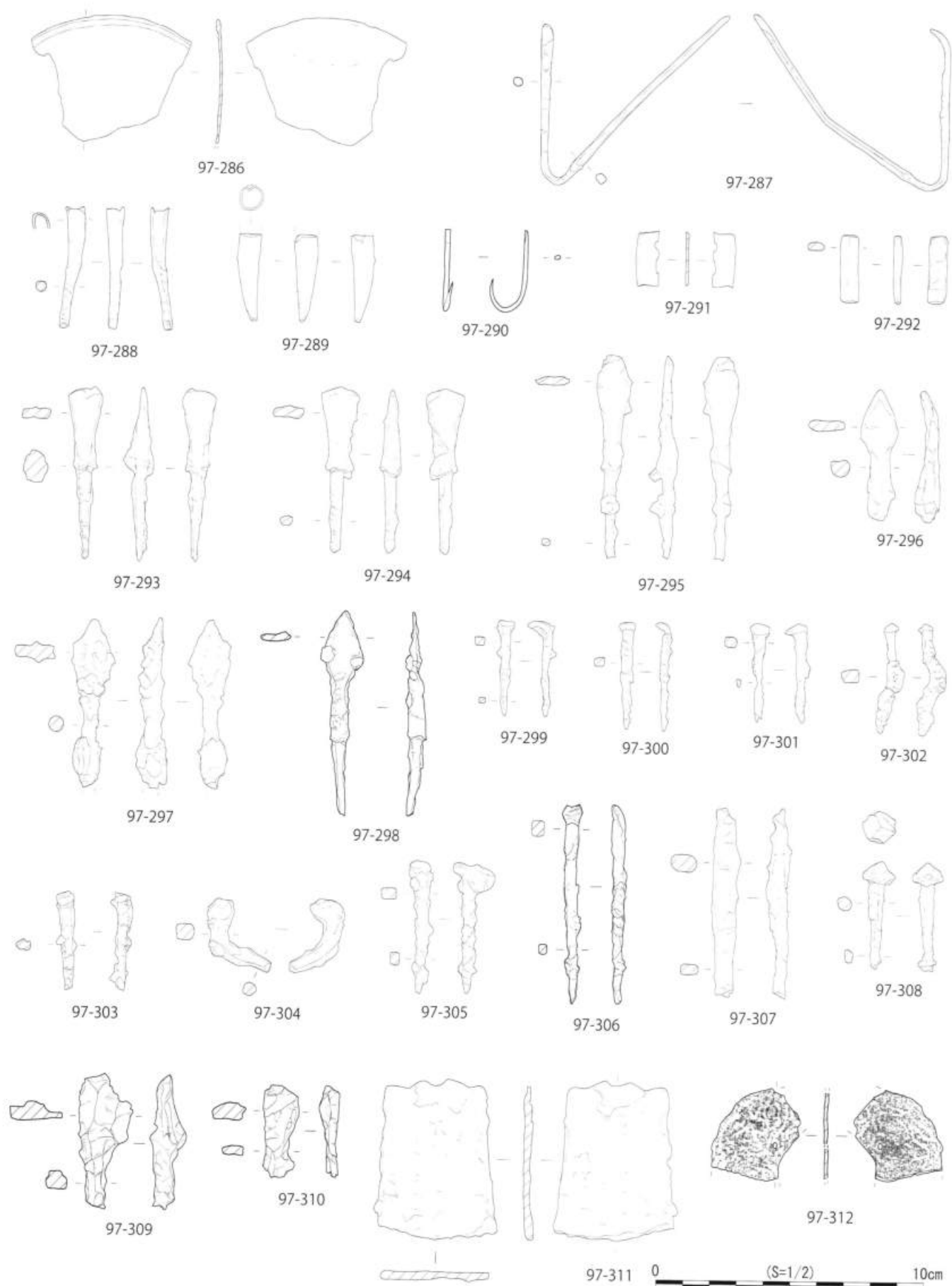
**20. 金属製品**（第97図 - 286~312） 286~292は青銅製品。286は鏡。287は簪。主郭において類例がある（第14集第100図）。288は覆輪縁金具か。289は弾頭形をした製品。外郭 VIII区でも同様の遺物が出土している（106-59・60）。290は釣針。返しはついていない。291・292は板状製品。293~312は鉄製品。293~298は鎌で293・294は先端が平坦なバチ型、295~298は先端が尖る龍舌型の資料。299~308は釘。いずれも断面正方形、頭部を折りたたむ和釘。308は頭部が円形となる釘。309・310は不明製品。311はバチ状となる板状の製品、312は小さく孔が穿たれ、両面に複雑な文様が刻印されているが、ともに詳細不明の資料。

**21. 銭貨**（第98図 - 313~331） 313~316は開元通寶（唐・621年）317~318は乾元重寶（唐・758年）。319は元豊通寶（北宋・1078年）。320は元祐通寶（北宋・1086年）。321は寛永通寶（新寛永）。322は文字がつぶれていて銭種不明、323は欠損しているが「□元□寶」が残存していることから開元通寶の可能性もある。324は欠損が著しく判読不能。325~327は銭名不明で無文銭とも考えられる。328~331は無文銭。今帰仁グスクが盛期の時期である洪武銭・永楽銭は得られていない。

**22. 玉**（第99図 - 332~344） 出土した玉は主郭分類を参考に形態的特徴から I類勾玉、II類管玉、III類丸玉の中において、III類の丸玉のみが得られた。この中で大きさから b2種と c 種に分類。332~341は丸玉 b2種、342~344は丸玉 c 種となっている。

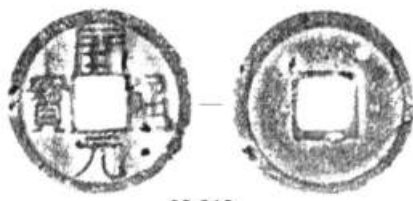


第96図 11・13次外郭出土遺物実測図(14)

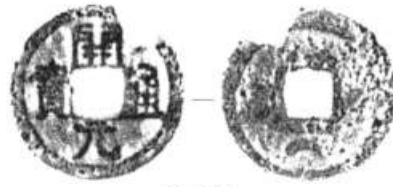


第 97 图 11·13 次外郭出土遺物実測図 (15)

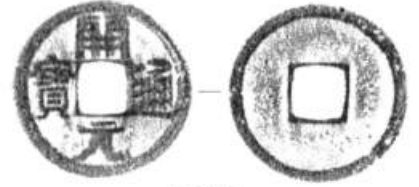




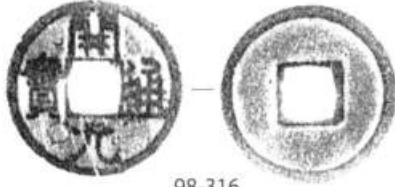
98-313



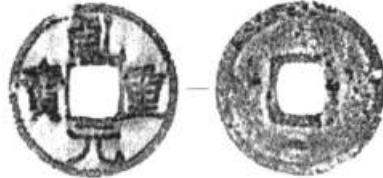
98-314



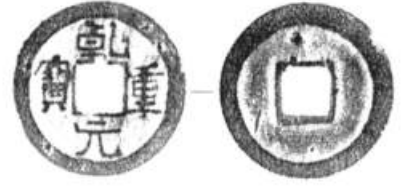
98-315



98-316



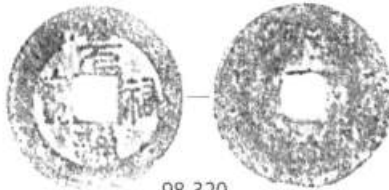
98-317



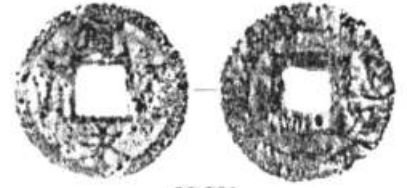
98-318



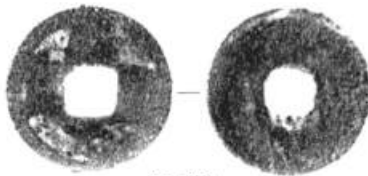
98-319



98-320



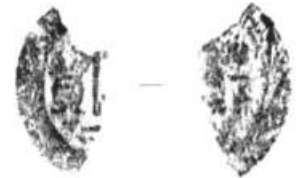
98-321



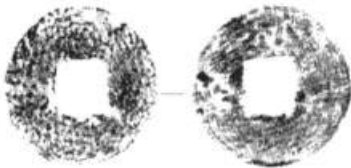
98-322



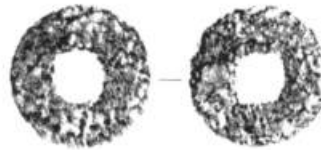
98-323



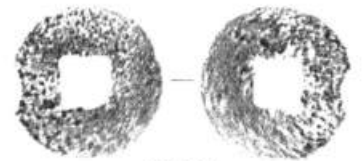
98-324



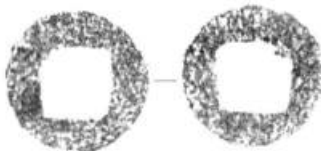
98-325



98-326



98-327



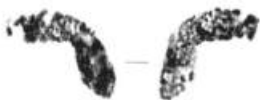
98-328



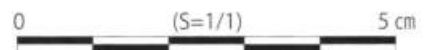
98-329



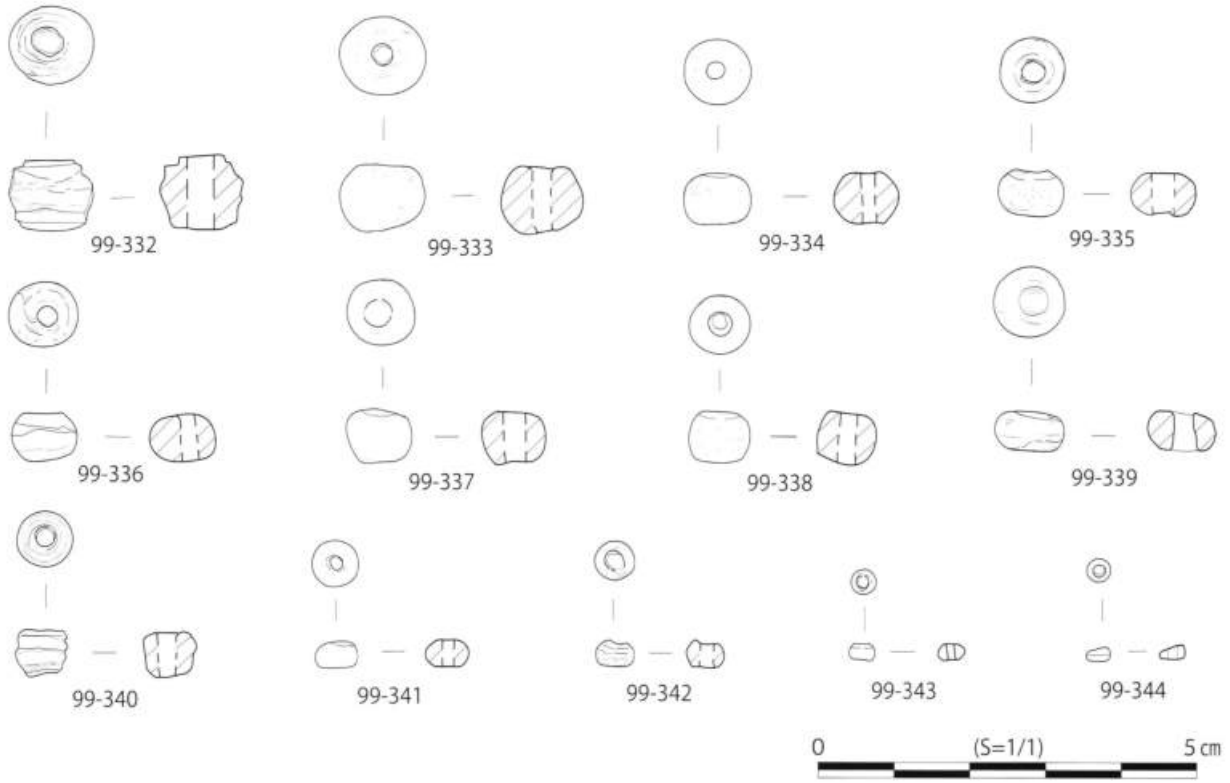
98-330



98-331



第98图 11·13次外郭出土遗物实测图(16)



第 99 図 11・13 次外郭出土遺物実測図 (17)





















## 第4節 中区（外郭12次調査）

西側城壁と東側城壁の繋がりを確認するためにされた調査である。県道敷下に旧来の城壁の根石等が埋没している可能性があったことから、平成21年度事業において県道115号線の道路（延長45m、227m<sup>2</sup>）占有して、北部土木事務所より許可をとり、発掘調査を行った（平成21年10月1日～平成22年3月31日）。アスファルトと舗装の路盤材を撤去し、その地下から今帰仁城跡の石垣や門跡などの確認をすることを目的とした。

### 1. 層序

遺跡全体を覆う堆積層は、現代の表土・旧耕作土のI層で、この下にグスク時代の遺物包含層が堆積する。また、グスク時代の包含層下に堆積する層が造成層による堆積層、岩盤の露頭、遺物を全く含まない自然堆積層の地山の幾つかのパターンが認められる。

I層：【にぶい黄褐色土層】腐食（Ia層）・路盤材コーラル層（Ib層）。調査地（県道下）全域が覆われる。ガラスビンや近現代の陶磁器等を包蔵する。道跡1が確認された（Ic層）。

II層：【褐色土層】近世～近現代の層。道跡2の遺構内覆土で礫を多く含む。

III層：【褐色土層】当該遺跡の形成期の近世～グスク時代の遺物包含層。

IV層：【暗褐色土層】遺跡全体を覆う層。今帰仁城跡で検出される遺構のほとんどがこの時期のもので、15世紀～17世紀初頭の遺物が得られている。石列に被る。

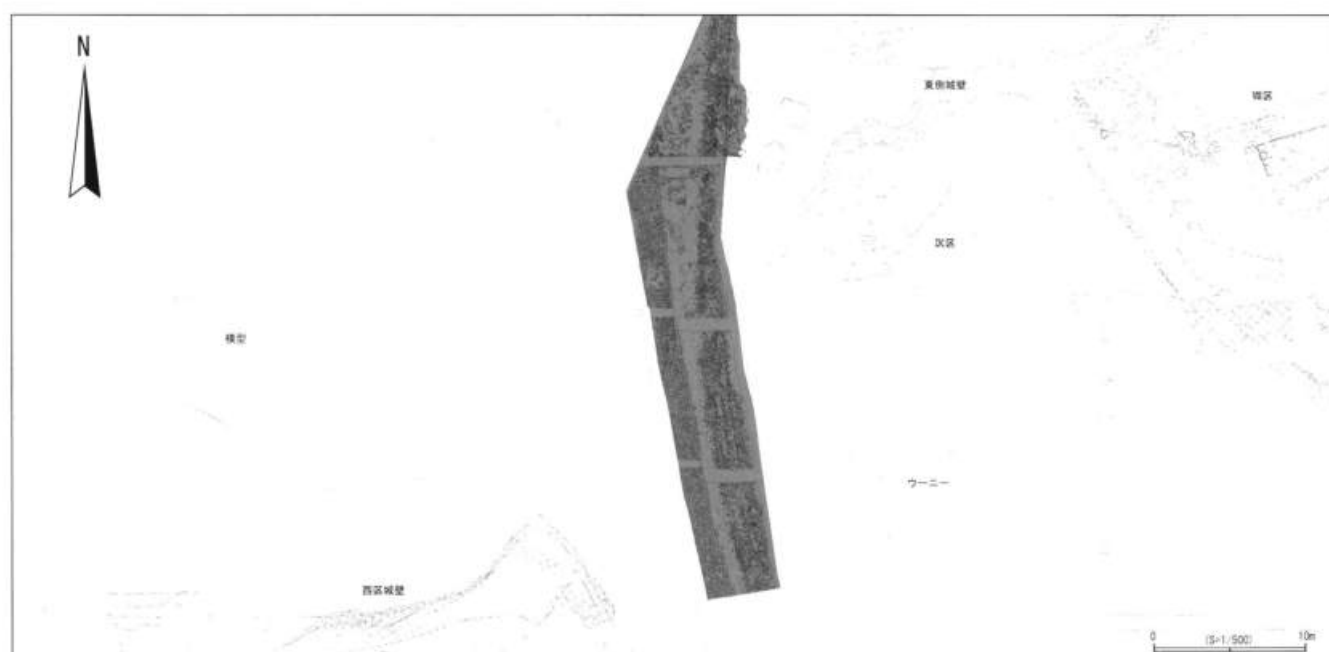
V層：【褐色土層】当該遺跡の形成期初頭の層と考えられ、炭を含み粘性が強い。層中には焼土、明褐色土粒を含む。14世紀前半～15世紀前半の遺物が主に出土し石列に潜り込む。Va～Vd。

VI層：【黄色褐色土層】橙色土粒が少なく赤色土・炭粒が少量混入する。微細礫多い。

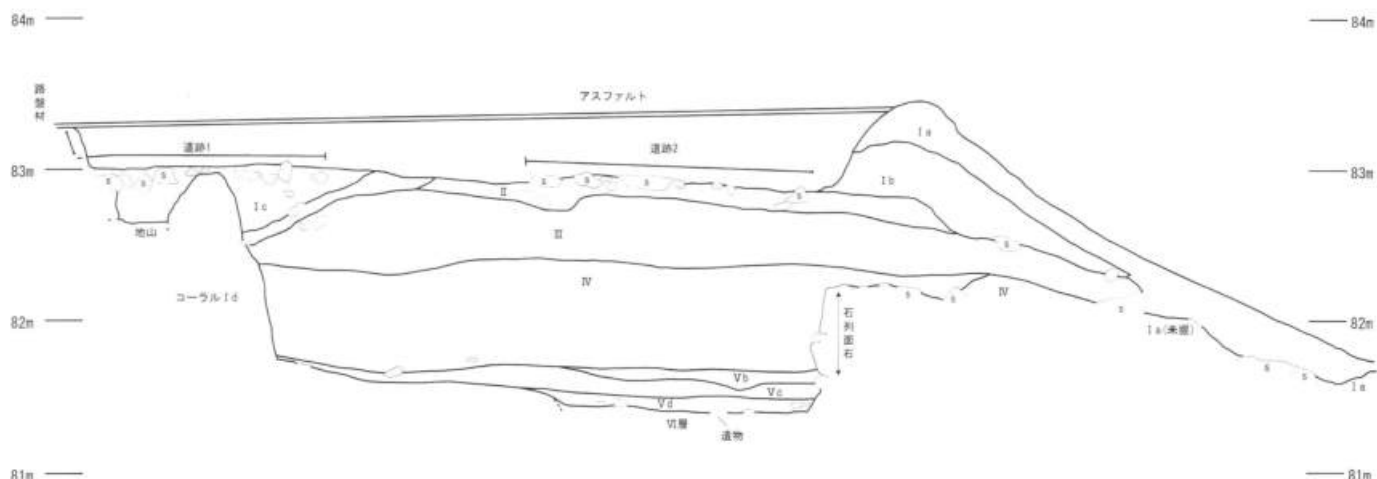
VII層：【褐色土層】橙・赤色土粒が多くなる。小礫が目立ち、遺構検出面となる。

VIII層：【褐色土層】造成層か？硬くなり橙・赤・炭粒を微量に混入する。

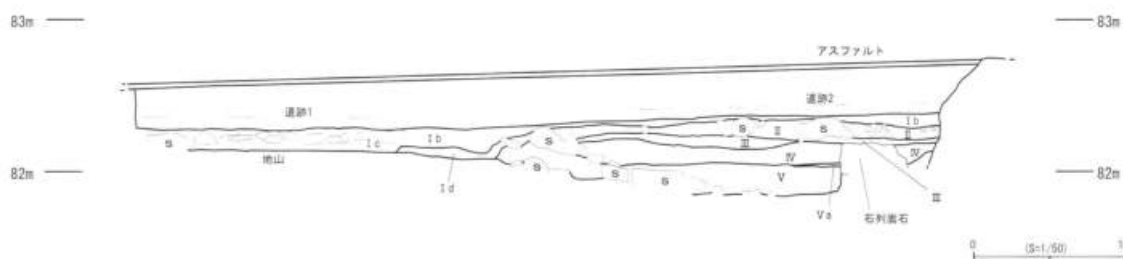
地山層：【明赤褐色土層・黄褐色土層】古期石灰岩の岩盤が至る所で露頭。



第100図 12次外郭位置図



T-27北壁セクション図



S-27北壁セクション図

第101図 12次外郭調査土層断面図

## 2. 遺構

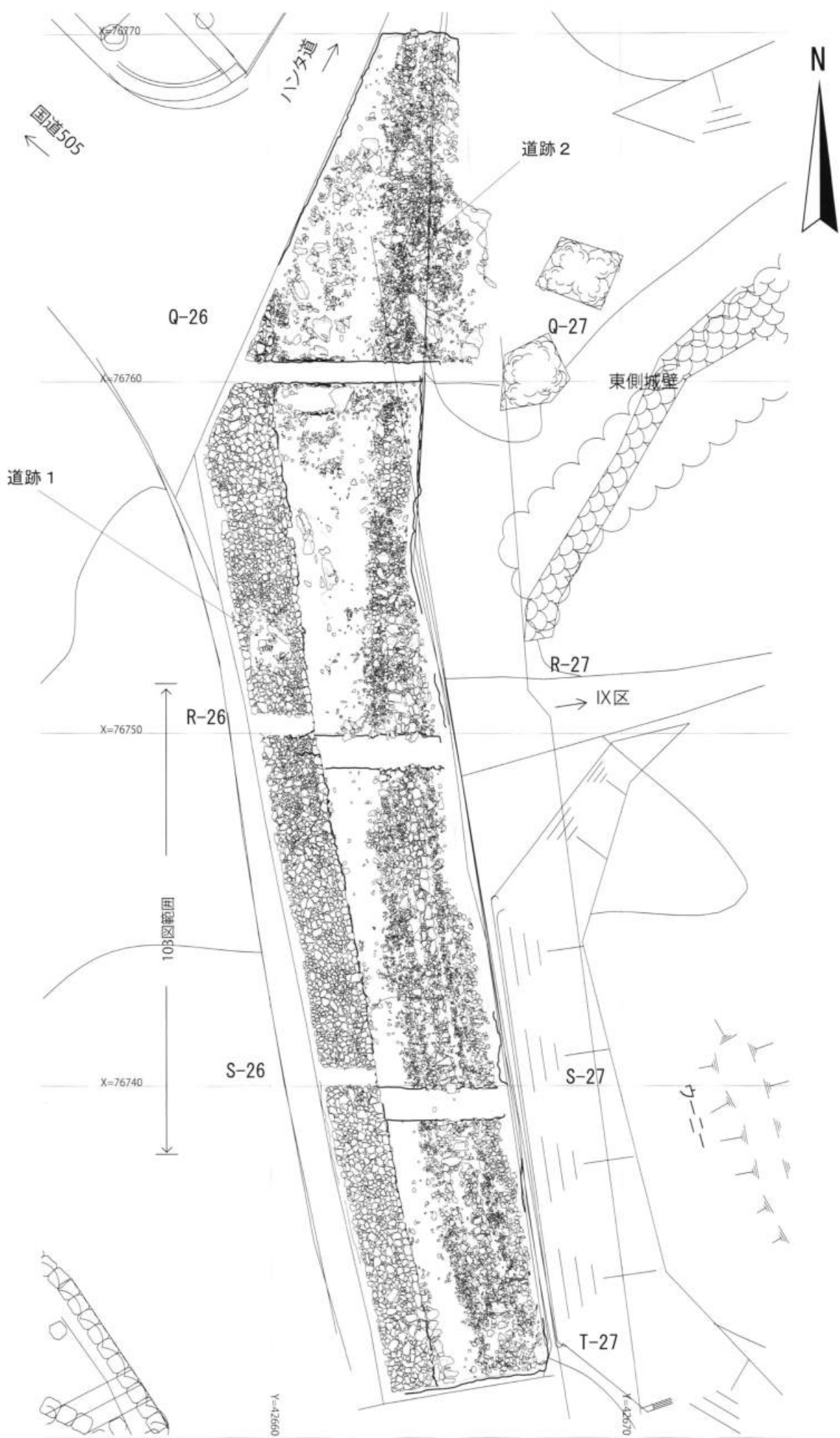
中区は県道115号線を占有して調査を行った。まず、道路敷の路盤材を撤去した段階で南北に2本の道跡が確認された、これらの道跡は道跡1、道跡2とした。調査区の西側の道跡1は昭和（戦前期）以降の築造年代。東側の道跡2は1よりも遡る近世以降の築造年代と推定された。明治36年の地積図には、道跡2と思われる路線が赤線で描かれており、これに該当すると考えられる。

〔名称〕道跡1      〔位置〕外郭中区（Q-26・R-26・R-27・S-27・T-27）

〔遺構図〕第102図    〔検出面〕I層      〔規模〕35m以上

〔所見〕路盤材のコーラル（Ib層）を除去するとすぐに調査区の西側から確認された。20～30cm大の礫が敷き詰められ、南側では調査区外となって一部が確認できなかった。大正時代に今泊慰霊塔から今帰仁グスクにわたって造られたとされている馬車道がこれに当たると思われ、現在はコーラル層で数度造成されていることから道跡を見ることは出来ないが、一部は露出して見ることができる。R-27北側トレンチ断面では、礫を多く含む赤土の造成土がみつかり（Id層）、道跡1を構築の際の地固め土と考えられる。聞き取りでは外郭城壁の石材を用いて造られたとされている。

〔遺構内堆積層〕Ic層    〔遺物〕（第106図）



第102図 道跡1・2遺構詳細図

[名称] 道跡2 [位置] 外郭中区 (Q-27・R-27・S-27・T-27)

[遺構図] 第102図 [検出面] II層 [規模] 39m以上

[所見] 道跡1と同様、路盤材のコーラル (Ib層) を除去すると道跡1の東側から確認された。1のように礫が整然と並べられておらず、比較的小粒の石 (5~30cm) を多用し、T-27トレンチ断面で道跡1が道跡2にのっているのが確認された。当初はグスク時代相当の遺構と思われたが遺物量も少なく、さらに遺構内から沖縄産陶器の鉢 (第106図-29) が確認されたことから、近世期に構築され、明治期頃までに使用された遺構と思われる。道跡1と同様、ハンタ道方向に遺構がのびていること、さらに下層からは道跡らしき遺構が確認できなかったことから「道跡2=ハンタ道」とも考えられる。

[遺構内堆積層] II層 [遺物] (第106図)

[名称] S-27グリッド検出の柱穴群 [位置] 外郭中区 (S-27)

[遺構図] 第103図 [検出面] VII・VIII層 [構成] 柱穴22基

[所見] S-27ではグスク時代の遺構を確認するべく、最上位面で確認された近現代期の道跡遺構を記録保存後、掘削を行った結果、石積み遺構のSR1、柱穴遺構を22基検出された。柱穴の検出面はVII・VIII層とSR1よりも下層、地山面に近い位置から確認されたことから、少なくとも監守時代よりも以前の遺構であると思われる。しかし遺構内の掘削を行っていないことや建物遺構のプランを確定できていないことから詳細はよくわかっていない。

第12表 12次外郭遺構観察表

S番号	地区名	グリッド	検出面	埋土の観察	規格・性格	柱痕	楔石・礫	長幅	短幅	採集	切り合い	備考
1	中区	S-27	VI	10YR 黒色 1.7/1 炭がびっしり	柱穴状	-	-	40	40	土器		焼土遺構
2	中区	S-27	VI	10YR 暗褐色 3/3 炭・赤色ブロック多く混入	柱穴	-	Vcと同じ礫	90	-			
3	中区	S-27	VI	10YR 暗褐色 3/3 炭・赤色ブロック多く混入	柱穴?	-	Vcと同じ礫	88	-			礫多量に混入
4	中区	S-27	VI	10YR 暗褐色 3/3 炭・赤色ブロック多く混入	柱穴?	-	Vcと同じ礫	100	-			
5	中区	S-27	VI	10YR 暗褐色 3/3 炭・赤色ブロック多く混入	柱穴?	-	礫	80	60			攪乱
6	中区	S-27	VI	10YR 暗褐色 3/3 炭・赤色ブロック・オレンジブロック多く混入	柱穴?	-	礫少	27	-			S8に切られる
7	中区	S-27	VI	10YR 暗褐色 3/3 炭・赤色ブロック多く混入	柱穴?	-	礫多	80	-			
8	中区	S-27	VI	10YR 暗褐色 3/3 炭・赤色ブロック・オレンジブロック多く混入	柱穴?	-	礫多	90	60			S6を切る
9	中区	S-27	VI	10YR 暗褐色 4/4 炭多・赤色ブロック微量混入	柱穴?	-	礫多	39	33			
10	中区	S-27	VI	10YR 暗褐色 3/4 炭少量混入	柱穴	-	楔	39	36			
11	中区	S-27	VI	10YR 暗褐色 3/4 ブロック微量混入	柱穴	-	礫大	34	31			SR6に入る
12	中区	S-27	VI	10YR 暗褐色 3/4 オレンジブロック少・炭少・赤プロ微量混入	柱穴	-	微礫	33	30			
13	中区	S-27	VII	10YR 暗褐色 4/4 炭微量・赤色ブロック・オレンジブロック微量混入	柱穴	-	微礫	30	16			
14	中区	S-27	VII	10YR 暗褐色 4/4 炭少・赤色ブロック・オレンジブロック微量混入	柱穴	-	礫	17	17			
15	中区	S-27	VII	10YR 暗褐色 4/4 炭少・赤色ブロック・オレンジブロック微量混入	柱穴	-	礫	22	33			
16	中区	S-27	VII	10YR 暗褐色 3/4	柱穴	-	礫多	33	24			
17	中区	S-27	VII	10YR 暗褐色 3/4 炭微量・赤色ブロック微量混入	柱穴	○	微礫	28	4			
18	中区	S-27	VII	10YR 暗褐色 4/6 炭微量・赤色ブロック微量混入	柱穴	-	礫	24	17			S9を切る
19	中区	S-27	VII	10YR 暗褐色 4/6 炭微量・赤色ブロック微量混入	柱穴	-	礫	22	-			S8に切られる
20	中区	S-27	VII	10YR 暗褐色 4/6 炭微量・赤色ブロック微量混入	柱穴	-	礫	31	23			
21	中区	S-27	VI	10YR 暗褐色 3/3 炭・赤色ブロック・オレンジブロック微量に混入	柱穴	-	礫少	32	31			-
22	中区	S-27	VI	10YR 暗褐色 4/4 炭・赤色ブロック・オレンジブロック微量に混入	柱穴	-	礫	32	-			-



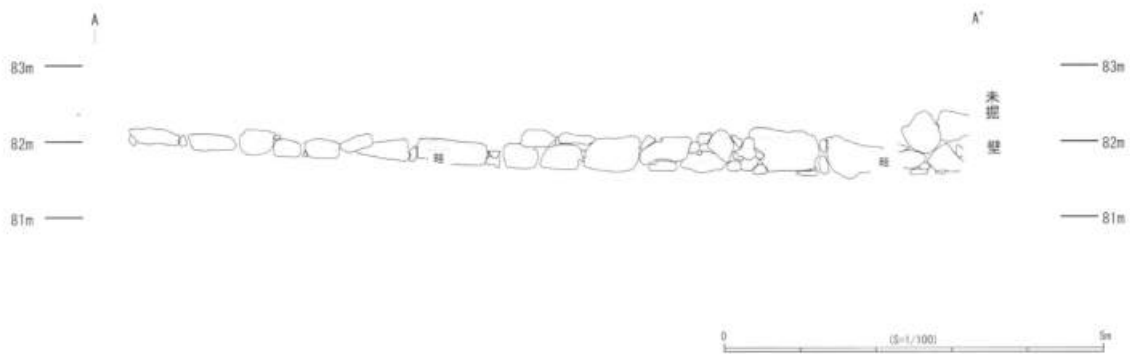
第 103 図 グスク時代遺構面詳細図



[名称] SR1 [位置] 外郭中区 (S-27) [遺構図] 第103・104図

[検出面] V層 [構成] 石積遺構 [規模] 22m以上

[所見] S-27のIV層掘削中に南北に連なって検出された。面石は50～100cmの大きな石で並べられ、根石を求めて継続して掘削を続けたが、ほとんど積まれていなかった。外郭城壁とは軸線が異なり、比較的小規模な石積みであったことから、26集で報告した石積み遺構SR2と同じ「区画石積み」と思われる。構築年代はIV層において15世紀～17世紀初頭の遺物が得られていることから監守時代相当の遺構と考えられる。



第104図 12次外郭SR1遺構詳細図(立面図)

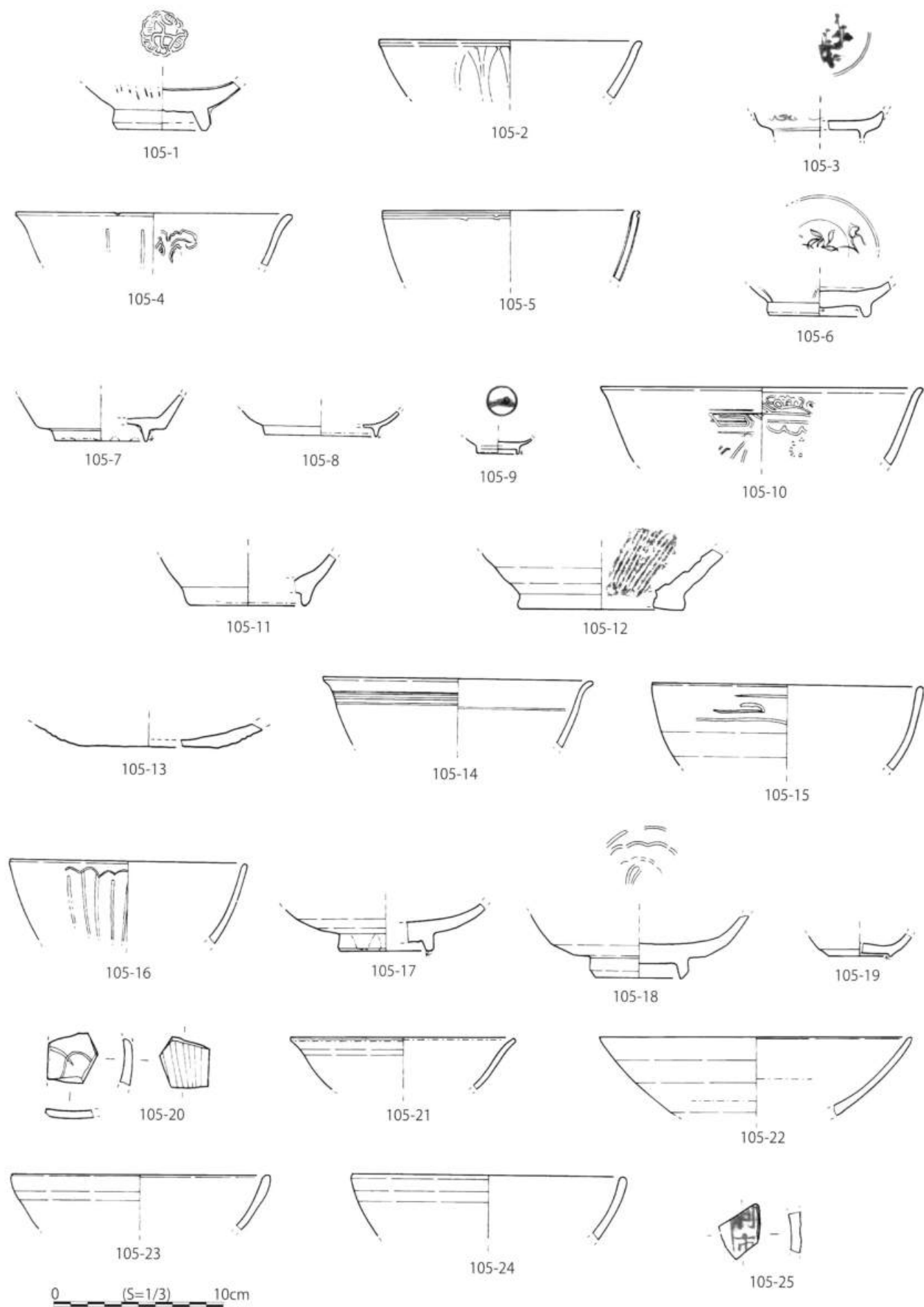
### 3. 包含層出土遺物

[Ⅲ層出土遺物] (第105図-1～3) 1は龍泉窯系青磁碗VI類の底部で見込みには卍を押印する。2は同V類。3は主郭分類青花杯I類で見込みに梅文。

[Ⅳ層出土遺物] (第105図-4～12) 4～6は龍泉窯系V類。4は内面に型押しによる花文。6は皿で見込みに印花文を施す。7は口折皿か。見込みは広く平坦につくりあげ畳付のみ無釉とする資料。釉調は比較的薄くIV類相当と思われる。8は白磁E群(景德鎮系)の皿。9は小杯の底部。中国産で大丈夫か?。10は高麗青磁碗で内外面に白土で象嵌する。11は瑠璃釉の瓶。12は備前播鉢の底部。

[Ⅴ層出土遺物] (第105図-13～25、第106図-27・33・34・37～39・41) 13はグスク土器の底部(第3様式)。混和材の石英を多く含む。14～20は青磁。14は龍泉窯系IV類。口縁帯に弦文を配する。17も同IV類で見込みは幅広い。15・18は同V類。15はいわゆる雷文帯碗。ヘラ描きで施文する。16は同VI類の細蓮弁文碗。19は碁笥底の杯。見込みは膨らみ高台内側の削りは浅く無釉となる。20は窓部が残存する小型の器台か。外面に幅の狭い蓮弁を配する。21～24は白磁。21はA群(口禿・景德鎮窯系)の碗。22はF群(今婦仁タイプ・浦口窯系)。口縁内側を斜位に面取りし、外面は胴部中位までの施釉となる。23・24はC2群(ピロースクII・閩清窯系)。25の褐釉陶器胴部外面には「利市」が印字される。27は3/4を欠損していて銭種不明。

[Ⅰ・Ⅱ層出土遺物] (第106図-26・29・30～32) 26は富士一銭アルミニウム貨で、表に菊の紋章に富士山と瑞雲が刻印。裏に大日本、一、昭和16年とある。29は壺屋焼の鉢で口縁帯に波状文。30は砥部焼の口縁部。31は近現代の皿で産地不明。



第 105 图 12 次外郭出土遺物実測図 (1)



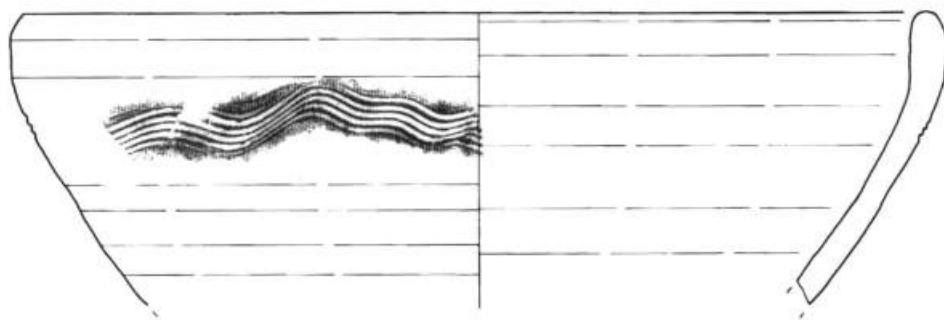
106-26



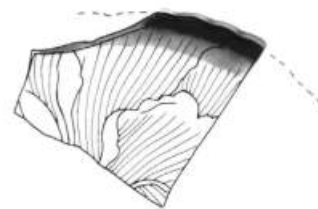
106-27



106-28



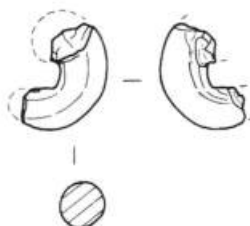
106-29



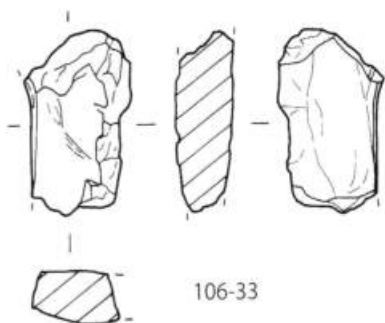
106-30



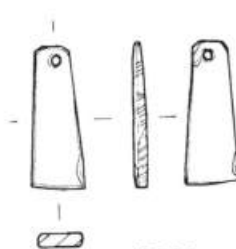
106-31



106-32



106-33



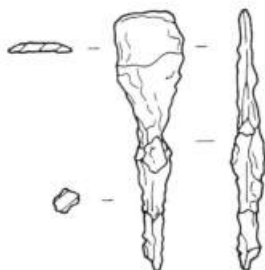
106-34



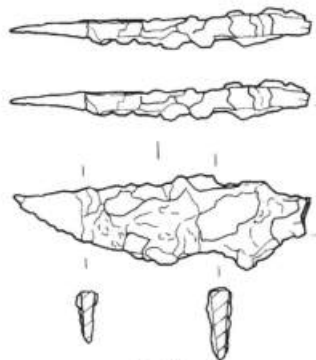
106-35



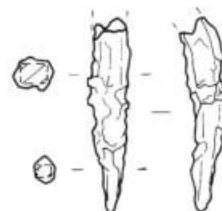
106-36



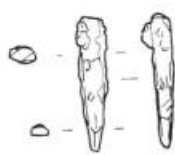
106-37



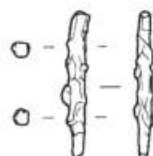
106-38



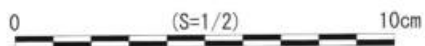
106-39



106-40



106-41



第 106 図 12 次外郭出土遺物実測図 (2)

第13表 12次中區 外郭調査出土遺物集計表(1)

種別	器種	分類	文様等	部位	12次中區出土遺物														小計		
					I	Ib	Ic	Id	Ⅱ上面	Ⅱ層	Ⅲ層	Ⅳ層	V	Va	Vb	Vc	Vd				
青磁	碗	同安窯系Ⅰ類	櫛描文	口縁								2						2			
		龍泉窯系Ⅱ類	鎬蓮弁	口縁							1	2						3			
		龍泉窯系Ⅳ類	弦文帶碗	口縁									1					1	2		
		龍泉窯系Ⅳ~Ⅴ類	無文外反	口縁		1	1					20	106							128	
				底部		2							1			1	2		6		
			蓮弁文	口縁								2	1							3	
				底部								3	6					1		10	
		龍泉窯系Ⅴ類	蓮弁文	口縁			1													1	
				底部																	
			雷文帯	口縁			2					3	29		3		5			42	
			無文外反	口縁							1					1		8			10
				底部		1												1			2
		無文直口	口縁									8			1					9	
			底部			4						3	6		1					14	
		龍泉窯系Ⅵ類	細蓮弁文	口縁										23		1				24	
				底部									4							4	
			無文直口	口縁		1								33						34	
		不明	口縁										4				1			5	
	底部																				
	泉州窯系	端反碗	口縁									2						1	3		
	粗製品	粗製碗	口縁	1							1								2		
	皿	同安窯系Ⅰ類		口縁									1				1		2		
				底部			1													1	
		龍泉窯系Ⅲ類	口折皿	口縁								1	2				1			4	
				胴部										1							1
		龍泉窯系Ⅳ・Ⅴ類	口折皿	口縁													1			1	
				腰折稜花	口縁								1	7							8
			口折蓮弁	口縁			1						6	6							13
				底部										4							4
			直口有文	底部	1															1	
			直口無文	口縁			1						5	3							9
				底部									1	3							4
Ⅴ類腰折外反			口縁										8		2					10	
		底部										1							1		
龍泉窯系Ⅴ類		不明	底部			2													2		
龍泉窯系Ⅵ類		腰折稜花	口縁										4							4	
			口縁										3							3	
		直口無文	口縁										2							2	
			底部										1							1	
盤	折縁口縁 鈎縁(ヘラ) 鈎縁(不明) 不明	口縁														1			1		
		口縁										1							1		
		口縁									1	3							4		
		底部										5							5		
瓶		口縁										1							1		
		胴部			1														1		
杯	蓮弁文	口縁			1				1	1						1			4		
		底部														1			1		
小杯	碁笥底	底部		1															1		
		器模不明	胴部											1					1		
酒会壺	身	口縁									1							1			
白磁	碗	白磁	A群(口禿)	口縁										1					1		
		福建浦口窯	F(今歸仁)	口縁									1							1	
			底部														1			1	
		福建閩清窯	C2(ピロースク2)	口縁								1	7				1	2			11
				底部																	0
			C3(無文外反)	口縁								1	4					1			6
底部											1								1		

第13表 12次中区 外郭出土遺物集計表(2)

種別	器種	分類	文様等	部位	12次中区出土遺物													小計			
					I	Ib	Ic	Id	Ⅱ上面	Ⅱ層	Ⅲ層	Ⅳ層	V	Va	Vb	Vc	Vd				
白磁	皿	景德鎮窯系	A (口禿)	口縁							1								1		
				底部								1								1	
		景德鎮窯系	E 群 (外反皿)	口縁								1									1
				底部			1							2							3
		景德鎮窯系	E 群 (小皿)	口縁											1						1
				底部										7				1			8
	福建邵武窯	D1 群 (小皿)	口縁																1		
			底部									3								3	
	福建邵武窯	D' 群	口縁									2	3							5	
			底部	1	1									1						3	
杯	福建邵武窯	D1 (八角杯)	口縁						1										1		
			底部						1										1		
	景德鎮窯系	E 群	口縁							2									2		
福建邵武窯	D 群	口縁									1							1			
青花	明	Ⅱ類	外反	口縁			1				1	2							4		
				底部									2							2	
		Ⅲ類	蓮子	口縁										12							12
				底部			1							4							5
		Ⅳ類	口折	口縁								1									1
				底部								1									1
		Ⅴ類	腰折れ	口縁								4									4
				底部								1									1
	Ⅵ類	饅頭	口縁							1	2								3		
	Ⅶ類	外反	口縁									2							2		
	景德鎮窯	不明	底部								3								3		
	皿	Ⅰ類	外反	口縁							1	3								4	
				底部									4							4	
		Ⅱ類	碁笥底	口縁								1								1	
		Ⅲ類	外反	口縁			1													1	
				底部										2							2
杯		杯Ⅰ類	直口	口縁							4									4	
	底部					1				1	4								6		
	小杯Ⅲ類	外反	口縁	1															1		
			底部									1								1	
天目	碗		口縁																0		
			底部								1	3								4	
褐釉陶器	壺	中・小型	口縁						1			1								2	
			底部	1																1	
		大型	玉縁口縁									2									2
			方形口縁										1								1
	不明		底部									2					1			3	
	揺り鉢	揺り鉢	口縁																	0	
底部												1								1	
軸縁	袋物	底部																		0	
		底部											1							1	
瑠璃釉	碗	底部											1							1	
		口縁			1								1							2	
タイ	褐釉陶器	メナムノイ	大型壺	口縁																0	
			中型壺	口縁						1			1								2
ベトナム白磁	碗									1	1								2		
高麗	青磁	碗										1							1		
備前	揺鉢											1							1		

第13表 12次中区 外郭出土遺物集計表 (3)

種別	器種	分類	文様等	部位	12次中区出土遺物													小計			
					I	Ib	Ic	Id	Ⅱ上面	Ⅱ層	Ⅲ層	Ⅳ層	V	Va	Vb	Vc	Vd				
南西諸島	徳之島産?	カムイヤキ	壺	口縁										2					2		
				底部			1												1		
	壺屋焼			口縁						3									3		
	グスク土器	壺	不明	口縁								1						1		2	
				底部						1	1						2			4	
沖縄産陶質土器			口縁																0		
			底部																	0	
近現代陶磁 (沖縄産)				口縁			1												1		
近現代陶磁 (本土産)				口縁			3													3	
ガラス																				0	
石器	石斧					1														1	
	石製品																			0	
	砥石																	2		2	
金属製品	鉄製品	釘										4		1			8			13	
		鏃																1		1	
		刀子																		0	
		不明										6		1		2				9	
	銅製品	縁金具					1														1
		靴										1									1
		不明					1					2					1				3
玉	勾玉					1														1	
	丸玉											1	1				1			3	
	小玉													1				1		2	

・は破片が出土

第14表 12次外郭調査出土遺物観察表

図	種別	分類	器種 (玉類=色) (銭=国名)	部位 (銭=初銚年)	器:口径 他:外径 銭:外径 単位=cm (銭・玉=mm) (金属=mm)	器高 厚さ 銭厚 単位=cm (銭・玉=mm) (金属=mm)	器:底径 重量 (単位=g)	次	グリッド	層	遺構	dot	No.	備考
105-1	青磁	龍泉系 VI	碗	底部	-	-	5.2	12次	R-27	Ⅱ	-	-	56	
105-2	青磁	龍泉系 V	碗	口縁	15.2	-	-	12次	S-27	Ⅱ	-	-	60	
105-3	青花	I類	杯	底部	-	-	5.2	12次	S-27	Ⅱ	-	-	63	
105-4	青磁	龍泉系 V	碗	口縁	16.0	-	-	12次	S-27	Ⅳ	-	-	73	
105-5	青磁	龍泉系 V	碗	口縁	14.8	-	-	12次	T-27	Ⅳ	-	-	46	
105-6	青磁	龍泉系 V	皿	底部	-	-	5.7	12次	S-27	Ⅳ	-	-	73	
105-7	青磁	龍泉系 IV	皿	底部	-	-	5.4	12次	S-27	Ⅳ	-	-	69	杯の可能性あり
105-8	白磁	E群	皿	底部	-	-	6.6	12次	S-27	Ⅳ	-	-	70	No.69 + No.70 接合
105-9	青花	-	小杯	底部	-	-	2.4	12次	S-27	Ⅳ	-	-	70	
105-10	高麗	韓国	碗	口縁	18.6	-	-	12次	S-27	Ⅳ	-	-	93	
105-11	瑠璃軸	-	瓶	底部	-	-	6.8	12次	S-27	Ⅳ	-	-	64	
105-12	陶器	備前	插鉢	底部	-	-	9.6	12次	S-27	Ⅳ	-	-	70	拓本
105-13	グスク土器	-	不明	底部	-	-	8.0	12次	S-27	Vc	-	-	86	
105-14	青磁	龍泉系 IV	碗	口縁	15.6	-	-	12次	S-27	Vc	-	6	91	
105-15	青磁	龍泉系 V	碗	口縁	15.7	-	-	12次	S-27	Vc	-	-	77	No.77 + No.81 接合
105-16	青磁	龍泉系 VI	碗	口縁	13.8	-	-	12次	S-27	Vc	-	-	77	
105-17	青磁	龍泉系 IV	碗	底部	-	-	5.3	12次	S-27	Vd	-	1	82	
105-18	青磁	龍泉系 V	碗	底部	-	-	5.0	12次	S-27	Vc	-	-	86	
105-19	青磁	-	杯	底部	-	-	3.7	12次	T-27	Vc	-	4	89	
105-20	青磁	不明	不明	胸部	-	-	-	12次	S-27	Va	-	-	77	
105-21	白磁	A群	碗	口縁	13.0	-	-	12次	S-27	Va	-	-	79	
105-22	白磁	F群	碗	口縁	18.0	-	-	12次	T-27	Vd	-	-	75	
105-23	白磁	C2	碗	口縁	15.1	-	-	12次	T-27	Vd	-	-	75	
105-24	白磁	C2	碗	口縁	15.8	-	-	12次	S-27	Vc	-	-	86	
105-25	褐釉	-	壺	胸部	-	-	-	12次	S-27	Vc	-	-	86	胸部計測なし
106-26	銭貨	一銭	日本	昭和16年	16.00	1.63	0.64	12次	S-27	Icd	-	-	34	
106-27	銭貨	銅貨	通札	-	-	1.30	0.90	12次	S-27	Va	-	-	77	2/3欠損
106-28	銭貨	不明	-	-	-	1.19	0.72	12次	S-27	Ⅳ	-	-	69	3/4欠損 判読不能
106-29	瓦質土器	壺屋	鉢	口縁	24.0	-	-	12次	S-27	Ⅱ	-	-	57	No.57 + No.65 接合
106-30	近現代磁器	砥部	碗	口縁	15.0	-	-	12次	T-27	Ic	-	-	42	
106-31	近現代磁器	-	皿	完形	13.2	2.5	6.8	12次	S-27	Ic	-	-	61	
106-32	玉類	-	勾玉	-	3.11	1.23	7.78	12次	Q-27	Ib	-	-	6	欠損
106-33	石器	-	砥石	-	5.02	1.49	22.95	12次	S-27	Vc	-	-	86	
106-34	石器	-	砥石	-	3.87	0.35	3.43	12次	S-27	Vc	-	5	90	
106-35	金属製品	青銅	靴	-	2.54	0.27	1.98	12次	S-27	Ⅳ	-	-	69	
106-36	金属製品	青銅	不明板状	-	4.99	0.13	2.94	12次	S-27	Ⅳ	-	-	73	
106-37	金属製品	鉄	鏃	-	69.36	3.24	9.64	12次	S-27	Vd	-	8	96	
106-38	金属製品	鉄	刀子	-	78.81	5.87	21.93	12次	S-27	Vc	-	-	86	
106-39	金属製品	鉄	釘	-	51.70	10.03	7.59	12次	S-27	Vc	-	-	86	
106-40	金属製品	鉄	釘	-	36.12	4.91	3.31	12次	S-27	Ⅳ	-	-	22	
106-41	金属製品	鉄	釘	-	39.00	4.13	2.17	12次	S-27	Vc	-	-	86	

## 第5節 中区（外郭14次調査）

外郭13次調査中において、県道115号線のアスファルトの下に石積遺構が延びていることが確認された。そこで平成22年度に北部土木事務所の了解を得て調査を行った（面積120㎡）。実際の調査はアスファルトと路盤材を撤去し始めるとすぐに城壁を確認することが出来たため、城壁ラインの想定、遺構検出はスムーズに取り組んでいる。ただし遺構以外は攪乱が著しく、グスク時代に限定できる出土遺物は少なかった。地区分けについては試掘トレンチで一括して回収するため、グリッド名ではなく、Aトレンチ（北側城壁内）、Bトレンチ（中央城壁上）、Cトレンチ（南側城壁外）、Dトレンチ（外側カーザフ地区側）で地区分けを行った。

### 1. 層序

I層：【明褐色土層ほか】アスファルトや路盤材等の県道を構築する際に搬入された攪乱土。県道下のほぼ全域が覆われる。地下深くに攪乱が及び、城壁の面石のような大きな石も混ざる。ガラスビンや近現代の陶磁器等を包蔵する。

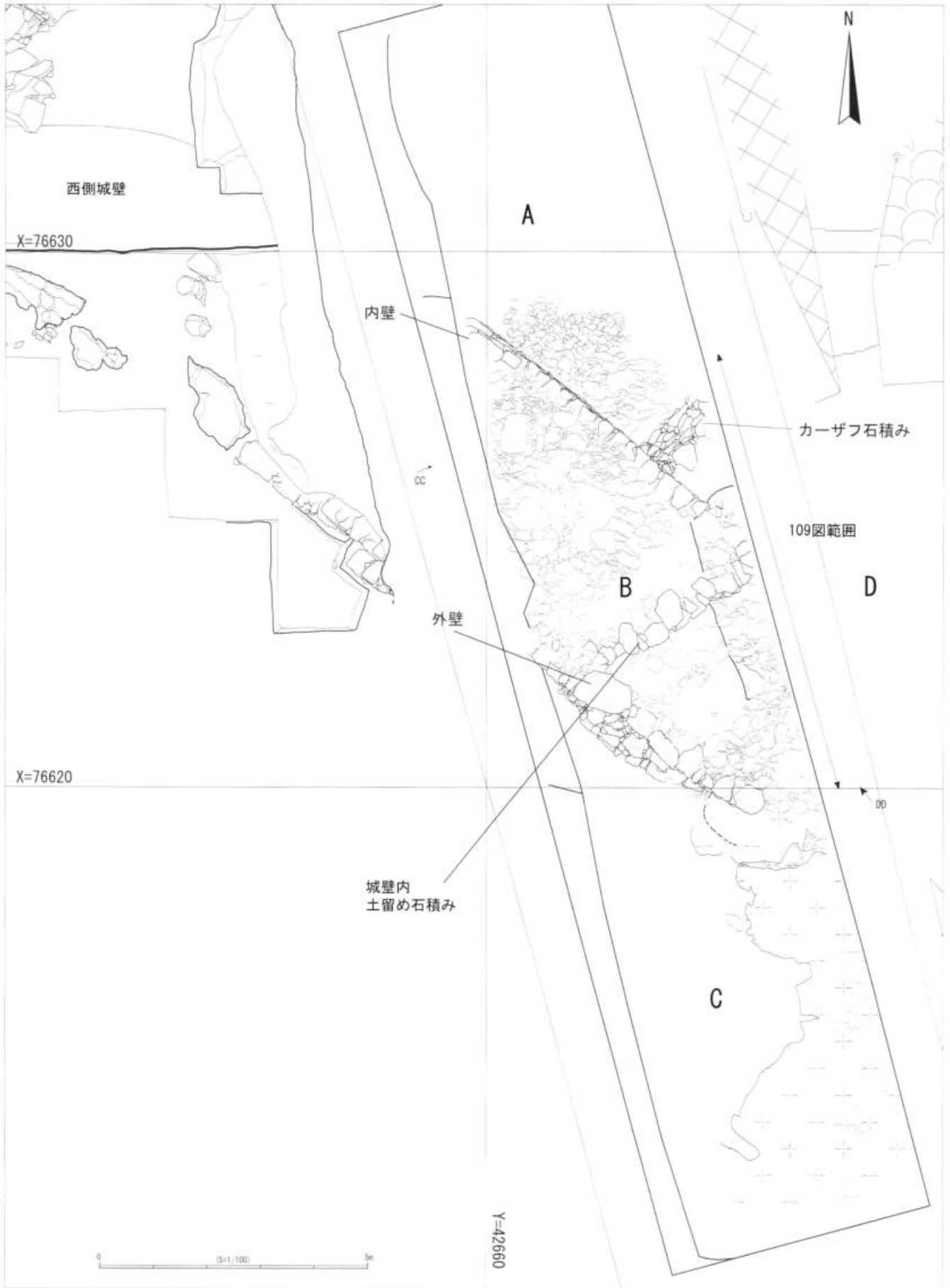
II層：【暗褐色土層・褐色土層】当該遺跡の形成期のグスク時代の遺物包含層（IIa～IIb）。遺跡全体を覆う。VIII区で検出される遺構のほとんどがこの時期のもので、15世紀中頃～17世紀初頭（主郭第IV期～第V期）の遺物が得られている。

III層：【黄褐色土層・褐色土層・暗褐色土層】造成層。盛り土を作り出すために異なる土を数回に分けて入れ込んで造成している。出土遺物から当該遺跡の形成期初頭の層と考えられ、炭を含み粘性が強い。層中には焼土、炭、黒色土ブロックを含む。出土遺物はグスク土器、カムイヤキ、同安窯系青磁のみ得られている。

地山層：【明赤褐色土層・黄褐色土層】古期石灰岩の岩盤が至る所で露頭。

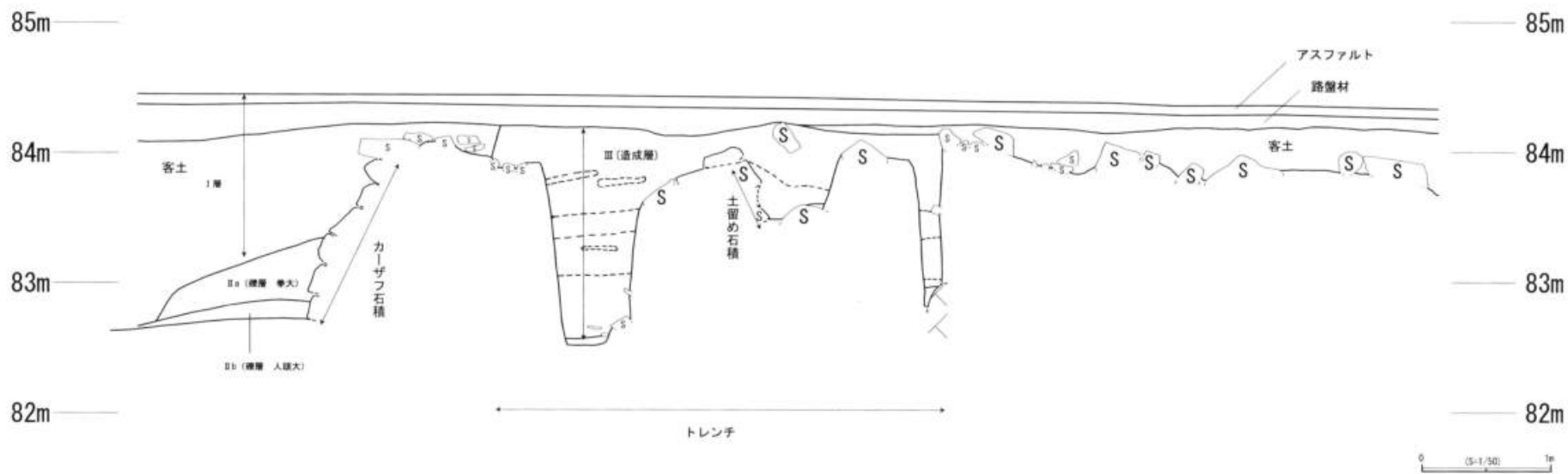


第107図 14次外郭位置図

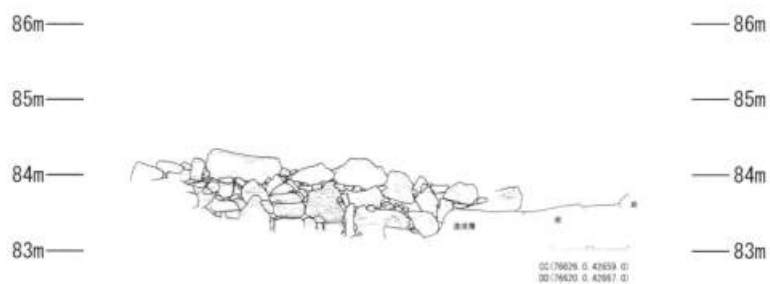


第 108 図 14 次外郭調査遺構平面図

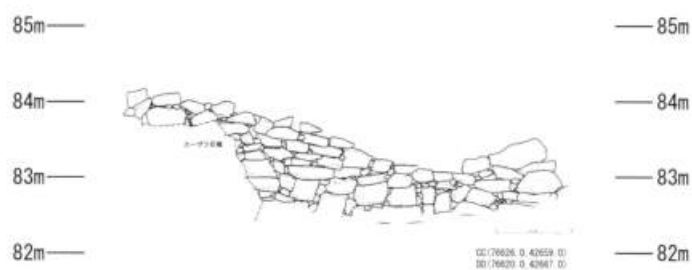




第109図 14次外郭調査土層断面図



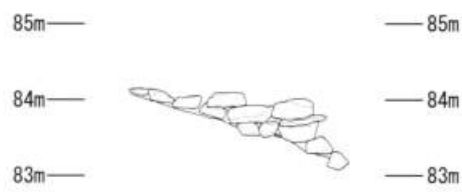
第110図 CC-DD内壁立面図



第111図 CC-DD外壁立面図



第111図 城壁内石積立面図



第111図 近世石積立面図

## 2. 遺構

[名称] 県道下検出の城壁 (CC-DD) [位置] 外郭中区

[遺構図] 第108・111図 [検出面] I層 [規模] 幅約4.5m

[所見] 今帰仁城跡の城壁は空積みを主体とするが県道下検出の城壁は様相を異にする。調査区の攪乱土を除去すると造成された盛り土 (III層) に据え付けるように確認された。当該城壁を検出することで外郭城壁とカーザフ城壁が繋がった。外壁側のCトレンチでは並びが悪く上から潰されたように確認され (第111図:CC-DD外壁立面図)、1m以上の大きな礫を用いているものもある。逆側 (内壁側) のAトレンチでは比較的小ぶりの礫を用いていて残りも比較的良好で (第111図:CC-DD内壁立面図)、新しい城壁 (擁壁) が被さって積まれていた (第111図:近世立面)。近世城壁を記録後に撤去すると、また新たな城壁が内壁に被って確認された (カーザフ北側城壁)。

[名称] 県道下検出の造成層 [位置] 外郭中区 (城壁内)

[遺構図] 第108・111図 [検出面] 城壁内 [規模] 幅約3m

[所見] 調査区の攪乱土を除去すると城壁と造成層 (盛り土) を検出した。特に造成層は土留めの石積みを構築、数度にわたって土を入れ、これを平行して3回繰り返していることが確認された。土留め石積みは雑につくられているが、50～100cm前後の大型の石を一行に並べ (3回)、土砂の流出を防ぎ土留めの強度強化を図ったものと考えられる。過去の外郭調査では各区の区画石積みとして造成を行い平坦地をつくっていたが (既報告:26集 p99)、県道構築時に破壊された可能性はあるものの当該造成層を境とした明確な平坦面は確認されなかった。また造成層 (III層) にトレンチを入れ土留めの図面を作成 (第111図:城壁内石積み立面)、少量ながら土器、カムイヤキ、同安窯系青磁が確認され、城壁を積み上げる以前に造成 (盛り土) によって防壁ラインを構築していた可能性がある。

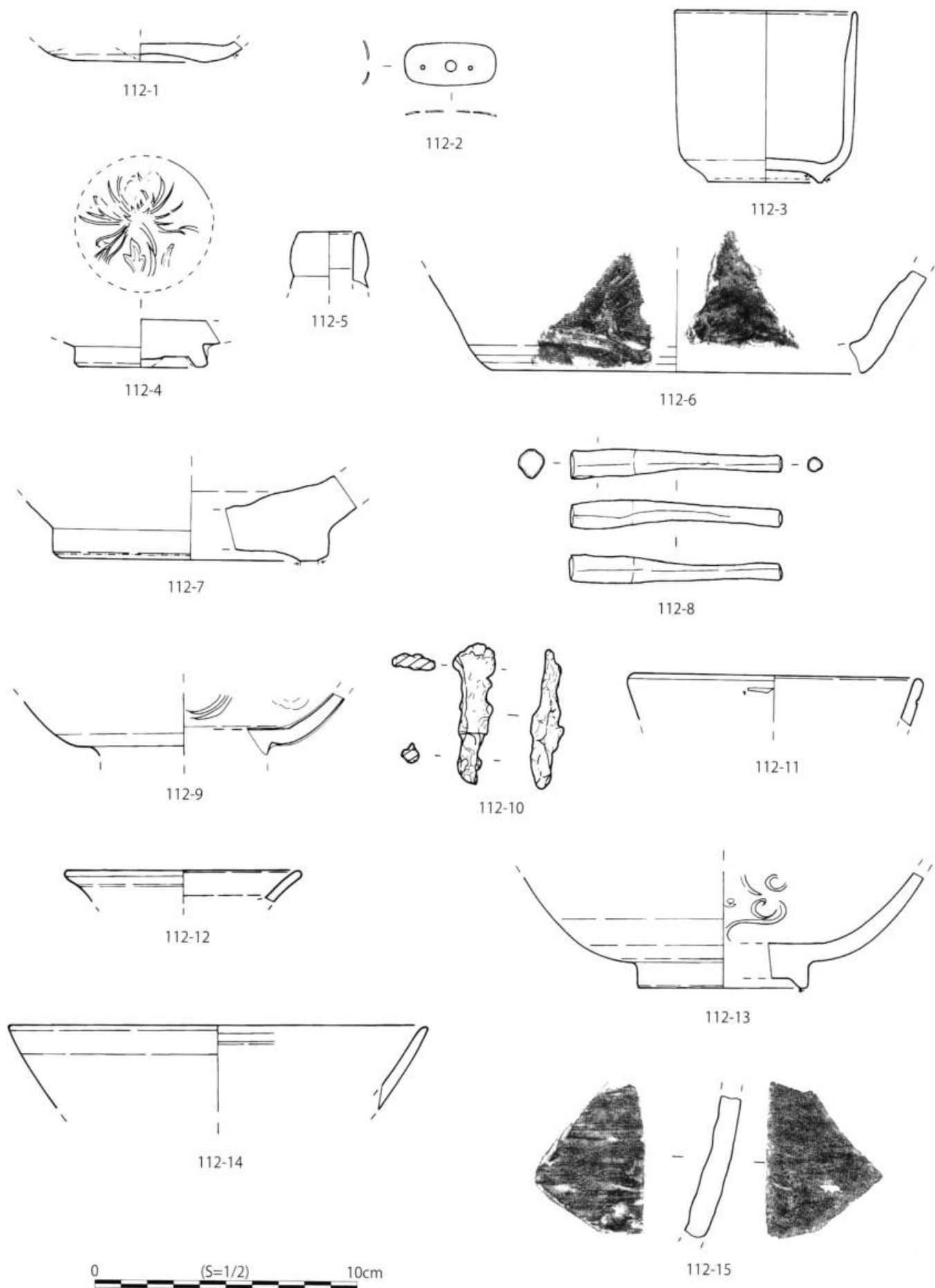
## 3. 包含層出土遺物

[Aトレンチ (北側城壁内) 出土遺物] (第112図 -1～7) 1は同安窯系青磁皿で外底は露胎となり、若干上げ底のようにしあげる。見込みに櫛描文はみられない。2は用途不明の青銅製品。筆筒の金具か。3は近現代の本土産の湯飲み。4は龍泉窯系青磁II類の底部で外底は無釉となり、見込みは少し盛り上がり線描きによって花文を施文する。5はガラス製の瓶飲み口か。6はカムイヤキB群の底部。7は青磁瓶の底部で高台内側の削りはとても浅い。

[Bトレンチ (中央城壁上) 出土遺物] (第112図 -10～15) 10は鉄釘で腐食が著しい (I層)。11は龍泉窯系V類か (I層)。小破片のためIII'類ともとれるが、暫定的にV類とした。12は同安窯系の浅い皿。13は龍泉窯系青磁I類底部。外底から内底が厚く、高台は小さい。見込みは広く内側には劃花文が施文される。14は同安窯系の碗口縁部で口縁内面上部に界線を巡らす。今帰仁グスクで碗の出土は珍しい。15はカムイヤキB群。

[Cトレンチ (南側城壁外) 出土遺物] (第112図 -8) 8は青銅製煙管の吸い口。土が付着しこびりつく。

[Dトレンチ (外側カーザフ地区側) 出土遺物] (第112図 -9) 9は龍泉窯系青磁I類で見込みは広くつくる。内側には劃花文が施文される。



第112図 14次外郭出土遺物実測図

## 第V章 総括

### 1. 今帰仁城跡外郭西区の発掘調査成果について

発掘された外郭は、城内10の郭のなかでもっとも北側にある郭で昭和54年に追加指定された地域にあたる。外郭の面積は約20,000㎡で今帰仁城跡の郭の中でも最も広い地域となる。調査に先立ち地形や石垣などの地表面で観察できる遺構及び地籍から東・西・中・城外西・城外東区の5つのエリアに分けた。東区については既に第26集・第29集で報告済みであるが、未報告であったV区、IX区を追加で報告している。

### 2. 外郭西側城壁の特徴

外郭西側城壁は発掘調査以前から保存状態が非常に悪いことがわかっていたが、さらに発掘調査で追認することができた。西区全体で根石ごと欠損する箇所もあり、ほとんどが根石と数段の積石が残るのみであったが、東区の城壁とは規格性と共通性が高く、同規模・同時期の城壁であることが確認された(p48)。また、城壁の構築年代を知ることを目的に、これまで東区調査から根石確認トレンチを複数箇所設定してきた。東区トレンチ調査からは、根石の下に入り込む層から14世紀中頃以降の遺物が確認され、西区調査においても根石確認トレンチ⑨でその一端をうかがうことができたが、15世紀段階の築城である可能性もあり、今後とも継続して城壁調査を行うことで詳細な調査成果を待って検討したい。

城壁を仔細に観察すると、城壁の崩落や孕みといった毀損以外にも、不自然な積み方が観察されている。東区のSR2や中区調査(12次調査)のSR1は、城郭内を区画する区画壁の構築などが確認されている(II期城壁)が、特にSX1～SX3など、後代に構築されたと考えられる遺構が城壁上に残る。SX1～SX3などは、平成23年度に行われた第15次外郭発掘調査において発見された塹壕との関連が指摘されているが、詳細は次回の調査報告書に譲ることとする。

また、外郭西区では石取りによって城壁が無くなっているが、県道下の調査(14次調査)では、県道115号線を造る際にそのまま埋めていたことで、今回の調査では最も残りの良い調査区となった。城壁は造成土に据え付けるように構築されていることが確認され、これまでの今帰仁城跡の城壁では確認されていない構築方法であった。造成土からは龍泉窯系I類や同安窯系の碗も確認され、主郭I期の版築と同時期の可能性が考えられる。

### 3. 遺物について

西区調査の出土陶磁器は、グスク土器、青磁、白磁、青花、褐釉陶器、タイ産、ベトナム産、日本本土産などの輸入陶磁器をはじめ、玉、金属製品、石製品などがあり、これまでの調査と同様にほとんどの陶磁器の多くは中国産で占められる。これら出土遺物の年代は13世紀後半～17世紀前後の年代幅で収まる。古手のものでは同安窯系青磁、龍泉窯系青磁I・II類、白磁A・F・C2群が得られているが、西区の大半は攪乱を受けているためI層でも多く古手の遺物が確認されている。そして出土した遺物の主体的な年代は14世紀後半～15世紀中頃の出土遺物で占められている(主郭III期)。これまで調査してきた東区III・IV区では主郭I～III期(13世紀後半～15世紀中頃)、VII・VIII区では16世紀を中心とした遺物を包含している。東区調査との大きな違いは17世紀前半頃の今帰仁城跡終末期の遺物が少なくなっていることがあげられる。詳細には初期沖繩産陶器の湧田焼が破片でわずか数点、17世紀中頃に相当する肥前陶器は確認されていない。おそらく監守時代には使用されなくなりはじめ、17世紀以降には外郭西側を使用していなかった可能性が高い。

#### 4. おわりに

以上、外郭西区発掘調査の成果をまとめてきた。西区調査はよく分かっていなかった西側城壁の確認に主眼を置き、調査の結果、東側城壁から連続して構築されていることが確認され、構築年代は14世紀中頃～15世紀頃となっている。今後とも継続して城壁調査を行うことで詳細な調査成果を待って検討したい。また、更に精緻な分析や今回行えなかった面的な調査や、自然遺物の報告などを通して発掘された遺構や遺物から今帰仁城跡の新たな歴史が掘り起こされることを期待したい。

最後になるが、外郭の調査は城内の駐車場が撤去されたことによって、導線上重要な地域として早期に調査・整備され史跡の総合的な活用を目指すこととなった。今回の調査・整備で、来訪者の利便性は向上し、活用の面では大隅城壁前面で演劇等が行われている。また、近く史跡を横断する県道115号線の村道移管が予定され、これを機にさらに利便性の向上を図るための調査や整備が進捗することは間違いないであろう。

#### 《参考文献》

- 新垣力 2011年「無釉陶器の成立と展開」『琉球陶器の来た道』沖縄県立博物館・美術館
- 伊仙町教育委員会 2005年『カムイヤキ古窯跡群 IV』伊仙町埋蔵文化財発掘調査方向書(12)
- 上田秀夫 1982年「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』No.2 貿易陶磁学会
- 上田秀夫 1991年「16世紀末から17世紀前半における中国染付碗・皿の分類」『関西近世考古学研究』I 関西近世考古学研究会
- 上原静 2010年「琉球砥石考」『南島考古』No.29号 沖縄考古学会
- 沖縄県教育委員会 1993年『湧田古窯跡(I)ー県庁舎行政棟建設に係る発掘調査ー』沖縄県文化財調査報告書第111集
- 沖縄県教育委員会 1998年『首里城跡ー京の内跡発掘調査報告書(I)ー』沖縄県文化財調査報告書第132集
- 沖縄県教育委員会 2008年『沖縄の金工関係史料調査報告書』沖縄県史料調査シリーズ第4集 沖縄県文化財調査報告書第146集
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2004年『首里城跡ー城郭南側下地区発掘調査報告書ー』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第19集
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2007年『渡地村跡ー臨港道路那覇1号線に伴う緊急発掘調査報告ー』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第46集
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2009年『首里城跡ー京の内発掘調査報告書(II)ー』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第49集
- 小野正敏 1982年「15・16世紀の染付碗、皿の分類とその年代」『貿易陶磁研究』No.2 貿易陶磁学会
- 亀井明德/John N.Miksic 共著編『インドネシア・トローラン遺跡発見陶磁の研究』
- 九州近世陶磁学会 2000年『九州陶磁の編年』
- 金武正紀 1987年「沖縄のグスク」『考古学ジャーナル』No.284 ニューサイエンス社
- 金武正紀 1988年「ピロースクタイプ白磁碗について」『貿易陶磁研究』No.8
- 金武正紀 2007年「今帰仁タイプ白磁碗」『南島考古』No.26 沖縄考古学会 pp.187-196
- 金武正紀 2003年「沖縄出土の産地不明陶器」貿易陶磁研究 No.23
- 九州近世陶磁学会 2000年『九州陶磁の編年 九州近世陶磁学会10周年記念』
- 九州近世陶磁学会 2002年『国内出土の肥前陶磁 西日本の流通をさぐる(第1分冊)』

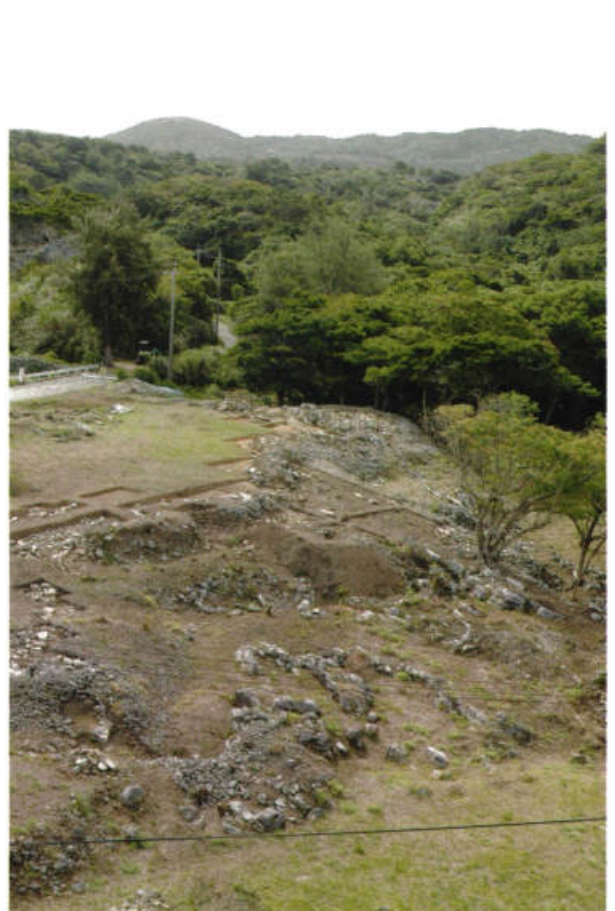
- 下地安広 1994年「沖縄の遺跡から出土する近代磁器－浦添の遺跡を中心に－」『南島考古』  
No.14号 沖縄考古学会
- 瀬戸哲也・ほか 2007年「沖縄における貿易陶磁研究－14～16世紀を中心に－」『中世窯業  
の諸相～生産技術の展開と編年～』補遺編
- 東京国立博物館 1990年『東京国立博物館図版目録 中国陶磁編Ⅱ』
- 永井久美男 2002年『新版 中世出土銭の分類図版』高志書院
- 仲原哲弘1993年『なきじん研究』vol.3 今帰仁村教育委員会
- 仲原哲弘2007年『なきじん研究』vol.15 今帰仁村教育委員会
- 今帰仁村教育委員会 1983年『今帰仁城跡発掘調査報告書Ⅰ－志慶真門郭の調査－』今帰仁村  
文化財調査報告書第9集
- 今帰仁村教育委員会 1986年『今帰仁城跡周辺遺跡範囲確認調査報告書』今帰仁村文化財調査  
報告書第12集
- 今帰仁村教育委員会 1991年『今帰仁城跡発掘調査報告書Ⅱ－主郭（俗称本丸）の調査－』今  
帰仁村文化財調査報告書第14集
- 今帰仁村教育委員会 2005年『今帰仁城跡周辺遺跡Ⅱ－今帰仁城跡周辺整備事業に伴う緊急発  
掘調査報告－』今帰仁村文化財調査報告書第20集
- 今帰仁村教育委員会 2006年『史跡 今帰仁城跡－外郭発掘調査概報－』今帰仁村文化財調査  
報告書第23集
- 今帰仁村教育委員会 2007年『今帰仁城跡周辺遺跡Ⅲ－村内遺跡発掘調査報告－』今帰仁村  
文化財調査報告書第24集
- 今帰仁村教育委員会 2008年『今帰仁城跡発掘調査報告Ⅲ－今帰仁ムラ跡西区屋敷地5の調査  
－』今帰仁村文化財調査報告書第25集
- 今帰仁村教育委員会 2009年『今帰仁城跡発掘調査報告Ⅳ－今帰仁城跡外郭報告1－』今帰仁  
村文化財調査報告書第26集
- 那覇市史編集委員会（編）1970年『那覇市史』資料編第1巻2所収「琉球渡海日々記」
- ネイチャー・プロ編集室 1996年『色々な色』光琳堂出版
- 原田禹雄（訳注）1998年『蔡鐸本 中山世譜（琉球弧叢書（4））』榕樹書林
- 真壁忠彦 1977年「備前」『世界陶磁全集 3 日本中世』小学館
- 美濃口雅朗 2002年「越州窯系青磁窯跡の踏査」『貿易陶磁研究』No.22
- 宮城弘樹 2006年「グスクと集落の関係について（覚書）－今帰仁城跡を中心として－」『南  
島考古』No.25 沖縄考古学会
- 宮城弘樹・具志堅亮 2007年「中世並行期における南西諸島の在地土器の様相」『廣友会誌』  
第3号 廣友会
- 和田久徳・ほか 2001年『明実録の琉球史料（一）』沖縄県文化振興会公文書管理部史料編集室  
(五十音順)



1. 今帰仁城跡空撮



2. 外郭西区全景 (2009年)



3. 外郭西区全景 (2011年)





1. 完掘状況（北から南）



2. S1074 検出状況



3. S1074 半裁状況



4. 調査着手前



5. 作業状況



1. Ⅸ区全景



2. 骨製品出土状況 (22-150)



3. R-29 東壁



4. 作業状況



5. 溝状遺構検出状況



1. 覆輪出土状況 (21-116)



2. 青銅製品出土状況 (21-108)



3. II層検出状況



4. 青磁出土状況 (18-26)



5. 遺構検出状況



1. A-C 着手前



2. A-C 着手後



1. A-C 内壁検出状況



2. D-E 外壁検出状況



3. G-H 外壁検出状況



4. I-J 外壁検出状況



5. I-J 内壁検出状況



6. O-P 外壁検出状況



7. O-P 内壁検出状況



1. S-T 外壁検出状況



2. U-V 外壁検出状況



3. W-X 外壁検出状況



5. W-X 内壁検出状況



4. Y-Z 外壁検出状況



6. Y-Z 外壁固化作業状況



7. 根石確認調査作業状況 (A-B 内壁)



1. SX1 検出状況



2. SX2 検出状況



3. SX3 検出状況



4. SX4 完掘状況



5. SX4 検出作業状況



6. SX6 検出状況



7. SX5・7 半裁状況



8. SX5・7 検出状況



1. A-23・B-23・24 遺構検出状況



2. U-25・26 遺構検出状況



3. 開元通寶 (98-315)



4. 作業状況 (2009年)



5. 客土除去作業



6. 根石確認トレンチ⑨測量作業状況



7. 発掘作業状況



8. 根石確認トレンチ⑦X-21付近





1. 西区全景3 (SX2 付近)



2. 1 4次外郭遺構検出状況

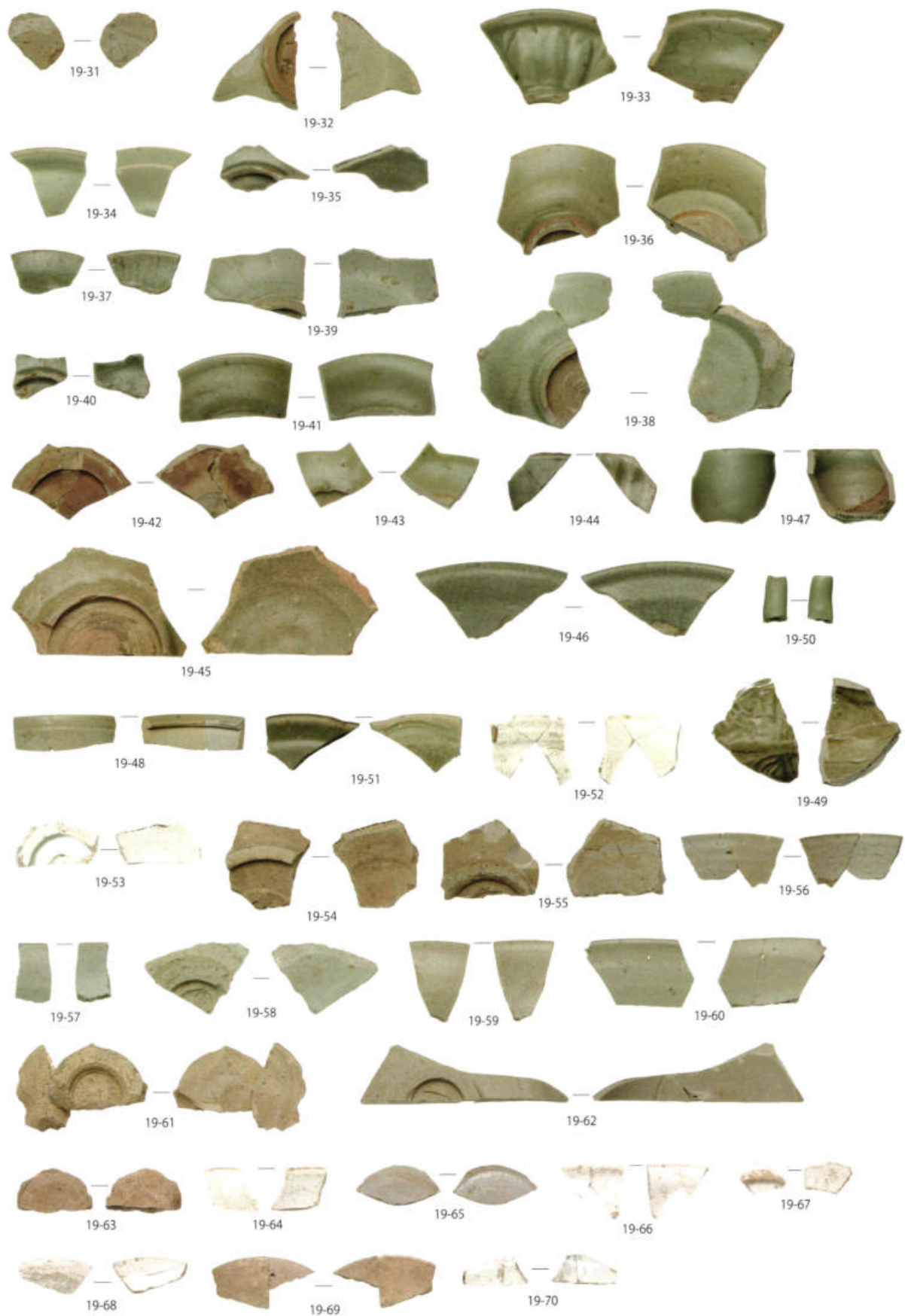


3. 1 2次外郭調査完了状況



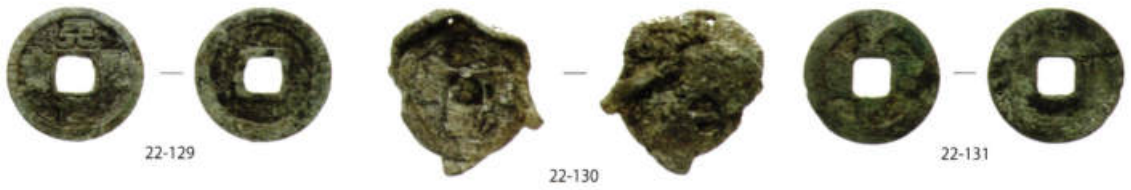




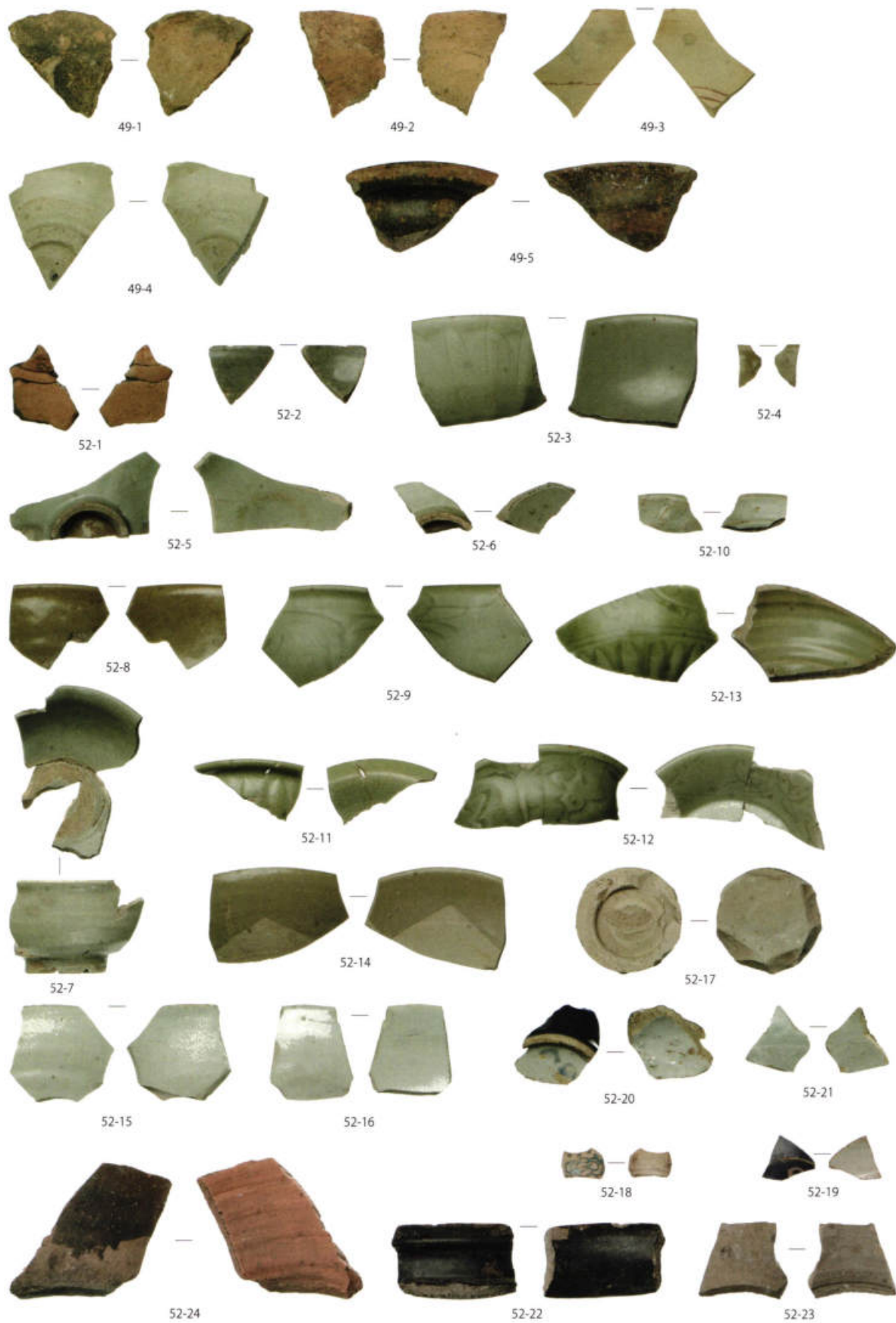
























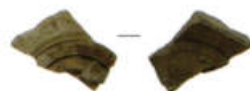
86-19



86-20



86-21



86-22



86-23



86-24



86-25



86-26



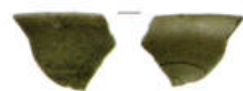
86-27



86-28



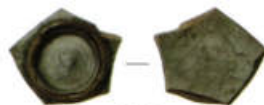
86-29



86-30



86-31



86-32



86-33



86-34



86-35



86-36



86-37



86-38



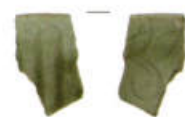
86-39



86-40



86-41



86-42



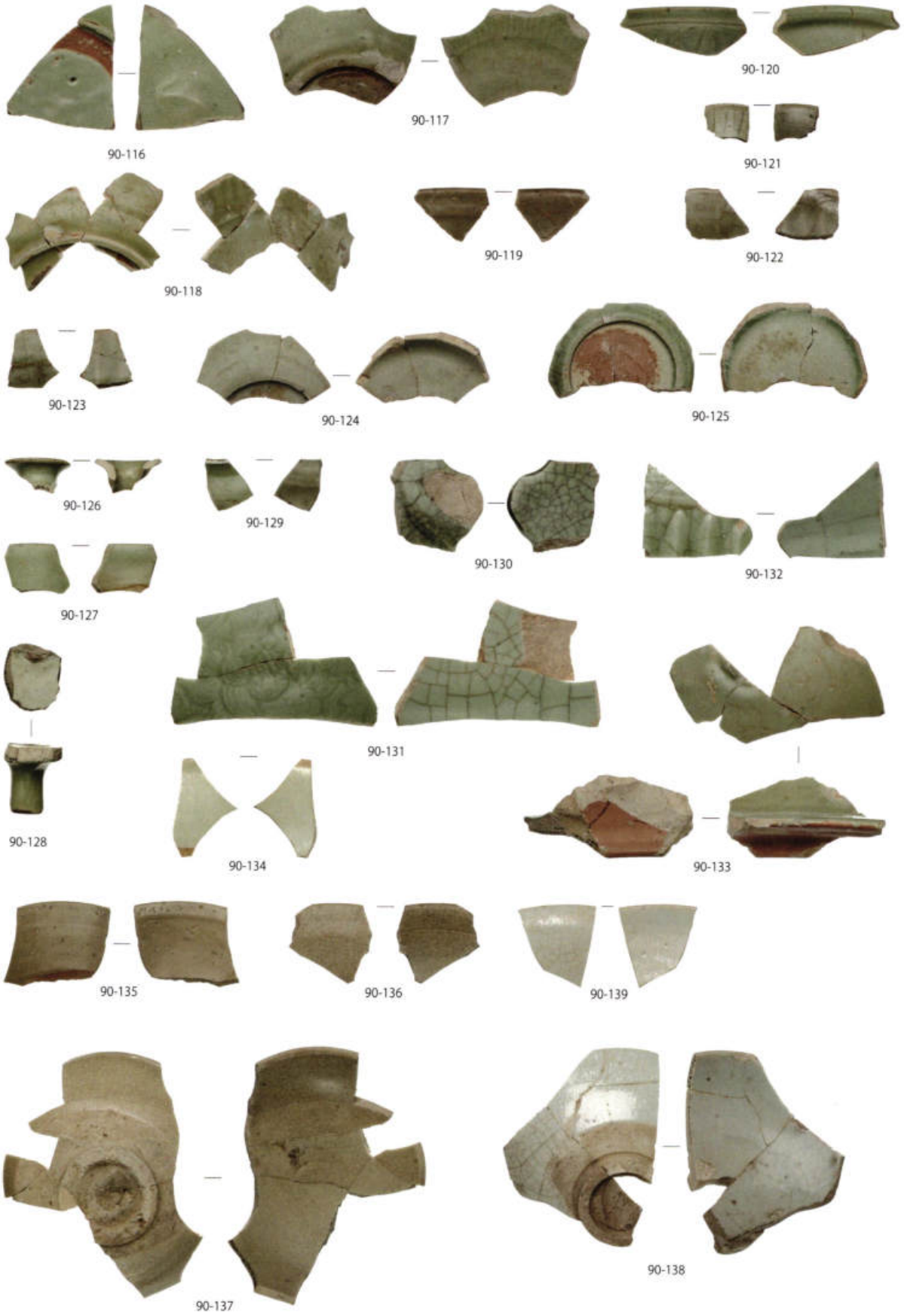
86-43

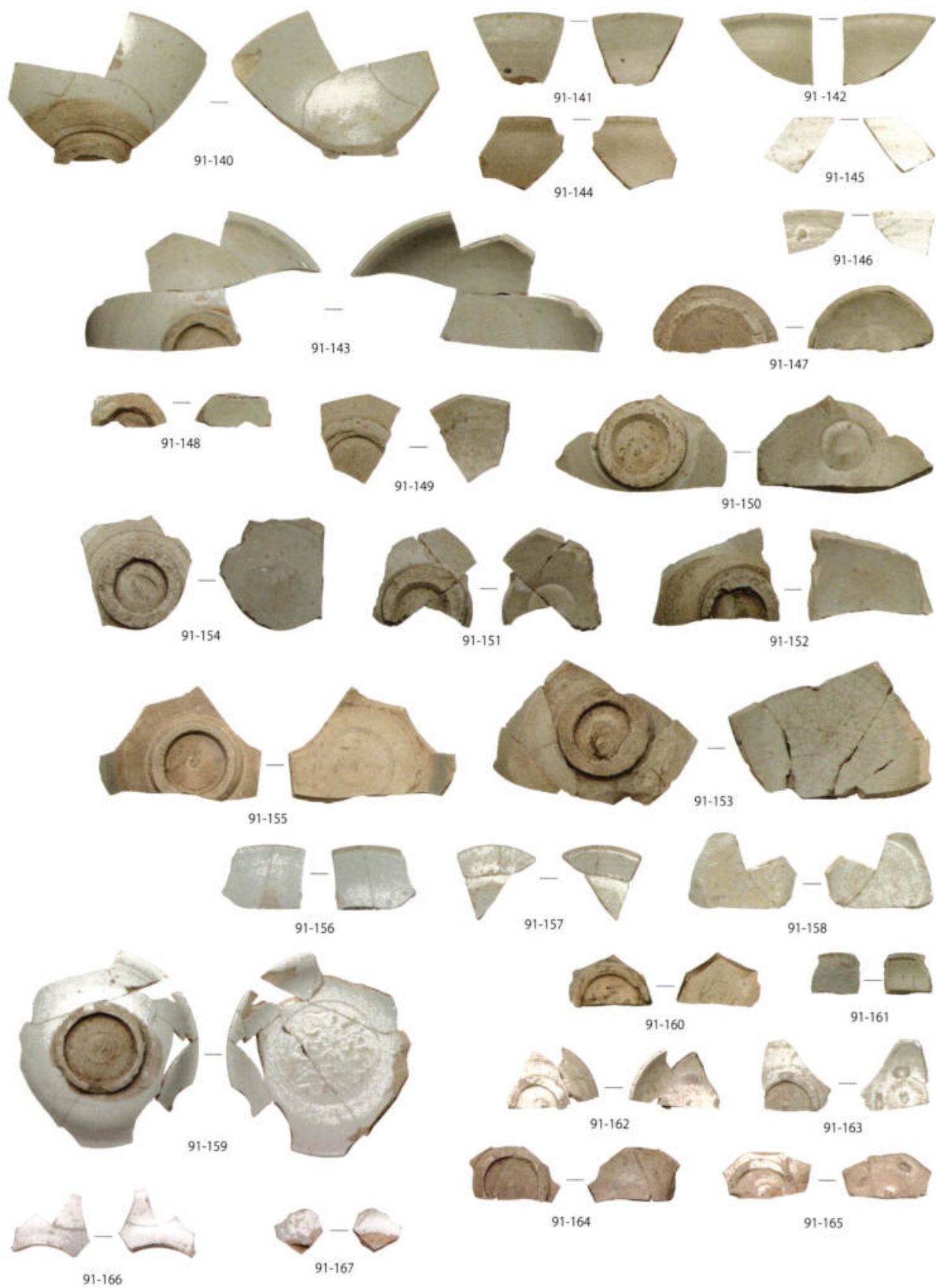


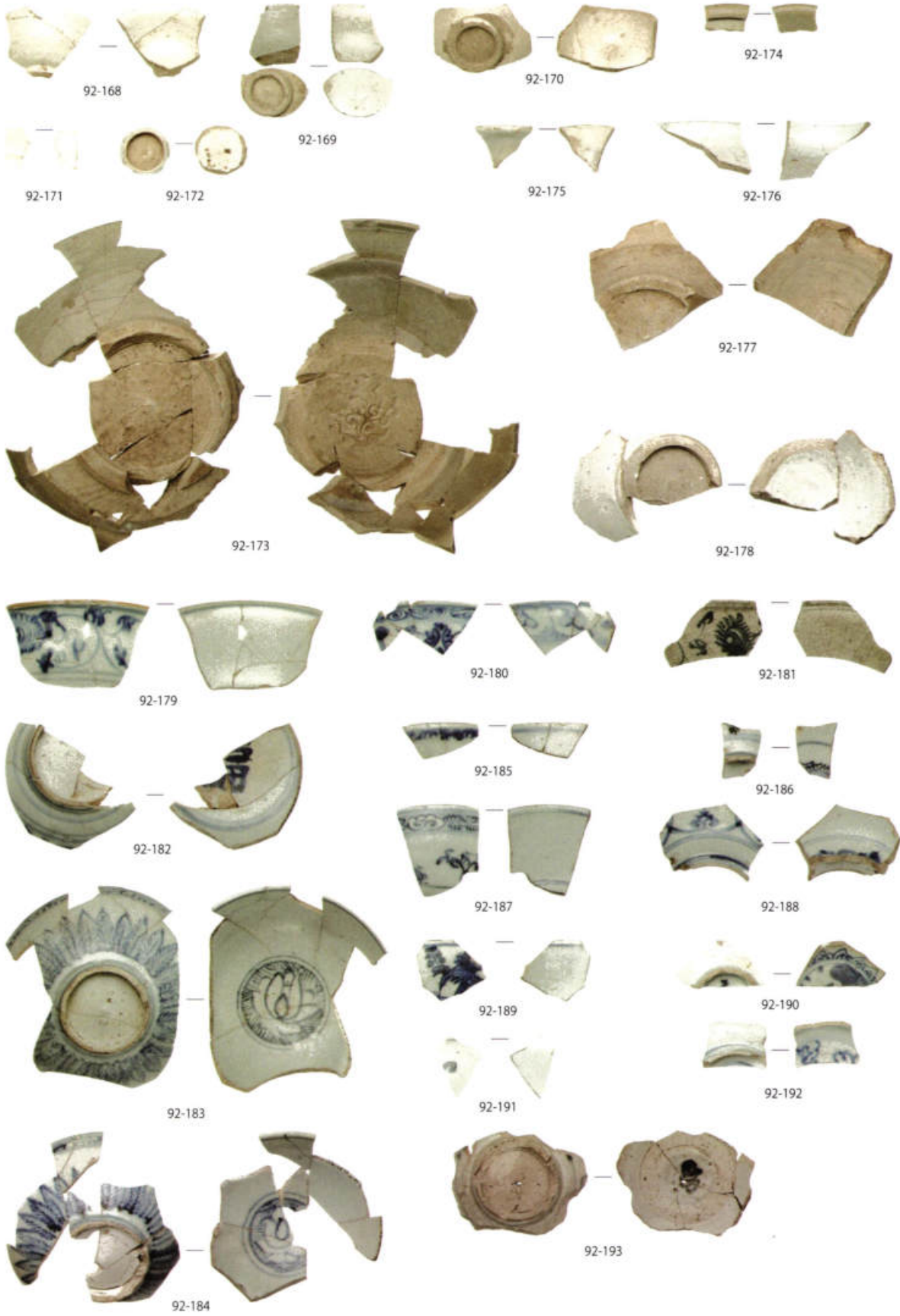


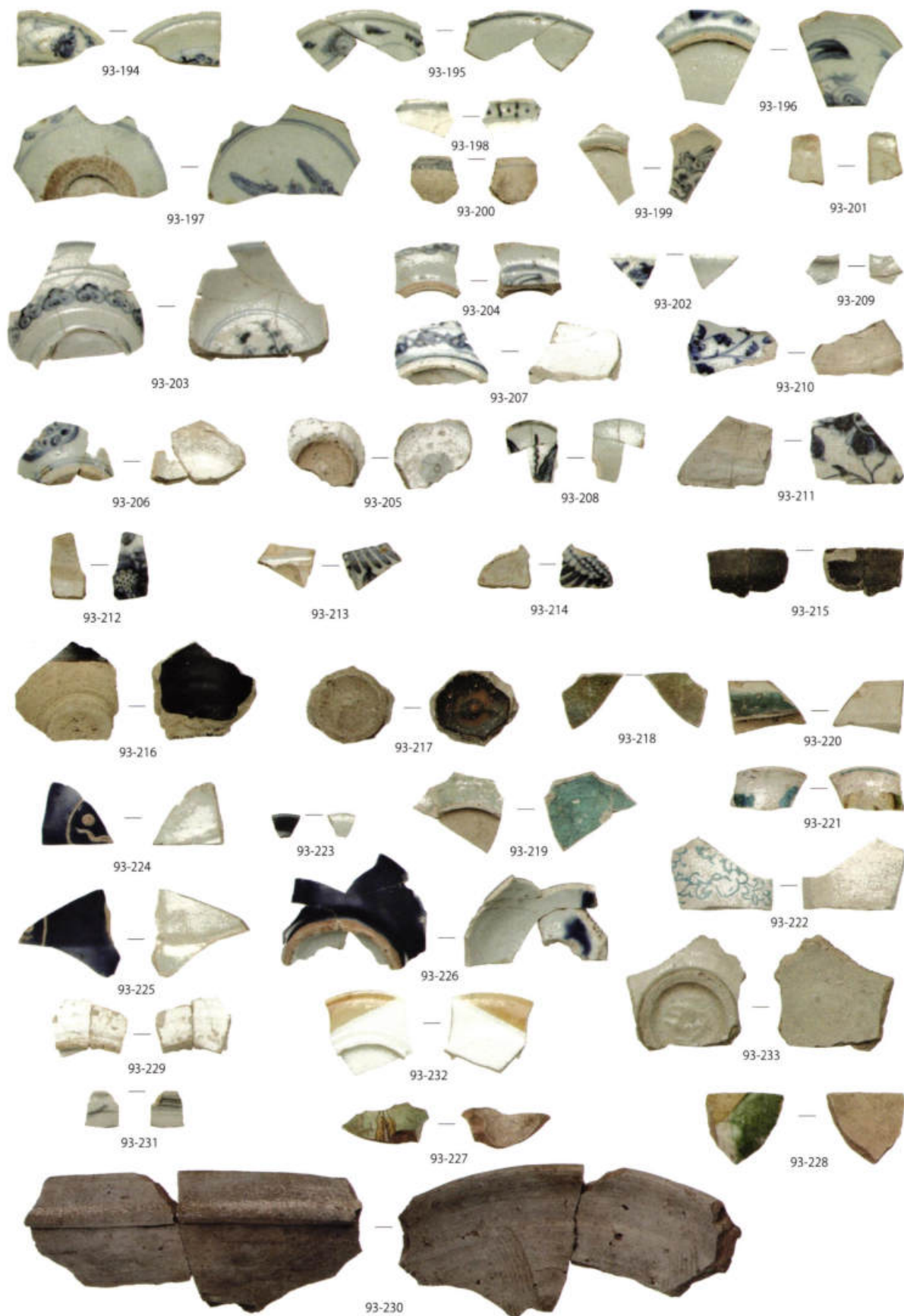














94-234



94-235

94-236

94-237



94-238

94-239

94-240

94-241

94-242



94-243

94-244

94-245



94-247

94-248

94-250



94-246

94-251



94-249

94-252



95-253



95-255



95-254



95-256



95-257



95-258



95-259



95-260



95-261



95-262



95-263



95-264



95-265



95-266



95-267



95-268



95-269

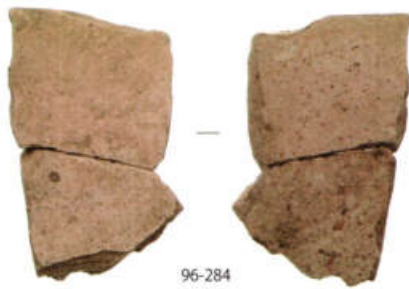


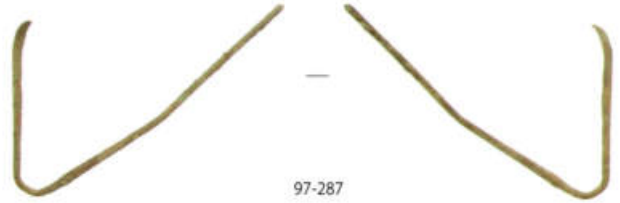
95-270



95-271









98-313



98-314



98-315



98-316



98-317



98-318



98-319



98-320



98-321



98-322



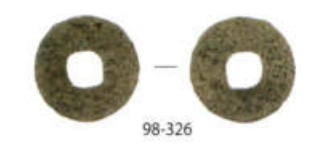
98-323



98-324



98-325



98-326



98-327



98-328



98-329



98-330



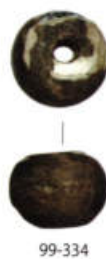
98-331



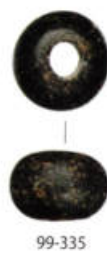
99-332



99-333



99-334



99-335



99-336



99-337



99-338



99-339



99-340



99-341



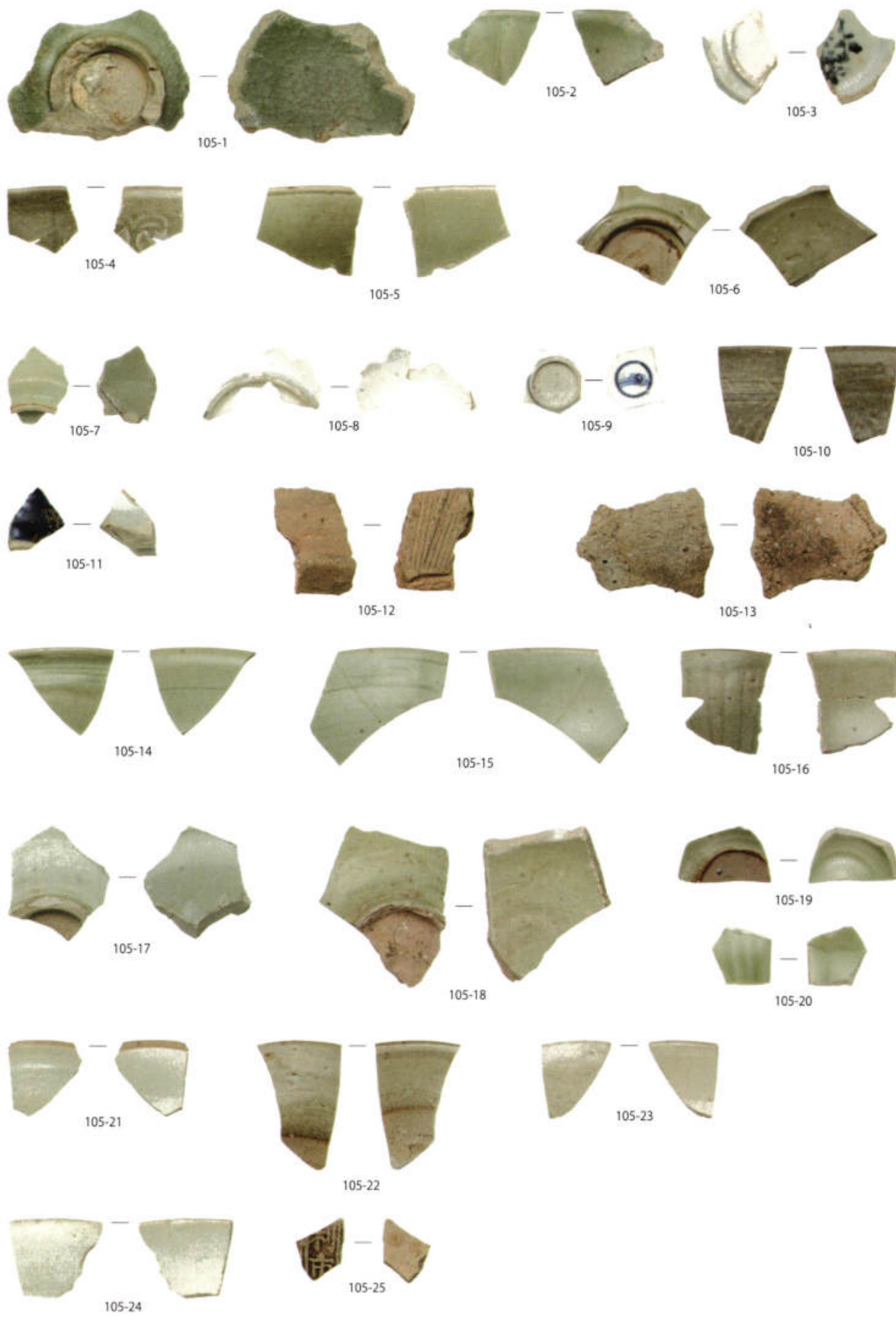
99-342



99-343



99-344





106-29



106-30



106-31



106-32



106-33



106-34



106-26



106-27



106-28



106-35



106-36



106-38



106-39



106-40



106-41



106-37



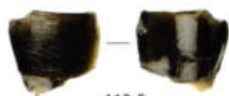
112-1



112-2



112-3



112-5



112-4



112-6



112-7



112-8



112-10



112-9



112-11



112-12



112-13



112-14



112-15

## 報告書抄録

ふりがな	なきじんじょうせきはくつちょうさほうこく 6							
書名	今帰仁城跡発掘調査報告VI							
副書名	今帰仁城跡外郭発掘調査報告3							
巻次								
シリーズ名	今帰仁村文化財調査報告書							
シリーズ番号	第32集							
編著者名	玉城靖、與那嶺俊、宮城弘樹、有銘倫子、仲村善洋							
発行機関	今帰仁村教育委員会							
所在地	〒905-0592 沖縄県今帰仁村字仲宗根 232 TEL0980-56-3201							
発行年日	西暦 2013 年 3 月 31 日 (平成 25 年)							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "			
なきじんじょうみよ 今帰仁城跡	なきじん 今帰仁村 いまじまり 字今泊	473065		26° 41' 34"	127° 55' 41"	21 年度 2009.4.1 ～ 2010.3.31  22 年度 2010.4.1 ～ 2011.3.31	1,400m <sup>2</sup>	今帰仁城跡史跡 等総合整備活用 推進事業に係る 発掘調査
所収遺跡名	種別	主な遺構	主な遺構	主な遺物			特記事項	
今帰仁城跡	城跡	グスク時代 (13～16世紀)	城壁 石敷き遺構 石列遺構 柱穴 土坑 土留石積み ほか	グスク土器 カムイヤキ 沖縄産陶器 中国陶磁器 青磁 白磁 青花 褐釉陶器 瑠璃釉 色絵 タイ陶磁 韓国陶磁 ベトナム陶磁 肥前陶磁器 玉類 銭貨 金属製品 石製品			今帰仁城跡の北 側に所在する郭 内の機能と変遷 を確認。前号の 東側城壁調査に 引き続き西側城 壁の根石確認調 査を実施。 今帰仁城跡の史 跡整備を実施。	



---

今帰仁村文化財調査報告書第32集

## 今帰仁城跡発掘調査報告 VI

発行 2013年3月29日

沖縄県今帰仁村教育委員会

沖縄県今帰仁村字仲宗根232

TEL 0980-56-3201

印刷 株式会社平山印刷

沖縄県豊見城市字豊崎3-59

TEL 098-995-6233

---